

上ヶ平遺跡Ⅰ

2000

財団法人 岐阜県文化財保護センター



灰釉陶器 水注



南側から見た上ヶ平遺跡周辺



上ヶ平遺跡全景

序

岐阜県益田郡の下呂町は、名泉として全国的に知られる下呂温泉とともに発展してきました。その下呂温泉の熱源といわれる湯ヶ峰の山頂近くに産する下呂石は、石器の原石として岐阜県のみならず、近隣他県にも運ばれ使われていたことが知られています。上ヶ平遺跡は、湯ヶ峰の西方2.5kmに位置しています。

このたび、下呂町森上ヶ平に、岐阜県土地開発公社による「りはとびあ（仮称）」整備事業が計画され、事業予定地内に存在する上ヶ平遺跡の事前の発掘調査を実施しました。

今回の発掘調査では、縄文時代早期から平安時代に至る住居跡が8軒検出されたほか、黒鉛入り土器や須恵器、灰釉陶器などが出土しました。また、遺跡の全域からは下呂石の原石やかけらが大量に検出されており、湯ヶ峰との関りが注目されます。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりましては、関係諸機関・各位の温かい御理解と御協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター
理事長 村木 光男

例 言

1. 本書は岐阜県益田郡下呂町森上ヶ平に所在する上ヶ平遺跡（遺跡番号21583-09018）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は障害者総合リハビリテーションセンターりはとぴあ（仮称）整備事業に伴うもので、岐阜県土地開発公社から岐阜県教育委員会が委託を受け、調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は、八賀晋三重大学名誉教授の指導のもとに平成9年度は伊藤秀雄・八賀哲夫、平成10年度は八賀哲夫が担当した。
4. 本書の執筆は以下のとおりである。
第1章第1節 伊藤秀雄
第2章第1節 岩田修
その他の執筆・編集 八賀哲夫
5. 遺物の写真撮影は、フォトスタジオ サトウに委託した。
6. 水準測量は(株)サーベイヤーコンサルタント、空中写真測量はアジア航測(株)に委託した。
7. 自然科学分析は、(株)パレオ・ラボに委託した。
8. 発掘調査及び報告書の作成に当たって次の方々や諸機関から御指導・御助言をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）
佐野康雄（岐阜県立羽島高等学校） 谷口和人（高山市立松倉中学校）
下呂町教育委員会 下呂町企画調整課 下呂観光会館
9. 本報告書で使用した土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1993「新版標準土色帖」を用いて識別した。
10. 調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している

目 次

序

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経緯	1
第2章 遺跡の環境	9
第1節 地形・地質環境	9
第2節 立地と歴史的環境	13
第3章 基本層序と遺構・遺物概要	17
第1節 基本層序	17
第2節 縄文時代の遺構と遺物	17
1 遺構概略	17
2 竪穴住居跡	19
3 集石遺構	24
4 下呂石の大量出土地点	29
5 その他の遺構	33
第3節 古代の遺構と遺物	37
1 遺構概略	37
2 竪穴住居跡	37
3 その他の遺構	52
第4節 遺物包含層の遺物	53
第4章 自然科学分析	65
第5章 まとめ	80
主要参考文献	82

図 版 目 次

- 図版 1 作業風景・第 1 号・第 2 号住居跡等
- 図版 2 集石遺構・下呂石集中出土地点等
- 図版 3 不明遺構・土坑・第 3 号住居跡等
- 図版 4 第 4 号・第 5 号・第 6 号住居跡等
- 図版 5 第 7 号住居跡・炭化材出土状況等
- 図版 6 第 2 号住居出土黒鉛入り土器・包含層出土黒鉛入り山形文土器
- 図版 7 包含層出土黒鉛入り無紋土器・第 4 号住居出土土師器
- 図版 8 第 4 号住居出土土師器・第 7 号住居出土須恵器
- 図版 9 第 7 号住居出土須恵器
- 図版 10 第 7 号住居出土須恵器・第 8 号住居出土灰釉陶器
- 図版 11 第 8 号住居出土灰釉陶器・包含層出土灰釉陶器
- 図版 12 第 8 号住居出土灰釉陶器・刀子・包含層出土灰釉陶器
- 図版 13 第 1 号・第 2 号住居出土石器
- 図版 14 下呂石集中出土地点 S X5 出土石器・遺物包含層出土石鏃
- 図版 15 遺構内出土石器・遺物包含層出土石器
- 図版 16 遺構内・外出土スクレイパー
- 図版 17 遺構内・遺物包含層出土磨石・打製石斧
- 図版 18 下呂石コア
- 図版 19 下呂石礫とコアブランク・打痕のあるコア
- 図版 20 炭化材樹種
- 図版 21 炭化材樹種・プラントオパール

挿 図 目 次

第 1 図	上ヶ平遺跡の位置	4
第 2 図	地区設定図	4
第 3 図	遺構配置図	5
第 4 図	遺物出土状況	7
第 5 図	遺跡周辺の地形・地質概略図	8
第 6 図	上ヶ平遺跡周辺の地形横断図	8
第 7 図	上ヶ平遺跡周辺の遺跡	12
第 8 図	基本層序	18
第 9 図	第 1 号住居跡	20
第 10 図	第 1 号住居跡の遺物	21
第 11 図	第 2 号住居跡	22
第 12 図	第 2 号住居跡の遺物	23
第 13 図	S S 1	24
第 14 図	S S 2 ・ S S 3	25

第15図	SS4・SS5	26
第16図	SS6	27
第17図	下呂石集中出土地点	29
第18図	SX5の遺物(1)	31
第19図	SX5の遺物(2)	32
第20図	SX5の遺物(3)	33
第21図	SX7・SX8・SX12	34
第22図	土坑と溝状遺構	35
第23図	第3号住居跡・第5号住居跡	38
第24図	第4号住居跡・遺物分布図	39
第25図	第4号住居跡遺物	40
第26図	第4号住居跡竈跡	41
第27図	第6号住居跡	43
第28図	第7号住居跡	45
第29図	第7号住居跡炭化材と竈跡	46
第30図	第7号住居ピット	48
第31図	第7号住居跡出土遺物・須恵器	50
第32図	第7号・第8号住居跡出土遺物・須恵器・灰釉陶器・刀子・砥石	51
第33図	SS7・SS8	52
第34図	包含層出土遺物土器	54
第35図	包含層出土遺物須恵器・灰釉陶器	55
第36図	石鏃分類表	56
第37図	包含層出土遺物石器(1)	57
第38図	包含層出土遺物石器(2)	58
第39図	包含層出土遺物石器(3)	59
第40図	包含層出土遺物石器(4)	60
第41図	包含層出土遺物石器(5)	62
第42図	包含層出土遺物石器(6)	63
第43図	過去2000年の地磁気永年変化曲線	68
第44図	各焼土の地磁気測定結果と永年変化曲線	68
第45図	焼土の地磁気測定結果と永年変化曲線	69
第46図	プラントオパール分布図	79

表目次

第1表	上ヶ平遺跡周辺の遺跡	16
第2表	ピット一覧表	36
第3表	焼土の残留磁化測定による年代推定結果	67
第4表	焼土の残留磁化測定結果と統計計算結果	69

第5表	放射性炭素年代測定結果	69
第6表	第7号住居跡炭化材の樹種同定結果	71
第7表	樹種同定観察結果	72
第8表	樹種同定結果一覧	75
第9表	プラントオパール個数	76
第10表	土器一覧表	81
第11表	石器一覧表	82

本文・表・図中に必要に応じて遺構記号を使用した。これらは次のように遺構の種類を表す。

- | | |
|--------------|--------------|
| ・ S B・・・住居跡 | ・ S X・・・不明遺構 |
| ・ S S・・・集石遺構 | ・ S K・・・土坑 |
| ・ P・・・ピット | ・ P G・・・ピット |

遺跡の区割りは、上ヶ平の事業予定地の今後の調査も踏まえ、アイウエオの五十音と算用数字を組み合わせて、「ハ13」のようにグリッド名をつけた。(第2図参照)

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

平成7年10月、岐阜県障害福祉課より事業予定地内の遺跡の分布調査を行って欲しいとの依頼を受けて現地踏査を実施した。現地は岐阜県遺跡地図改訂版によると森上段遺跡に隣接する。また、縄文時代前期～弥生時代の集落跡である峰一号遺跡からも直線距離で500m内にあることから遺跡が存在する可能性は十分想定できた。踏査の結果、石器材料の下呂石剥片が表面採集できたため、遺跡の有無確認をするための試掘調査を平成8年3月に実施した。調査は4ヶ所5地点で実施し、3地点より下呂石剥片・石核・石鏃などの遺物と共にピットなどの遺構を検出したことから、事業予定地内南東部は包蔵地の可能性が高いと判断した。

工事予定地は11万㎡の広範囲であり、全てに遺跡が存在するとは考えられないことから遺跡の範囲確認調査を平成8年10月17日から同年12月13日まで実施した。用地買収契約が終了していなかったため地主から起工承諾をもらえたところのみに試掘坑を設定した。この調査によって縄文時代早期の遺跡と平安時代の遺構が事業予定地内南東部に存在することが明らかになり、遺物も多く出土した。しかしながら、調査地点が制限されていたため遺跡の範囲は推定の域を出ないものであった。

以上の経緯を踏まえ、平成9年度は平成8年度の調査で遺跡密度の高い地点の本発掘調査1500㎡を実施した。平成10年度は、前年度の調査区内で建物が建っていた部分200㎡の本発掘調査を実施するとともに、平成8年度の範囲確認調査で未確認であった地点の範囲確認調査を行った。

本報告書は、平成9年度・10年度に行った本発掘調査地点の報告書である。また、本発掘調査が必要な地点があるため書名は「上ヶ平遺跡Ⅰ」とした。

第2節 発掘調査の経緯

平成9年度調査

10月中旬までに現場事務所の設置、用具の搬入等の準備作業を行った。重機による掘削は10月16日に開始した。以下週ごとに調査経過を記述する。

第1・2週（10.20～10.31） 地区を設定し、北側の地区から掘削を開始した。試掘確認調査でプランが検出されていたS B1の調査も開始した。S B1で炭化材、柱穴、竈跡2基を検出。包含層掘削に入り灰釉陶器、石匙等が出土する。S B1で刀子出土。

第3週（11.4～11.7） ネ12区に黒鉛入り押型文土器出土。ネ12区に遺構プラン検出（S X1）。S B1付近にもプランらしきものが見え出す。集石遺構2基検出。

第4週（11.10～11.14） S B1の炭化材を実測後取り除く。注口つきの灰釉陶器出土。S X1を掘削する。遺物はほとんどない。床面までは浅い。ネ9区、ノ9区のグリッドを掘削し始める。黒鉛入り押型文土器が遺跡全体の包含層から出土する。

第5週（11.17～11.21） 降雪もあり、朝晩の冷え込みが厳しくなってきた。S B1の調査は、ほぼ床

2 第1章 調査の経緯

面に達し、ピットの中にも底に炭が混じるものがあった。ノ11区に磨斧出土。S X1北東の床面に炭が少量、黒鉛入り土器片1点、磨斧1点出土した。流れ込みと考えられる。

第6週（11.25～11.28） S X3で下呂石のチップが大量に検出された。チップ群に石鏃が混じって出土する。S B1の床面の検出。床直上には須恵器の甕の破片が出土する。土層断面観察用の畦を掘削する過程で、後世のピットと炭化したどんぐりがかたまって出土した。

第7週（12.1～12.5） ハ9、10区掘削開始。S X2で黒鉛入り押型文土器が床直上から出土した。集石遺構が新たに4基検出された。

第8・9週（12.8～12.19） 毎朝霜柱が立つようになった。ピットが多数検出される。ピットと集石遺構の実測を開始する。ハ12・13区で下呂石のチップが大量に出土する地点が検出され、S X5としてチップや石鏃の出土地点を記録することにした。

第10週（12.22～12.25） S X2よりチップが集中して出始める。集石遺構S S5の半割、炭化物採取をした。壁となっている板状の石が周囲を半分までめぐり焼けている。縄文時代早期の型式と確認。

第11・12週（1.5～1.16） 雪が現場に6～7cm残ったまま凍りついて固くなっていて、作業に差し障るようであり、作業中止。

第13・14週（1.19～1.30） 朝、霜柱が立ち作業にならない時間を遺物洗いに当て、後に掘削するという日が続く。新たなピット検出続く。

第15・16週（2.2～2.13） ネ・ノ・ハ14区より上の段の掘削開始。朝、水が溜まったまま凍っていたり、土が凍っていて鎌の刃が立たない地区が出て、午前10時頃解けるまでは掘削出来るグリッドが少ないという日があった。新たなピットの検出続く。

第17週（2.16～2.20） ピットの調査開始。ネ13, 14, 15区、ノ14, 15区掘削、ネノ9, 10区、ハ12, 13区掘削進める。ネ15区とノ15区に楕円形のプラン検出（S X7とS X8）。

第18週（2.23～2.27） ハ10区で方形のプラン検出（S X6）。土師器も出土した。

第19週（3.2～3.6） 集石遺構S S2・3・4の調査。大量の炭が出土した。S X2、S X3、S X4の精査をする。基本層序のセクションをとる。

第20週（3.9～3.13） ピット検出数244となる。ノ、ハ14, 15区東よりの包含層掘削。S X6プランの中の後世のピットに炭が出土した。S X7、S X8を調査。S X7、8で石鏃出土。

第21週（3.16～3.20） ピット実測完了。調査区全域を清掃し、3月18日に発掘作業員による掘削作業を終了した。

第22週（3.23～3.26） 残る遺構の実測・精査をし、3月26日に平成9年度の発掘調査終了。

平成10年度発掘調査

4月6日と4月24日の両日、本年度の本発掘調査、試掘確認調査場所の確認と下呂町との打ち合わせを行った。ネ13区の小屋とノ・ハ13区のビニールハウスが1週間ぐらい前に取り払われているのを確認。4月30日から重機による表土掘削開始。試掘調査のトレンチも4カ所掘削した。

第1週（5.11～5.15） ネ9～ハ9区を掘削開始。試掘調査トレンチの掘削を開始する。新たな地区の設定と杭打ちをした。

第2週（5.18～5.2） ハ11区、ネ、ノ、ハ9区の掘削。ハ9区にて方形プランを検出（S X9）。ネ8区で

石匙出土。ハ14区の東の用水路の漏水対策を行った。S X9の検出面上部より炭が出土。S X6の調査開始。

第3週（5.25～5.29）ノ9区で石鎌1点出土。S X9より南にまた新しい方形プランを検出（S X10）。S X10でも炭がよく出土する。

第4週（6.1～6.5）ネノハ8, 9区からはほとんど遺物が出土しない。ネ12, 13区、ノ13, 14, 15区、ハ13, 14, 15, 16区の掘削開始。ハ13で灰釉陶器出土。S X9, 10は床面まで掘削進む。ノ13区に下呂石が多数出土する地点がある（P G1）。

第5週（6.8～6.12）ハ13区東側溝脇に土を詰め漏水防止としたが、逆に地下水位を上げたため、トレンチ46, ハ12, 13区等で浸水がおこった。そのため排水路づくりをした。ハ14区杭の周辺に焼礫多数、炭も出る。（S S7, 8）ネ11区に土坑が一つ検出された（S K1）。ハ12区に焼土と、焼礫群出土（S S6）。

第6週（6.15～6.19）S X9, 10完掘。S K1, S X12精査。

第7週（6.22～6.26）S X8のⅡ層で灰釉陶器が1点出土した。Ⅲ層は下呂石1点。S X7完掘。S X7のⅡ層で石鎌と下呂石出土。S K1で裏にほとんど刃がつけられていない縄文時代早期のものと思われる石匙が出土。

第8週（6.29～7.3）S X5の掘削に取り掛かる。S X6で土師器片が多数出土した。S X2で長径5mmぐらいの炭のかけらが床面で多数出土。S X6で北側の床に焼けた土と石が出てきた。焼土がブロック状であり壊された炉跡と判断する。土師器も4個体分出土。S B1精査。北側の炉の半割、実測。ネ、ノ、ハ9, 10区の新たなピットの実測開始。

第9, 10週（7.6～7.17）ピットの新たな検出と実測。S B1の炉石の下に炭が出土。S S8の下からは、ブロック状の焼けた土、炭が出土。試掘確認調査トレンチの表土掘削に重機を入れる。

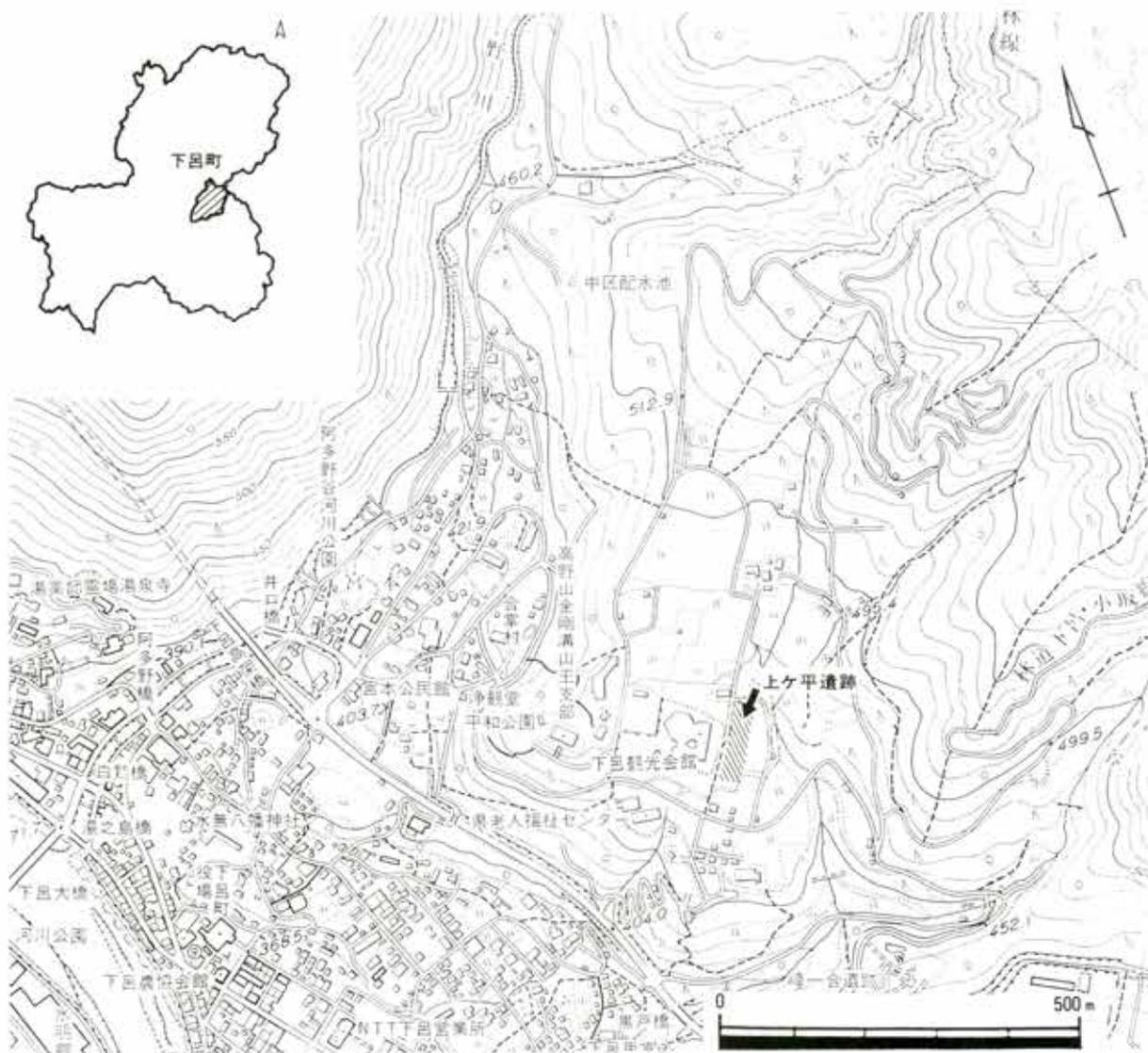
第11, 12, 13週（7.21～8.7）重機による試掘トレンチ掘削。ピット実測継続。S B1とS X6のピット精査。

第14, 15週（8.17～8.28）ハ15～16区掘削。S B1北の畦と南の畦を掘削。ハ14区Ⅲ層で遠賀川式の土器片3点出土。S X5の掘削については地山まで近づき、下呂石のチップはでなくなってきた。

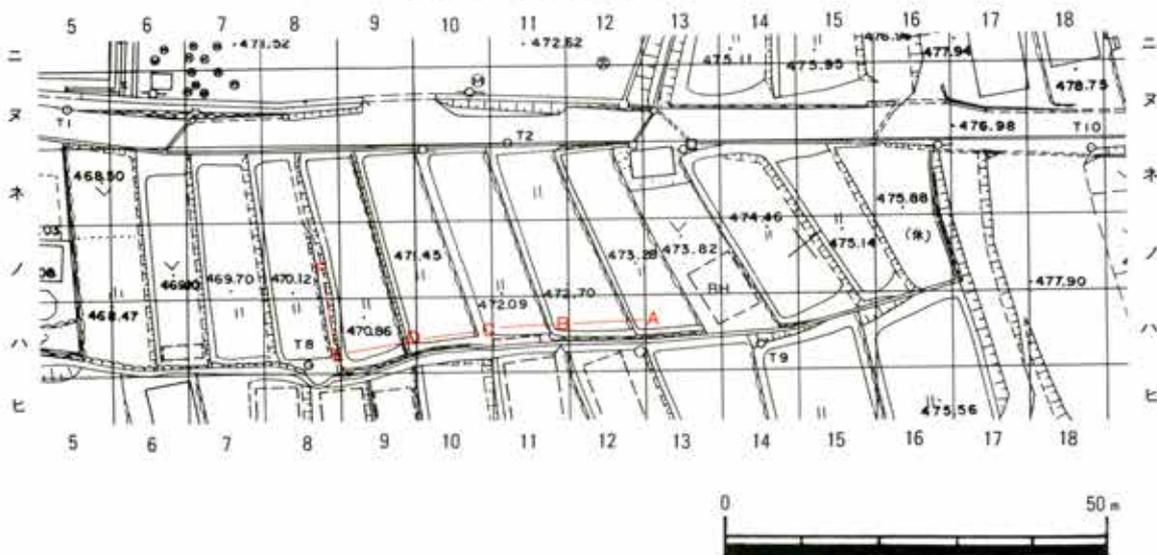
第16週（8.31～9.4）ピット実測完了。空撮に備え掃除。9月3日に空撮を行った。本発掘調査は本日で終了。9月4日より作業員全員試掘確認調査トレンチの掘削にかかる。

12月7日に試掘確認調査の最終日を迎え、作業員は片付け清掃をし解散。12月8日より重機による埋め戻し作業の開始。12月15日に埋め戻し作業終了。

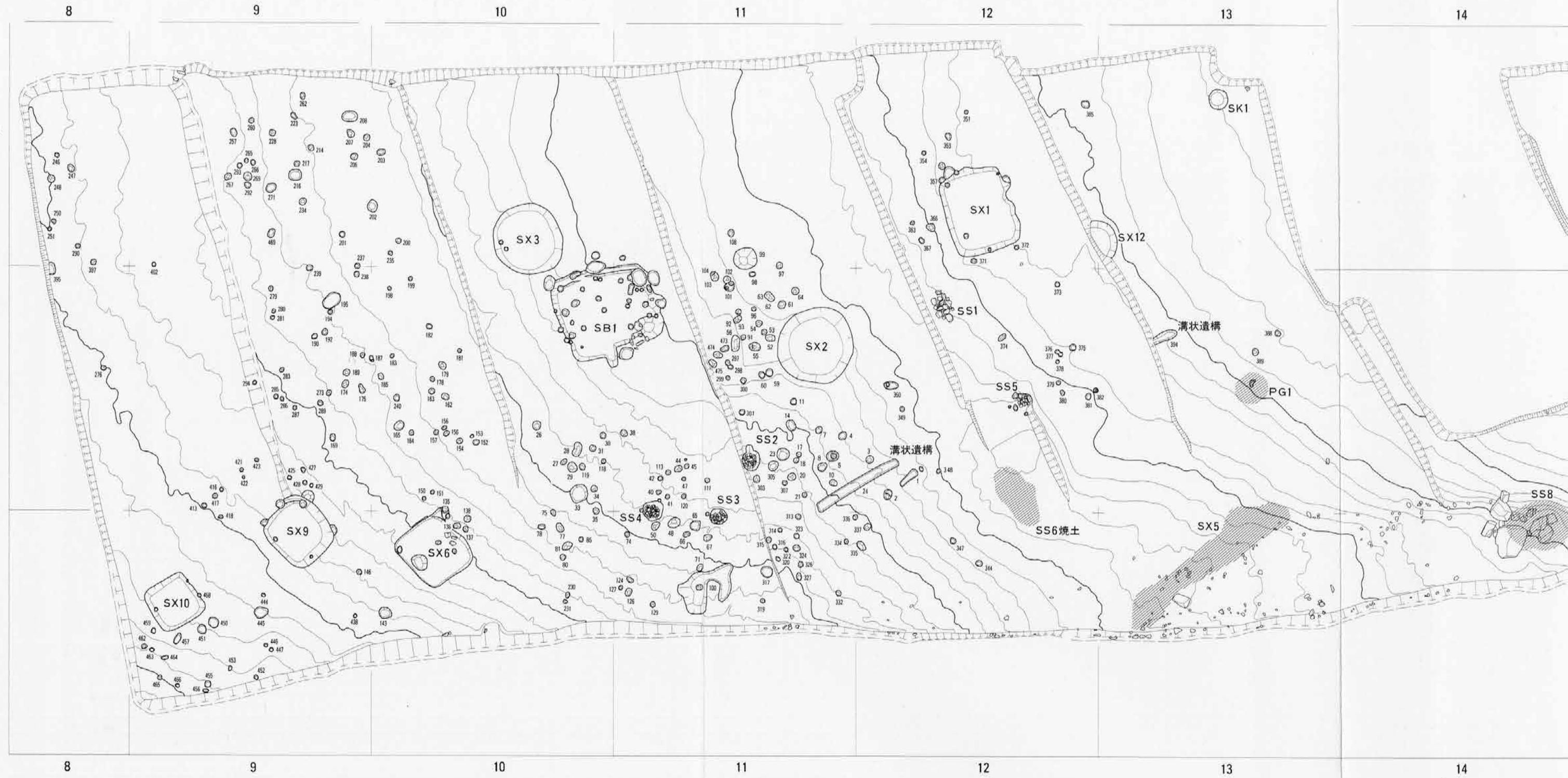
以後、財団法人岐阜県文化財保護センター飛騨出張所にて整理作業に入った。



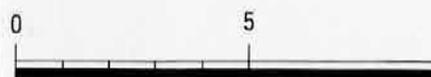
第1図 上ヶ平遺跡の位置

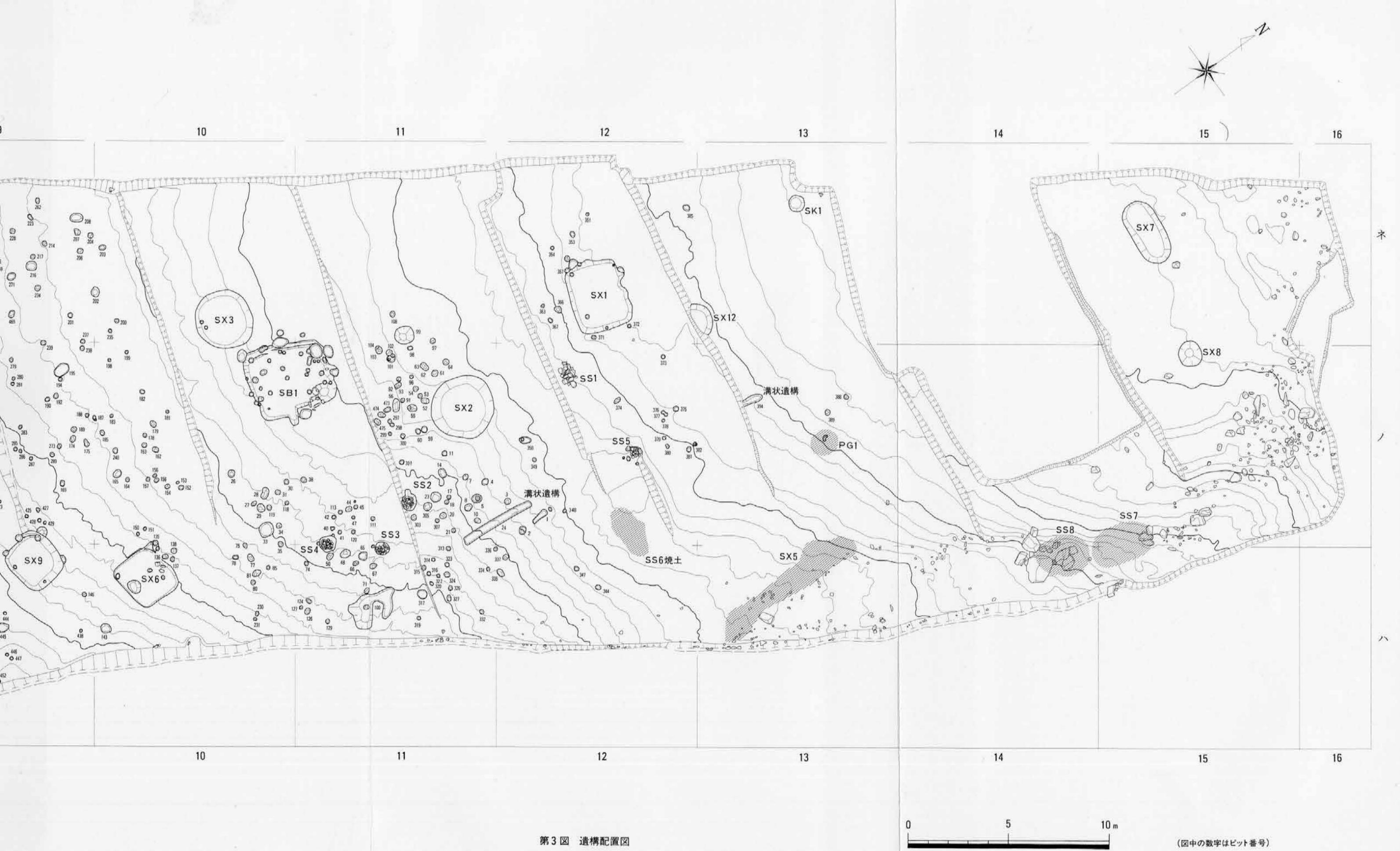


第2図 地区設定図



第3図 遺構配置図





第3図 遺構配置図

(図中の数字はピット番号)



8 9 10 11 12 13 14 15



8 9 10 11 12 13 14 15



第4図 遺物出土状況



第4図 遺物出土状況

第2章 遺跡の環境

第1節 地形・地質環境

湯ヶ峰近傍のこの遺跡周辺は、阿寺断層の影響を受けた特徴的な地形を有している。また、湯ヶ峰火山からは下呂石が産している。このような地形・地質環境は、考古学の面で大きな影響を与えている。

1. 地形・地質的特徴

上ヶ平遺跡は、下呂温泉で有名な下呂町市街地すぐ北方、山地内の緩斜面上に位置する。この緩斜面は、傾斜6~8度、東西300m南北900mで南側に面した日当たりのよい場所である。小さな谷川が山地から流れていて縄文時代人にとって水利もある。この緩斜面は現状は水田であり幕末以降に開墾された。下呂石を産する湯ヶ峰（1057m）からは、西方に約2.5km離れている。

湯ヶ峰周辺の地形地質区分を第5図に示した。下呂市街の北東には阿寺山地の峰が続く。寺田小屋山（1505m）などの峰々から南西方向に谷川が流れ、飛騨川下呂町市街の海拔360mまでいっきに急流となっている。この傾斜は阿寺断層崖として、東濃からさらに北西萩原町の御前山まで続く。

阿寺断層は、この付近で分岐する。北側に湯ヶ峰断層が、南側には下呂断層が走る。阿寺断層はこの付近の地形発達に大きな影響を与えている。

<阿寺断層の影響>

湯ヶ峰断層にそって大洞・大林・三ツ石の緩斜面の堆積地が分布している。第5図ではこれを中期緩斜面に区分した。湯ヶ峰東麓にも同様な堆積地がある。下呂断層にそっては、初矢峠付近に古期緩斜面、谷沿いに中期緩斜面とした地形が見られる。以上のような地形は、断層活動によって形成されたと考えられる。飛騨川も萩原町から下呂町市街地までは阿寺断層によって流路が決められ、断層にそって流れる。下呂町・萩原町市街地はこのような阿寺断層によって発達した河岸段丘上につくられている。また、乗政川においても、下呂断層・湯ヶ峰断層に挟まれた地域に河岸段丘、扇状地が先達している。

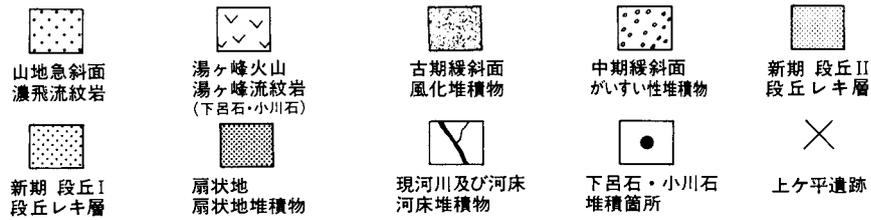
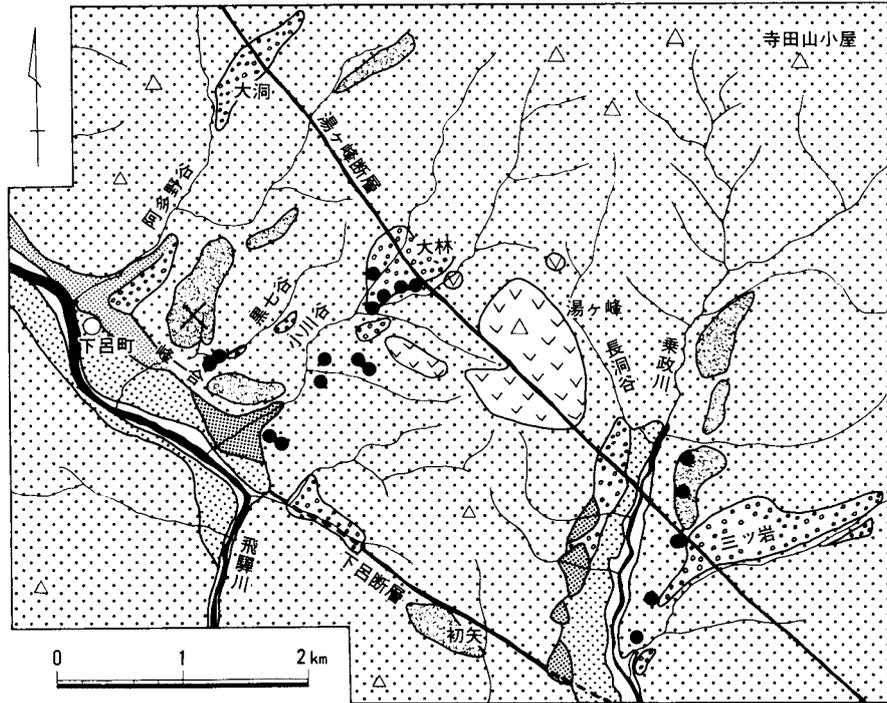
阿寺断層の活動は少なくとも100万年以上前から生じており、旧石器人の足跡が見られるようになった数万年前の地形は、新期河岸段丘を除くと、基本的には現在とあまり変化していない。湯ヶ峰断層は、阿寺断層が北東側が上昇するような断層変位を起こしているのに、逆に南西側を上昇させている。この逆のセンスが大洞・大林・三ツ石のような地形を形成したと考える。さらに、阿寺断層が下呂町付近で分岐していることから多くの緩斜面地形を生じ、旧石器人・縄文人に格好の生活場所を提供した。

2. 地形・地質区分

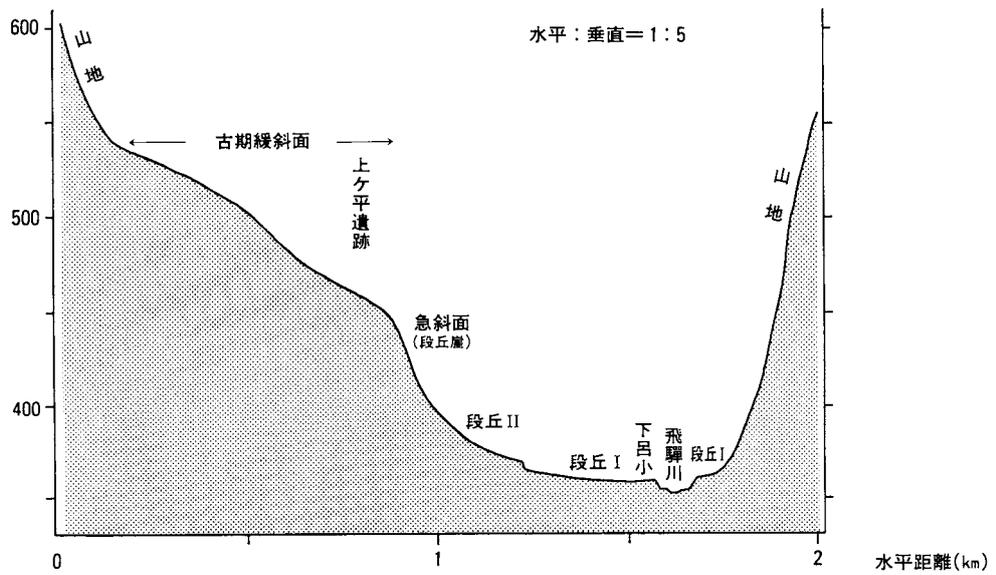
地形・地質区分は、地表調査及び航空写真観察によって行なった。

<山地、急斜面・濃飛流紋岩>

ここに区分した地形は、山地や段丘崖など急斜面となっている地域である。ほとんどの面積を占め



第5図 遺跡周辺の地形・地質概略図



第6図 上ヶ平遺跡周辺の地形横断図

ている。谷も深く侵食し、崖崩れを起こしている所も多い。崖崩れは阿寺断層による破碎帯が多いことにもよる。湯ヶ峰火山とした以外の山地は、いずれも濃飛流紋岩の分布域である。濃飛流紋岩の岩体に生じた割れ目（阿寺断層）にマグマが噴出したのが湯ヶ峰火山である。濃飛流紋岩は、約7千万年前に噴出した火砕流堆積物を主としている。

＜湯ヶ峰火山・湯ヶ峰流紋岩（下呂石・小川石）＞

紛10万年前に湯ヶ峰断層にそって流紋岩マグマが噴出し、溶岩層が重なって湯ヶ峰火山を形成した。湯ヶ峰火山は、下呂石と称される黒色のガラス質流紋岩溶岩と板状で多孔質、青灰色～赤色の流紋岩溶岩（小川石と呼ばれる）から成る。一部に凝灰質、集塊岩質岩石が見られる。分布は湯ヶ峰山頂を中心とした本体と、小岩体に別れる。岩脈もいくつか存在する。

湯ヶ峰流紋岩の中で、石器に利用された下呂石はごく一部であり、全体の1%に満たない。その下呂石の中で石器に耐える材質のものは更に限られる。しかし、断層活動や侵食・気象変化などによって山体の崩壊が進み、常に岩盤が露出して新鮮な下呂石を供給し続けたのであろう。

＜古期緩斜面・風化堆積物＞

ここで、古期緩斜面としたのは、飛驒川左岸と乗政川左岸から30～100mの高度から分布している緩斜面を主とする。これらの特徴は、河川に面していて河川近くでは急斜面となっていることである。この河川よりの急斜面は河川（飛驒川と乗政川）による侵食による。この急斜面は段丘崖と考えられる。この古期緩斜面とした地域は、礫層など明らかな堆積物を載せていない。わずかな崩壊物や風化堆積物を有している。風化が進み、河川による侵食が高い高度まで及んでいることから、この地形は古いと考え、古期緩斜面とした。上ヶ平遺跡については後で述べる。

初矢峠付近の地形もここに分類した。また、阿多野川上流部の地形も含めた。これらの成因は前述の河川に面したものと少し異なるかもしれないが、古い地形であることから一括した。

初矢峠付近では、旧石器時代からの遺跡・遺物が発見されている。

＜中期緩斜面・崖錐性堆積物＞

湯ヶ峰断層・下呂断層に伴うものが中心である。大洞・大林・長洞谷下流・三ツ石・初矢に見られる。崖錐性堆積物を主とする。大林や長洞谷下流では、下呂石など湯ヶ峰流紋岩の角礫を多く含んでいる。前述のように、断層活動と関係が深い地形である。大林では旧石器時代の遺物が多く出土している。

＜新期段丘・段丘礫層＞

飛驒川・乗政川にそって段丘が発達している。新期段丘に分類される。2段に分けられる。河川堆積物による礫層を主とする堆積層が見られる。

＜扇状地・扇状地堆積物＞

新期段丘面上に谷川から流出した堆積物が載っている。小川谷の出口と乗政川右岸に発達する。

3. 上ヶ平遺跡に関して

第5図のように、上ヶ平遺跡は古期緩斜面に位置している。断面図を見ると地形の様子を知ることができる（第6図）。この図は垂直方向を5倍に強調している。この古期緩斜面は、海拔540mから450mまで少し勾配を変えながら高度を下げている。飛驒川河床の海拔は約350mなので、古期緩斜面末端部か

らは100mほど低くなっている。河床付近には、新期河岸段丘が先達している。

この古期緩斜面の成因はよく分からない。前述のように、飛騨川に面した急崖は、河川の侵食によると考えられること、この古期緩斜面の表面には風化堆積物が載っているだけで情報が少ない。このような古期緩斜面と思われる地形は、飛騨川流域では見られることがある。

遺跡付近を試掘した断面を見ると、地表から20cmほどの耕作土、黒土が50cm、さらに赤土が1mといたつた所が普通である。拳大以上の風化残留の礫が混じる。これより地下は、岩盤になるが、ここも風化している。いずれも濃飛流紋岩及びその風化物である。

下呂石や小川石などの湯ヶ峰流紋岩の礫の分布は第5図の黒丸で示した。湯ヶ峰西斜面では、大林集落付近を中心に小川谷下流、それに西側の谷の黒七谷の堆積物中にも見られる。黒七谷は現在は湯ヶ峰流紋岩の分布から離れた谷なので、過去においてまだ谷の侵食が十分でなかった頃にこの谷まで湯ヶ峰流紋岩の礫が流れたのだろう。これらの礫は、下呂石だけでなく小川石も含まれているので、人為的に運ばれたのではないことは確かである。

上ヶ平遺跡から流れる谷にはこのような礫はない。また、この遺跡から発見されるのは下呂石のみで、小川石はでてこない。よつて、この遺跡およびこの古期緩斜面から出土する下呂石は、人為的に運ばれたものである。

4. まとめ

上ヶ平遺跡は、古い地形である古期緩斜面の上に位置する。この地形は非常に安定してつて、ほとんど変化を受けることはなかつた。南向きの傾斜をもち日当たりのよい場所、山側からは小さな谷川も流れて水利もあつた。

湯ヶ峰から流れる小川谷には下呂石の転石も多かつた。そこから1km近くの本遺跡では下呂石が容易に得られ、石器工場としての役割が果たせたことであろう。

<主な参考文献>

岩田 修 1995 「湯ヶ峰流紋岩と下呂石」 飛騨考古学会20周年記念誌「飛騨と考古学」

佃 栄吉ほか 1993 「2.5万分の1阿寺断層系ストリップマップ」 地質調査所

第2節 立地と歴史的環境

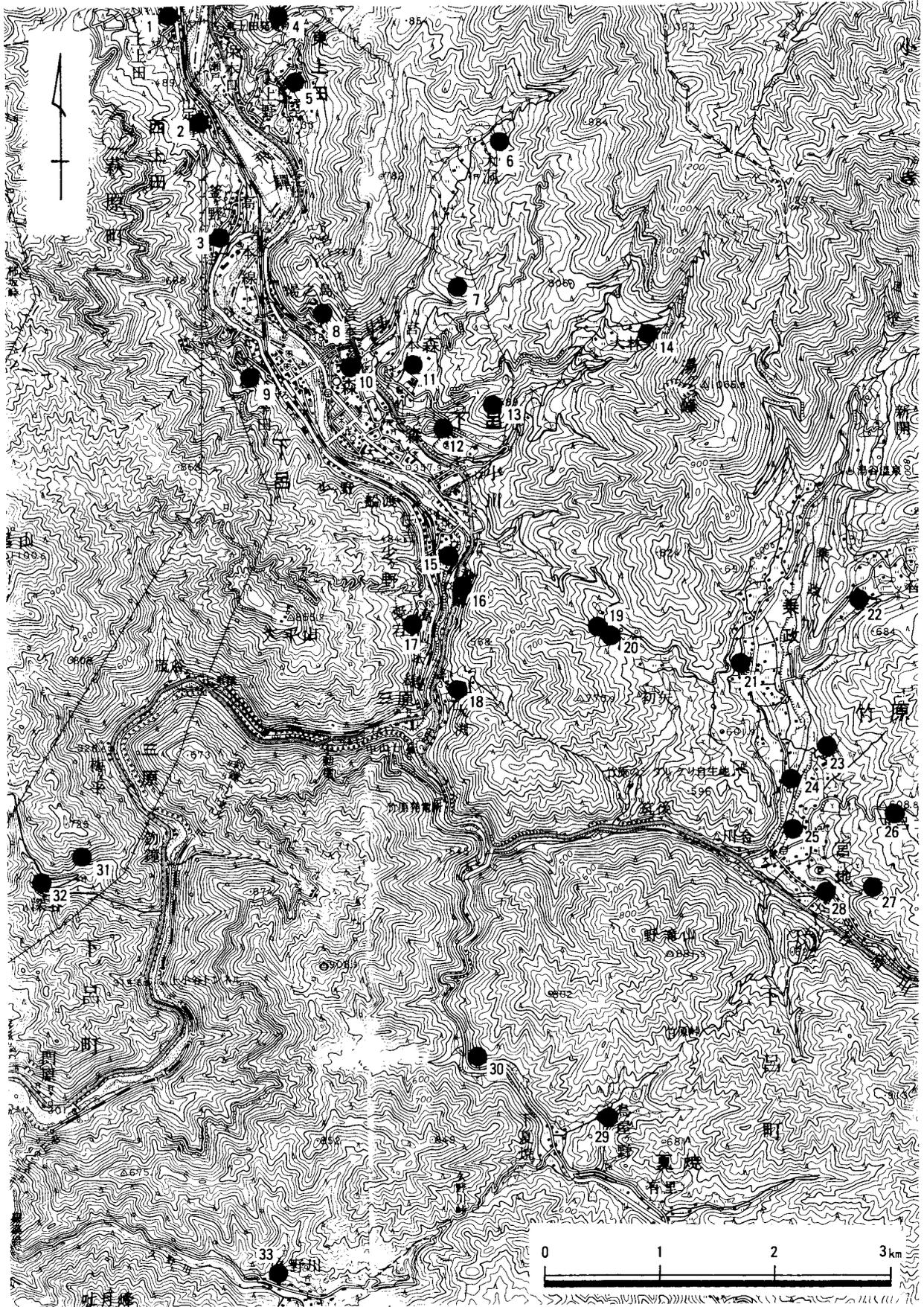
上ケ平遺跡は益田郡下呂町森字上ケ平に所在する。上ケ平は空谷山（^{からたにやま} 海拔1411m）の麓にある森地区の丘陵部に位置する。空谷山は下呂御前山ともいわれ、山頂からは御嶽山や乗鞍岳が一望でき、山岳信仰の社がある。また、上ケ平遺跡の2.5km東方には10万年以上前に最後の噴火をした湯ヶ峰（^{ゆがみね} 海拔1066m）がある。湯ヶ峰は地質調査で下呂温泉の熱源であると確認されている。湯ヶ峰の山頂部に露出する湯ヶ峰流紋岩は、縄文時代、弥生時代と石器の原石として飛騨地方のみならず東海地方近県やさらに遠方まで運ばれ使用されていることが確認されている。

縄文時代 峰一合遺跡：縄文時代早期の遺物は乗政・野尻・宮地・大林などから、縄文時代の石器とともに尖頭器・剥片石器などが発見されているが、ここでは峰一合遺跡を取り上げてみる。上ケ平遺跡の南南東500mに谷を一つ挟み峰一合遺跡がある。湯ヶ峰の山麓に舌状にひらけた台地の上であり、現河床より100m以上の高い位置にある。昭和41～43年の発掘で5軒の竪穴住居跡が発見され、そのうち完全な形をのこす1軒は径5.4mの円形プランの住居跡で、床に焚火をした部分が見られる。早期の押型文土器が出土しているが、出土量の多い土器は前期のもので、北白川下層Ⅱ・Ⅲ式と諸磯 a・b・c 式からなる。石器は石鏃・石匙・石錘等1000点余の多数を出土しており、その多くが下呂石製である。また、パン状炭化物の出土が2点報告されている。また弥生土器と弥生時代の住居跡も併出している。この峰一合の発掘現場には住居跡を保存・復原して遺跡公園とし、昭和47年中部山岳考古館を併設して土器・石器等の考古資料を展示している。

古代 森の八幡神社の神像：森の八幡神社はシャグシ宮とも呼ばれ、水無八幡宮とも称され、乗政の八幡神社とともに飛騨八幡八社のうちで、仁徳天皇の65年武振熊命が両面宿禰追討の命を奉じて飛騨入国の途次、先帝応神天皇の霊を奉斎して戦勝を祈願した祭場と伝えられる。この八幡神社に現存する神像10軀（国重文）はいずれも一木彫の30～60cmのもので彩色を施したものもある平安末期の作である。また同神社に伝わる田の神祭りは古い祭祀形態を残すものである。

下呂の古名「続日本紀」光仁天皇宝亀7年（776）の10月の条に「美濃国菅田駅と飛騨国大野郡伴有駅と相去る七十四里、岩谷険深にして行程殊に遠し。其の中間に一駅を置いて下留と名づく」とある。伴有駅は現在の萩原町上呂のことで菅田駅（現金山町）と74里（約40km）と標準の30里の2倍半であったため、その中間に下留を置いたというのである。下留は音読されてゲルとなり現在の下呂となった。「延喜式」にも「下留駅一駅馬五疋、上留駅、駅馬五疋」と下留の名が見える。貞観12年（870）大野郡を割いて益田郡が新設され、飛騨国は3郡となった。このころの益田郡は益田郷・秋秀郷の2郷であった（和名抄）。下呂以北は益田郷に属し、竹原・上原・中原・下原は秋秀郷に属していたらしい。

中世 大威徳寺跡：三国山から南に延びた山なみに連なる舞台峠の西方の台地上に鳳慈尾山大威徳寺跡（県指定史跡）がある。鎌倉初期、文治建久のころに源頼朝の発願により文覚上人が創立したものと伝えられる天台宗の寺院であったが、永禄3年（1560）、飛騨の三木三郎左衛門尉と東濃の遠山友勝が戦った折兵火にあい、続いて天正13年（1585）の大地震のため壊滅してしまつたと伝えられる。その直後天正15年、この寺の十二坊のうちの多聞坊の僧慶俊が郡上郡長滝寺阿多院で書写した経文の



第7図 上ヶ平遺跡周辺の遺跡

建設省国土地理院
50000分の1地図「下呂」「加子母」より

後書に「本堂丈間五間四方、地蔵堂、大黒堂、講堂、鎮守、拝殿、鐘楼堂、三重塔、二王堂、坊数十二坊、東坊・多聞坊・南坊・竹林坊・西坊・聖林坊・吉祥坊・北坊・宝光坊・池坊・満月坊・福成坊」と大威徳寺の堂坊の有様を記している。今は廃墟となっているが、「丈間五間四方」といわれた本堂跡の礎石は現存し、七堂完備した天台の伽藍の往時をしのぶことができる。

戦国時代 領主と道 応永18年（1411）は飛騨国司姉小路尹綱が守護京極氏に討たれ、京極氏の家臣三木正頼が戦功によって竹原郷を与えられ、飛騨攻略の足掛かりを得た年である。このころの飛騨街道は下呂の小川より初矢峠を越して竹原の乗政に出て、それより上原の夏焼、久野川を経て下原の大船渡に出る往古のままの道であった。6代177年間飛騨を統一支配した三木氏も天正13年（1585）金森長近に攻略され、飛騨は金森氏の領国となった。往古以来の飛騨街道に大きな改良を加えたのは金森氏であって、下呂から三原・保井戸を経て金山に至る益田川沿いの難所を開削して中山七里の新道を開いた。今日の益田街道の原型をなすものである。

近世 江戸期の村々：江戸初期金森藩の慶長検地の「慶長三郡高帳」によると、下呂郷は湯嶋村（150石7斗令）・もり村（439石3斗余）・小川村（254石9斗余）・しやうかの村（200石6斗余）の4か村計1,045石6斗9升5合で、上田村はまだ東西分離しないで萩原郷に属していた。竹原郷は、のりまさ村（390石3斗余）・宮地村（360石7斗余）・みまへの村（222石8斗余）の3か村、計973石8斗余であり、後の中原・上原の村々は下原の村々とともに麻生郷として一括されていた。元禄5年の金森氏出羽上山の移封によって幕府直轄領となった。飛騨では天領行政の第一歩として、元禄7年検地が実施された。その「飛騨国中検地反歩帳」によると上田村は萩原郷に属したまま東上田村・西上田村の2村に分かれ、下呂郷は湯ノ嶋村・森村・小川村・少ヶ野村・三原村および門原村の6か村、竹原郷は乗政村・宮地村・野尻村・御厩野村の4か村となった。また下原郷16か村のうち、保井戸村・瀬戸村・三ツ淵村・和佐村・火打村・門和佐村・久野川村・夏焼村・田口村・蛇之尾村の上原・中原両地区の10か村が現在の下呂町に属する村々である。

幕末・近代・現代 上ヶ平一帯は江戸時代末期までは山林であった。日照もよいなだらかな地形のこの地が、古い時代の開墾事業を受けていなかったのは、水利に恵まれなかったことが原因である。しかし、飢饉後の郡代の新田開発奨励と支援を得て、幕末天保12年より小池作兵衛によって開墾が始まり、続く大正、昭和初期にかけて次第に耕地が広がり現在に至っている。上ヶ平の一角には、小池作兵衛翁を顕彰する記念碑（大正11年）がある。

引用文献

角川日本地名大辞典編集委員会 1978 『角川日本地名大辞典』21岐阜県
岐阜県 1972 『岐阜県史 通史編 原始』

第1表 上ヶ平遺跡周辺の遺跡

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	神屋垣内遺跡	益田郡萩原町西上田字神屋垣内	縄文	
2	定清遺跡	益田郡萩原町西上田字北垣内	縄文	
3	釜ヶ野遺跡	益田郡萩原町西上田字神屋垣内	縄文	
4	飛越遺跡	益田郡下呂町東上田飛越	縄文	
5	上野遺跡	益田郡下呂町東上田上野	縄文	
6	丸野遺跡	益田郡下呂町森丸野	縄文	
7	籠林遺跡	益田郡下呂町森籠林	縄文	
8	武川久兵衛墓	益田郡下呂町湯之島平岩	近世(江戸)	県史跡S32. 12. 19指定
9	幸田小洞遺跡	益田郡下呂町幸田小洞	縄文	旧地図の地名変更
10	宮本遺跡	益田郡下呂町森宮本	縄文	森八幡神社境内、滅失
11	森上段遺跡	益田郡下呂町森上ヶ平	縄文	
12	峰一合遺跡	益田郡下呂町森峰一合	縄文	S43~46発掘調査
13	下呂森城址	益田郡下呂町森城平	中世(室町)	
14	大林遺跡	益田郡下呂町小川大林	縄文	
15	小ヶ野遺跡	益田郡下呂町小ヶ野町屋	縄文・弥生	滅失
16	山本遺跡	益田郡下呂町小川山本	縄文・弥生	
17	念仏岩遺跡	益田郡下呂町小ヶ野念仏岩	縄文・弥生	
18	大野遺跡	益田郡下呂町小川大野	縄文・弥生	
19	初矢峠石畳	益田郡下呂町乗政初矢	近世(江戸)	県営苗圃内に所在、県史跡S48. 3. 16指定
20	初矢遺跡	益田郡下呂町乗政初矢	縄文・弥生	県営苗圃内に所在
21	山口遺跡	益田郡下呂町乗政山口	縄文	
22	三ツ石遺跡	益田郡下呂町乗政三ツ石	縄文	
23	下新開遺跡	益田郡下呂町乗政下タヤ	縄文	
24	下島遺跡	益田郡下呂町乗政下島	縄文	S59発掘調査、S60報告書刊行
25	丸山遺跡	益田郡下呂町宮地幅	古墳	S49滅失
26	杉戸遺跡	益田郡下呂町野尻杉戸	縄文	滅失
27	宮地城跡	益田郡下呂町宮地洞奥	近世(江戸)	町史跡S46. 6. 22指定
28	首塚	益田郡下呂町宮地宮ノ前	近世(江戸)	
29	鳥屋ヶ野遺跡	益田郡下呂町夏焼鳥屋ヶ野	縄文	
30	笹島遺跡	益田郡下呂町夏焼笹島	縄文	
31	円空岩遺跡	益田郡下呂町門原深谷	縄文	
32	深谷遺跡	益田郡下呂町門原深谷	縄文	
33	下垣内遺跡	益田郡下呂町久野川下垣内	縄文	

(岐阜県教育委員会「岐阜県遺跡地図」1990をもとに作成)

第3章 基本層序と遺構・遺物概要

第1節 基本層序

本遺跡は、数カ所に近現代の攪乱が見られるものの、層序は比較的安定している。幕末から大正・昭和初期の開墾時に緩やかな斜面に応じて水田を作るために各々の田で北西部の地山を削り、その粘土を「敷き¹⁾」として南東側斜面に敷いたと考えられる。従って、西側となるネの列が各層とも浅く、東側のハの列に行くに従い遺物包含層等（以下、包含層）が漸次に厚くなる傾向を持つ。以下、I層より順次記述する。

1) 水田の水が漏出しないように粘土質の土を敷き固めたもの。

I 層 黒褐色土 (7.5Y R3/1) 表土

ねばり・しまりなし。耕作土である。20~30cmの厚みがある。

I a層 明赤褐色土 (5Y R3/3)

固く、しまりあり、ねばりなし。耕作土の下の「敷き」として入れた粘土層である。

I b層 明黄褐色土 (10Y R6/8) に明褐色土 (7.5Y R5/6) の粘土が混じる。

新田開発時に耕地の平面を作るために入れた土と考えられる。

II 層 黒褐色土 (10Y R2/1)

しまり、ねばりなし。包含層である。

III 層 黒褐色土 (10Y R2/2~2/3)

しまり、ねばりなし。地山直上の包含層である。

地 山 明黄褐色土 (10Y R6/6)

ねばり、しまりあり。地山の粘土層である。

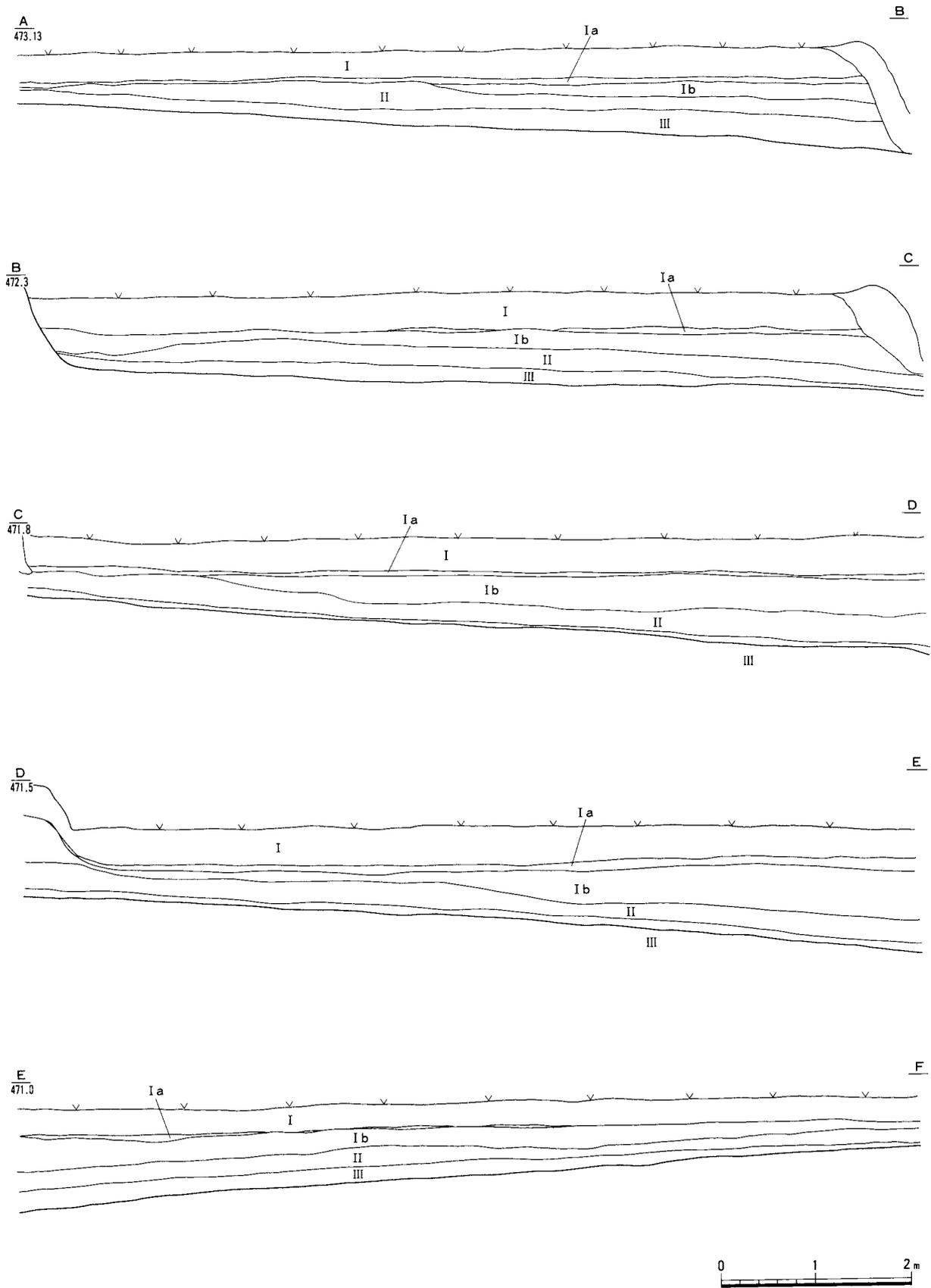
第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 遺構概略

縄文時代の遺構として竪穴住居跡の第1号住居跡 (S X3)、第2号住居跡 (S X2)、集石遺構 (S S2、S S3、S S4、S S5、S S6、S S7、S S8)、下呂石集中出土地点 (P G1、S X5)、不明遺構 (S X7、S X8、S X12)、土坑 (S K1)、その他溝状遺構がある。ピットらしきプランは、小さく不定形の木の根状のものも含め480を越える検出があったが、ピットとして確認したのは280である。

遺物に関してこの遺跡の特徴的な点は、下呂石の大量の出土である。下呂石の石器製品とコア、フレーク、チップ類の総点数は29286点に対して、下呂石以外の石器製品は73点にとどまり、下呂石産地の湯ヶ峰との近さを物語るものと思われる。さらに、その出土した下呂石についても剥片石器の製品数は254個であり、他はほとんどがコアやフレークであった。

縄文土器は、出土点数が少なく復元できる個体が多かったが、主に黒鉛入りの山形文土器と、無文



第8図 基本層序

の黒鉛入り土器であった。黒鉛入り土器の出土地点は、遺構内だけでなく遺跡全体に点在した。

2 竪穴住居

第1号住居跡（S X3）（第9図、図版1）

試掘確認調査時にプランの検出されていたS B1の南西間近で包含層から下呂石のチップ、フレークがよく出る地点があり、やがて円形のプランが検出された。これがS X3である。直径は2.9mとやや小さく、深さは24cmと浅いため、上部が削平されてしまったと考えられるが、床面近くになるにつれ下呂石のチップが大量に出土した。

<遺構の位置>ネ10区東に位置する。

<平面形・規模>直径が2.9mの円形を呈する。床面積約6.6m²。

<覆土>Ⅰ層、黒褐色土層。Ⅱ層、褐色土層。Ⅲ層、黄褐色土層。地山はⅢ層と同色ながらねばりが強い。

<床面・壁>全体に浅く緩いすり鉢状になっている。上部が削平されているように見え、壁の立ち上がりは不明であるが、S X2と同様と見られる。

<柱穴>ピットが遺構の南に2基あるが、他のピットは検出できず、柱穴は不明である。

<出土遺物>黒鉛入り土器が無文で2点、黒鉛の含有されていないと見られる山型文の土器も1点出土している（第34図40、図版6）。山形文の土器は横位に3条の施文があり、胎土には、黒鉛を含んでいないと見られる。無文の黒鉛入り土器は小指の先大の小片で部位は不明である。石器製品では、石鏃16点、ピエスエスキュー1点、スクレイパー 8点（第10図、図版13・15・16）、下呂石コア32点（第19図64、図版18）が出土している。石器の分類は第4節遺物包含層の遺物・石器の項で述べることにするが、S X3の石鏃16点のうち9点が欠損していることと、下呂石のチップが遺構中央部で大量に出土していることから、このS X3において石器を加工したことが考えられる。また、第10図9のように両側面を抉った形状のものが一点出土している。第9図の遺構図中の○印は下呂石の出土地点である。

<時期>黒鉛入り土器の出土から縄文時代早期の住居跡と考えられるが、併せて、下層のⅢ層より出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果では、BC10890年という年代数値も出ていることから縄文時代早期と考えられる。

第2号住居跡（S X2）（第11図、図版1）

試掘確認調査時、トレンチの包含層を掘っていたときは、下呂石のチップも灰釉陶器も出土する状態であった。プランが検出された時点で、サブトレンチを入れたところ、下層で地山と同色の層に至っても下呂石のチップやフレークが出土したため、より深くサブトレンチを入れることで床面と考えられる下呂石の出土限界を探った。S X2は円形の住居跡で、中央部下層に掘り進むにつれ下呂石のチップ、フレークが大量に出土した。

<遺構の位置>ノ11区北西に位置する。

<平面形・規模>直径が約3mの円形を呈する。床面積は約7.1m²である。

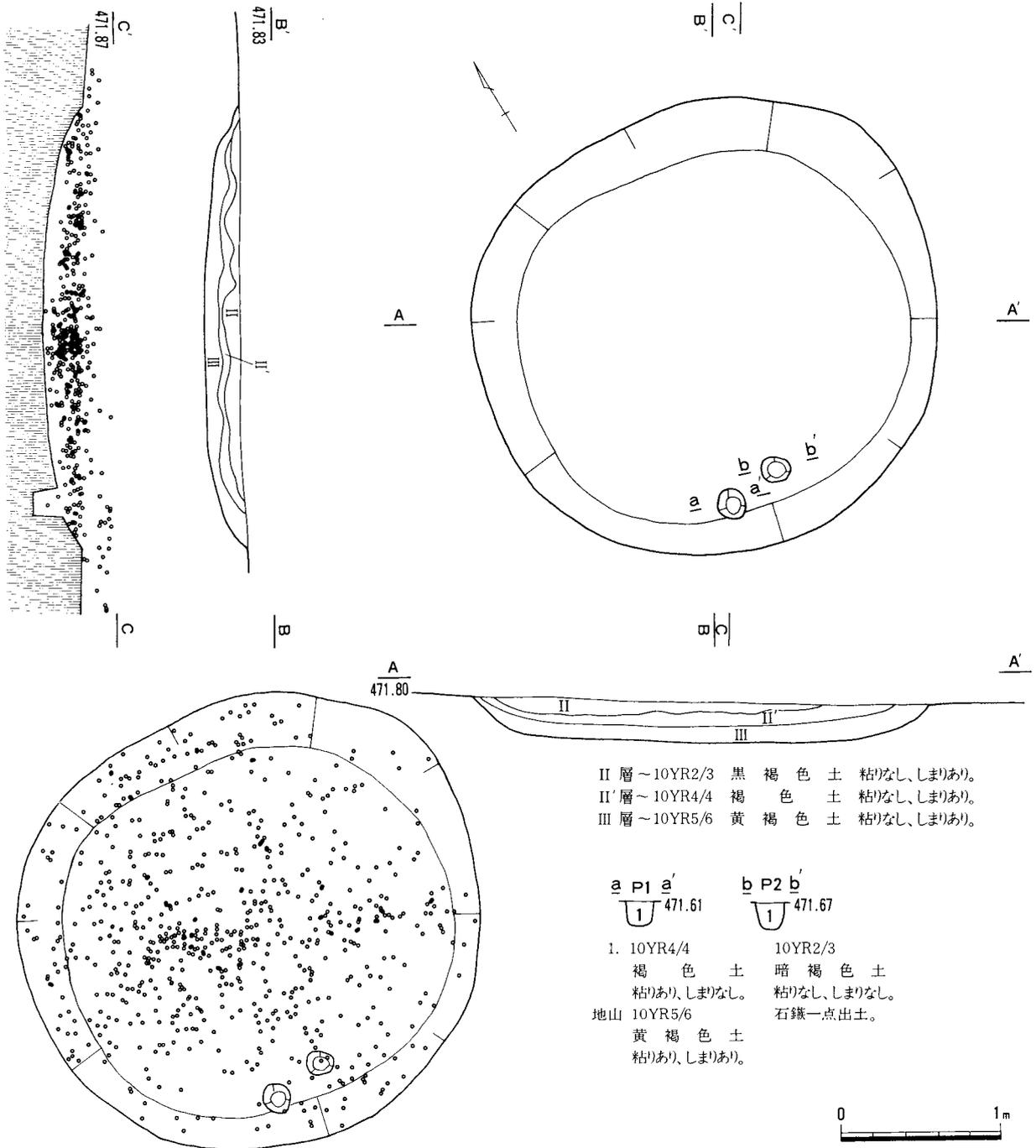
<覆土>Ⅰ層、黒褐色土層。Ⅱ層、黒褐色～褐色土層。Ⅲ層、にぶい黄褐色土層～黄褐色土層。Ⅲ層と地山は同色ながらねばりが違い、地山はねばりが強い。

＜床面・壁＞全体に緩いすり鉢状になっていて、壁の立ち上がりも緩い角度になっている。

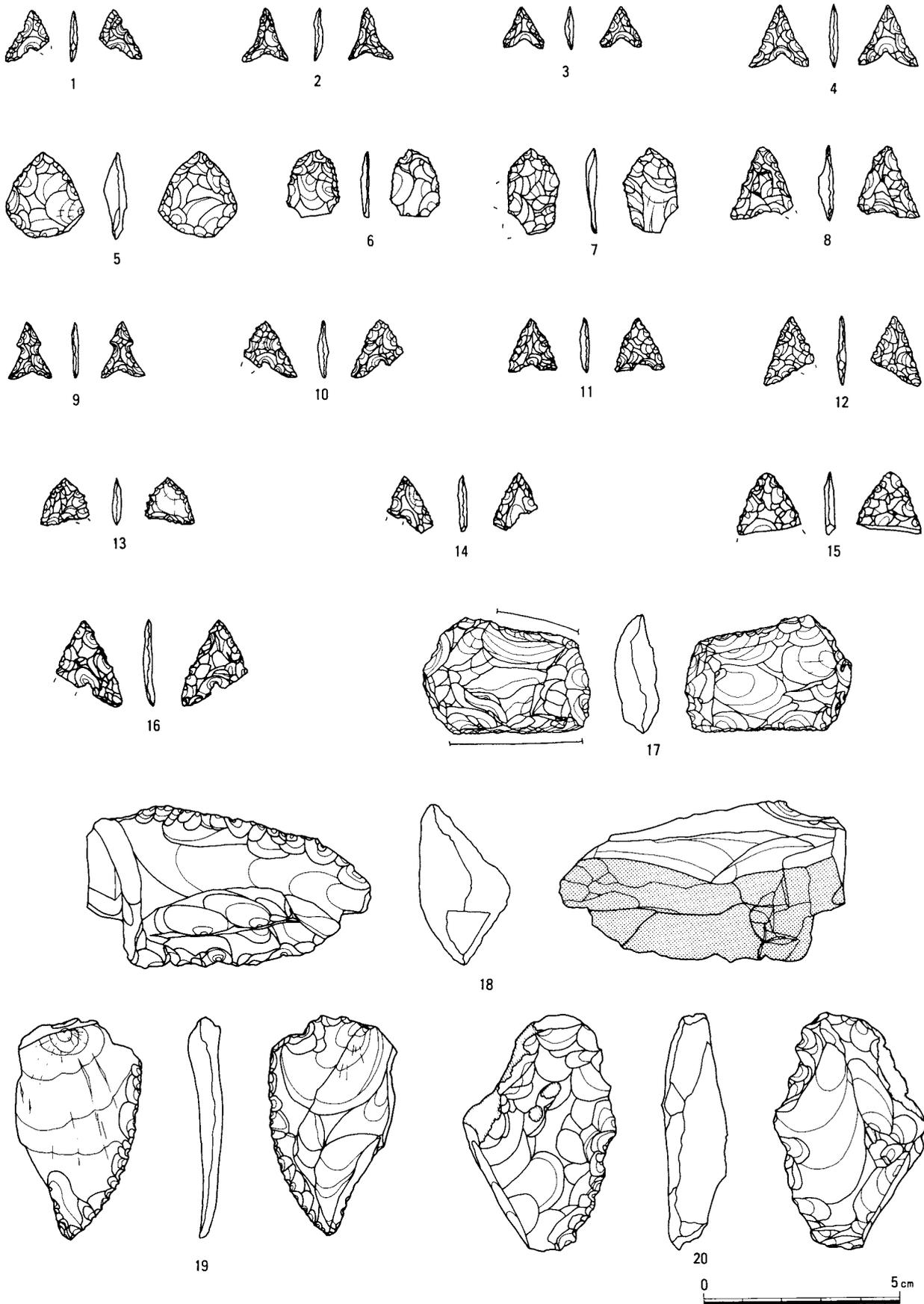
＜柱穴＞Ⅲ層が地山と同色であることもあり、検出できなかった。

＜出土遺物＞床面直上からは、無文の黒鉛入り土器が出土している（第11図、図版6）。器形は、緩く外反する器形で、乳房状の尖底に至ると思われる。石器製品では、石鏃20点、磨製石斧1点、砥石1点、下呂石スクレイパー 10点（以上第12図、図版13・15・16）、下呂石コア24点（第19図、図版18）が出土している。第11図の遺構図中の○印は、下呂石の出土した地点である。

また、石鏃は20点中17点が欠損していた。遺構中央部床面近くで下呂石のチップが大量に出土して



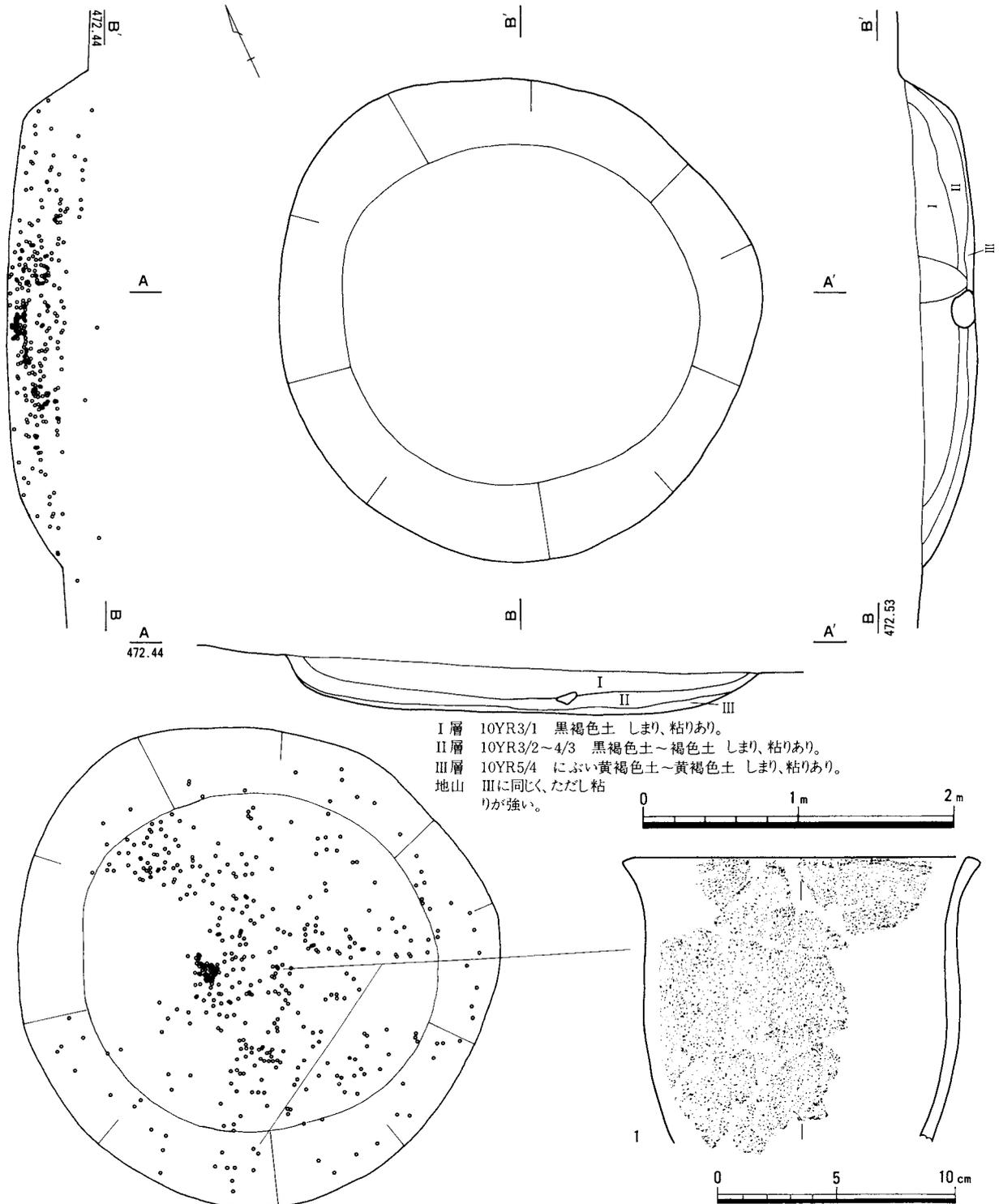
第9図 第1号住居跡



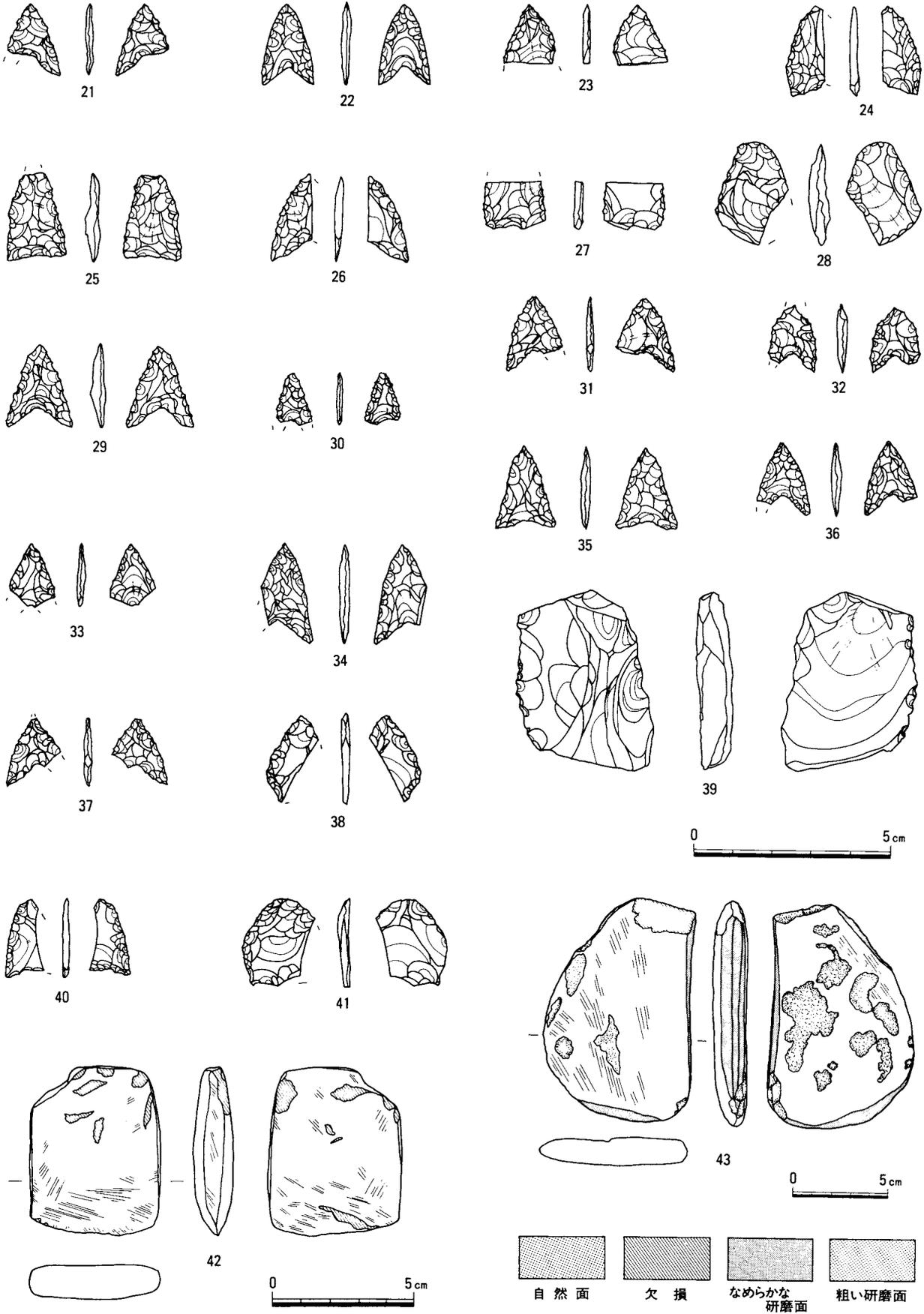
第10図 第1号住居跡の遺物

いることと併せ、この住居跡内で直接石器の加工が行われたことが考えられる。磨製石斧は側面に研磨痕があり、刃部は1端のみであるが、摩耗が激しい。砥石は、使用面は表裏の全面と側面とであるが、裏面には擦った傷が同方向に多数見られる。

<時期> S X2は、黒鉛入り土器の出土から縄文時代早期の住居跡と考えられるが、併せて、下層のⅢ層より出土した炭化物の放射性炭素年代測定による結果では、BC8910年という年代数値も出ている



第11図 第2号住居跡



第12図 第2号住居跡の遺物

ことから縄文時代早期と考えられる。

3 集石遺構

S S1～S S6まで6基の集石遺構を検出した。S S2～S S5には炭化材が、S S6では焼土が検出されている。下呂石のフレークが各遺構から数点出土している。S S2は石鏃が1点出土した。

S S1 (第13図、図版1)

S X2の北4mのところ検出された。1cm長の炭化材が5点検出されているが、廃棄ブロックの可能性が高い。

<位置>ノ12区の西で、S X1、S X2、S S5の間に位置する。

<石材・重量>23個の石があった。石材は、流紋岩質である。角張った石が多く、23個中10個は4.8kgから19.05kgと大きな石である。平均重量は4.7kgである。

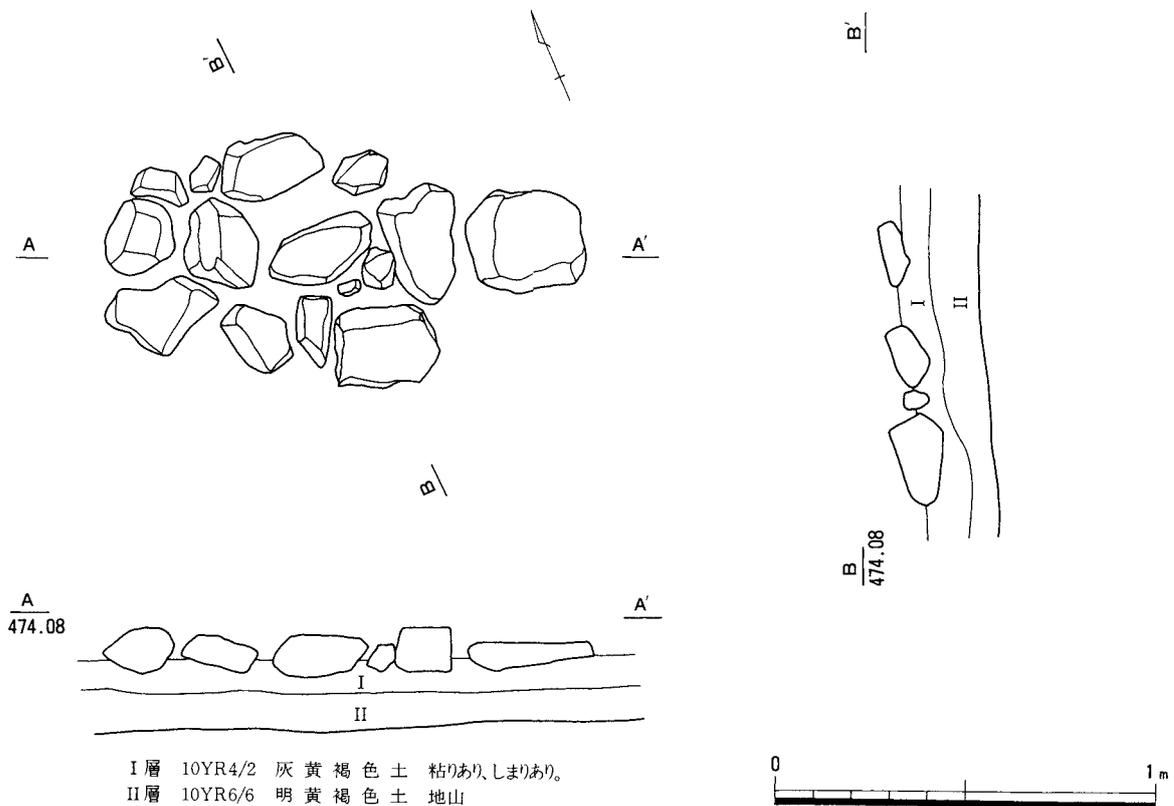
<土坑の形状>土坑は見られず、わずかに石材の重量で地山に沈んだように見られる。

<被熱礫>23個中19個が赤く焼けていたが、焼化の程度は強くないように見られる。

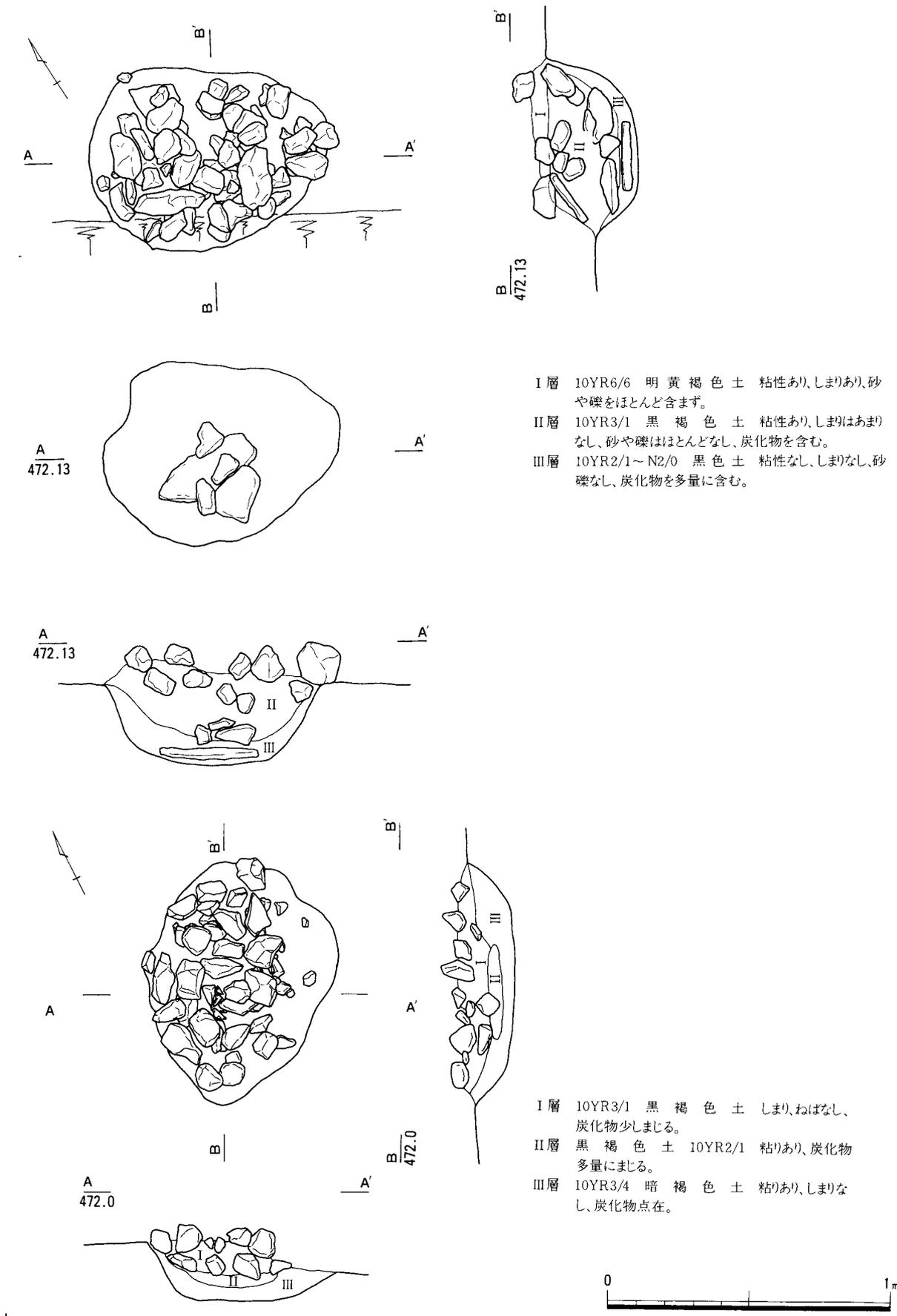
<時期>不明である。

S S2 (第14図、図版2)

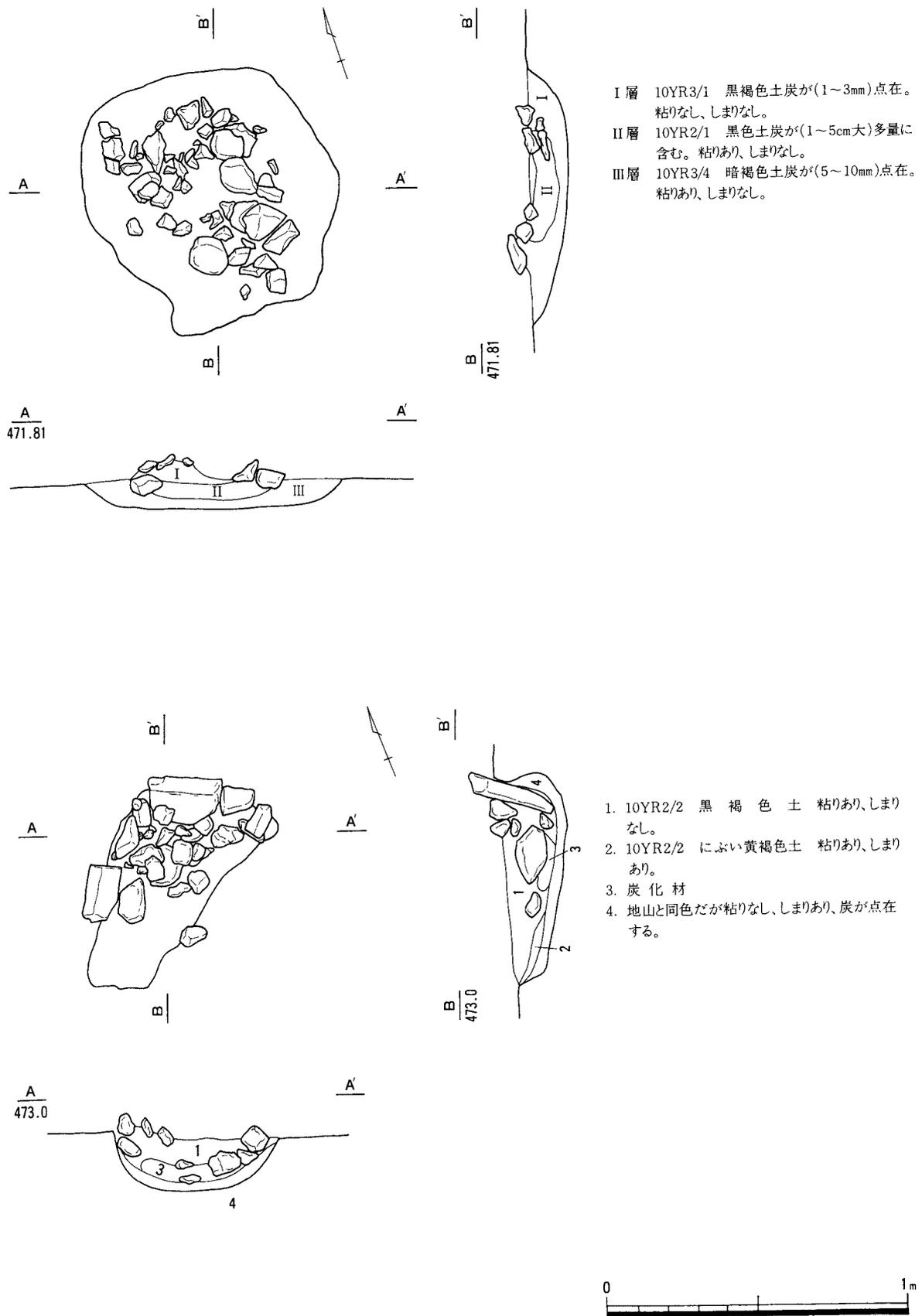
S S2は、ノ11区東の地点で東西に走る水田の境で検出された焼礫集石である。一部南側が削られてしまっているが、拳大の焼成を受けた礫がかたまっており、半割してみると大量の木材炭化物が出土した。炭化材は、中段から下段にかけて次第に多くなり、土坑壁面ではぎっしりと詰まるように検出された。壁石はないが、土坑の基底には1枚の扁平な底石(16cm×38cm)が据えてあった。



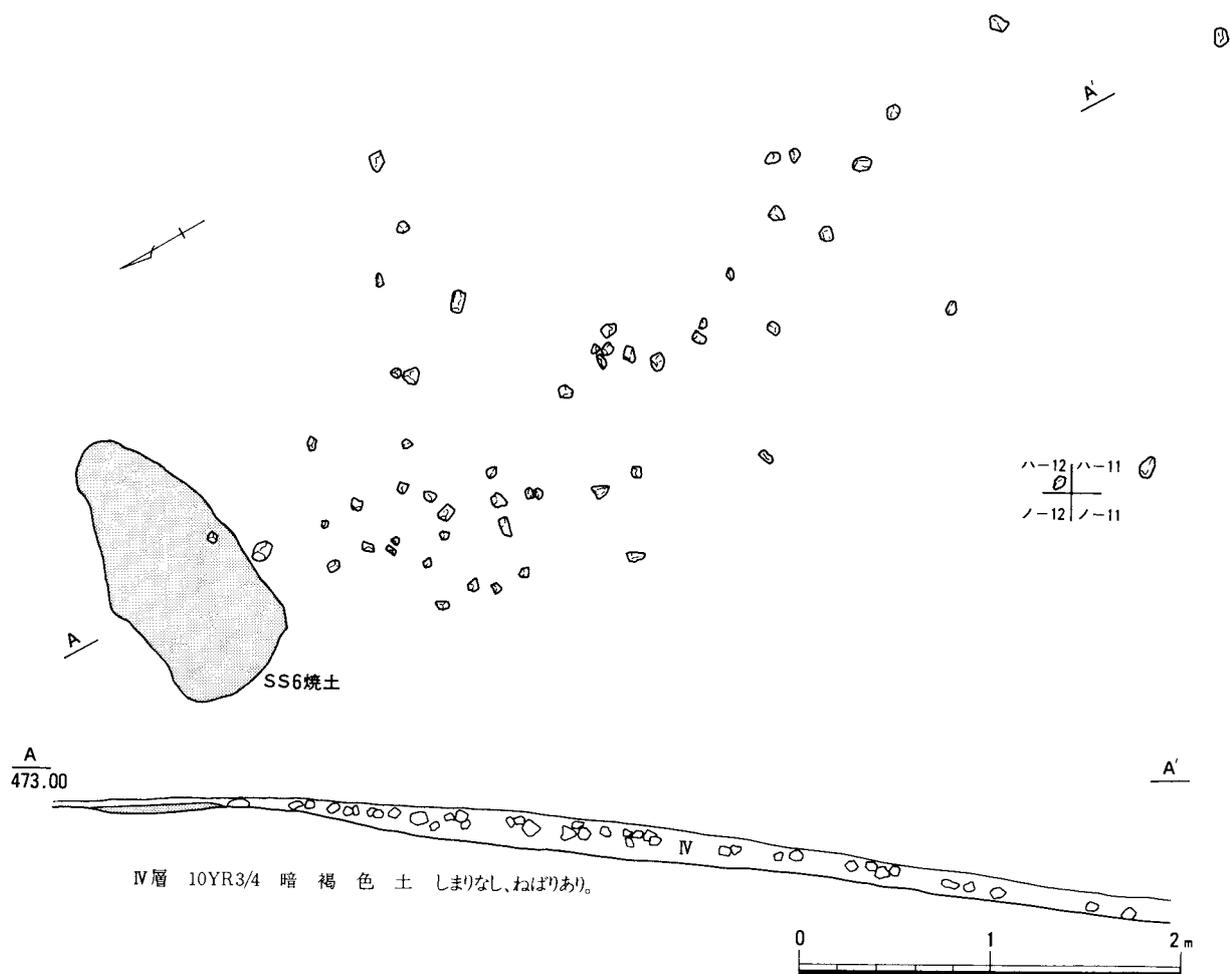
第13図 S S1



第14図 SS2・SS3



第15図 SS4・SS5



第16図 SS6

<位置>ノ11区東の地点でS X2の東4mに位置する。

<石材・重量>石材はデイスイト質である。56個の拳大の礫があり、焼礫の平均重量は642gである。基底部の偏平な底石は流紋岩質で、重量は5.4kgである。

<土坑の形状>たて（南北）66cm、よこ（東西）86cm、深さ28cmの皿状の土坑である。

<被熱礫>約95%の礫が焼成を受けている。

<時期>遺物の炭化材から放射性炭素年代測定したところ、BC4060年からBC4100年と結果が出たが、比較的上層の炭化材を試料として出したため、誤差が大きくなっていたと考える。遺構面が同じSS3と同様のBC8000年代前半、縄文時代早期と見られる。

SS3（第14図、図版2）

SS3は、SS2、SS4との間が2m間隔の中間位置に検出された。木材の炭化物が大量に出土している。

<位置>ノ11区とハ11区の境に位置する。

<石材・重量>石材はデイスイト質である。53個の拳大の礫があり、平均重量は668gである。

<土坑の形状>縦90cm、横67cm、深さ17cmの皿状の土坑である。土坑の土層は3層に分かれ、礫が充填されているⅠ層とその下の炭化材が大量にあるⅡ層、最下層で炭化材が少し混じるⅢ層である。

<被熱礫>約90%が焼成を受けた礫である。

<時期>炭化材の放射性炭素年代測定したところ、BC8850年頃と結果が出た。最下層の炭化材を試料として出したため、誤差は少ないと考える。従って、縄文時代早期と見られる。

S S 4 (第15図、図版2)

S S 3の南2mで検出された。形態もS S 3に似ている。大量の炭化材が出土した。

<位置>ノ11区とハ11区の境に位置する。

<石材・重量>石材はデイサイト質である。50個の拳大の礫があり、平均重量は431gである。

<土坑の形状>縦90cm、横87cm、深さ11cmで、土層はS S 3同様3層に分かれる。

<被熱礫>約90%が焼成を受けた礫である。

<時期>遺物の炭化材から放射性炭素年代測定したところ、BC4330年頃と結果が出たが、S S 2と同様の理由で、遺構面が同じS S 3と同じくBC8000年代前半、縄文時代早期と考える。

S S 5 (第15図、図版2)

S S 5は、ノ12区北の畑地として開削された区域に東側の一部が削られたようにして検出された。北端には大きな板状の壁石が立ちピットを囲むように20cm大の礫が並ぶ。ここでも大量の木材炭化物が出土している。南側に開口部をもつ形状と見られる。

<位置>ノ12区北でS X 2からは北に8m離れている。

<石材・重量>石材はデイサイト質のものが半数で、他は流紋岩質である。33個の礫があり、平均重量は977gである。北壁の一番大きな壁石は7.75kgあり、流紋岩質である。土坑を囲む壁石のほとんどは同様に流紋岩質である。

<土坑の形状>縦72cm、横65cm、深さ25cm。土層は3層あり、Ⅲ層の上に基底部の底石が並ぶ。

<被熱礫>約90%の石が焼成を受けている。

<時期>遺物の炭化材から放射性炭素年代測定したところ、BC4060年からBC4100年と結果が出たが、比較的上層の炭化材を試料として出したため、誤差が大きくなっていたと考える。従って、遺構面が同じS S 3と同様のBC8000年代前半、縄文時代早期と見られる。

S S 6 (第16図)

S S 6は、S S 5の東4mの地点に短径1.2m、長径2.2mの楕円状の焼土として検出されたものである。これに伴うと思われる焼成を受けた拳大の礫が、斜面に沿って南方に扇形に流れ出るように51個検出されている。(最遠の礫で9.5m南)

<位置>焼土の位置はS S 5の1m東である。焼礫はハ12区に広がっている。

<石材・重量>デイサイト質である。52個の礫の平均重量は、610gである。

<焼土の形状>長径2.3m、短径1.1mの楕円形である。

<被熱礫>100%焼礫であった。

<時期>焼土面が比較的厚く3cm以上あるため地磁気年代測定をしてみたところ、BC8100~8200年ということであった。前出の集石遺構同様、縄文時代早期の遺構と考える。

4 下呂石の大量出土地点 (S X5、P G1)

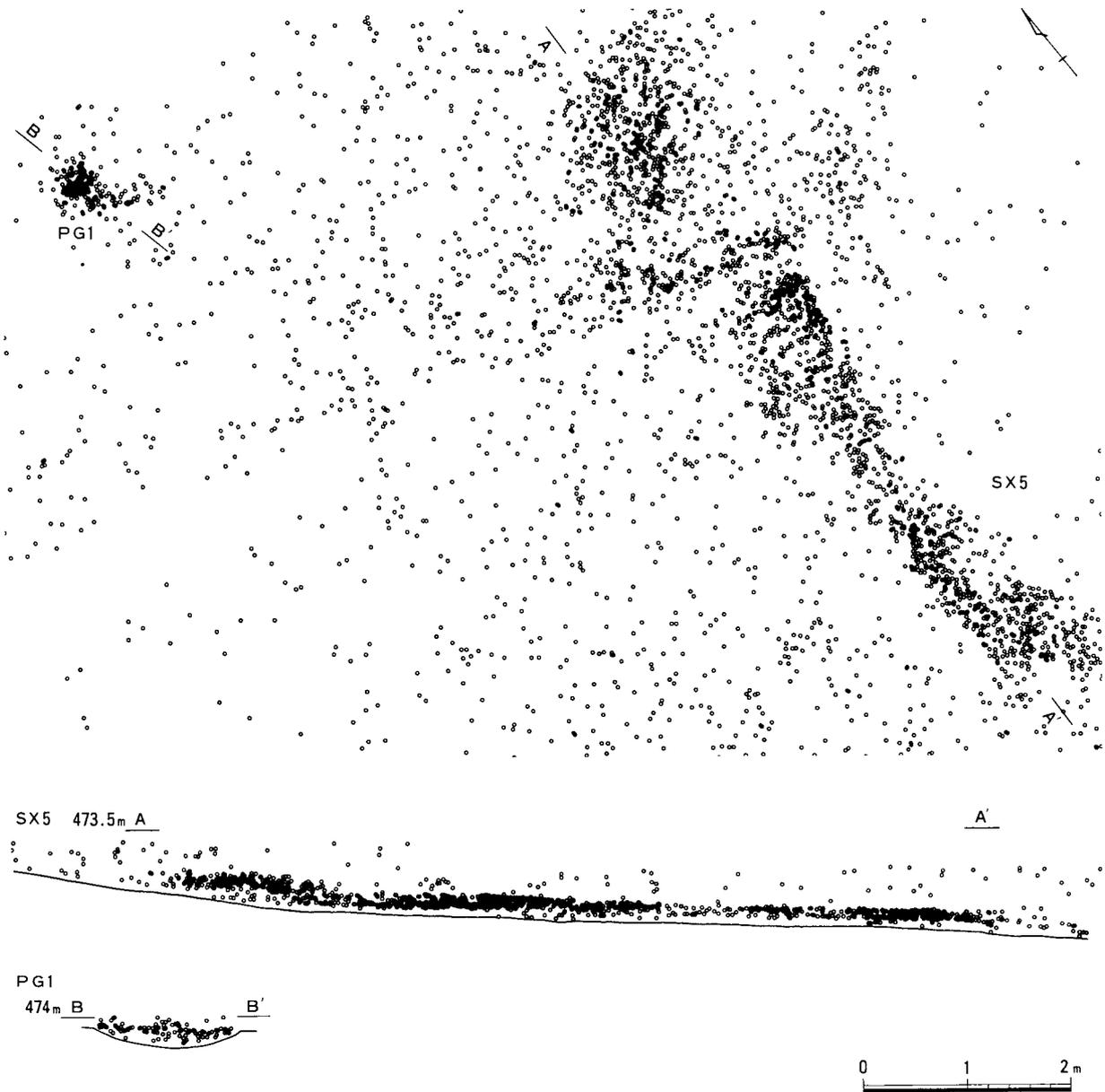
S X5 (第17図、図版2)

ハ13区で、下呂石のチップ、フレイクが大量に出土する帯状の遺構が検出され、S X5とした。石器の加工と何らかの関連があると考え、チップ、フレイクの出土地点を記録した。谷状になった地山の自然な傾斜に近い方向に帯状にのびており、近くの加工場所から流れ込んだものと見ることができるが、コア、フレイク類の量と大きさからこの場所での加工、貯蔵も考えられる。

<位置>ハ13区の西、北から南南東にかけての緩やかな斜面上に位置する。

<形状>幅1~1.5m、長さ8mの帯状である。

<下呂石出土状況と地形>図版2に示すように、ハ13区での掘削作業に際して下呂石出土地点に箸(コ



第17図 下呂石集中出土地点

ア・フレーク類)と串(チップ)を立て区別しながら調査した。下呂石の出土分布は、第17図に示すとおりである(○が下呂石出土地点を示す)。地山直上から10cm~15cmの厚みでかたまっており、コア・フレーク類とチップはS X5内では偏ることなく全体に分布していた。

遺跡の地形は全体に西側から東側に傾斜し、ハ15区からハ8区にかけては、平均して6.4%の勾配がある。ハ13区の南北の傾斜はS X5の南端近くで、かなり(勾配で2.4%)緩くなっている。このため、S X5が流れ込みの堆積した場所の可能性はあると考える。しかしS X5と谷の方向軸は30°ずれているうえ、谷状の地形の上流部となるハ14区の方角を見ても、勾配が緩いS X5のすぐ東や北の斜面を見てもS X5のような下呂石の堆積はない。これはS X5の下呂石が谷の上流部から流れ込んだものではなく、S X5の場所で直接下呂石が加工されたかもしくは、加工がS X5のすぐ西で行われ、それが谷に流れ込む手前のS X5で堆積した可能性が強いと思われる。

<出土遺物>石鏃は15点、ピエスエスキーユ2点、下呂石スクレイパー5点、(以上第18図、図版14・15・16)、磨石3点(第20図、図版17)下呂石フレーク460点、下呂石チップ1732点、下呂石コア55点(第19図、図版18)が出土している。

石鏃では第18図53に見られる先端が突出した早期に多い形状の特質を持つものの他、50、51のように胴部に鋸歯を持ち先端と末端が尖っているタイプ、45のように肩から先端にかけて尖らせて胴部以下が幅広になったタイプがみられた。

コアは55点中90%はコアとしてまだあまり剥片を取っていないコアブランク(第4節遺物包含層の遺物-石器の分類参照)である。コアの平均重量は50.1gであるが、100gを越えるものは5点、内1点は300gであった。

P G1 (第17図、図版3)

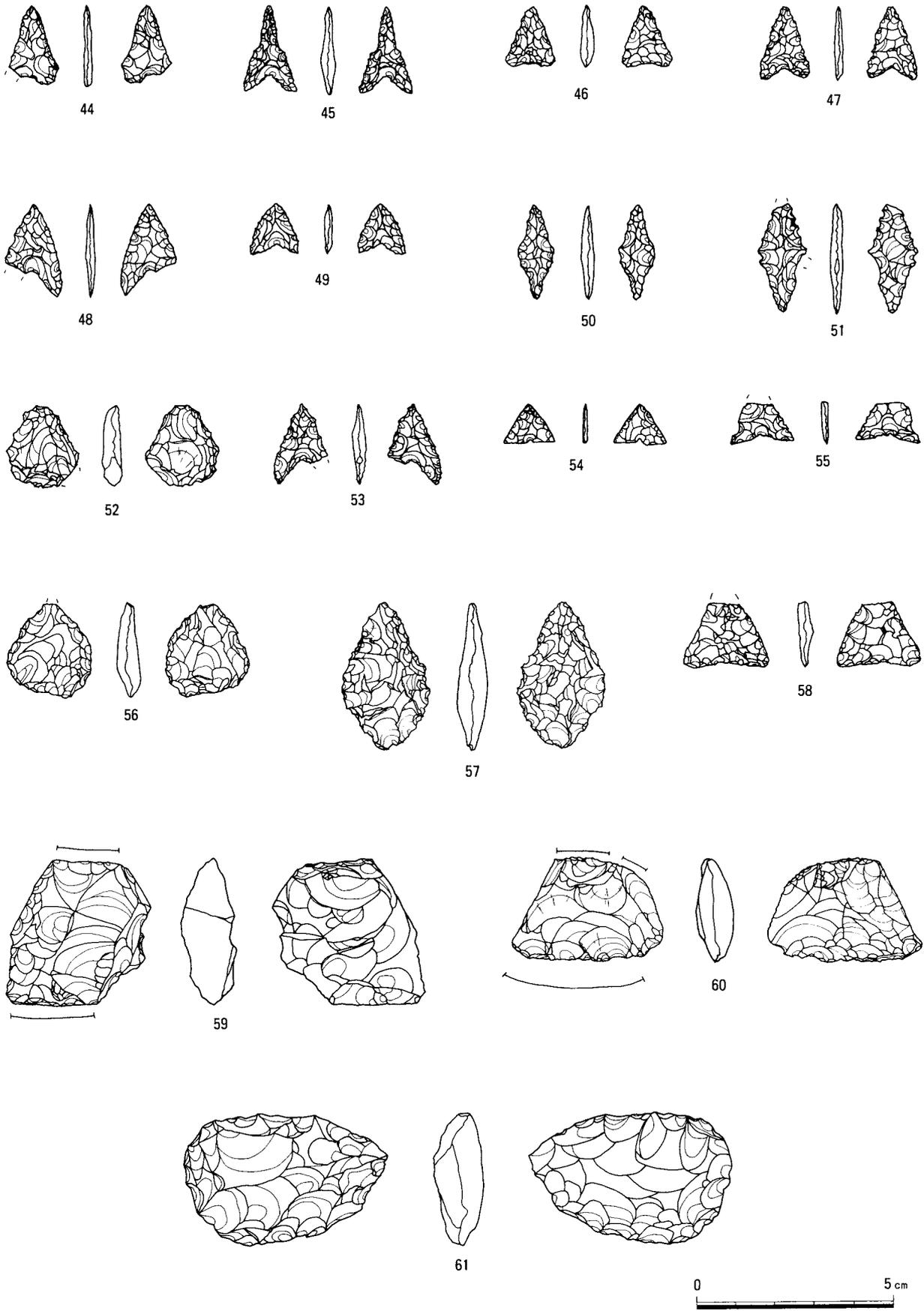
S X5の最北部から西に5mのところの下呂石のフレークが集中して出土する地点があり、P G1とした。下呂石の加工、貯蔵の場所の可能性が考えられる。

<位置>ノ13区の中央北よりで、S X5の北端から5m西に位置する。

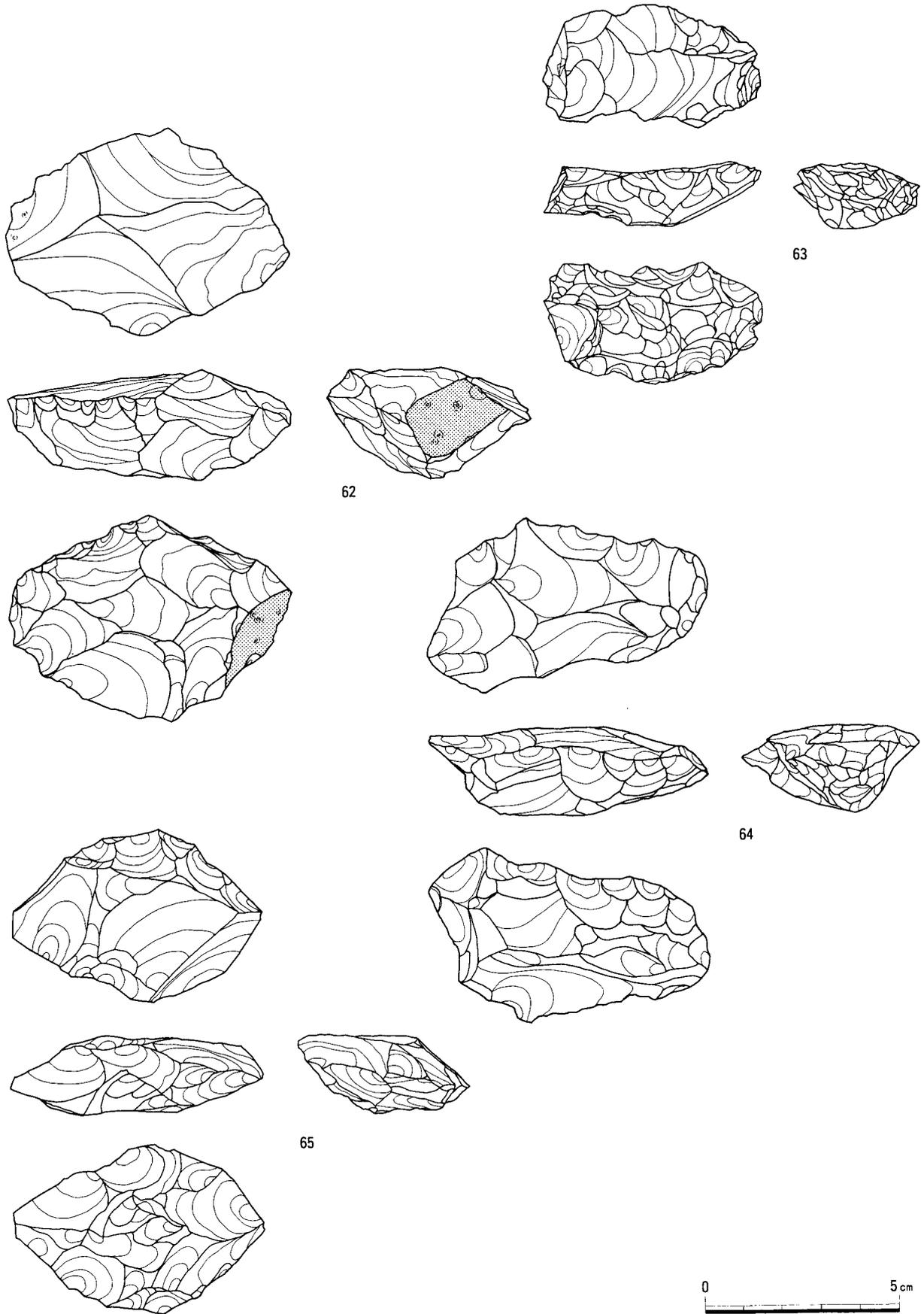
<形状>半径1mの範囲に盛り上がるように下呂石がかたまっていた。P G1の中央部では、同じく下呂石の大量出土したS X5と違い、下呂石のフレークやコアは重なり合うように密集した形で検出されている。半割してみたがピット状の遺構ではなかった。

<下呂石出土状況>P G1は半径1mに集中して下呂石が出土しているが、このP G1の周囲を見ると、北西側のP G1より斜面で高くなる位置には全くと言っていいほど下呂石は出土していない。P G1より斜面の下側になる東南方向には下呂石が点々と出土していた(第17図)。このことから、P G1は流れ込んだものではないことがわかる。意図的に貯蔵等の目的で下呂石をかためてあったように見られる。

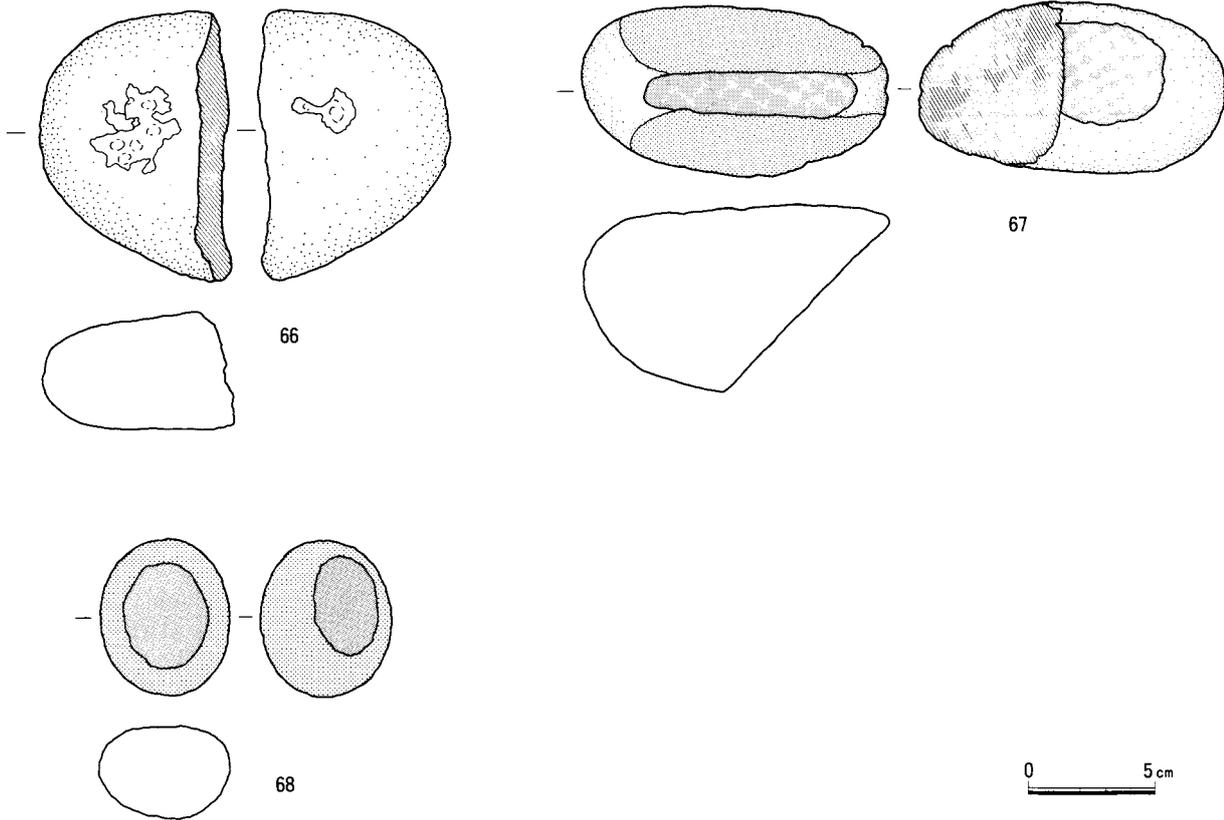
<出土遺物>下呂石スクレイパー1点、フレーク73点、下呂石チップ291点、下呂石コア7点が出土している(第19図63、図版18)。コアの平均重量は33.3gである。



第18図 S X 5の遺物 (1)



第19図 S X 5の遺物 (2)



第20図 S X 5の遺物 (3)

5 その他の遺構

S X 7 (第21図、図版3)

<位置>ネ15区南に位置する。

<平面形・規模>長径3.3m短径1.65mの楕円形で、深さは28cmである。

<覆土>土層はⅠ層黒褐色土、Ⅱ層暗褐色土、Ⅲ層黄褐色土の3層からなる。

<出土遺物>石鏃1点、スクレイパー 1点、コア4点、フレーク19点。以上すべて下呂石。

<時期・用途>縄文時代。不明。

S X 8 (第21図、図版3)

<位置>ネ15区とノ15区の境に位置する。

<平面形・規模>長径1.28m、短径1.12mの楕円形である。深さは20cmである。

<覆土>土層はⅠ層黒褐色土、Ⅱ層褐色土の2層からなる。

<出土遺物>石鏃3点、フレーク6点。以上すべて下呂石。

<時期・用途>縄文時代。不明。

S X 12 (第21図、図版3)

<位置>ネ12区とネ13区の境でS X 1の3m北に位置する。

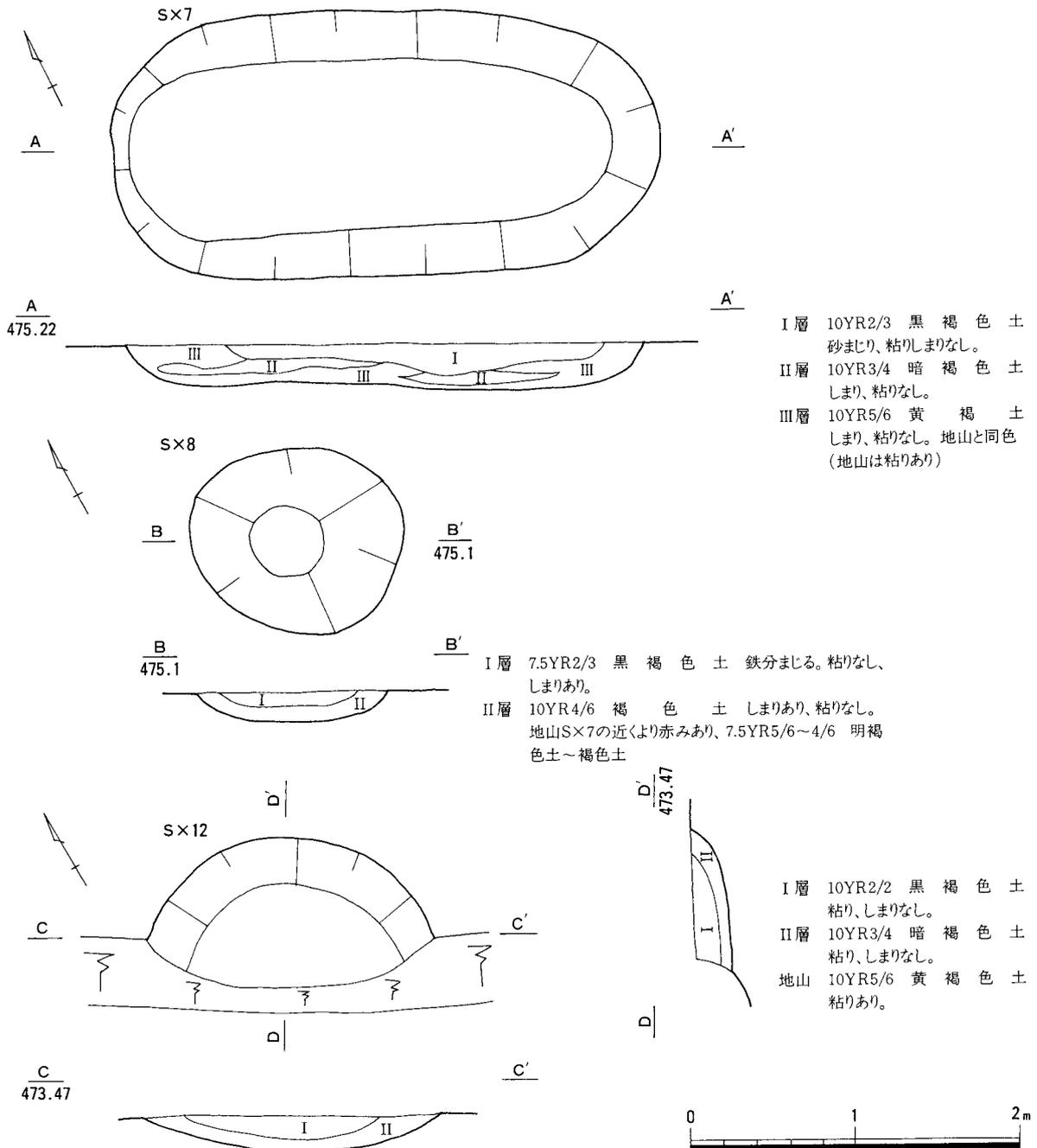
<平面形・規模>直径1.8mの円形と見られるが、南側6割に相当する部分が削られてしまっているた

め不明な点が多い。深さは最深部で24cmである。

<覆土> I層黒褐色土、II層暗褐色土の2層からなる。

<出土遺物> 下呂石フレーク12点。

<時期・用途> S X 12の南側は、耕地の開削時に削られたものと考えられるが、それがためか遺物が少なく判断材料が少ないが、下呂石のフレークの出土から縄文時代と考える。しかし、規模が小さく用途不明の遺構である。



第21図 S X 7、S X 8、S X 12

土坑と溝状遺構

土坑 (SK1) (第22図、図版3)

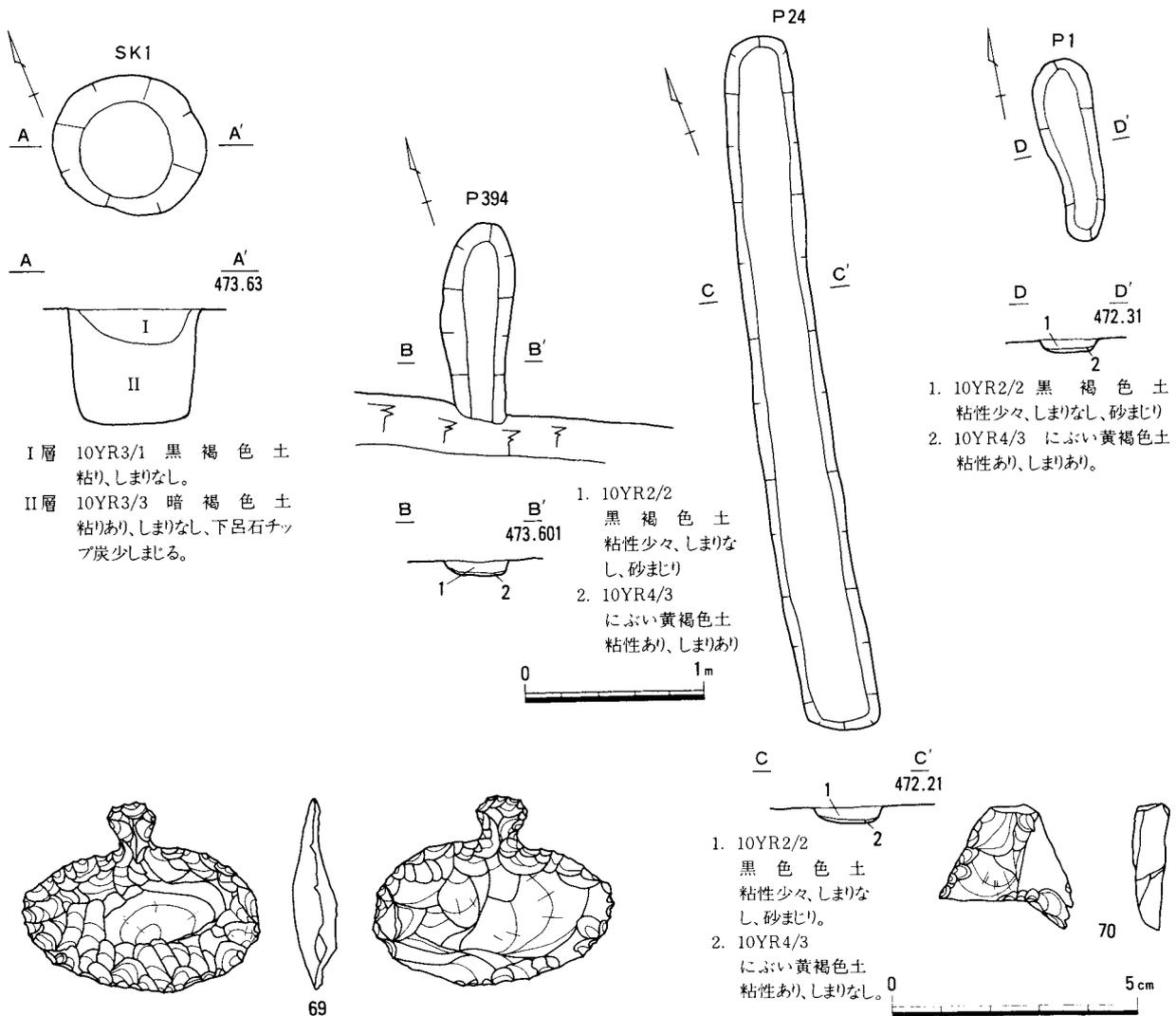
土坑は1基検出され、SK1とした。ネ13区の北西にあり、直径73cm、深さ64cmで土層は2つに分かれ、下層から石匙 (第22図69、図版15) が1点出土した。石匙は刃部が楕円形で下呂石製である。縄文時代の遺構と考えられる。

溝状遺構 (第22図)

ノ11区とノ12区の境で、SX2と集石遺構SS5およびSS2、3との間に南北に溝状の遺構が検出された (P1とP24)。ノ13区南西部にも南側が削られた形の溝状遺構が検出された (P394)。

P24とP394は10m近く離れてはいるが互いに延長線上に位置する。3基とも土層は2層でI層は黒褐色土、II層は黄褐色の1~2mmの砂混じりの土である。遺物は、P1で黒曜石のスクレイパーが1点出土している (第22図70、図版16)。

遺構の検出面の状況から、縄文時代の遺構と考える。



第22図 土坑と溝状遺構

ピット

ピットは、全部で482基確認した。ピットとして検出したが、掘り込みが不明瞭で掘削後に欠番にしたものもある。一覧表にまとめた。なお、直線的に並んだりするものはなく、掘建柱建物の跡は不明である。

第2表 ピット一覧表

番号	地区	大きさ	深さ	遺物(内は下呂石ルノ数)
1	ノ-12	80 × 25	10	漆器遺構 瓦葺石スレ(10-1)
2	ノ-12	39 × 34.5	19	
3	ノ-12	21 × 23	33	
4	ノ-11	24 × 24	14.5	
5	ノ-11	40 × 39	54	
7	ノ-11	30 × 29	12.5	
8	ノ-11	32.5 × 31	31.5	(8)
10	ノ-11	28 × 28	21	
11	ノ-11	33 × 28	10	
14	ノ-11	41.5 × 30	12	(1)
16	ノ-11	20.5 × 23	7	石鏃1
17	ノ-11	21 × 20.5	14	(1)
18	ノ-11	22 × 24	15	
20	ノ-11	32.5 × 31.5	35	(1)
21	ノ-11	50 × 33	15	
22	ノ-11	40.5 × 43	24	(1)
23	ノ-11	54 × 54	9.5	(2)
24	ノ-12	380 × 24	5	溝状遺構 (6)
25	ノ-10	66 × 53	15	(3)
26	ノ-10	38 × 38	33	
27	ノ-10	40 × 36	12	
28	ノ-10	60 × 50	28	
29	ノ-10	33 × 44	30	
30	ノ-10	27 × 27	15	(1)
31	ノ-10	29 × 26	29.5	
32	ノ-10	42 × 37	20.5	(1)
33	ノ-10	74 × 87	10	(1)
34	ノ-10	31 × 35	15	
35	ノ-10	27 × 33	24	
36	ノ-11	37 × 31	8.5	
37	ノ-10	36 × 29	8	
38	ノ-11	31 × 28	9	(1)
40	ノ-11	31 × 33	19.5	
41	ノ-11	27 × 28	12	
42	ノ-11	20 × 22	18.5	
44	ノ-11	35 × 28	21	
45	ノ-11	30 × 25	15	
46	ノ-11	24 × 15	6	(1)
47	ノ-11	21 × 20	14	(1)
48	ハ-11	51 × 41	21	
50	ハ-11	49 × 30	31	(1)
52	ノ-11	37 × 30	41	
53	ノ-11	25 × 23	24.5	
54	ノ-11	32 × 30	30	
55	ノ-11	50 × 39	48	
56	ノ-11	55 × 64	60	
59	ノ-11	29.5 × 31	24.5	
60	ノ-11	24.5 × 26	20	
61	ノ-11	38 × 31	40	
62	ノ-11	30 × 25	33.5	
63	ノ-11	28 × 24	27	
64	ノ-11	30 × 31	41.5	
65	ハ-11	47 × 43	13	
66	ハ-11	35.5 × 23	19.5	
67	ハ-11	46 × 32	12	
71	ハ-11	35.5 × 23	17	
73	ハ-11	27 × 35	7	(2)
74	ハ-11	27 × 27	9	
75	ハ-10	30 × 28	11.5	(1)
76	ハ-10	50 × 30.5	9	(2)
77	ハ-10	33 × 41	15	
79	ハ-10	34 × 24.5	9.5	
80	ハ-10	27 × 26	34	
81	ハ-10	34 × 33.5	28	(3)
85	ハ-10	24.5 × 32	18	
90	ノ-11	20.5 × 18	6.5	(1)
91	ノ-11	23 × 20	27	(2)
92	ノ-11	21.5 × 22	26	
93	ノ-11	21 × 30	24	
94	ノ-11	24 × 24	15	
96	ノ-11	22 × 21	20	(1)
97	ネ-11	30 × 30	21	
98	ノ-11	26.5 × 24	13	
99	ネ-11	96 × 93	31	
100	ハ-11	130 × 180	56	風倒木 石鏃2(8)
101	ノ-11	31 × 29.5	22	
102	ノ-11	46 × 35	21	
103	ノ-11	33 × 30	35.5	
104	ノ-11	27 × 11	16	
108	ネ-11	31 × 31	15	
111	ノ-11	23 × 29	24	
113	ノ-11	21 × 22	16	
118	ノ-10	23 × 23	16	
119	ノ-10	28 × 32	11	
120	ノ-11	20 × 26	16	
125	ハ-11	35 × 37.5	28	SS2横
127	ハ-11	23 × 23	18	
129	ハ-11	27 × 32	19	
131	ハ-10	41 × 42	20	SX6のピット 土師器片20
132	ハ-10	23 × 23	26	SX6のピット
133	ハ-10	28 × 27	15	SX6のピット 黒鉛土器片1
134	ハ-10	26 × 25	20	SX6のピット(1)
135	ハ-10	67 × 65	30	(1)
136	ハ-10	38.5 × 30	18	(1)
137	ハ-10	29.5 × 24	24	
138	ハ-10	34 × 30	28	土器片1
143	ハ-10	73 × 56	58	(1)
146	ハ-9	22 × 23	17	
150	ノ-10	18 × 19	21	
151	ノ-10	21 × 17	16	
152	ノ-10	21 × 23	31	
153	ノ-10	16 × 14	16	
154	ノ-10	23 × 22	37	
155	ノ-10	27 × 22	35	
156	ノ-10	24 × 20	30	
157	ノ-10	22 × 19	19	
162	ノ-10	26 × 29	28	
163	ノ-10	26 × 24	13	
164	ノ-10	40 × 19	28	
165	ノ-10	43 × 34	27	石鏃1 (1)
168	ノ-9	38 × 40	26	(1)
169	ノ-9	30 × 32	12	(1)
173	ノ-9	26 × 24	25	
174	ノ-9	33 × 30	31	(2)
175	ノ-9	21 × 32	28	
178	ノ-10	21 × 20	22	
179	ノ-10	27 × 36	31	土器片1
181	ノ-10	20 × 19	13	
182	ノ-10	21 × 27	9	
183	ノ-10	18 × 19	11	
184	ノ-10	24 × 25	41	
187	ノ-10	19 × 27	24	
188	ノ-9	20 × 20	15	
189	ノ-9	21 × 28	26	
190	ノ-9	25 × 22	15	(1)
192	ノ-9	32 × 30	13	
194	ノ-9	20 × 19	15	
195	ノ-9	82 × 47	24	(2)
198	ノ-10	18 × 17	14	
199	ノ-10	17 × 18	19	
200	ネ-10	20 × 22	24	
201	ネ-9	26 × 25	19	
202	ネ-10	43 × 47	14	
203	ネ-10	34 × 25	37	
204	ネ-9	27 × 28	19	(1)
206	ネ-9	29 × 27	28	
207	ネ-9	26 × 35	38	(1)
208	ネ-9	60 × 45	18	(2)
213	ネ-9	86 × 78	34	(2)
214	ネ-9	24 × 24	15	
215	ネ-9	26 × 36	15	(1)
216	ネ-9	55 × 48	15	
217	ネ-9	26 × 24	31	(1)
221	ネ-9	28 × 27	26	(1)
223	ネ-9	17 × 31	9	
228	ネ-9	23 × 26	29	
230	ハ-10	21 × 24	19	
231	ハ-10	17 × 24	9	
234	ネ-9	30 × 27	33	
235	ネ-10	19 × 23	38	(1)
236	ネ-9	21 × 38	38	(1)
237	ネ-9	25 × 28	27	土器片3 (1)
238	ネ-9	24 × 24	27	
239	ネ-9	27 × 28	27	
240	ノ-10	27 × 28	12	
246	ネ-8	33 × 48	11	
247	ネ-8	27 × 32	7	
248	ネ-8	32 × 32	37	(1)
249	ネ-8	28 × 27	8	
250	ネ-8	21 × 22	14	
251	ネ-8	18 × 17	6	
259	ネ-9	26 × 33	21	
260	ネ-9	25 × 24	26	
262	ネ-9	22 × 27	16	
265	ネ-9	21 × 17	11	
266	ネ-9	23 × 24	11	
267	ネ-9	31 × 16	30	(1)
269	ネ-9	35 × 37	24	
271	ネ-9	45 × 35	10	
274	ネ-9	27 × 23	23	(1)
276	ノ-8	22 × 27	8	
279	ノ-9	23 × 20	28	灰軸陶器片1
280	ノ-9	17 × 15	10	
281	ノ-9	20 × 19	13	
283	ノ-9	23 × 19	11	
284	ノ-9	28 × 35	21	(1)
285	ノ-9	16 × 21	9	
286	ノ-9	21 × 10	10	
287	ノ-9	19 × 19	23	(1)
288	ノ-9	38 × 45	47	(6)
289	ノ-9	21 × 23	26	
290	ネ-8	21 × 20	20	
292	ネ-9	25 × 28	15	
293	ネ-9	23 × 22	13	
294	ノ-9	22 × 18	27	
297	ノ-11	23 × 24	23	
298	ノ-11	21 × 23	13	
299	ノ-11	17 × 19	16	(1)
300	ノ-11	24 × 22	19	
301	ノ-11	25 × 22	17	(1)
303	ノ-11	27 × 37	16	(1)
305	ノ-11	40 × 37	9	
307	ノ-11	20 × 22	19	
311	ハ-11	32 × 32	7	(1)
313	ハ-11	23 × 25	18	
314	ハ-11	17 × 20	9	
315	ハ-11	24 × 21	23	
316	ハ-11	19 × 20	6	
317	ハ-11	45 × 48	9	
319	ハ-11	20 × 20	23	
320	ハ-11	16 × 23	12	(1)
322	ハ-11	19 × 22	11	
323	ハ-11	27 × 25	10	(1)
324	ハ-11	24 × 32	15	(2)
326	ハ-11	24 × 21	14	
327	ハ-11	26 × 22	8	
332	ハ-11	16 × 15	13	
334	ハ-11	20 × 42	14	(4)
336	ハ-11	20 × 21	15	(2)
337	ハ-12	30 × 21	11	(1)
338	ハ-12	19 × 18	9	(1)
339	ハ-12	26 × 33	19	(2)
340	ハ-12	28 × 34	11	(1)
341	ハ-12	19 × 21	9	(1)
343	ハ-12	27 × 30	12	(1)
344	ハ-12	24 × 27	10	
345	ハ-12	44 × 60	37	(1)
346	ハ-12	25 × 32	11	(1)
348	ノ-12	21 × 22	11	
349	ノ-12	19 × 20	10	
350	ノ-12	52 × 37	29	
351	ネ-12	14 × 15	19	
353	ネ-12	22 × 30	18	
354	ネ-12	18 × 19	15	
357	ネ-12	24 × 23	9	
358	ネ-12	31 × 31	9	(1)
361	ネ-12	37 × 36	11	(1)
363	ネ-12	20 × 18	12	
366	ネ-12	42 × 35	7	(1)
367	ネ-12	23 × 30	22	
371	ネ-12	25 × 22	14	
372	ネ-12	18 × 18	7	
373	ノ-12	21 × 21	12	
374	ノ-12	38 × 21	16	
375	ノ-12	24 × 30	14	
377	ノ-12	19 × 18	11	
377	ノ-12	19 × 16	7	
378	ノ-12	15 × 14	9	
379	ノ-12	19 × 18	20	
380	ノ-12	20 × 25	11	
381	ノ-12	28 × 29	14	
382	ノ-12	30 × 22	17	
385	ネ-12	30 × 37	10	
387	ネ-13	33 × 33	11	(5)
388	ノ-13	23 × 27	20	
389	ノ-13	27 × 25	23	(1)
394	ノ-13	84 × 99	14	溝状遺構 (13)
395	ノ-8	30 × 47	10	
397	ネ-8	23 × 22	21	
402	ネ-9	16 × 19	8	
403	ノ-9	21 × 23	11	(1)
413	ノ-9	21 × 26	9	(1)
416	ノ-9	17 × 16	11	
417	ノ-9	24 × 21	30	
418	ハ-9	20 × 15	11	
421	ノ-9	18 × 15	12	
422	ノ-9	13 × 14	12	
423	ノ-9	18 × 16	17	
425	ノ-9	18 × 18	20	(1)
426	ノ-9	23 × 20	8	(1)
427	ノ-9	18 × 21	11	
428	ノ-9	18 × 18	16	
429	ノ-9	15 × 17	11	
438	ハ-9	16 × 17	20	
439	ハ-9	23 × 30	21	(1)
444	ハ-9	16 × 17	10	
445	ハ-9	61 × 48	8	(1)
446	ハ-9	16 × 18	8	
447	ハ-9	18 × 17	8	
450	ハ-9	40 × 16	11	
451	ハ-9			

第3節 古代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

古代の竪穴住居跡として第3号住居跡（S X9）、第4号住居跡（S X6）、第5号住居跡（S X10）、第6号住居跡（S X1）、第7号住居跡（S B1）、第8号住居跡（S B1）がある。

第3号住居跡（S X9）（第23図、図版3）

＜遺構の位置＞ノ9区とハ9区の境で、S X6とS X10の間に位置する。主軸方位はN-2°-Wである。

＜平面形・規模＞縦2.4（南北）m×横（東西）2.6mの隅丸方形である。深さは36cmで、床面積は約6.24㎡である。壁に一段、12cmの高さのテラスが見られるが、耕地化の段階で南側の上部は開削されてしまった模様である。

＜覆土＞I層の黒褐色土と、同色ながら炭化材のよく出るII層の2層であった。

＜柱穴＞ピットが7基あったが、P1、P2、P3はしっかりとした掘り込みがあるため支柱穴の可能性が高い。深さ18～20cmを測る。P4、P5はS X9が切っており下層から下呂石も出土しているので縄文時代のピットと見られる。P6、P7については後世の遺構のピットと見られる。

＜出土遺物＞覆土の下層より炭化材が出土している。土器等の遺物は全く見られなかった。

＜時期＞出土した炭化材の、放射性炭素年代測定によると260年から320年と結果が出た。弥生時代末期か古墳時代の前期となる。ただし、一段高い外周部分が、後の時代に炭化材の出土した層に相当する古い住居跡を切る形で作られた別の新しい住居跡と考えることも可能である。これについては土器など比定するべき遺物が出土していないので時期は明らかでない。

第4号住居跡（S X6）（第24図、図版4）

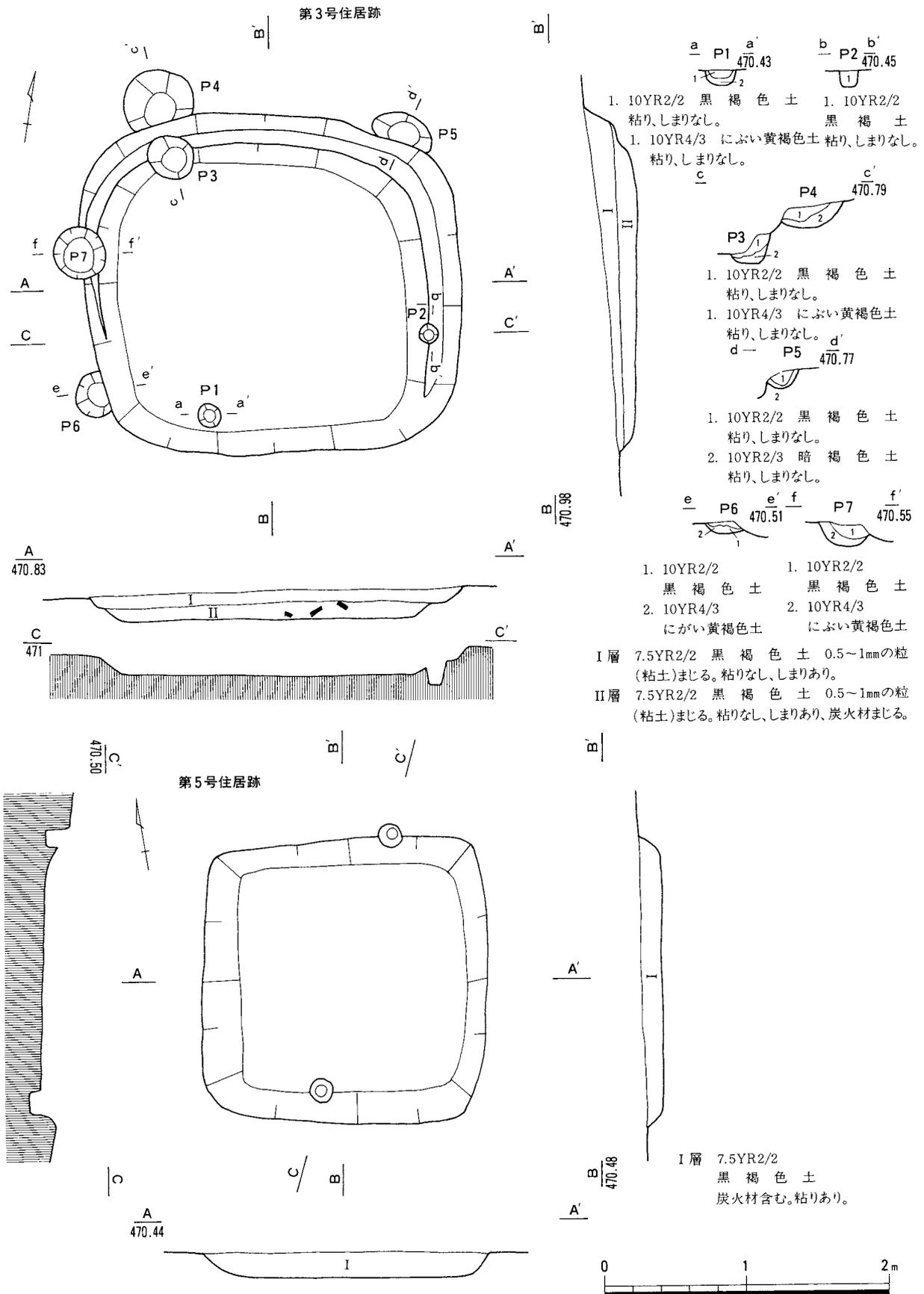
＜遺構の位置＞ハ10区の西に位置する。

＜平面形・規模＞縦2.44m×横2.64mの隅丸方形で、深さ28cm、床面積は約6.44㎡と小型である。主軸方位は真北である。壁の立ち上がりが明確であり、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は平均して25～30cmを測る。床面は素掘り面を均した直床式の構造で、比較的よく踏み固められ検出は容易であった。

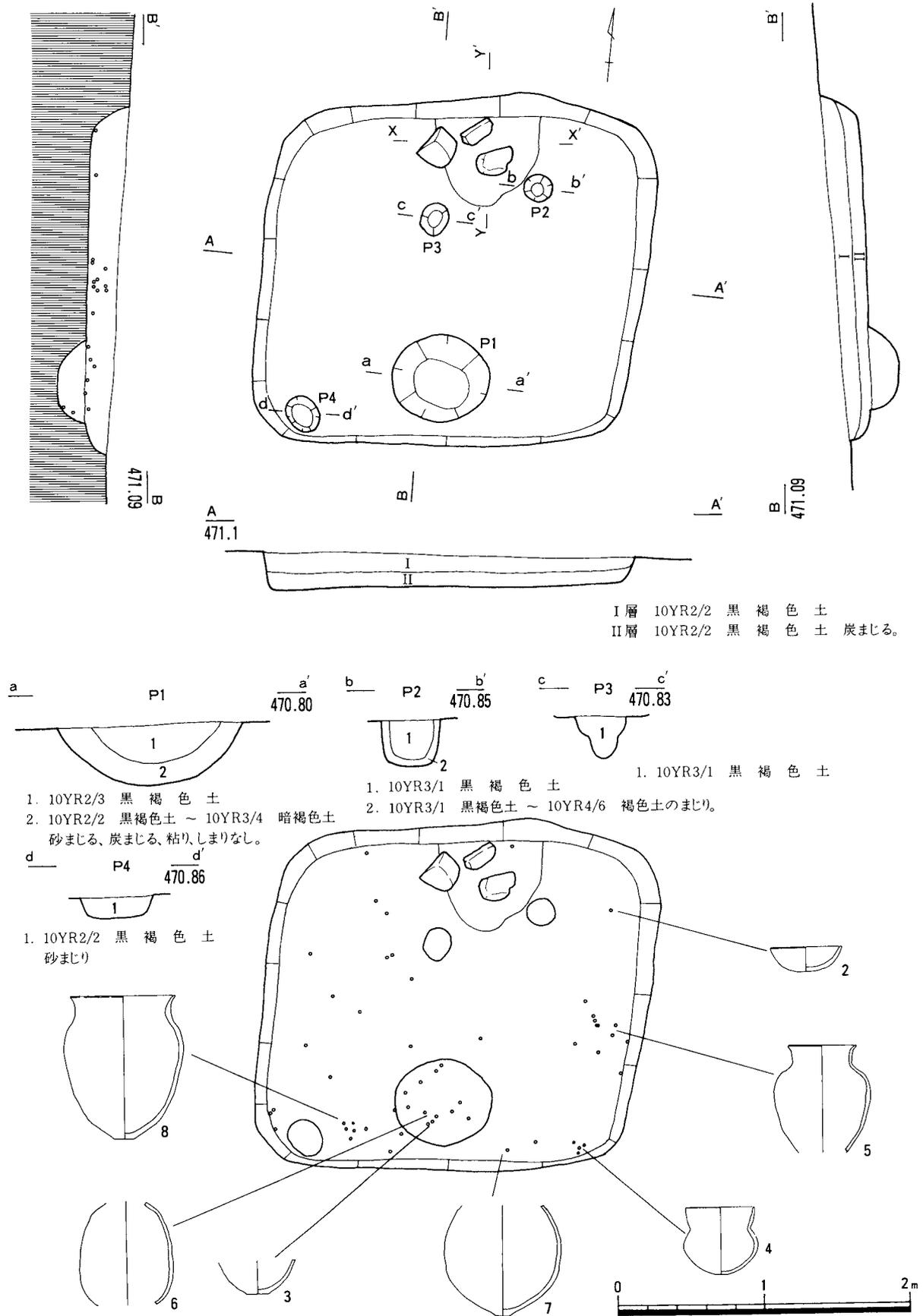
＜覆土＞黒褐色土のI層と、黒褐色で炭化材が混じるII層との2層である。

＜柱穴＞ピットは4基検出されたが、P1は貯蔵穴と思われ、P2、P3は竈に伴うピットと考えられる。P4は柱穴は深さ16cmを測り支柱穴と見られる。

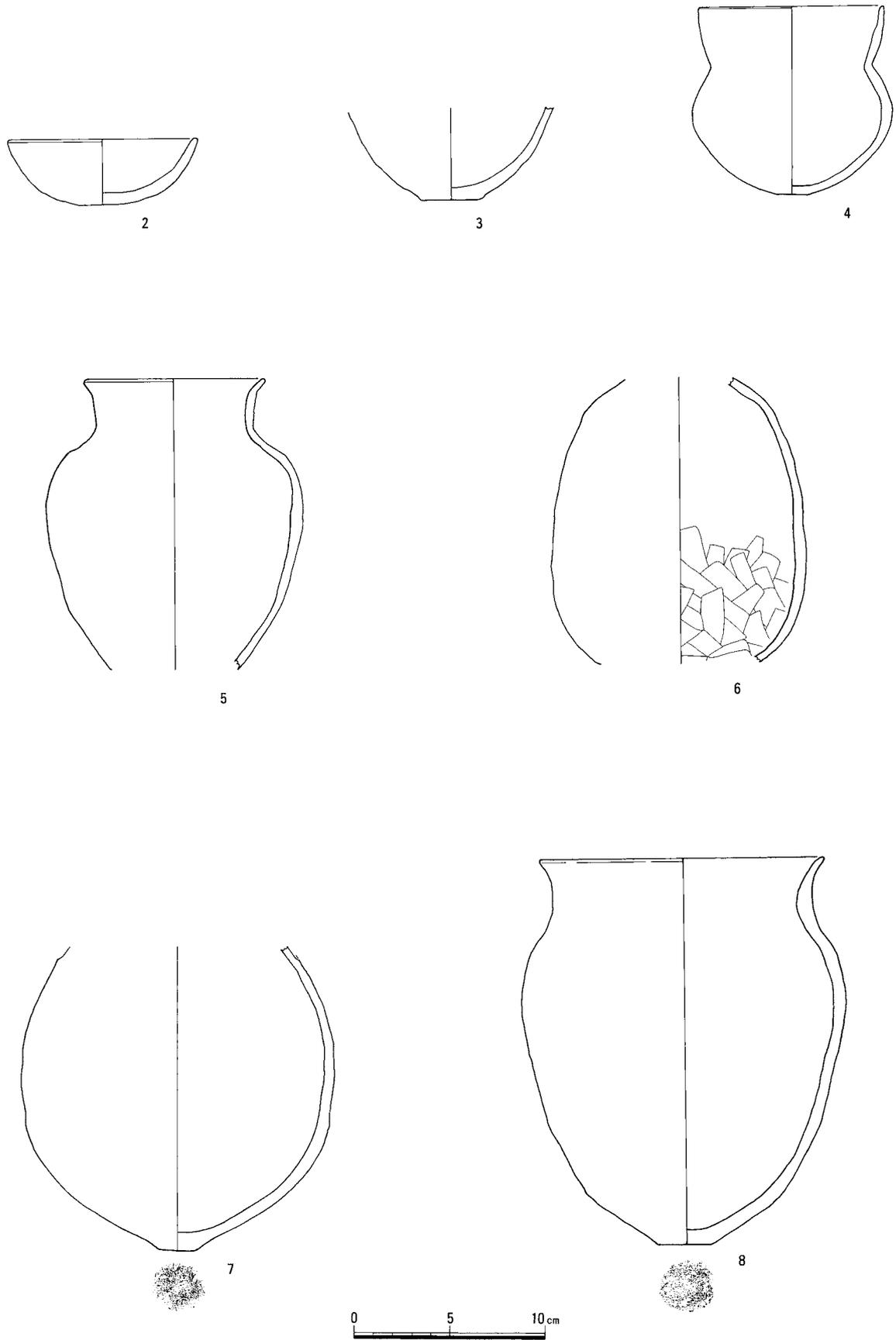
＜竈跡＞S X6には1基竈跡が検出されている（第26図）。住居跡の北端に赤褐色の焼けた土がブロック状に混ざった覆土があり、併せて3個の石も検出されている。石は竈の構造材の一部が廃棄されたものと思われる。覆土をはずすと、直径36cm、厚さ6cmの非常によく焼けて締まった赤褐色の焼土が検出された。おそらくここが竈の焚き口に近い火床面の部分と見られる。袖部の張り出しや煙道の壁の掘り込みは確認できず、遺存状態は良くなかった。焼土について地磁気の年代測定を計画したが、焼土がブロック状になっており正確な測定が出来ないとのことで断念した。



第23図 第3号住居跡・第5号住居跡



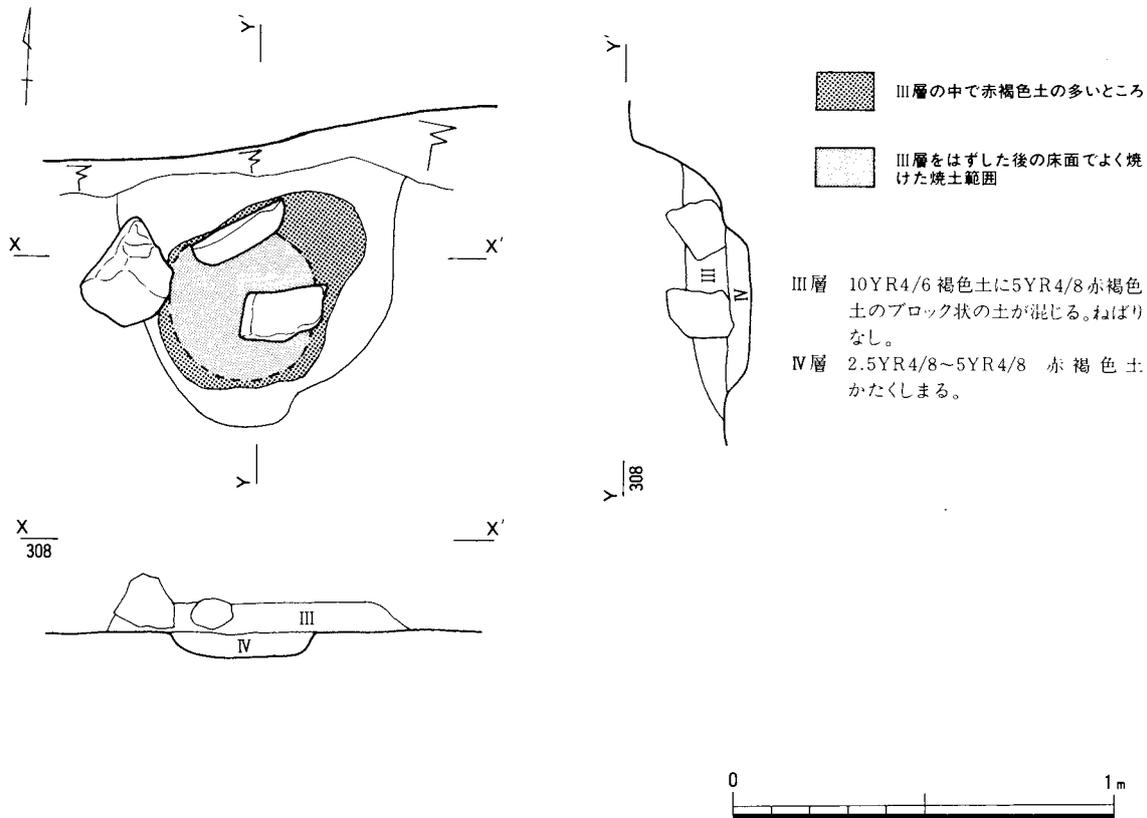
第24図 第4号住居跡・遺物分布図



第25図 第4号住居跡遺物

<出土遺物>土師器が出土した(第25図、図版7・8)。丸底の皿が1点(2)、小型の壺が1点(4)、中型の瓶が4点(3・5・7・8)、中型の壺が1点(6)、他に別個体と見られる破片が2点出土している。丸底の小皿は床直上に完形で出土している。他の土師器は破片で出土はしているものの大体同じ場所から出土している(第24図)。これらの土師器は、6を除き共通してヘラ削り痕が見られず表裏とも横ナデ調整を施したと見られる。小型壺4は頸部が緩やかに内湾して立ち上がりを見せる。中型壺5と8の口縁部は強く外反する。3・7・8とも底部の直径は2.5~3.0cmと小さい。6の壺は肩部から底部にかけて緩やかに直径が膨らみ、外面は横ナデ、内部は胴部から腰部にかけて細かい刷毛目状成形痕がある。胎土はいずれも1mm程度の石英・長石の砂粒が混じり、色は明黄褐色など赤みを持つ。

<時期>覆土から検出された炭化材の放射性炭素年代測定によると、535年と結果がでた。土師器が5~6世紀前葉の古墳時代と考えられるので概ね正しいと思われる。なお、プラン検出時のS X6の覆土には中央に4基後世のピットがあり、ピット131の炭化材を同様に放射性炭素年代測定にかけたところ895~940年との結果が出た。従って、S X6は平安時代にはすでに土中に埋まっていたことがわかる。



第26図 第4号住居跡電跡

第5号住居跡（S X10）（第23図、図版4）

＜遺構の位置＞遺跡の一番南、ハ9区の南端に位置する。

＜平面形・規模＞縦2m、横2mの隅丸方形で、深さ18cm、床面積は4m²であり同時期と考えられるS X6やS X1と比べても非常に小型である。主軸方位はN-5°-Eである。

＜覆土＞炭化材が含まれる黒褐色土のⅠ層である。

＜柱穴＞ピットが2基検出された。ピット2基をいれた断面図は第29図のようである。ピット1が深さ5cm、ピット2が8cmを測る。主柱穴の可能性はあるが断定しがたい。

＜出土遺物＞中央床面状に30cm長の炭化材が出土した以外は、土器等の遺物は検出されなかった。

＜時期＞覆土から検出された炭化材の放射性炭素年代測定によると、535年と結果がでた。S X6に関わる遺構と見られる。

第6号住居跡（S X1）（第27図、図版4）

＜遺構の位置＞ネ12区東に位置する。

＜平面形・規模＞縦2.8m、横3.56mの隅丸方形である。深さ18cm、床面積は約10m²である。主軸方位はN-20°-Eである。耕地の開削時に遺構の上部が削平されたように見られ、実際は壁がもう少し立ち上がっていたと思われる。

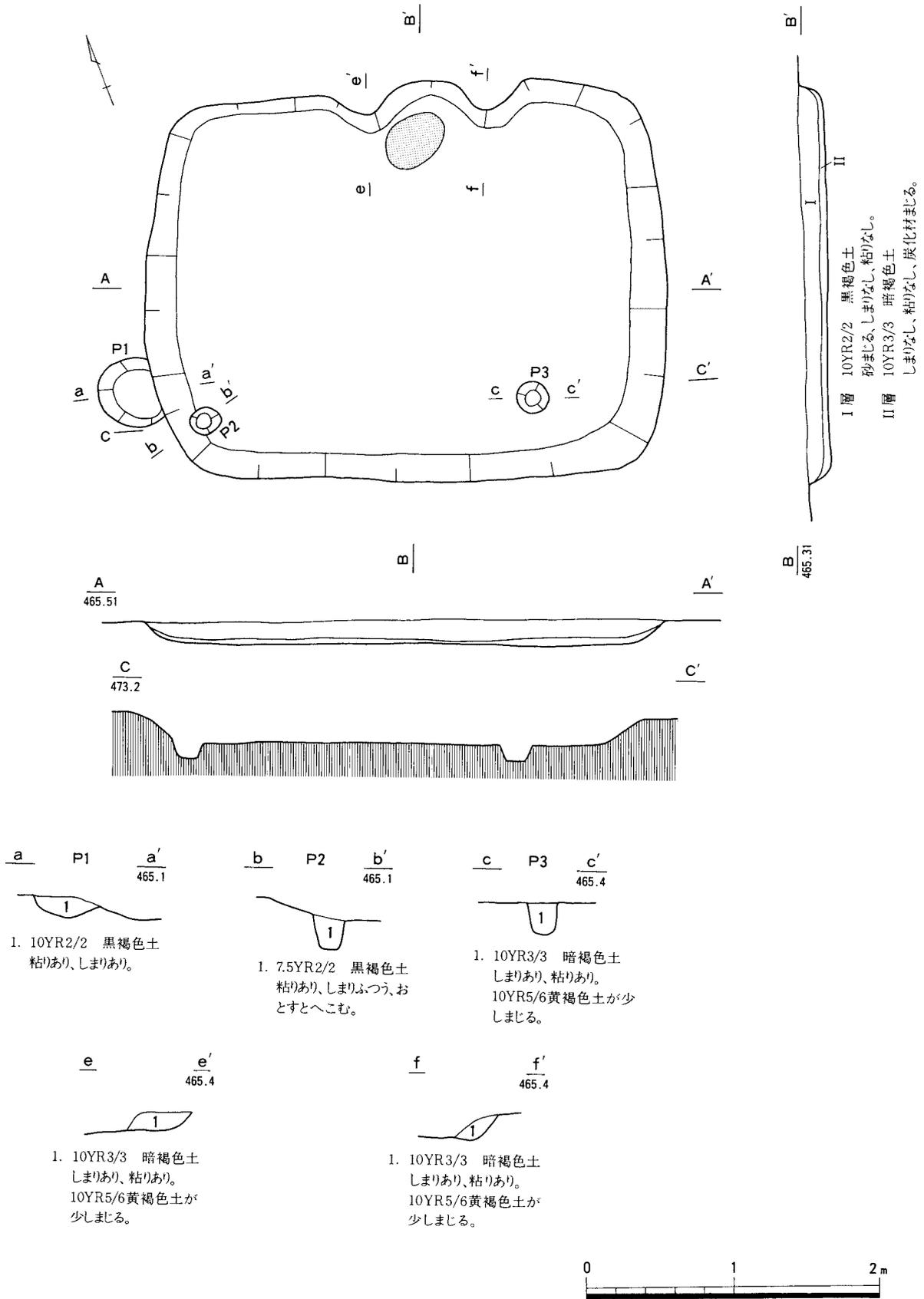
＜覆土＞黒褐色土のⅠ層と、茶褐色土で炭化材の混じるⅡ層の2層よりなる。また、竈があったと見られる北壁中央部では竈の袖部あたりで地山と同色の土がⅠ層、Ⅱ層に潜り込んでいる部分が少し見られる。

＜柱穴＞ピットは3基検出されたが、主柱穴と思われるものはP2とP3である。深さ11cmを測る。

＜竈跡＞北壁中央に竈の袖部と見られる壁の突き出たところがあり、それぞれの断面（第27図）をみるとやはり壁面から張り出した袖部の残存部分と見られる。図の両袖部の中央手前にあるスクリーントーンは赤褐色土の焼土が見られた。地磁気年代測定を計画したが、焼土がブロック状に壊れており、S X6同様正確な判定が不可能ということで断念した。

＜出土遺物＞流れ込みと見られる黒鉛入り土器2点と下呂石製の石鏃2点、側面に平面を作り出していない縄文時代早期と見られる磨製石斧（第42図の144、図版15）が1点出土したが、遺構に伴う土器等の遺物は出土しなかった。

＜時期＞床直上の炭化材の放射性炭素年代測定によると550年（430～630年）と結果がでた。土器等の遺物で比定年代は出せないが、おそらくS X6やS X10と同様の古墳時代6世紀前葉から中葉の住居跡と見られる。



第27図 第6号住居跡

第7号住居跡・第8号住居跡（S B1）（第28図、図版5）

この遺構は、試掘確認調査の段階から須恵器と灰釉陶器の出土する遺構として検出されていたが、切り合いが不明でS B1とした。本発掘調査時に次第に明らかになったところでは、二つの時代の住居が全く同じ位置、主軸方位で、およその規模でも重なり合っているということであった。上層の住居跡（平安時代）には灰釉陶器と竈跡の石組みが伴い、下層の住居跡（奈良時代）には須恵器と2基の竈跡、さらにおびただしい量の炭化材が伴っている。このように平安時代（10世紀代）の遺構が、それ以前の古い遺構に重なるように切って作られる例は、牧野小山遺跡の試掘確認調査で検出例があると報告がある（1997 佐野）。従って10世紀にはこのような例があってもおかしくないと思われる。

以下、下層の住居跡を第7号住居跡、上層の住居跡を第8号住居跡として記述する。なお、位置、主軸方位は全く同じであるが同様に記述をした。

第7号住居跡

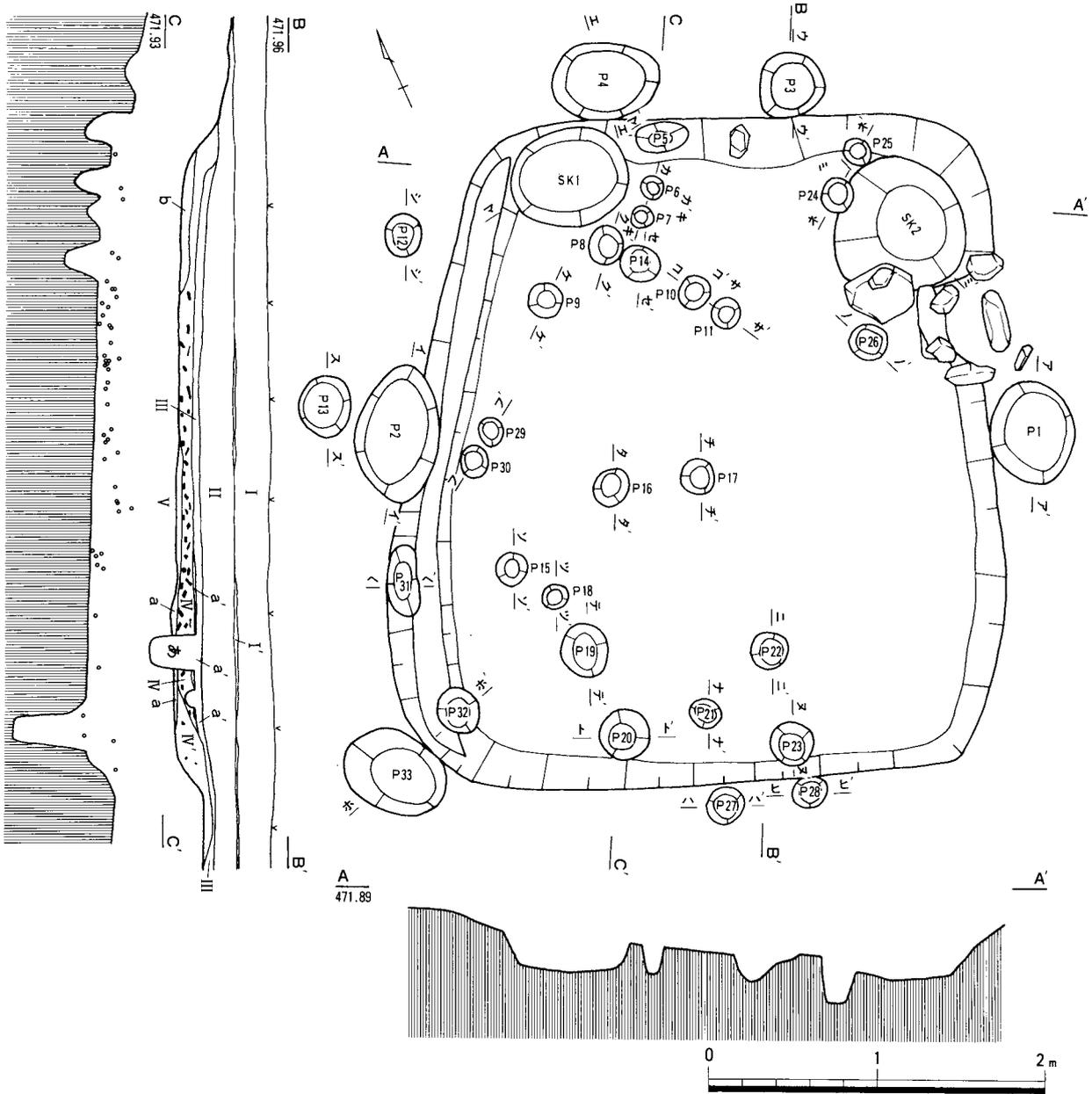
<位置>ノ10区とノ11区の西側の境に位置する。

<平面形・規模>縦4m×横3mの隅丸方形を呈する。床面積は約12m²、主軸方位はN-15°-Eである。規模に関しては西側壁のテラス状の部分が第8号住居跡によって切られたものと考え、若干第8号住居跡より西側壁が内側に寄ると見られる。

<覆土>基本的には5層からなる。I層-耕作土、II層-暗褐色土の遺物包含層、III層-灰釉陶器などの出土する褐色土層、IV層-炭化材と須恵器の出土する層である。このほか地山の上にa層-張り床と見られる橙色土の薄い層がある。

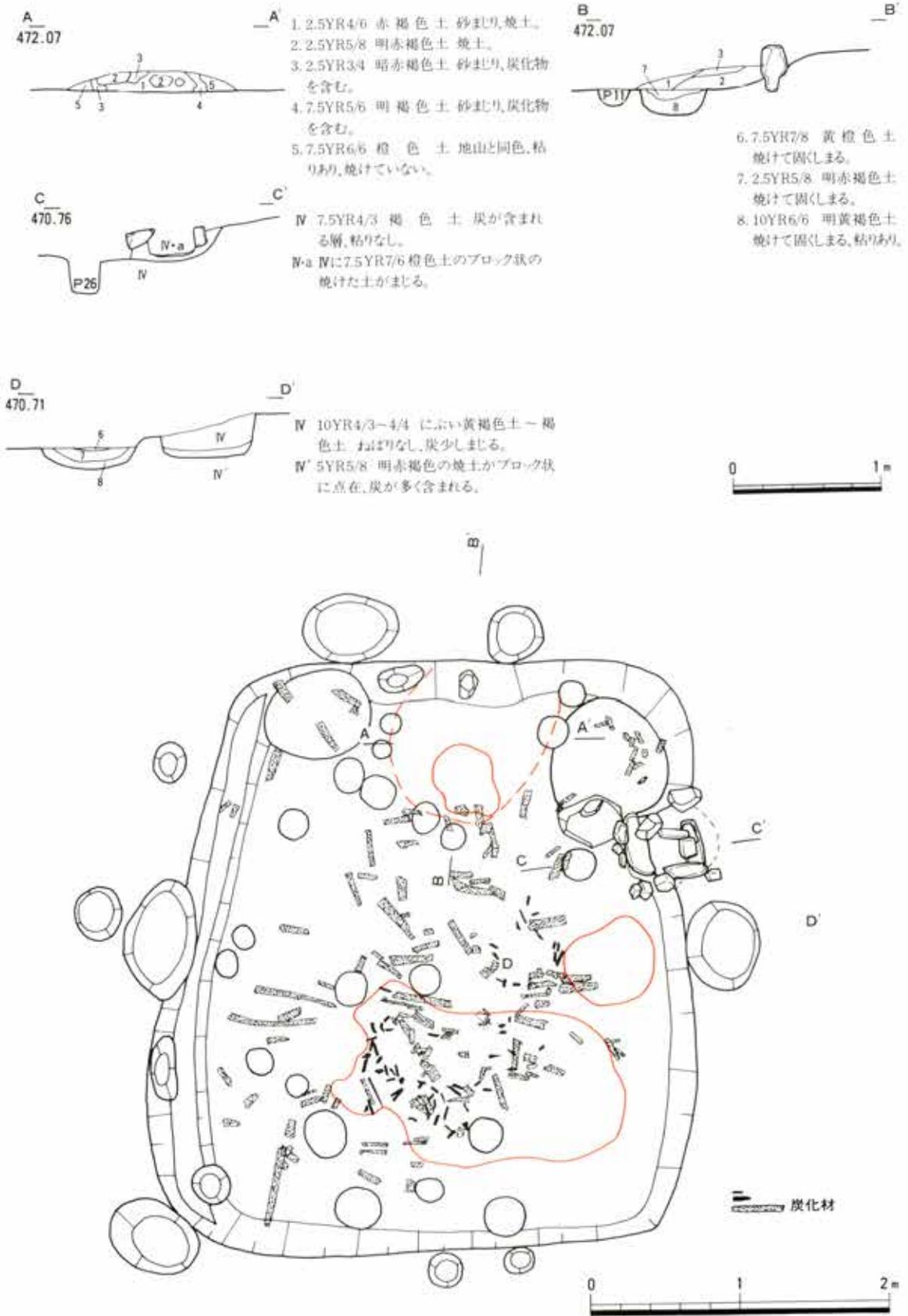
<柱穴>（第30図）第7号住居跡と第8号住居跡に関わると思われるピットが33基、土坑が2基検出された。P14とP19は主柱穴と見られる。SK1とSK2は、直径約60と80cmで深さがともにS B1の床面から16cmの土坑であるが、炭化材が出土している。貯蔵穴と見られる。P1も炭化材が出土していて放射性炭素年代測定では755~795年と結果が出た。従って第7号住居跡に伴うものである。P5・P6・P7・P10・P11・P14・P24・P26も第7号住居跡に関わるピットと見られる。なお、P33は第8号住居跡に切られる形で検出されているため第7号住居跡に伴うピットと見られるが、この中から灰が固まったものと見られる粘土状の土が検出された。クマザサ類などの灰が廃棄されたものとみられるが用途・目的等不明である（第4章自然科学分析）。

<竈跡>（第29図）第7号住居跡では、住居内の北壁に1基（竈A）、東壁に1基（竈B）の計2基の竈跡が検出された。2基ともに焚き口と見られる部分には強く焼成を受けた赤褐色土が見られた。以下、竈Aの焼土を焼土A、竈Bの焼土を焼土Bとする。竈Aは、竈本体の遺存状態は非常に悪く、煙道部の辺りは削平され、袖部の張り出し、煙道の掘り込みも損壊が激しく竈の原形は不明である。東の壁の立ち上がり部分には1個、袖部の芯材とみられる石が直立していた。袖部の用材と見られる土については、焼けた土がブロック状に黄褐色土に混じる形で厚さ14cmで堆積していたのが見られる（第29図平面図の赤色波線部と断面図）。この黄褐色土の堆積した場所が竈Aの範囲と近いと見られる。黄褐色土の堆積をはずすと床面にP5・P6・P7・P10・P11・P24・P25と焼土Aが見られた。P5・P6・P7・P10・P11は竈Aに伴う袖部の芯材のピットと見られる。焼土Aは、焚き口近くの火床部と見られる。範囲は縦40cm×横44cmの楕円形で厚さは強く焼けて固く締まった表面の明赤褐色土が6cm、その下の焼



- | | | |
|------|-------------|---|
| I層 | 表土10YR1/2 | 黒色土 |
| I'層 | 表土5YR4/4 | にぶい赤褐色土 |
| II層 | 10YR3/1 | 暗褐色土 砂粒 ϕ 1~2mm少しまじる、粘りなし。 |
| III層 | 10YR4/3~4/4 | にぶい黄褐色~褐色土 粘り少しあり、砂・小礫をほとんど含まず、灰釉陶器等の遺物が含まれる。 |
| a'層 | 7.5YR7/6 | 橙色土 ピット22のa層を掘り込んだため上層に出た土。 |
| IV層 | 7.5YR4/3 | 褐色土 炭が多量に検出される層。 |
| IV'層 | 7.5YR4/2 | 灰褐色土 炭は少な目、砂質粘りなし、しまりなし。 |
| a層 | 7.5YR7/6 | 橙色土 張り床か住居の木材の燃焼で焼けた土、かたくしまる。 |
| b層 | 7.5YR6/6 | 橙色土のブロック状の焼土がまじる、竈Aの袖部用材。 |
| 地山 | 7.5YR7/8 | 黄橙色土 |

第28図 第7号住居跡



第29図 第7号住居跡炭化材と電跡

けて締まった明黄褐色土が10cmあった。竈Bも、竈本体の遺存状態は悪く、袖部、煙道等の痕跡が見られなかった。これは、竈Bとほとんど同じ場所に第8号住居跡の竈がつくられ、芯材となる石なども転用されていた可能性があり、そのため激しく損壊を受けたことによると思われる。袖部の用材の土等も攪乱されたと見られる。しかし、竈Aのように袖部にピットがないことから、芯材等の用い方の違う形式の竈であったと思われる。焼土Bは遺存状態が良く、縦横30cmの円形に近い形状で、焼土の深さは強く焼けて締まった黄褐色土が1cm、その下に強く焼けて締まった明黄褐色土が7cm、さらにその下に焼けて固く締まった明黄褐色土が5cmあった。焼土A、Bとも厚みが厚く焼成が強いことから、竈としてA、Bそれぞれが長期にわたり使われたことがわかる。なお、2基の竈の焼土A、Bともに遺存状態が非常に良かったため、地磁気の年代測定を依頼した（第4章自然化学分析）。

<出土遺物>須恵器（第31図9～16、図版9・10）（第32図17、図版8）が出土した。

9は直径約30cmで大型の瓶の口縁部である。外反する口縁部端部は丸く、直下に断面が丸みを帯びた三角形の張り付け凸帯を一条持つ。調整はナデが施されている。胎土は灰黄褐色である。10・12・16は肩部で、肩が張っている。11・13・14・15は胴部である。10～16はいずれもタタキが施されている。17は須恵器の鉢である。口唇部は口縁部に対して直角に平らで、内面は回転ナデ調整、外面は回転ヘラ削り調整である。10から17の胎土はいずれも灰黄褐色である。

<炭化材>床面から大量に出土した炭化材については、住居の中央部に方向軸を持つものが多い（第29図）。図中の住居中央部下の赤い囲み（縦約1m×横約2.6m）は炭化材の下で床がよく焼けていた部分である。建築材が燃えたものと見られるが、樹種同定の結果はブナ科のコナラ節やクヌギ節の樹木が使われていたようである。さらに直径2mm程度の屋根を葺いたものではないかと見られる炭化材も検出されているが試料が少なく検査には出さなかった。柱穴からの柱の抜き取りが確認できず、炭化材が住居の廃絶儀礼のような形で燃やされたものなのか、焼失家屋なのかは不明である。

<時期>第7号住居跡は二つの竈とも焼土の遺存状態が良く、地磁気年代測定を依頼したところ焼土Aが750年（±45年）、焼土Bが750年（±20年）と結果が出た。床面の炭化材の放射性炭素年代測定では650～790年と結果が出ており、遺物の須恵器からも相当と思われる。従って奈良時代の住居跡と見られる。

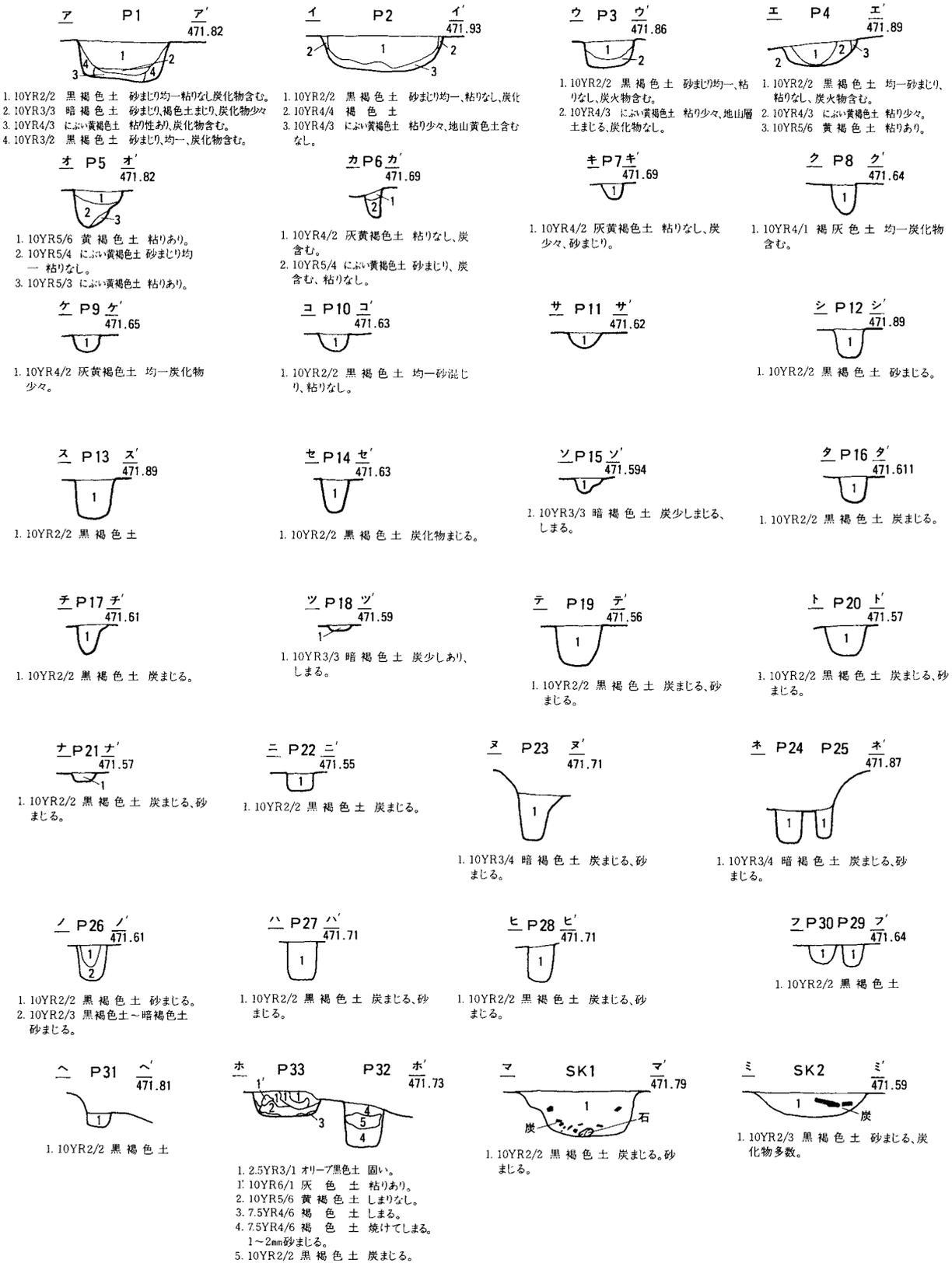
第8号住居跡

<位置>ノ10区とノ11区の西側の境に位置する。

<平面形・規模>縦4m×横3.35mの隅丸方形を呈する。床面積は約13.4㎡、主軸方位はN-15°-Eである。西側壁のテラス状の部分は第8号住居跡本来の床面と見られるため、若干第7号住居跡よりも広がっている。このテラス状の部分は第7号住居跡の床面より約10cm高い。

<覆土>基本的には3層からなる。Ⅰ層-耕作土、Ⅱ層-暗褐色土の遺物包含層、Ⅲ層-灰釉陶器などの出土する褐色土層。ピットが第7号住居跡の床面の張り床を掘り抜いてⅢ層の上に広がったと見られるa'層-橙色土の薄い層がある。

<柱穴>（第30図）第7号住居跡と第8号住居跡に関わると思われるピットが33基、土坑が2基検出された。P32は主柱穴と見られる。この中で灰釉陶器が出土したピットがP20・P23・P27であり、内P20とP23は主柱穴の可能性が高い。第8号住居跡の床面からの深さはP32が約30cm、P23が20cm、P32



第30図 第7号住居ピット

が25cmを測る。また、P22は第8号住居跡の床面から掘り抜いたものであることが確認されている。P8・P9・P18も第8号住居跡に関わるピットと見られる。また、住居跡との切り合いからP2・P3は後世のものと思われる。

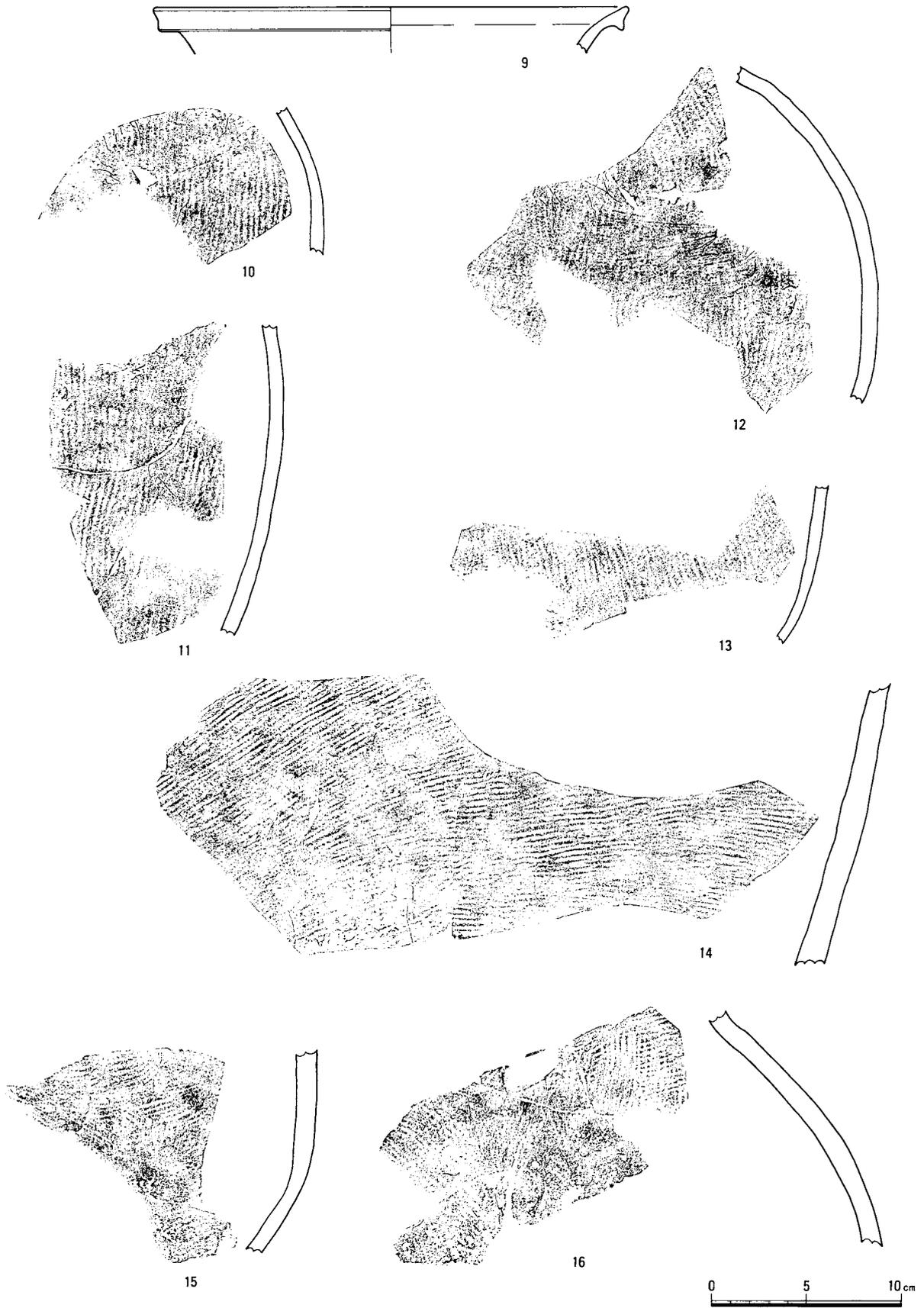
＜竈跡＞（第29図）第7号住居跡では、住居内の東壁の北側に1基、竈の用材と見られる石が17検出された。竈本体の遺存状態は悪いが、石を多く使用した竈として注目できる。石材はいずれもデイサイト質である。用材の石はかなり攪乱を受けていると思われ、袖部の用材と見られる土も攪乱されている可能性が高いが、東壁を掘り込んでおり、P1寄りに動いていないと見られる石もあることから両袖部の間が約50cm程度ある竈と見られる。石に囲まれた部分の中央部にブロック状の赤褐色の焼土がわずかに確認できたが火床部は確認できなかった。

＜出土遺物＞灰釉陶器の水注（口絵、第32図、図版11）の他、灰釉陶器の椀が9点、皿が1点、段皿が2点（第32図、図版11・12）、鉄製の刀子（第32図、図版12）が1点出土した。また、流れ込みと見られるが砥石も一点出土している。灰釉陶器は18から24が折戸53号窯式。25から27が東山72号窯式。28から31が百代寺窯式と見られる。刀子はピット32の脇のテラス状部分から出土している。

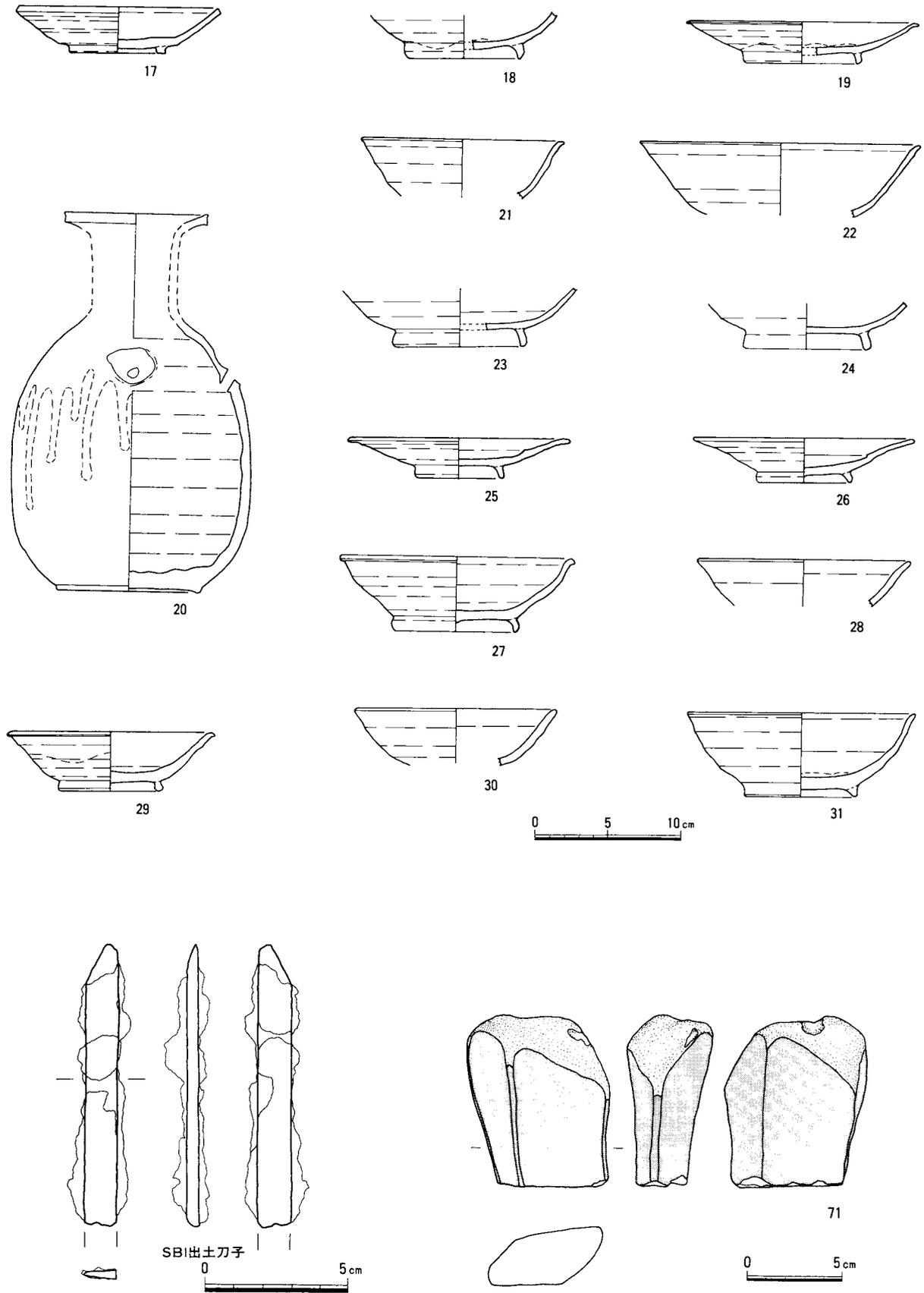
20の水注の器形は胴部から底部にかけて径が次第に広がって緩やかに膨らみ、肩部は張らずに緩く、頸部はまっすぐに立ち上がっている。把手が垂直に立ち上がるように口縁部は大きく外反し、端部に三角形の凸帯をつけている。調整はナデ調整で、施釉は刷毛塗りである。

椀類は、ロクロ水挽き成形で作られており、底部外面は回転糸切り痕が回転ナデ調整で消してある。18・19・21・22・23・24はいずれも刷毛塗りで施釉されている。器形は、19の皿は口縁部に向けて直線的に開くタイプで口縁部端が細くなり外反する。椀類では22の口径が19.6cmと大型である。以上は総じて丁寧な作りである。25・26は段皿でヘラ削りにより明瞭な段が作られていて、形態は胴部から口縁部に向かって大きく外反する。25・26と27の椀はいずれも施釉が見られないが胎土は黄灰色である。28から31は胎土が黄灰色の椀で、概ね自然釉がかかっている。

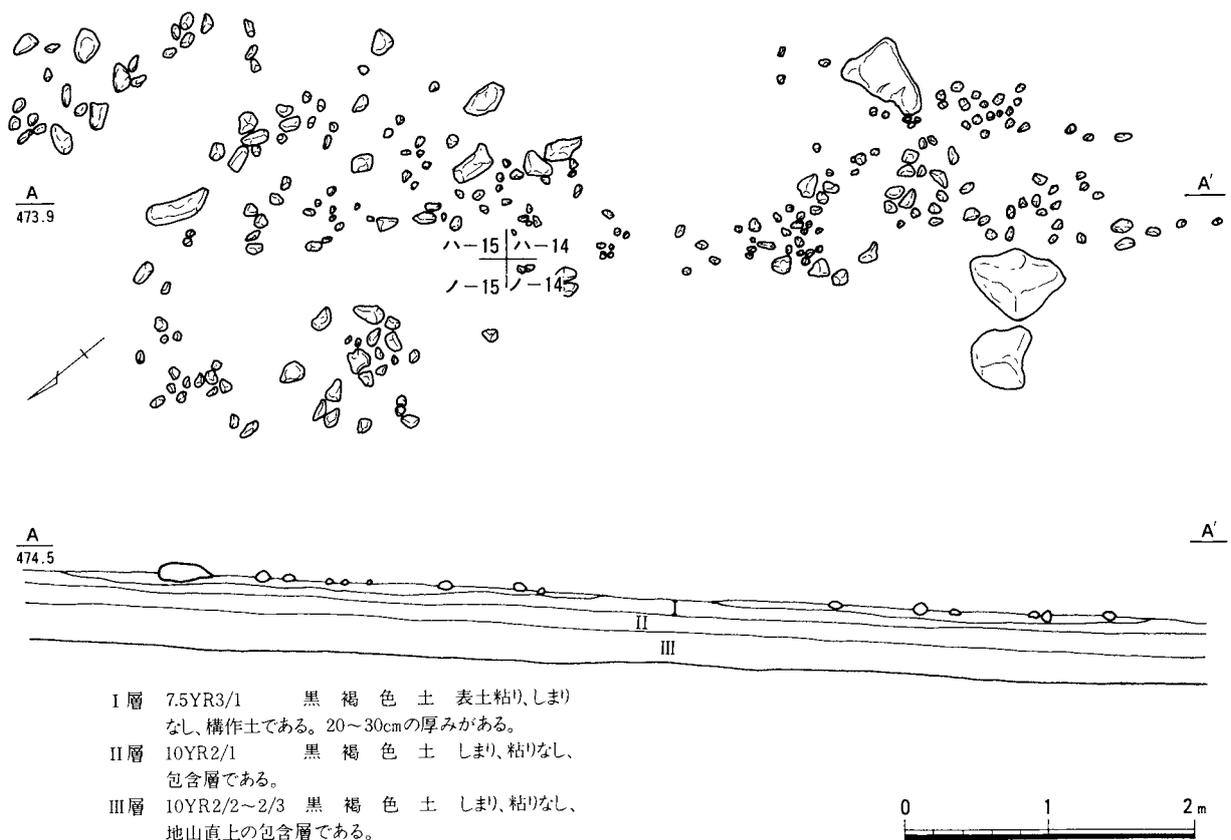
＜時期＞第8号住居跡は第7号住居跡を切って直上に作られた建物であるが、遺物の灰釉陶器が900年代と比定出来ることと、第8号住居跡から第7号住居跡に掘り込んだと見られるドングリの検出されたピットで、炭化したドングリを放射性炭素年代測定したところ1030年と結果が出たことで10～11世紀前半の平安時代の遺構と見られる。



第31図 第7号住居跡出土遺物・須恵器



第32図 第7号・第8号住居跡出土遺物・須恵器・灰釉陶器・刀子・砥石



第33図 SS7・SS8

2 その他の遺構

古代のその他の遺構として集石遺構（SS7、SS8）がある。（第33図、図版5）

＜遺構の位置＞SS7がハ14区とハ15区の境南端に位置し、SS8はハ14区とハ15区の境北端である。SS7とSS8は隣接し遺構検出面も同じである。

＜平面形・規模＞SS7が長軸約4.9m、短軸約3.1m。SS8は長軸3.7約m、短軸約1.1mである。

平面形は不定形である。ともに焼成を受けた礫が多数あり、大量の炭化材が伴って検出されている。炭化材の検出される層は5~10cmの深さで、ピット等はない。

＜出土遺物＞SS7は灰釉陶器1点（第35図91）、SS8も灰釉陶器1点（第35図95）が出土している。ともに百代寺窯式から3型式のものと見られる。

＜時期＞炭化材の放射性炭素年代測定からSS7は980年、SS8は1000年と結果が出た。出土した灰釉陶器の窯式と同様、平安時代である。

第4節 遺物包含層の遺物

縄文土器（第11図1・第34図32～56、図版6・7）

遺跡全体で縄文土器は368点出土した。黒鉛入りで山形文の土器、いわゆる沢式土器を一括してⅠ類、その他をⅡ類とする。本遺跡出土のⅠ類土器は、31点である。S X2出土の土器以外は破片であり、全体を伺える資料は乏しい。しかし、破片からすると全体的に斉一性の強い土器群であり、以下破片から推定される本土器群の特徴を述べる。

器形は、緩く外反する器形で、乳房状の尖底に至ると見られる。口縁端部には面取りを施す。口径17cmほどである。胎土には、黒鉛を含有し砂等は見られない。40は黒鉛が認められない。また、36、37のように表面が明赤褐色を呈する土器も見受けられる。文様は山形文を施文する土器と無文の土器の2種類が確認される。S X2出土の1は全面が無文の土器である。32～45は山形文を施文する。外反する口縁部には横位に一条。外反する頸部下にさらに一条横位に施文する。この2段目の施文に直行するように縦位に1条施文する。幅広の無文の破片が多く見られることから、縦位の施文は間隔が広く施文されていると思われる。用いられている山形文の原体は、単位5条のものが主体となる。37のように比較的波長の大きい山形も見られるが、平均には6mmの波長である。46～55は無文である。56は尖底部である。

その他の縄文土器は、71点出土しているが、施文が見られたのはきわめて少なくほとんどが無文の破片であり時期等の手がかりは不明である。

弥生土器（第34図64）

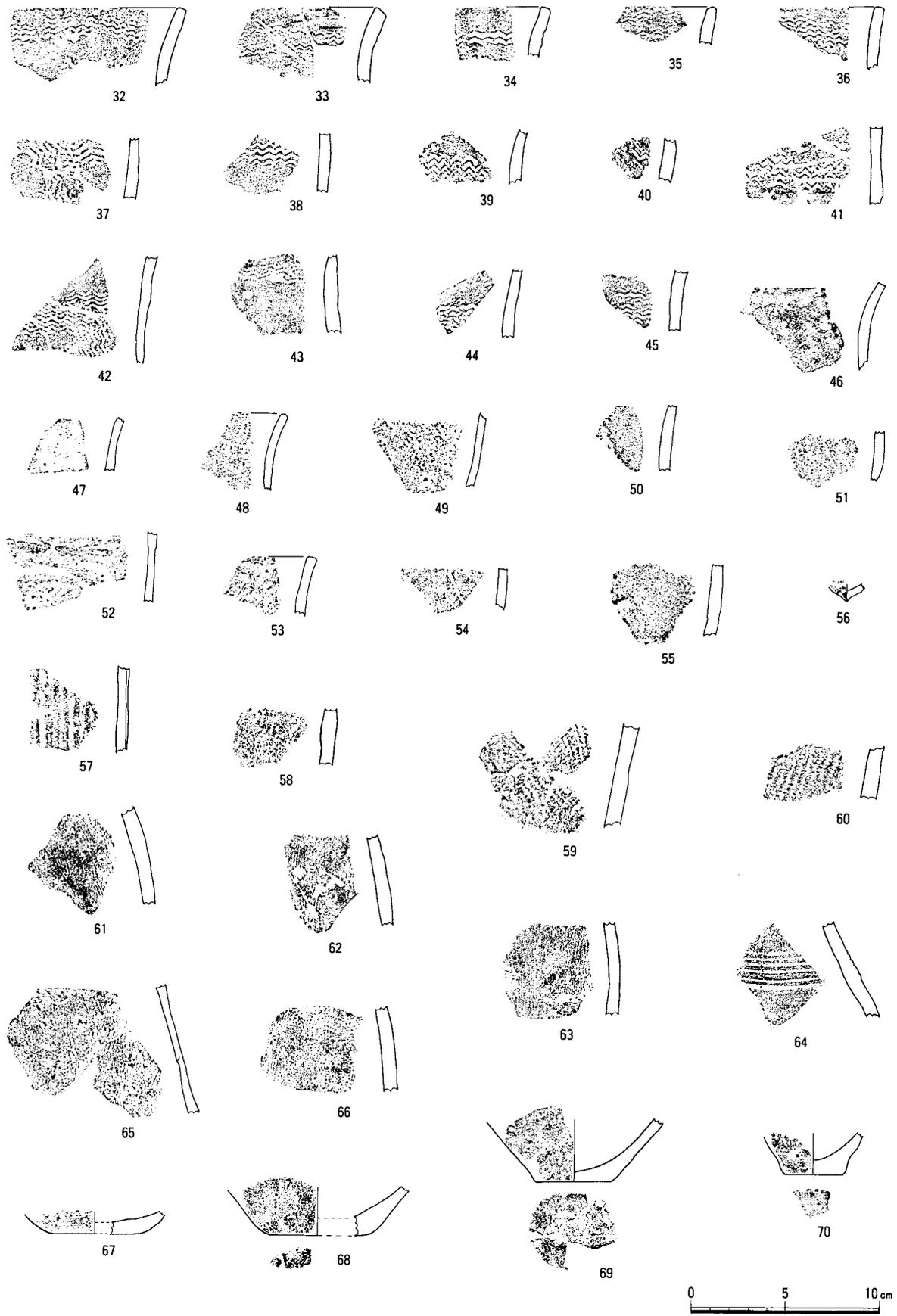
ハ14区の下層から遠賀川系の土器が1点出土している。胎土は明黄褐色で、1mm程度の砂粒が混じる。肩部と見られ、6本の沈線が見られる。

須恵器（第31・35図、図版8～10）

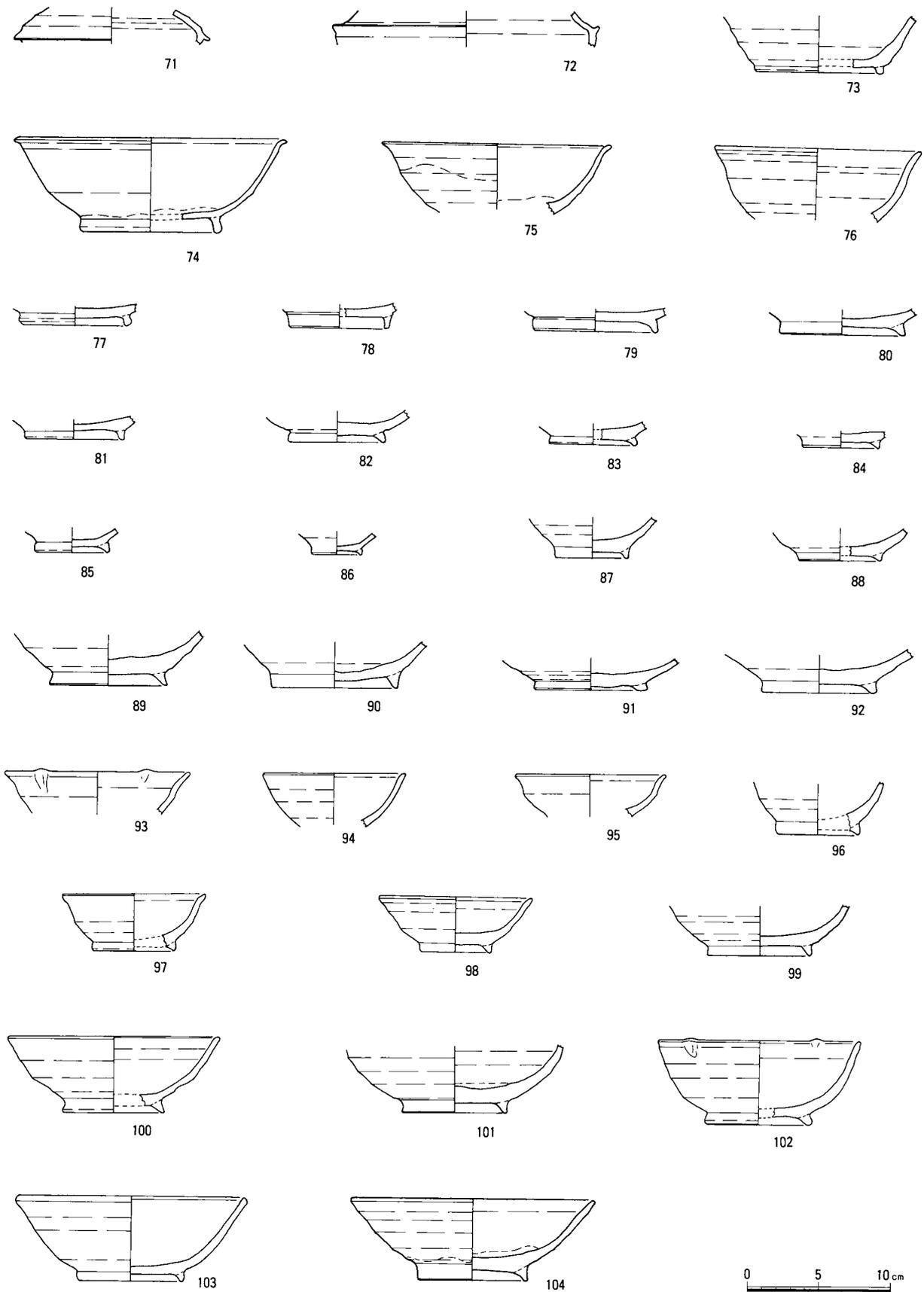
遺跡全体では須恵器68点が出土した。須恵器は第7号住居跡に伴うものがほとんどであったが、遺構以外でも須恵器は17点出土している。71の杯蓋と72の杯身はともに胎土は褐灰色で、緻密である。杯蓋はかえりを有し、口縁部がやや屈曲して外に開き、端部は丸く収まる。内外面ともナデ調整である。杯身は口縁部は内傾しながら緩やかに外反し、受け部は短く斜め上方に突き出す。内外面ともナデ調整である。71、72ともに作り出しが丁寧で5世紀末と見られる。

白瓷（第32・35図、図版10～12）

白瓷系の土器は遺跡全体で453点出土し、三つの窯式が見られた。折戸53号窯式をⅠ類、東山72号窯式をⅡ類、百代寺式から3型式をⅢ類として分類した（第10表）。椀類がほとんどだが、第8号住居跡に段皿が2点、丸皿が2点ある。Ⅰ類、Ⅱ類はS B1に伴うものが多かったが、Ⅲ類は第8号住居跡付近だけでなく遺跡の全般から出土していた。第8号住居跡の近くに同住居跡と同時期もしくは直後の遺構が複数存在した可能性が高いと思われる。



第34図 包含層出土遺物土器



第35図 包含層出土遺物須恵器・灰釉陶器

石器

遺跡全体で石器製品およびフレーク、チップ等の剥片は29359点出土している。このうちコアを含む石器製品は1269点出土しており、残る28040点は下呂石の剥片である。石器製品は下呂石製のものが1246点、下呂石以外の石器は73点である。剥片石器に占める下呂石の割合は97%と非常に高い。下呂石以外の石材はチャートと黒曜石、砂岩、凝灰岩などである。以下石器ごとに記述する。

石鏃（第37・38図、図版14）

石鏃は、遺跡全体で154点出土している。石材は下呂石が151点、チャートが1点、黒曜石が2点である。下呂石製が98%と断然多い。

石鏃の矢先としての機能から、尖頭部と矢柄との装着部である基部に着目して、それぞれ次のように分類した（第36図）¹⁾。そして、それぞれの石鏃を尖頭部と基部との組み合わせで分類した。

1) 石器の分類については、第36図も含め戸入村平遺跡（1994 千藤）及び牧野小山遺跡（1998 佐野）の石器分類を参考とした。

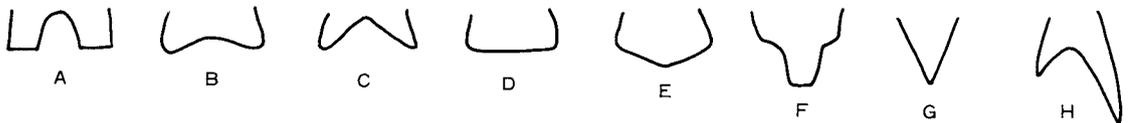
尖頭部

- 1類：鋭角な尖頭部を持つもの。
- 2類：1類と同じだが全長が長いもの（全長が全幅の1.5倍以上）。
- 3類：鈍角な尖頭部を持つもの。
- 4類：先端が小さく尖り、側縁部の肩が張った形状を持つもの。
- 5類：鋭角の尖頭部を持つが、肩から下が幅広のもの。
- 6類：1類・2類と同じだが先端部が1mmほど突き出しているもの。
- 7類：先端部が丸いもの。

尖頭部の分類



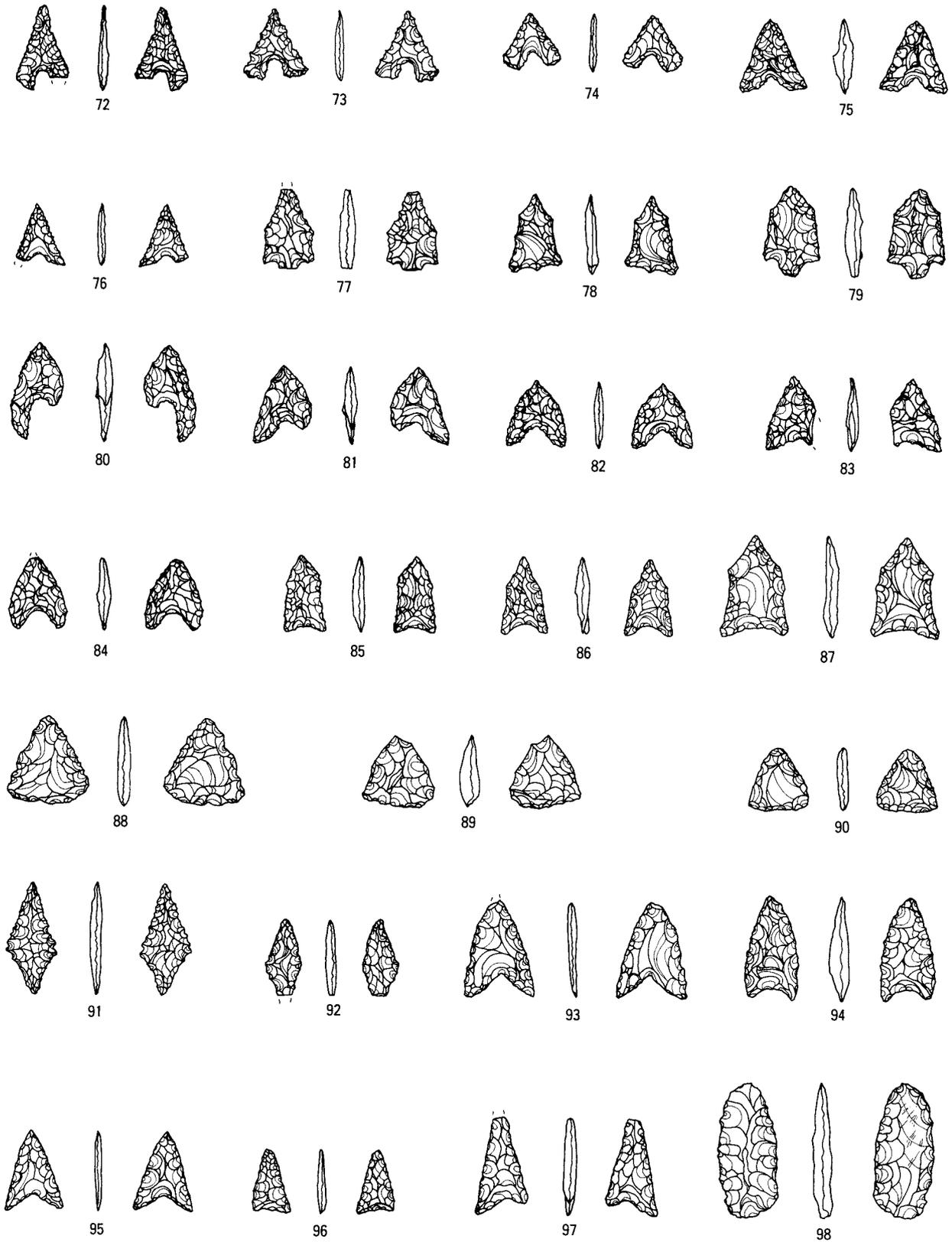
基部の分類



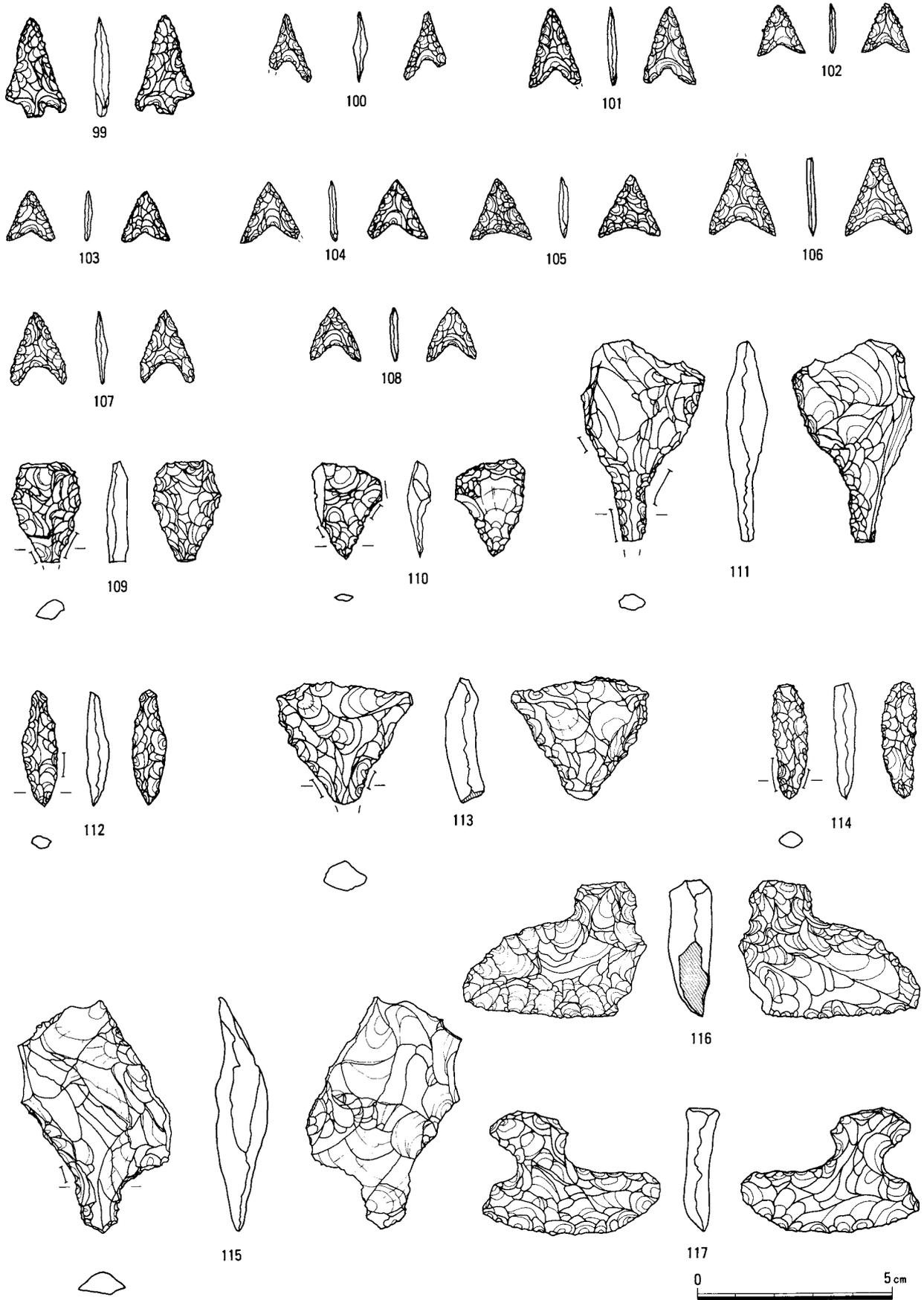
破損・折損の部位による分類



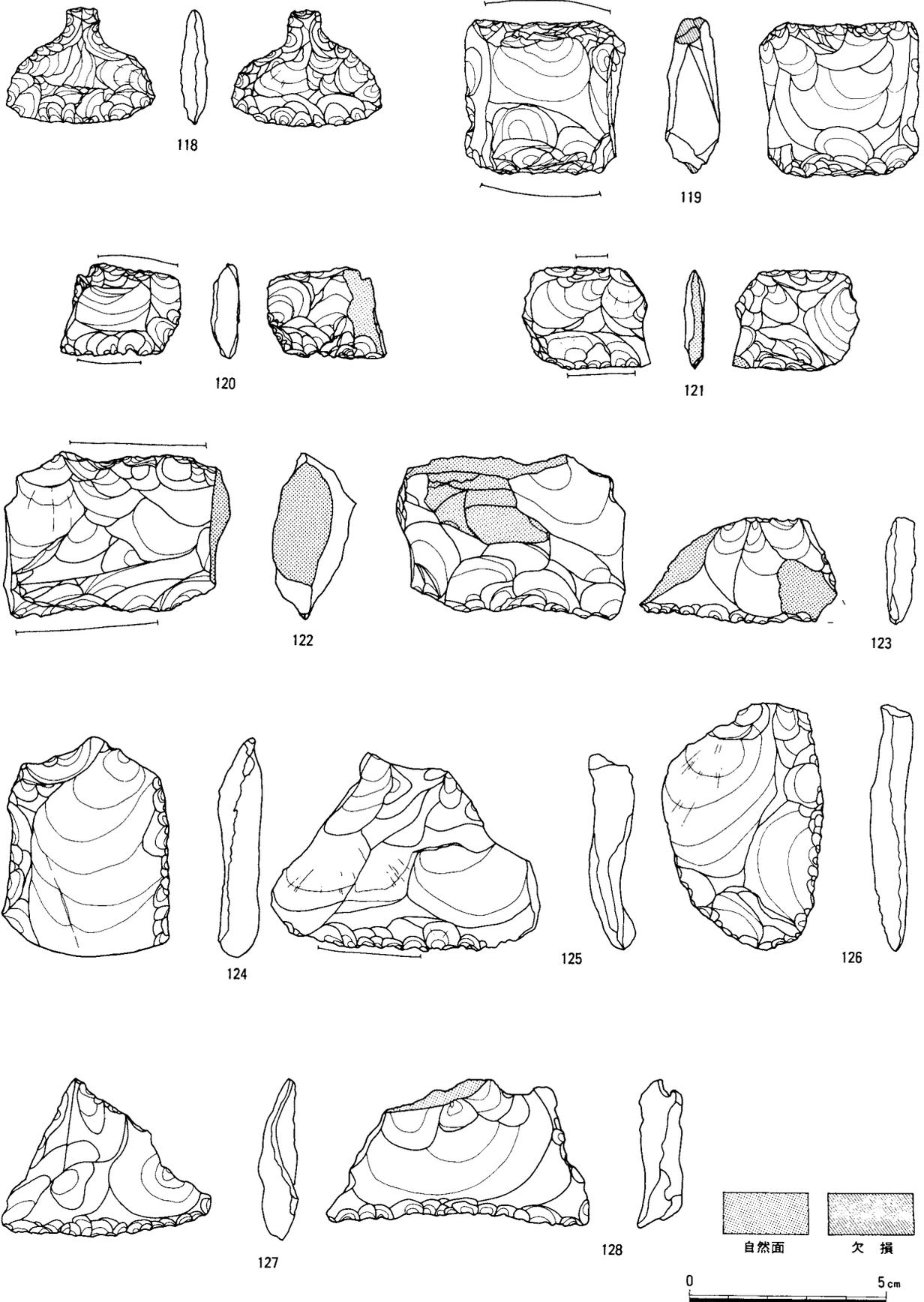
第36図 石鏃分類表



第37図 包含層出土遺物石器 (1)



第38図 包含層出土遺物石器 (2)



第39図 包含層出土遺物石器 (3)

基部の分類

- A類：基部の中央部がU字型に抉られているもの。
 B類：凹状のわずかな抉りの入るもの。
 C類：深い抉りのあるもので、抉りが直線的なものをC1、丸みを帯びたものをC2とした。
 D類：いわゆる平基鏃で、基部が直線状になるもの。
 E類：いわゆる円基鏃で、基部が丸みを帯びて突出するもの。
 F類：いわゆる有茎鏃で、基部に茎を持つもの。
 G類：鋭角の尖頭部と相似の鋭角基部をもつもの。
 H類：いわゆる片脚鏃。

1A類8点、1B類16点、1C1類25点、1C2類15点、1D類1点、1E類2点、1F類1点、1G類5点。2A類4点、2B類8点、2C1類18点、2C2類2点、2D類3点、2E類2点、2F類1点、2H類2点、3A類1点、3B類3点、3C2類1点、3D類6点、3E類3点、4A類2点、4B類6点、4C1類2点、4D類1点、4E類1点、4F類4点、5C2類1点、6E類4点、7E類2点、他基部の欠損4点である。

破損や折損の見られるものは総計94点であった。破損や折損の部位によって第36図のように分類した。それぞれの点数は次の通りである。

a 28点 b 40点 c 4点 d 5点 e 8点 f 9点

石錐（第38、図版15）

9点出土した。S X5より2点、包含層より7点出土してている。石材はすべて下呂石である。形態と尖頭部の数により、次の3つに分類した。

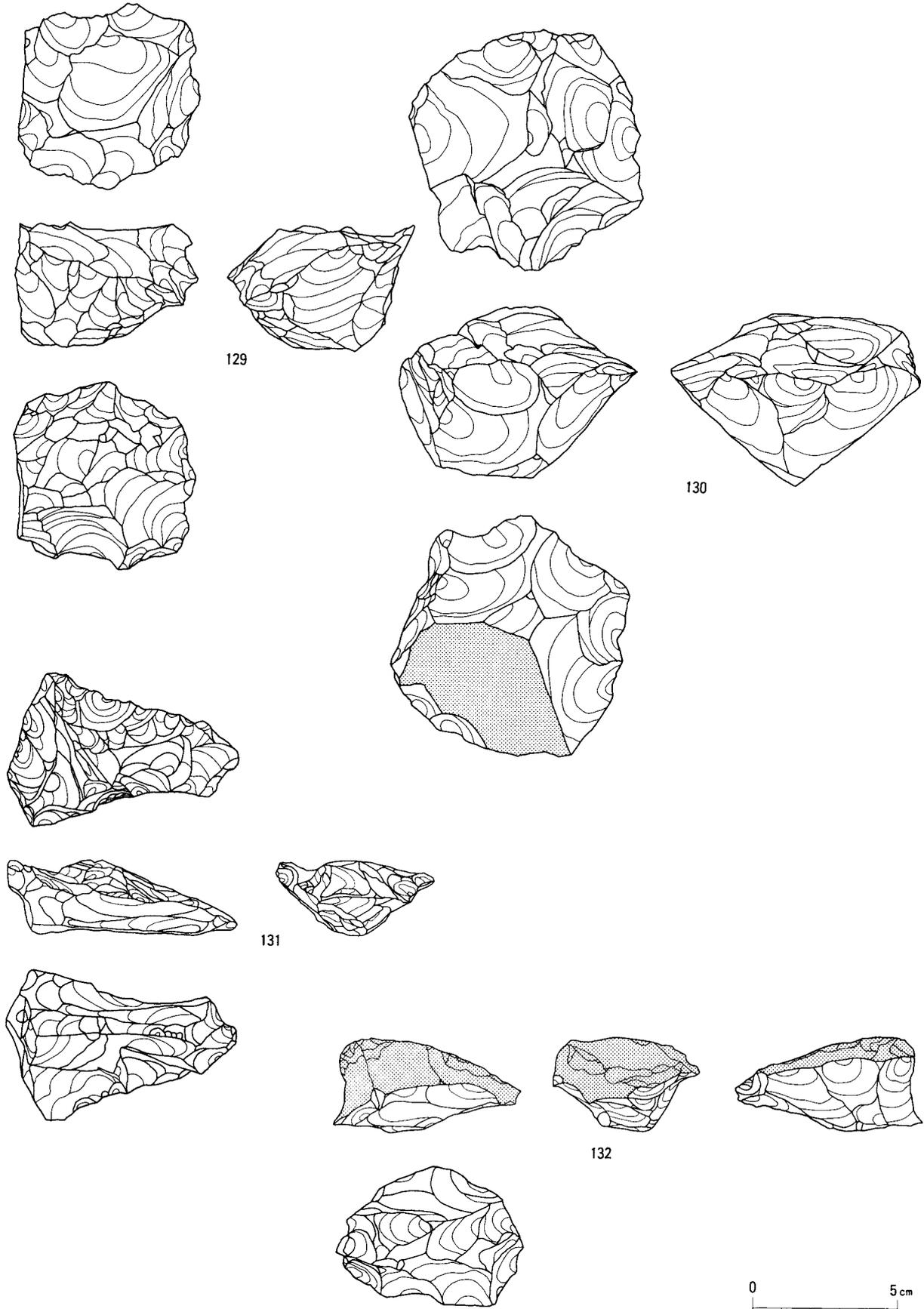
- 1類：剥片の一端を尖らせて尖頭部を作り出したもの。素材の形を大きく変えることがなく多様な形態となり、他と比較して尖頭部が短い。
- 2類：剥片の全体を成形して尖頭部を作り出したもの。基部と尖頭部の区分はしっかりしている。尖頭部は一端にある。
- 3類：長い棒状の形態を呈し、基部と尖頭部の区分が不明瞭なもの。調整が全体に及び、形態に統一性が見られる。尖頭部が一端にある。

石匙（第38・39図、図版15）

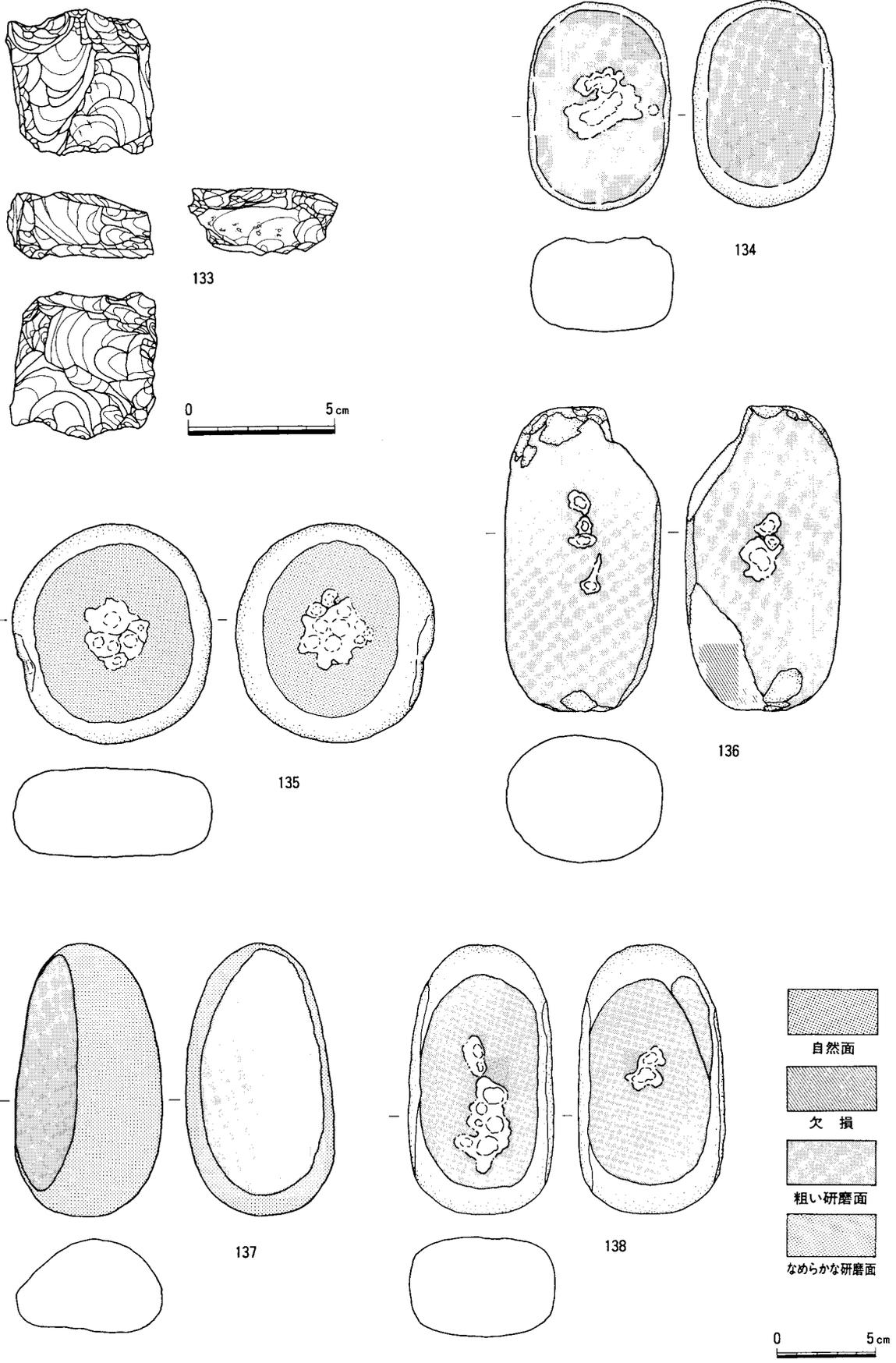
4点出土した。S K1出土の69、包含層の116、117、118である。4点ともつまみを上方のおいたとき、直交するその下端の縁部が刃部となるいわゆる横形の石匙である。石材は116がチャートで、他は下呂石製である。

両極石器（ピエス・エスキーユ）（第39図、図版15）

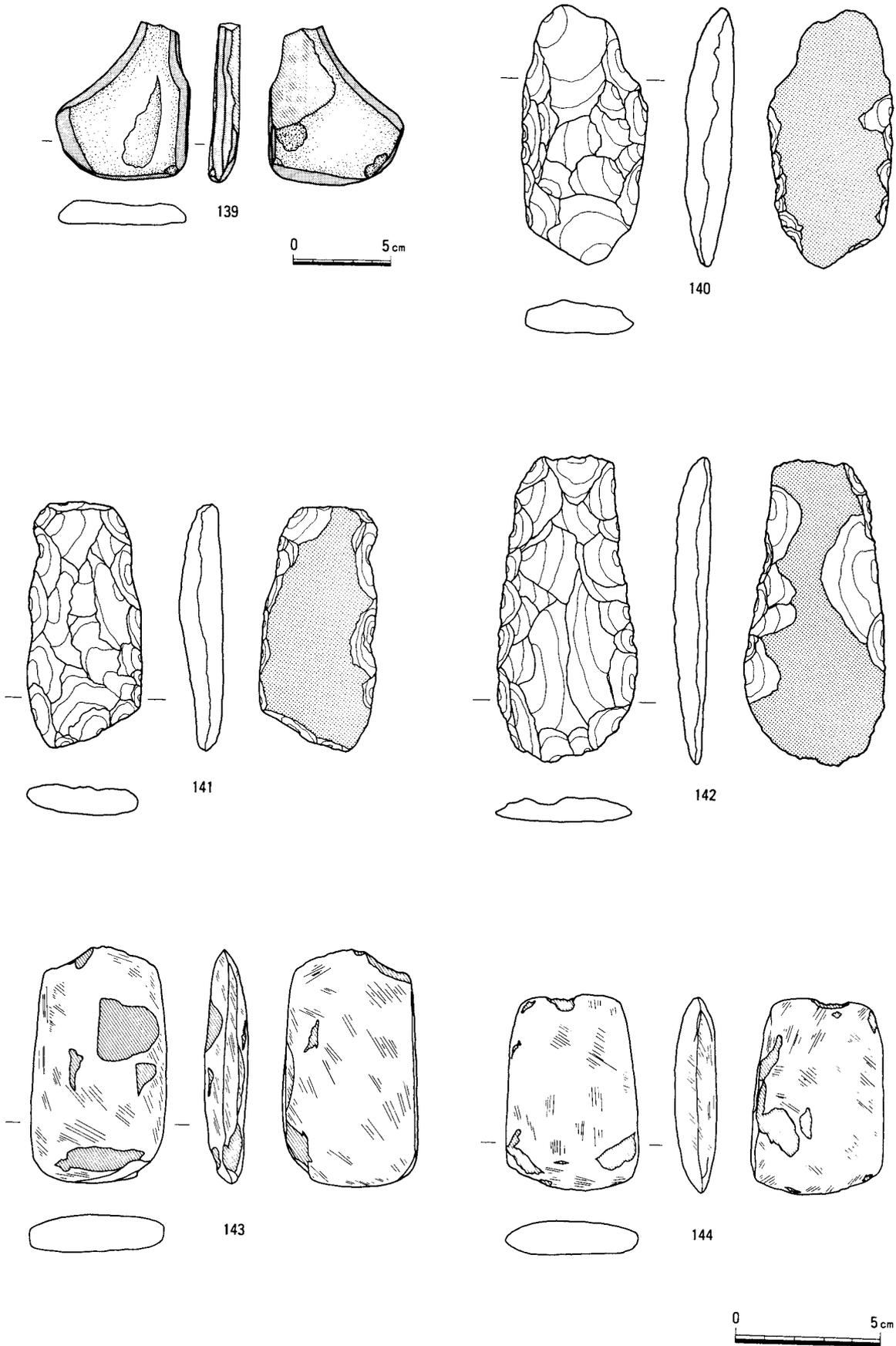
向かい合った二辺ないしは四辺の縁辺部に、階段状の剥離痕やつぶれが認められる石器を両極石器とした。18点出土した。S X3で1点、S X5点で2点、包含層から15点である。石材はすべて下呂石である。剥離痕のみられる部位と長さ・幅を比較して次の2つに分類した。



第40図 包含層出土遺物石器 (4)



第41図 包含層出土遺物石器 (5)



第42図 包含層出土遺物石器 (6)

- 1類：縦長で縦に一对の剥離痕のみられるもの。2点出土（607、608）。
2類：1類以外で、一对の剥離痕のみられるもの。1点出土（606）。

スクレイパー類（第39図、図版16）

上記の他の剥片に調整された刃部を持つ石器を一括してスクレイパー類とした。遺構内で10点、包含層で66点出土した。石材は、溝状遺構P1に黒曜石のものが1点、包含層では黒曜石製が1点、頁岩製のものが1点で、他は下呂石製である。総じて刃部の調整は荒く、1~3cmの刃部が付くものがほとんどであった。

コア（石核）（第40・41図、図版18）

コアは打ち欠いて剥片を取り出す石器であるが、本遺跡では1008点出土している。このうち992点は下呂石、16点がチャートである。分類は次のように分類した。

- A類 板状に割った剥片を利用し、側面を打面とするもの。
B類 板状に割った剥片を利用し、背面（剥離面）を打面とするもの。
C類 厚手の礫を素材としコアの中心部に向かって剥片剥離を行う。

出土したコアは、A類が355点、B類が199点、A類とB類をかねるもの5点、C類が449点である。下呂石のコア全体の約90パーセント以上は礫を割って剥片をとれるように打面を作ったばかりのもので、まだ剥片をあまり取っていない状態のコアブランクといえ、この比率は大きな特徴といえる。また、打痕の見えるコアが30点程度、打面を作る以前の礫も50点程度見られた（図版19）。

打製石斧（第42図、図版17）

包含層より3点出土している。形態はいわゆる短冊型と呼ばれるものが2点（140、141）基部に向かってやや収束する、いわゆるバチ型と呼ばれるものが1点（142）出土した。3点とも石材は凝灰岩で自然面を残している。

磨製石斧（第42図、図版15）

3点出土した。S X1より1点（144）、S X2より1点（42）包含層より1点（143）出土している。石材は144が砂岩で、他は粘板岩である。刃部は42は1つで、他は両端にある。

磨石・凹石（第41図、図版17）

磨石と凹石は25点出土した。S X5で2点、S S8で1点、包含層で22点である。石材は濃飛流紋岩が12点で、他は砂岩8点、凝灰岩が4点、安山岩が1点である。

砥石（第42図、図版15）

砥石は19点出土した。S B1で1点、S X2で2点、S X3で1点、S X5で1点、包含層から14点である使用した面は平均して3ある。石材は泥岩が1点あるが、他はすべて砂岩である。

第4章 自然科学分析

住居跡焼土の焼成年代推定

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

上ヶ平遺跡は、下呂町森地内に所在する古代および縄文時代早期の遺構・遺物からなる遺跡である。ここでは、この住居跡焼土の熱残留磁化を測定し、その磁化方向から焼成年代を推定した。

2. 考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度（全磁力）によって表される。方向は、真北からの角度である偏角（Declination）と水平面からの角度である伏角（Inclination）によって表す。磁気コンパスが北として示す方向（磁北）は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在、この付近の偏角は約 6.55° 、伏角は約 51.82° 、全磁力（水平分力）は約 31029.2 (n T)である（理科年表, 1993; いずれも1990年値）。これら地磁気の三要素（偏角・伏角・全磁力）は、観測する地点によって異なった値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物（磁鉄鉱など）はこの磁場が取り除かれた後でも磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化（熱残留磁化）が、焼かれた当時の地磁気の方向を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方向は少しずつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化測定から、その変化が詳しく調べられている（広岡, 1977, Shibuya, 1980; 第1図）。また、湖や浅海の堆積物の堆積残留磁化を測定し、過去11,500年間の地磁気変化曲線も求められている（Hyodoほか, 1993）。

年代のよく分かっている窯跡焼土や火山岩の熱残留磁化測定あるいは堆積物の堆積残留磁化から地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土などの残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較することによって、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯跡焼土などについても、土器とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、 ^{14}C 年代測定法など他の絶対年代測定法のように、測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年

代値が推定されるが、いずれを採用するかは、焼き物等の年代が参考となる。

3. 試料採取と残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、a) 測定用試料の採取および整形、b) 残留磁化測定および統計計算を行い、c) 地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認するために、段階交流消磁も行った。

a. 測定用試料の採取および整形

試料は、床焼土面において、①一辺約4cmの立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分（良く焼けた部分）の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや堅め（練りハミガキ程度）の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5cmの正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス（考古地磁気用に改良したクリノメータ）で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を掘り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5cm・厚さ2cm程度の立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。採取した試料は、平安時代の住居跡2ヶ所から15試料、縄文時代早期遺構から12試料をそれぞれ採取した。

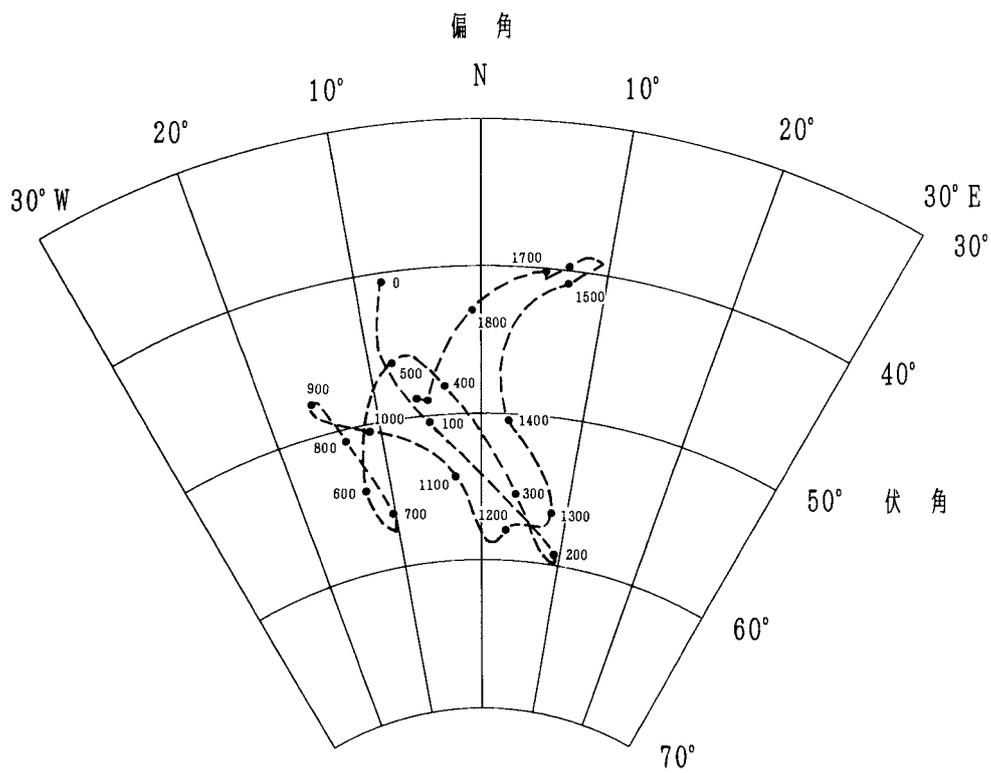
b. 段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算の結果

熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナー磁力計（SMM-85：(株)夏原技研製）を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料（No2）について交流消磁装置（DEM-8601：(株)夏原技研製）を用いて段階的に消磁し、その都度スピナー磁力計を用いて残留磁化を測定した。その結果、試料の磁化強度は $10^{-3} \sim 10^{-4}$ emuと強いことが分かった。また、磁化保持力については、NRM（自然残留磁化）に対する相対強度は、SB1A焼土では75 Oe消磁に対して約52%、SS6では25 Oe消磁に対して約97%と高い値であった。また、磁化方向は、中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録していることが分かった。

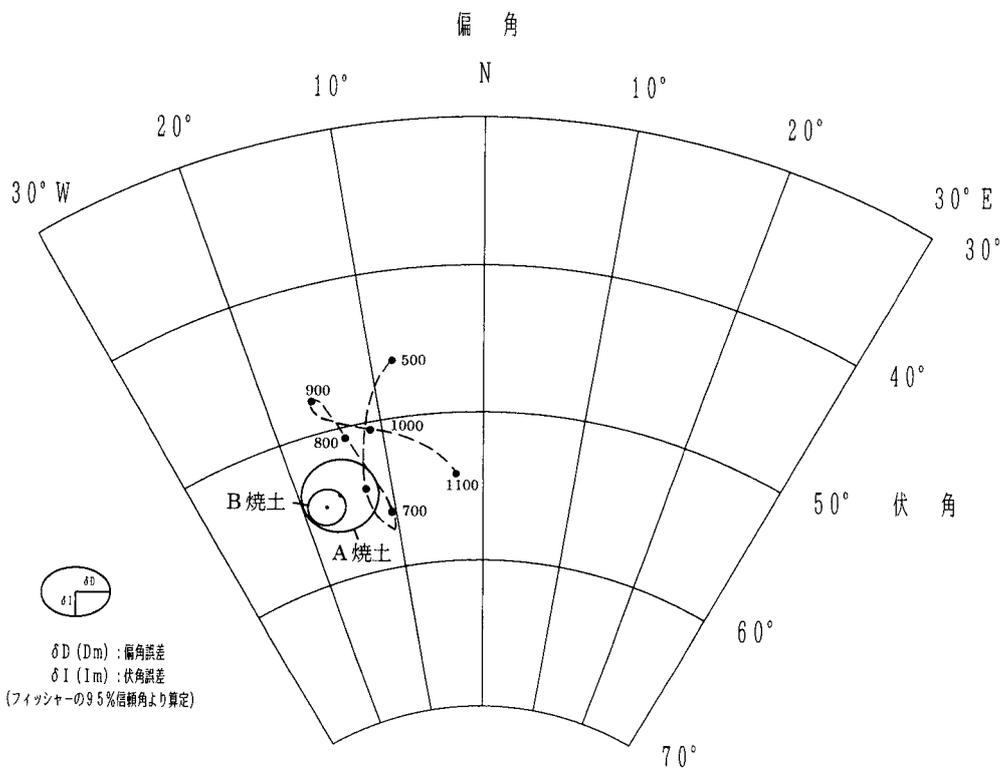
以上の理由から、SB1が75 Oe、SS6が25 Oe消磁の残留磁化方向が焼成時の磁化方向であると判断した。そこで、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、同様に消磁した後に残留磁化を測定した。

複数試料の測定から得た偏角（ D_i ）、伏角（ I_i ）を用いて、Fisher（1953）の統計法により平均値（ D_m , I_m ）を求めた。信頼度数は、1352.82と大きな値であり、各誤差も小さな値となった（第1表）。なお、No3およびNo6は、他の試料から大きく外れたため、計算からは除外した。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した $6.55^\circ W$ を使用した。その結果は、Shibuya（1980）による地磁気変化曲線とともにプロットした。図中測定点に示した楕円は、フッシャー（1953）の95%信頼角より算定した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。



第43図 過去2,000年間の地磁気永変化曲線 (Shibuya, 1980)



第44図 各焼土の地磁気測定結果と永年変化曲線 (Shibuya, 1980)

c. 炉跡の焼成年代

第44図は、Shibuya (1980) による地磁気永年変化曲線の一部とともにS B1A焼土およびB焼土の磁化方向を示した。また、第45図は、Hyodoほか (1993) による地磁気永年変化曲線の一部とともにS S6の焼土の磁化方向を示した。

S B1の焼土は、標準曲線から外れるものの600年付近と700~800年間の各永年変化曲線付近に位置する測定した磁化方向の中心を最も近い曲線上に移動した場合、A焼土がA. D. 600^{+50}_{-25} 年とA. D. 750 ± 45 年、B焼土がA. D. 610^{+25}_{-15} 年とA. D. 750 ± 20 年である。ただし、住居は、遺物から9世紀と推定されていることから、実際的にはA. D. 750 ± 45 年とA. D. 750 ± 20 年が有力である。なお、A焼土とB焼土は、やや離れた場所における焼土であるが、ほぼ同じ推定年代値であることから、同時期の焼土であることが分かる。

一方、S S6は、7,650~7,700年間、8,100~8,200年間、8,500~8,550年間の各永年変化曲線付近に位置する。なお、年代誤差は小さいものの、この永年変化曲線のみであり、信頼性がやや低いため年代幅を示すにとどめる。

第3表 焼土の残留磁化測定による焼成年代推定結果 (アンダーライン年代は有力年代値)

遺 構	遺物による年代	考古地磁気推定年代 (A. D.)
S B1-A焼土	7~8世紀ころ	A. D. 600^{+25}_{-15} 年、 <u>A. D. 750 ± 45年</u>
S B1-B焼土	7~8世紀ころ	A. D. 610^{+25}_{-15} 年、 <u>A. D. 750 ± 20年</u>
S S6焼土	縄文早期	7,650~7,700年、8,100~8,200年、8,500~8,550年

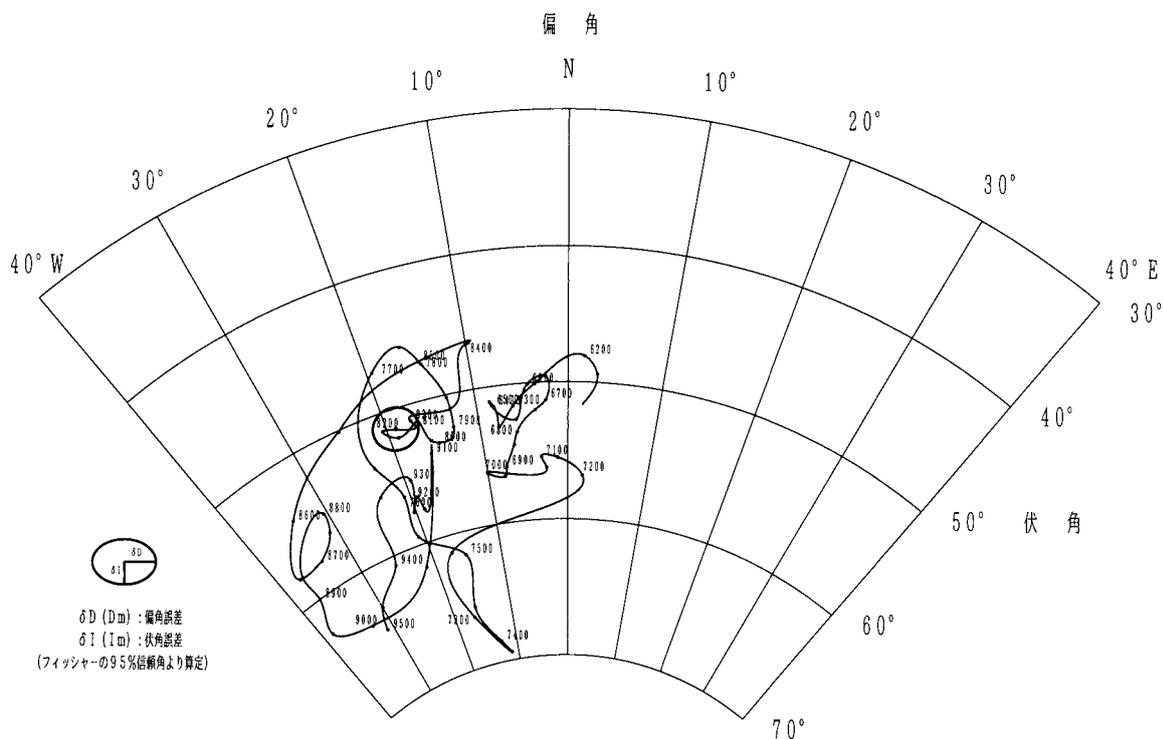
引用文献

Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A, 217, 295-305.

Hyodo, M., C. Itota and K. Yaskawa (1993) Geomagnetic Secular Variation Reconstructed from Magnetizations of Wide-Diameter Cores of Holocene Sediments in Japan, J. Geomag. Geoelectr., 45, 669-696

理科年表 (1993) 国立天文台編, 丸善, 952p

Shibuya, H. (1980) Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文, 54p



第45図 焼土の地磁気測定結果と永年変化曲線 (Hyodoほか、1993の一部)

第4表 焼土の残留磁化測定結果と統計計算結果 (偏角補正前)

遺構名	試料No.	偏角(° E)	伏角(°)	強度(x10-3 emu)	備考	統計処理項目	統計値
SB-1、A焼土	1	-7.4	56.3	2.500	段階交流消磁	試料数 (n)	6
	2	-4.0	57.3	0.802		平均偏角 Im (° E)	-9.13
	3	-9.9	54.0	5.940		平均伏角 Dm (°)	54.42
	4	-10.7	51.6	13.700		誤差角 δD (°)	4.19
	5	-8.6	52.0	4.290		誤差角 δI (°)	2.44
	6	-13.7	55.1	3.140		信頼度計数 (k)	752.11
						平均磁化強度 (x10-3 emu)	5.06
遺構名	試料No.	偏角(° E)	伏角(°)	強度(x10-3 emu)	備考	統計処理項目	統計値
SB-1、B焼土	1	-10.6	57.3	1.890		試料数 (n)	9
	2	-12.9	57.0	2.300		平均偏角 Im (° E)	-10.85
	3	-13.3	54.1	12.000	段階交流消磁	平均伏角 Dm (°)	54.94
	4	-11.2	56.5	1.600		誤差角 δD (°)	2.09
	5	-11.1	54.3	1.130		誤差角 δI (°)	1.20
	6	-10.3	54.2	0.802		信頼度計数 (k)	1852.81
	7	-11.4	52.8	29.900			
	8	-8.1	53.4	7.430			
	9	-8.9	54.8	11.100		平均磁化強度 (x10-3 emu)	7.57
遺構名	試料No.	偏角(° E)	伏角(°)	強度(x10-4 emu)	備考	統計処理項目	統計値
S S 6	1	-11.8	53.9	1.330		試料数 (n)	12
	2	-12.4	50.5	1.530		平均偏角 Im (° E)	-12.39
	3	-18.0	50.1	1.450		平均伏角 Dm (°)	51.42
	4	-10.5	46.5	0.726		誤差角 δD (°)	2.49
	5	-12.9	50.2	0.645		誤差角 δI (°)	1.55
	6	-6.5	53.2	1.450		信頼度計数 (k)	785.16
	7	-12.7	50.1	1.730			
	8	-8.3	54.0	1.280			
	9	-14.0	50.4	1.200			
	10	-13.6	50.9	1.320			
	11	-13.4	53.7	0.965			
	12	-14.2	53.1	0.979		平均磁化強度 (x10-4 emu)	1.22

放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

1. 放射性炭素年代測定について

試料は、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後、リチウムと混合して反応管内に入れ、真空ポンプで引きながら800℃まで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管（400cc）を用いて、 β -線を計数して年代値を算出した。その結果は下記に示す。

なお、年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5, 570年を使用した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。試料の β -線計数率と自然計数率との差が 2σ 以下の時は、 3σ に相当する年代を下限の年代値として表示し、試料の β -線計数率と現在の標準炭素（Modern standard carbon）の計数率との差が 2σ 以下の時は、Modernと表示し、 ^{14}C (Sample) / ^{14}C (Modern) の値を付記し、 ^{14}C (Sample) / ^{14}C (Modern) < 1であれば、yrBPの値を付記する。

暦年代の補正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5, 568年として算出された ^{14}C 年代値（yrBP）に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動および半減期の違い（ ^{14}C の半減期5, 730 \pm 30年）を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の ^{14}C 年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。補正暦年代の算出にRadiocarbon Calibration Program 1999* REV4.1 {Reference for datasets used:

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (INTCAL98 Stuiver et al., 1998a). Radiocarbon 40: 1041–1083} を使用した。なお、交点年代値は ^{14}C 年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、 1σ 年代幅は ^{14}C 年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で 1σ 年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正は約二万年前からAD1, 950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を***またはModernと表示する。また、AD1, 955*はModernを意味する。

第5表 放射性炭素年代測定結果

測定No.	試料	14C年代値	補正暦年代
PLD-274	SB1 床 炭化物	1,320 ± 90 yrBP (AD 630年)	交点年代値 AD 680年 1σ年代幅 AD 650 to 790
PLD-504	SB1-P1 炭化物	1,210 ± 80 yrBP (AD740年)	交点年代値 AD 780/795/800年 1σ年代幅 AD 690 to 755 AD 760 to 895 AD 920 to 940
PLD-273	SB1 ドングリ	980 ± 90 yrBP (AD 970年)	交点年代値 AD 1,030年 1σ年代幅 AD 990 to 1,170
PLD-270	SX1 炭化物	1,530 ± 80 yrBP (AD 420年)	交点年代値 AD 550年 1σ年代幅 AD 430 to
PLD-434	SX2 炭	9,590 ± 190 yrBP (BC 7,640年)	交点年代値 BC 8,910, 8,880, 8,860年 BC 8,800, 8,700, 8,660年 BC 8,640年 1σ年代幅 BC 9,030 to 8,420
PLD-500	SX3 炭化物	10,700 ± 480 yrBP (BC 8,750年)	交点年代値 BC 10,890年 1σ年代幅 BC 11,205 to 9,990 BC 9,845 to 9,825
PLD-501	SX6 炭化物	1,560 ± 80 yrBP (AD 390年)	交点年代値 AD 535年 1σ年代幅 AD 415 to 600
PLD-505	SX6上層 P131炭化物	1,130 ± 100 yrBP (AD 820年)	交点年代値 AD 895/920/940年 1σ年代幅 AD 780 to 1,045
PLD-502	SX9 炭化物	1,750 ± 80 yrBP (AD 200年)	交点年代値 AD 260/285/300/320年 1σ年代幅 AD 180 to 190 AD 215 to 400
PLD-503	SX10 炭化物	1,550 ± 80 yrBP (AD 400年)	交点年代値 AD 535年 1σ年代幅 AD 420 to 605
PLD-426	SS-2 炭化物	5,290 ± 110 yrBP (BC 3,340年)	交点年代値 BC 4,210, 4,200, 4,140年 BC 4,130, 4,080, 4,050年 1σ年代幅 BC 4,310 BC 4,250 to 3,980
PLD-427	SS-3 炭化物	9,560 ± 180 yrBP (BC 7,610年)	交点年代値 BC 8,850, 8,810, 8,620年 1σ年代幅 BC 9,020 to 8,410
PLD-428	SS-4 炭化物	5,460 ± 110 yrBP (BC 3,510年)	交点年代値 BC 4,330年 1σ年代幅 BC 4,390 BC 4,370 to 4,230 BC 4,180 to 4,170
PLD-429	SS-5 炭化物	9,600 ± 160 yrBP (BC 7,650年)	交点年代値 BC 8,920, 8,870, 8,860年 BC 8,790, 8,710, 8,690年 BC 8,670年 1σ年代幅 BC 9,020 to 8,460
PLD-430	SS-7 炭化物	1,090 ± 90 yrBP (AD 860年)	交点年代値 AD 980年 1σ年代幅 AD 880 to 1,020
PLD-431	SS-8 炭化物	1,060 ± 80 yrBP (AD 890年)	交点年代値 AD 1,000年 1σ年代幅 AD 890 to 1,030

引用文献

Radiocarbon Calibration Program 1999* REV4.1, Copyright 1999 Quaternary Isotope Lab University of Washington. *To be used in conjunction with: Stuiver, M. and Reimer, P.J. (1993). Radiocarbon, 35, P.215-230.

上ヶ平遺跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生 (パレオ・ラボ)

樹種同定1

1. はじめに

岐阜県益田郡下呂町に位置する当遺跡の考古遺物から奈良時代～平安時代と考えられている住居跡 (S B1) 出土炭化材の樹種同定結果を報告する。

炭化材はコナラ節とクヌギ節であり、S B1から出土した材の直径や年輪数からは、直径3～6 cmで少なくとも樹齢が9～13年以上の材が使われており、樹皮が付いていた材からは秋から初春に伐採されたことが判った。

2. 炭化材樹種同定の方法

まず、炭化材の横断面 (木口) を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつける。次に横断面だけでは同定できない試料 (アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ以外) については、3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定する。またコナラ節やクヌギ節などでも、年輪幅の狭いぬか目や逆に年輪幅の広い試料などは実体顕微鏡下では誤同定の恐れがあるので、このような試料については走査電子顕微鏡で確認した。走査電子顕微鏡用の試料は、横断面の他に、接線断面 (板目) と放射断面 (柁目) は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り平滑面を出す。この3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1 cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡 (日本電子(株)製 J S M-T100型) で観察と写真撮影を行った。

3. 結果とまとめ

表1に試料ごとの同定結果を表示した。炭化材は脆く崩れ安いので試料が元の原形をどの程度留めているのか問題はあるが、当遺跡の試料はブロック状の破片ではなく樹皮付きの試料などもあったので、試料の形状と年輪数、樹皮が付いていた試料や内樹皮の一部が残っている試料については年輪形成がどの時期で終了していたかを記録するようつとめた。

S B1の9点 (A～I) は、コナラ節7点とクヌギ節2点であった。この2分類群は、弥生時代以降から全国的に建築用材として報告事例の多い樹種である。試料の現存形状は節部と思われる試料Bを除き、すべて丸木や芯持ちまたは芯部に近い部分であり、材の直径は3 cm～6 cmで、計測年輪数は9～13年分であった。コナラ節と同定され樹皮が付いていた試料Aと試料Hそして内樹皮の一部が残っていた試料Cの樹皮の内側は、小型管孔からなる晩材部で終了していた (図版20 2a. -2c.)。同じくコナラ節で内樹皮が残存付着していた試料Dは、孔圏管孔が1層形成されて終了していた。このことから試料A・C・Hは、秋以降から冬場に伐採され、試料Dは初春に伐採されていた。生木は水分を多量に含んでいるため、材を利用する前にゆっくり乾燥させて反りやひび割れを防いでから使用される。また落葉広葉樹は落葉時期は材に含まれる水分が葉を展開している時期より少ない。このような

点から、秋以降から初春の伐採は材利用に適っていると言える。ただし、材の伐採時期がそのまま住居建築時期に結び付くとは限らない。

1) コナラ節 *Quercus* subgen. *Q. sect. Prinus* ブナ科 図版20-ア 1a.-1c. (SB1 A) 2a.-2c. (SB1 H)

年輪の始めに中型～大型の管孔が1層または数層配列し、晩材は薄壁で角形の非常に小さい管孔が放射状や放射方向に配列する環孔材。穿孔は単一、道管内腔にはチロースがある。放射組織は単列のものと幅の広い複合状のものがある。

コナラ節は、暖帯から温帯に生育する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

2) クヌギ節 *Quercus* subgen. *Q. sect. Cerris* ブナ科 図版20-ア 3a.-3c. (SB1 B)

年輪の始めに中型～大型の管孔が1層または数層配列し、晩材は厚壁で丸い非常に小型の管孔が放射方向に配列する環孔材。穿孔は単一、道管内腔にはチロースがある。放射組織は単列のものと幅の広い複合状のものがある。コナラ節の材と類似するが、晩材部の非常に小型の管孔の形態と配列で区別される。

クヌギ節は、暖帯の山林や二次林に普通の落葉高木で、クヌギとアベマキが属する。

表6 第7号住居跡炭化材の樹種同定結果

遺構	試料	樹種	形状・計測年輪数・備考など
SB1	A	コナラ節	r : 3.5cm 12年輪 樹皮付き 晩材形成
SB1	B	クヌギ節	r : 4.0cm 破片 節部破片
SB1	C	コナラ節	φ : 3.0cm 9年輪 晩材形成
SB1	D	コナラ節	φ : 3.5cm 11年輪+ 孔圏形成止
SB1	E	コナラ節	φ : 4.0cm 11年輪+ 芯持ち割れ材
SB1	F	コナラ節	r : 2.5cm 11年輪 みかん割れ
SB1	G	コナラ節	r : 2.5cm 11年輪 みかん割れ
SB1	H	コナラ節	φ : 1.5cm 9年輪 樹皮付き 晩材形成
SB1	I	クヌギ節	φ : 6.0cm+ 13年輪 芯持ち割材

樹種同定2

1. はじめに

奈良時代～平安時代の住居跡と推定される遺構SB1・SX6・SX9・SX10から出土した複数または多量の炭化材破片の樹種同定結果を報告する。

炭化材試料は、散在して出土した破片であり元の形状は留めていないため、建築材か生活道具類または燃料材であったのか元来の用途は不明である。しかし、過去にどのような樹種の木材が利用されて生活が営まれて来たのか、遺跡出土の炭化材樹種を調査した資料は当地域一帯ではほとんど見あたらない。従って用途不明な炭化材ではあるが、当時の生活になんらかの関わりを持ち利用されていた材であることから、その樹種と樹種構成を明らかにして当時の木材利用を知る目的で樹種同定が実施された。

2. 試料と炭化材樹種同定の方法

樹種同定と共に比例計数管法による放射性炭素年代測定が実施された(別報)。まず放射性炭素年代測定に必要な量の炭化材を先に取り除き、残り試料に付いて樹種同定を行った。樹種同定試料は大き

くて保存の良い破片だけを対照にすると、同定結果の樹種構成に偏りが出る恐れがあるので、3方向断面が観察可能な破片は大小にかかわらず可能な限り同定した。放射性炭素年代測定試料を取る前に実体顕微鏡で大雑把な出土樹種傾向を捕えておいたが、残り試料を同定した結果でも優占樹種は変わらず、更に詳細な結果が得られた。

樹種同定は、まず炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で観察し、分類群のおおよその目安をつけ分けた。コナラ節・クヌギ節・クリなどは横断面の管孔配列が特徴的なので実体顕微鏡下で確認して同定した。それ以外の分類群は、各分類群の典型的特徴を示す破片複数とやや異なる傾向が見られる破片を選び、3方向の破断面（横断面・接線断面・放射断面）を走査電子顕微鏡で観察して同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子(株)製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

残りの炭化材試料は、遺構ごとに検出分類群に分けチャック袋に入れ、財団法人岐阜県文化財保護センターに保管されている。

3. 結果

S B1のピットP1の炭化材はクヌギ節であった。S X6のピットP131からはヒノキ科、ピットP133からはモミ属・イヌシデ節・クヌギ節が検出された。ピットから検出されたこれらの樹種は、柱材や建築材部材として住居跡から出土例が多い樹種であり、出土地点がピットであることから、建築材であった可能性は高いと思われる。S X6内の炭化材樹種は、モミ属・イヌシデ節・クスノキ科であり、モミ属とイヌシデ節はピットP133からも検出されている。

S X9からは9分類群が検出され、モミ属の破片が最も多く、次にクスノキ科・サクラ属・シラキが多く、コナラ節・クリ・ヤマグワ・トネリコ属・タケ亜科であった。

S X10では12分類群が検出され、ここではクヌギ節が最も多く、次ぎにサクラ属・シラキ・カエデ属がやや多く、他にアサダ・ブナ属・タラノキ・スノキ属・エゴノキ属・トネリコ属・不明環孔材・広葉樹樹皮が出土した。

以上の4遺構から出土した炭化材は、モミ属・ヒノキ科の針葉樹2分類群と、広葉樹のイヌシデ節・アサダ・ブナ属・コナラ節・クヌギ節・クリ・ヤマグワ・クスノキ科・サクラ属・シラキ・カエデ属・タラノキ・スノキ属・エゴノキ属・トネリコ属の15分類群、そのほかに不明環孔材と広葉樹樹皮そしてタケ亜科であった。クスノキ科とスノキ属は落葉性と常緑性の樹種を含むが、そのほかの広葉樹は落葉性である。従って当遺跡では、複数の落葉広葉樹を多用しており、針葉樹ではモミ属が多く使われ、多種多様な分類群が利用されていたことが判明した。樹木の他に、タケ亜科（タケ・ササ類）も検出された。以下に樹種同定の根拠となった材組織の観察結果を記載する。

第7表 樹種同定観察結果

<p>(1) モミ属 <i>Abies</i> マツ科 図版20-イ 1a.-1c. (S X9) 仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞はない針葉樹材。傷害樹脂道が現れ、傷害樹脂道のある破片もしばしば観察された。モミ属は一般に早材から晩材への移行はゆるやかで晩材部の量は多いが、当遺跡の破片は晩材部の量が少ない破片が多かった。放射柔細胞の壁は厚く、放射断面において数珠状肥厚が見られ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型で1分野に1-4個、炭化材では孔口の大きさが不揃いに見える。放射組織の細胞高は比較的高い。モミ属は常緑高木の針葉樹で、暖帯から温帯下部の山地に普通のモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの種も材組織が類似しており識別はできない。材質はやや軟軟で加工は容易であるが保存性は低い</p>

<p>(2) ヒノキ科 Cupressaceae 図版20-イ 2a.-2c. (S X6 P131) 仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材の量は極めて少ない。分野壁孔は1分野に2~4個あり、輪郭は丸くヒノキ型であり、孔口の開口は狭いものとやや広く開いているものが観察された。細胞壁が不朽した部分も目立ったため、ヒノキ科ではあるが、属や種を特定することはできなかった。 日本に生育するヒノキ科には、ビャクシン属・クロベ属・アスナロ属・ヒノキ属などがあり、材は有用材として知られている。</p>
<p>(3) アサダ <i>Ostrya japonica</i> Sarg. カバノキ科 図版20-イ 3a.-3c. (S X6 P133) 小型の管孔が単独または2~数個が放射方向に複合して散在し、年輪界でやや径を減じる散孔材。道管の壁孔は交互状から対列状に密在し、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、2細胞幅、道管との壁孔は小型で交互状に密在する。アサダは、温帯の山地に生育する落葉高木で、材質は堅く丈夫である。</p>
<p>(4) クマシデ属 イヌシデ節 <i>Carpinus</i> sect. <i>Eucarpinus</i> カバノキ科 図版20-ウ 4a.-4c. (S X10) 単独または2~数個の小型管孔が放射方向に複合して散在し、放射組織が帯状に集合している部分が見られる散孔材。道管の壁孔は交互状から対列状に密在しその孔口は大きい。道管の穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、1~3細胞幅、道管との壁孔はやや大きい。集合放射組織があり穿孔もほぼ単一であることから、イヌシデ節と同定した。なおクマシデ節は集合放射組織の出現頻度が低く、穿孔は横棒が10本以下の階段状のものが多いことで区別している。 クマシデ属は暖帯および温帯の山地に生育する落葉高木または大形低木で、イヌシデ節には山野に普通のイヌシデとアカシデがある。材は丈夫で有用材として知られている。</p>
<p>(5) ブナ属 <i>Fagus</i> ブナ科 図版20-ウ 5a.-5c. (S X10) 小型の管孔が年輪の前半に多く分布し、晩材では極めて小型となり分布数も減る散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状となり、穿孔は単穿孔と横棒数が10~20本の階段状がある。放射組織は異性、1~3細胞幅の狭いものと10細胞幅以上で細胞高も高い広放射組織とがあり、道管との壁孔は大きなレンズ状である。 ブナ属は温帯極相林の主要構成樹種で、大木となる落葉樹である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、ブナより低地から生育し本州以南の主に太平洋側に分布するイヌブナの2種がある。材は建築材から漆器まで用途が広い。</p>
<p>(6) コナラ属 コナラ亜属 コナラ節 <i>Quercus</i>. subgen. <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i> ブナ科 図版20-ウ 6a.-6c. (S X9) 年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部では薄壁で孔口が角形の小型管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状に密在し、穿孔は単一、内腔にチロースが発達している。放射組織は単列と集合状・複合状がある。 コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木で、カシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は重硬であるが、加工はやや困難で割れや狂いが出やすい</p>
<p>(7) コナラ属 コナラ亜属 クヌギ節 <i>Q.</i> subgen. <i>Quercus</i> sect. <i>Cerris</i> ブナ科 図版20-エ 7a.-7c. (S X10) 年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部では孔口が丸く厚壁の小型管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状に密在、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列と集合状・複合状があり、道管との壁孔は柵状である。クヌギ節は暖帯の山林や二次林に普通の落葉高木で、クヌギとアベマキが属する。材は重厚で割裂性が良い。</p>
<p>(8) クリ <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc. ブナ科 図版20-エ 8a.-8c. (S X9) 年輪の始めに大型の管孔が隣接して配列し、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状や柵状である。 クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材の加工はやや困難だが、狂いが少なく耐朽性に優れた広葉樹材として知られている。</p>
<p>(9) ヤマグワ <i>Morus australis</i> Poiret クワ科 図版21-エ 9a.-9c. (S X9) 年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では小型から非常に小型の管孔が塊状・斜状・波状など集合する環孔材。道管の壁孔は交互状でやや大きく、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1~5細胞幅の紡錘形で上下端は方形細胞である。 ヤマグワは温帯から亜熱帯の山中に広く分布する落葉高木または低木である。材は重硬・強靱で心材は特に保存性が高い。</p>
<p>(10) クスノキ科 Lauraceae 図版21-オ 10a.-10c. (S X9) 小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合し、やや疎らで均一に分布し、年輪界で管孔の径が小さくなる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一と横棒数が10本前後の階段状である。放射組織は異性、1~2細胞幅、上下端に大きく膨らんだ油細胞があり、道管との壁孔は交互状で孔口は大きく開いている。 クスノキ科の材の中でクスノキとタブノキは管孔が大きく油細胞の出現頻度も高いことから、当遺跡の炭化材はこの2種以外である。小型管孔からなるクスノキ科の材組織は類似性が高くこれ以上は識別できなかった。ただし、温帯の山地に生育し小型管孔からなる点から当遺跡の炭化材は、クロモジ属の可能性が高いと考えられる。</p>
<p>(11) サクラ属 <i>Prunus</i> バラ科 図版21-オ 11a.-11c. (S X9) 小型の管孔が単独または2~数個が放射方向・接線方向・斜状に複合し全体的にうねるような文様に配列している散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単一、内腔には細くやや不規則ならせん肥厚がある。放射組織は異性、1~5細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する落葉広葉樹林の代表的な属で、多くの種が含まれる。材は粘り気があり強く、保存性も高い。</p>
<p>(12) シラキ <i>Sapium japonica</i> Pax et Hoffm. トウダイグサ科 図版21-オ 12a.-12c. (S X9) 小型で厚壁の管孔が単独あるいは2~数個が放射方向に接合してややまばらに分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は単列異性、放射細胞は大きく、道管との壁孔は交互状である。 シラキは岩手県以南の暖帯から温帯の山地に分布する落葉小高木で、川沿いの崖や尾根の岩上などに生育する。</p>
<p>(13) カエデ属 <i>Acer</i> カエデ科 図版21-カ 13a.-13c. (S X10) 小型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合して散在し、帯状柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細く規則的ならせん肥厚がある。放射組織は同性、1~3細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きく整然と配列している。 カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹で、約26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。</p>
<p>(14) タラノキ <i>Aralia elata</i> Seem. ウコギ科 図版21-カ 14a.-14c. (S X10) 年輪の始めに中型から小型の管孔が数層配列し、晩材部では非常に小型の管孔が斜状・塊状・接線状・放射状など様々な複合し紋様を描き配列する環孔材。道管の壁孔とその孔口は大きく、穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、主に3細胞幅である。 タラノキは暖帯から温帯の山野の日当りのよい所に生育する落葉低木である。材は丈夫ではなく木理も不齊であるため、小物器具に使われるぐらいである。</p>

<p>(15) スノキ属 <i>Vaccinium</i> ツツジ科 図版21-カ 15a.-15c. (S X10) 小型でやや角ばった管孔が単独あるいは2~3個が放射方向に複合して分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一と横棒数の少ない階段穿孔、内腔にはらせん肥厚がある。放射組織は1~4細胞幅でふくらとした紡錘形、道管との壁孔は交互状である。放射柔細胞の壁は厚く突起状の肥厚がある。 スノキ属は落葉または常緑の小低木で、日当たりのよい酸性土壌や疎林内に生育している種が多い。</p>
<p>(16) エゴノキ属 <i>Styrax</i> エゴノキ科 図版21-キ 16a.-16c. (S X10) 小型でやや厚壁の管孔が単独あるいは2~4個が放射方向に複合し、管孔は年輪前半に多く年輪界では径と分布数が減少する散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は横棒が少ない階段穿孔である。放射組織は異性、1~4細胞幅、多列部の上下端は単列で方形・直立細胞からなり、道管との壁孔は小型で交互状である。 エゴノキ属は暖帯から温帯下部の山地に生育する落葉高木である。エゴノキ・ハクウンボク・コハクウンボクがある。エゴノキの材用途は柄や器具が主である。</p>
<p>(17) トネリコ属 <i>Fraxinus</i> モクセイ科 図版21-キ 17a.-17c. (S X9) 中型~大型の管孔が2~3層配列し、晩材部では単独または放射方向に2個が複合した小型で厚壁の管孔が散在する環孔材。周囲状や翼状の柔組織が見られる。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、1~2細胞幅である。 トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木で、シオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。材は重硬で弾力性があり折れ難い。</p>
<p>(18) 不明環孔材 <i>unknown ring-porous wood</i> 図版21-キ 18a.-18c. (S X10) 年輪の始めに中型の管孔があり、晩材部では非常に小型の管孔が斜状・塊状に複合している。道管の穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、1~2細胞幅である。炭化材は節部のように管孔配列が乱れており組織の保存も悪いので、分類群は特定できなかった。</p>
<p>(19) タケ亜科 <i>Gramineae subfam. Bambusoideae</i> イネ科 図版21-キ 19a. (S X9) 直径約5mmの硬質で、稈の中心部は中空である。稈の輪郭は円形ではなく不規則に波打っていた。維管束は不整中心柱で同心円状に近い配置が見られる。維管束は向軸側に原生木部、その左右に後生木部の2個の管孔、背軸側に節部があり、全体としては4~3個の穴の集合に見える。維管束の周りは厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘が明瞭である。稈の皮層は厚く非常に堅い。このような形質からイネ科のタケとササ類を含むタケ亜科であると同定した。 タケ・ササ類には約12属が含まれ、中国や東南アジアから移入され栽培により広まったものが多く、ササ類は多くの野生種があり、タケ類ではハチク・マダケは日本に野生していた可能性があるといわれる。稈の破片や組織のみからは属や種を識別することは難しい。</p>

4. まとめ

今回、4つの住居跡と考えられる遺構から出土した炭化材は、針葉樹が2分類群、広葉樹が16分類群、その他にタケ亜科と広葉樹の樹皮があり、多様な分類群が検出された。針葉樹では、モミ属が破片数・量ともに複数の遺構から圧倒的に多く検出され、ヒノキ科はS X6のP 131から検出された。広葉樹ではクヌギ節が目立ち、サクラ属・シラキ・カエデ属・クスノキ科・トネリコ属などがやや多く、破片数や量は少ないがブナ属やクリなどが検出され、ほとんどが落葉性の広葉樹であった。炭化材の樹種構成は、当遺跡の立地環境から類推される自然植生の中間温帯林である樹種構成と類似性が高く、遺跡周辺の森林を利用していた様子が伺えた。

柱跡のピットから出土したモミ属・ヒノキ科・イヌシデ節・クヌギ節は、すべて柱材や建築材として適した材であり、住居跡からの報告事例も多い樹種である。その他の広葉樹材のほとんども建築材に適した材であった。ただし、クスノキ科・シラキ・タラノキ・スノキ属は、あまり大径木にならず強度も強い部類の材ではない事から、道具類や燃料材として使われていたか、建築材であったとしても部材や補強材であったのかも知れない。

遺構別に出土樹種を見ると(表7)、S B1とS X6からの検出分類群数は1~4分類群と少ないが、S X9とS X10からは9分類群または12分類群と多くの分類群が検出され、遺構により検出された樹種の種類や種数に偏りが見られた。この要因として、①検討試料の数量と分類群数の関係(試料数が多いほど検出分類群数が増加する)、②放射性炭素年代測定値との関連性(時期差による使用樹種の変化)、が考えられた。まず①については、多種多様な樹種が検出されたS X9とS X10は、S B1とS X9に比べ検討できた炭化材の量・破片数ともに多かった事から、検討試料数の多さが検出種類数の増加と関連していると考えられる。年代測定用の試料を取る前に大きな破片を選択して実体顕微鏡下で観察した時点では、針葉樹・クヌギ節・クスノキ科・カエデ属・イヌシデ節などが複数の遺構から見られ、全体的には同様な樹種構成であると予測していた。その後破片の大小にかかわらず可能な限り

表8 樹種同定結果一覧

出土量を3段階に分けて表示した。●：多量 ◎：やや多い ○：少量

(P130とP131はS X6の覆土のピット)

分類群	SB1	SX6			SX9	SX10	分類群	SB1	SX6			SX9	SX10
	P1	P131	P133	内				P1	P131	P133	内		
モミ属			○	○	●		サクラ属					◎	◎
ヒノキ科		○					シラキ					◎	◎
イヌシデ節			○	○			カエデ属						◎
アサダ						○	タラノキ						○
ブナ属						○	スノキ属						○
コナラ節					○		エゴノキ属						○
クヌギ節	○		○			●	トネリコ属					○	○
クリ					○		不明環孔材						○
ヤマグワ					○		広葉樹樹皮						○
クスノキ科				○	◎		タケ亜科					○	

樹種同定を実施した結果、試料数の多いS X9とS X10の検出分類群数は増加した。従ってS X9とS X10の検出分類群数の多さは、炭化材試料の量・破片数の多さと関連性が高く、また破片の大きさや保存の良さを優占して同定試料を選択すると結果に偏りが出る恐れがある事も判った。次に②との関連性について記す。多種多様な落葉広葉樹とモミ属が顕著に検出されたS X9とS X10そしてS X6内の放射性炭素年代測定値は、予想値よりやや古い古墳時代中期や弥生時代後期～古墳時代中期の値であった。一方、予想年代に近い値が得られたSB1では、クヌギ節とコナラ節が検出された。SB1では、今回の試料P1(クヌギ節)の他に前回に建築材A～I(10点)の同定が行われている。前報の建築材は保存も良く大きな炭化材で、その中の4点は芯持ちの丸木状態であった。これらの樹種は、コナラ節8点とクヌギ節2点であり、今回検討したP1出土炭化材樹種のクヌギ節は前回の結果と調和的と言える。SB1では検討試料数が少ない為かもしれないが、クヌギ節とコナラ節の2分類群のみで、いずれも二次林要素であった。予想値より古い値が出た遺構S X9とS X10の炭化材樹種構成は、当遺跡が立地する自然植生の中間温帯林の樹種構成と類似しており、そのような森林から伐採して来た事が連想された。一方、予想年代値が示されたSB1からは、二次林要素のコナラ節とクヌギ節のみが検出され、遺跡周辺に急速に二次林化が進行したのか、または自然林の地区からではなく二次林の地区から木材を調達した事が予想された。

なお当遺跡の北方に所在する堂之上遺跡(久々野町)では、縄文時代中期の住居跡から出土した炭化材11点の樹種はすべてクリであった(1980 大野郡久々野町教育委員会)。縄文時代は、全国的にクリが多用されていたことは知られており、当地域も例外ではなかった。しかし奈良～平安時代になると、当遺跡の住居跡出土炭化材の中でクリが占める割合は極めて少なくなり、クリは住居跡S X9からわずかな小破片が検出されただけであった。今回の調査からは、奈良～平安時代の住居跡からクリが多用されていた形跡は見られない。時代の推移により、樹種利用は大きく変化したようである。このような樹種利用の変化がどのような要因と連動して変化したのか、樹種利用の詳細を検討できるような資料の蓄積をしてゆく必要が感じられる。

引用文献 大野郡久々野町教育委員会 1980『堂之上遺跡』「遺構・遺物の諸問題—今後の展望にかえて」PP71-74

上ヶ平遺跡のプラント・オパール

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、珪酸分を多量に吸収することが知られている。プラント・オパールとは、根より吸収されたこの珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。上ヶ平遺跡においては灰あるいは灰が多く混入した土壌ではないかと思われる灰色を帯びた黄褐色の粘質土が検出された。以下には、この粘質土についてプラント・オパール分析から灰の有無を検討した。

1. 試料と分析方法

分析用試料は出土遺物から奈良時代～平安時代と考えられているSB1のピット33（試料No P33）より採取された黄褐色シルト質粘土で、灰色を帯び、白色粒子が散在している。この土壌試料について以下のような手順にしたがってプラント・オパール分析を行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカールにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40 μ m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

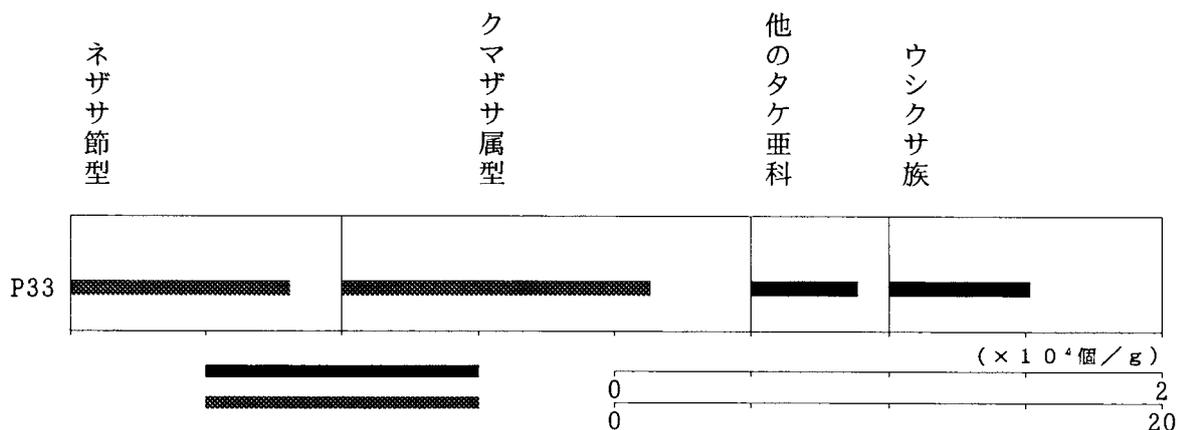
2. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（表9）、それらの分布を図1に示した。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

検鏡の結果、最も多く検出されたのはクマザサ属型で110,000個を越えている。次いでネザサ節型が約80,000個得られ、その他、ウシクサ族が約5,000個産出している。

第9表 プラント・オパール個数

飼料番号	イネ (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
P33	0	81,000	113,100	3,900	5,100	15,400



第46図 プラント・オパール分布図

3. 土壤試料について

上記したように、最も多く検出されたのはクマザサ属型であるが、検出状況はすべてが単一個体で、ほとんどが傷んでおり、風化をうけている様相が認められる。これは他の分類群についても同様である。一般に灰試料では機動細胞珪酸体が連なった状態で認められたり、一部には他の珪酸体とともに葉や茎に沈積した状態そのもので観察されたりもする。上ヶ平遺跡の今回の試料においてはこのような状況は認められず、検出個数もそれほど多いということはなく、これらのことから灰色を帯びた黄褐色粘質土は少なくともイネ科植物を焼いた灰ではない、あるいは灰は含まれていないとプラント・オパール分析からは判断される。

最も多く検出されているクマザサ属型のササ類（チマキザサ・ミヤコザサなど）は森林の下草的存在で生育するササ類で、遺跡周辺に成立していたであろう落葉広葉樹林下にこれらのササ類が広く分布していたのであろう。また、住居周辺や森林境界部など日のあたる開けたところにはネザサ節型のササ類（ミヤコネザサ・アズマネザサなど）がウシクサ族（ススキ・チガヤなど）とともに生育していたのであろう。こうした分類群のプラント・オパールがローム起源と思われる粒子に混入し、今回の試料のような土壤が形成されたと推測される。

引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－。考古学と自然科学，9，PP. 15-29.

藤原宏志・佐々木彰（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）－イネ（Oryza）属植物における機動細胞珪酸体の形状－。考古学と自然科学，11，PP. 9-20.

第5章 まとめ

上ヶ平遺跡の発掘調査の概要は、前章までに述べたとおりである。本章では今回の発掘の成果を簡単にまとめてみたい。

上ヶ平遺跡で検出された遺物のうち、特筆すべきものは大量に出土した下呂石だといえる。調査区全体で29286個の下呂石が出土していることと、下呂石が集中して出土する地点（S X5、P G1）があったことが注目される。

出土した下呂石のコアの計測からは、次のようなことがいえる。コアは、重いものは400g前後もあるが、重量の平均が82.5gであり、大きさも片手でつかめるものばかりである。これは、湯ヶ峰山頂部に露出する下呂石が崩落して斜面を転がり落ちたものを、遺跡に近い谷などから手で運べる大きさに割ってから持ってきたものであると考えられる。同じ下呂石のコアでも飛騨地区の他遺跡のコアは、産地から遠い分貴重なためかたくさん剥片を取った残りの小さくなったものが多いが、上ヶ平遺跡の場合、握り拳大のものが多く、剥片をまだあまり取っていない状態つまりコアブランクが90%以上ある。調査区全体でも製品となった剥片石器製品が261個しか出土していないことを考え併せると、産地が近い故に贅沢なコアの使い方をしたともいえる。しかし、他の遺跡と比べ量的にコアやフレークが異常に多すぎるともいえる。コアがたくさん出土したS X5の場合は、同時に下呂石のチップも大量に出土しており加工場所と考えることも出来るが、P G1の場合は下呂石のコアやフレークが一カ所に集中しており、意図的に下呂石を貯蔵していたと考えられる。また、いつでも手に入る下呂石を敢えて、集落での消費量以上に多量に貯蔵する必然性はない。他の地域へ搬出する流通拠点であったのではないかと推測すると、この遺跡での石器製品の少なさと符合する。今後の調査に期待をしたい。

縄文時代早期の遺構については、集石遺構、第1号住居跡、第2号住居跡がある。下呂石の大量出土地点はこれらの集落に関わる重要な遺構として位置づけられる。

集石遺構はS S2～S S6までが縄文時代早期の遺構と考えられ、第1号住居跡と第2号住居跡の生活と密接な関わりをもったと見られる。第1号住居跡と第2号住居跡には炉跡がなく、集石遺構が屋外炉として使われたのではないかと見られる。第1号住居跡では押型文のない無文の黒鉛入り土器が出土しており、第2号住居跡には沢式の黒鉛土器が出土している。無文と山形文の沢式が同時期に使われたと見られる。また、この二つの住居跡は床面近くに多量の下呂石のチップが出土しており、住居内で下呂石の加工をしたと考えられる。特に第2号住居跡では欠けた石鏃が多かったことがその証左となる。

遺物包含層からではあるが、S S8の下層から弥生時代初頭の遠賀川式の土器が出土している。遺構としては第3号住居跡が土器は出土していないが床面の炭化材から3世紀末か4世紀初頭の弥生時代末期と推定されており、益田郡では貴重な弥生時代の遺構、遺物の検出となる。

第4号住居跡および、第5号住居跡、第6号住居跡は6世紀代の住居と考えられるが、土器等の出土が第4号住居跡の土師器しかなく、互いの関連性は考察できなかつた。ただし、床面積は第4号、6号住居跡は6.4～10㎡と小型、第5号住居跡に至っては4㎡しかなく、住居以外の使用も考えられる。一方、200年ほど下った8世紀半ばの奈良時代の住居と考えられる第7号住居跡は、焼失住居か廃絶儀礼か判別

できないが、大量の炭化材が検出されている。樹種判定の結果からコナラ等が建築材として使われていたことがわかった。この第7号住居跡は、同時期に使われた竈跡が2基検出されたことが特徴である。須恵器の出土と併せ祭祀に関する特殊な目的を持った建物であった可能性がある。また第8号住居跡は、この奈良時代の住居プランにそっくり重なるようにつくられた10世紀半ば平安時代の住居であった。類例を調べたところ、牧野小山遺跡の試掘調査で10世紀半ばの住居跡の床面の下に、さらに古い住居跡がそのまま重なるようなプランで検出された例が報告されており、10世紀頃にはけっしてまれなことではなかったのではないかと考えられる。ただ、第8号住居跡の場合、出土した灰釉陶器には類例の少ない把手付きの水注があり、その質から、ある程度身分の高い住居の所有者が予想され、第7号住居跡との関連性は少なからずあると考えられる。灰釉陶器を見ると折戸53号窯式、東山72号窯式、百代寺窯式から3型式のものがありかなり長期にわたり使用された住居であることがわかった。

これらの遺構のほかにピットが483基検出された。ピットとして検出したが、掘り込みの不明瞭なものは欠番としたものもある。しかし、直線に並ぶものがなく掘立柱建物跡は不明であった。

今後、上ヶ平遺跡は、試掘確認調査を終えた現遺跡の北部に調査を広げる予定であるが、なだらかな丘陵面の各所に今回発掘を終えた遺跡と関わる貴重な遺構、遺物も検出されると考えられ研究の発展が期待される。

主要参考文献

- 大野政雄・佐藤達雄 1967 「岐阜県沢遺跡調査予報」『考古学雑誌』53-2
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1991 『図録 石器入門事典 先土器』
- 片岡 肇 1980 「樋沢式土器の再検討－長野岐阜両県を中心として」『信濃』32-4
- 1982 「押型文土器」『縄文文化の研究』3
- 1988 「異形押型文土器の再検討」『朱雀』
- 角川日本地名大辞典編集委員会 1978 『角川日本地名大辞典』21岐阜県
- 河出書房 1965 『日本の考古学 I 先土器時代』
- 岐阜県 1972 『岐阜県史 通史編 原始』
- 岐阜県教育委員会 1962 『岐阜県遺跡目録』
- 岐阜県教育委員会 1990 『改訂版 岐阜県遺跡地図』
- 岐阜県博物館 1992 『岐阜県博物館特別展 飛驒のあけほの』
- 下呂町史編纂委員会 1990 『飛驒下呂 通史・民族』
- 齋藤孝正 1982 「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』
- 佐野康雄 1998 『牧野小山遺跡 C地点』(財)岐阜県文化財保護センター
- 鈴木道之助 1981 『図録石器の入門事典 縄文』
- 千藤 克彦 1994 「第4章 縄文遺構と遺物 第6節 石器類」『戸入村平遺跡』
(財)岐阜県文化財保護センター
- 高山市教育委員会 1990 『鷹ノ巣遺跡A・B地点 鷹ノ巣古墳 発掘調査報告書』
- 谷口和人 1997 『西田遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 1998 「第4章遺物第3節包含層出土の縄文土器」『牛垣内遺跡』
(財)岐阜県文化財保護センター
- 田口昭二 1982 「美濃窯の灰釉陶器と緑釉陶器」『考古学ジャーナル』
- 戸田充則編 1994 『縄文時代研究事典』
- 中村 浩 1995 『須恵器集成図録』
- 長谷川孝志 1999 『土岐口西山古窯跡』(財)岐阜県文化財保護センター
- 古川町教育委員会 1994 『上町遺跡トヨ地点・O地点・栗原センター地点発掘調査報告書』
- 吉朝 則富 1989 『はつや遺跡－発掘調査報告書』清見村教育委員会

第10表 土器一覽表

番号	種別	分類	器種	地区	層位	法量			胎土	胎土色調	残存率 %	備考	挿図	図版	
						口径	器高	底径							
1	土師器	—	皿	SX	6	Ⅲ	13.0	4.7	-	1mm程度の砂混じる	明黄褐色	70	手握ね 横ナデ 無文 丸底	25図-2	8-4
2	土師器	—	甕	SX	6	Ⅲ	-	-	4.0	1mm程度の砂混じる	明黄褐色	30	手握ね 横ナデ 無文	25図-3	
3	土師器	—	小型壺	SX	6	Ⅱ	12.5	12.8	2.2	1mm程度の砂混じる	浅黄褐色	50	手握ね 横ナデ 無文	25図-4	8-3
4	土師器	—	甕	SX	6	Ⅱ	12.5	-	-	1mm程度の砂混じる	灰褐色	60	手握ね 横ナデ 無文	25図-5	7-3
5	土師器	—	壺	SX	6	Ⅲ	-	-	-	1mm程度の砂混じる	灰褐色	50	手握ね 外横ナデ無文 内欄目	25図-6	7-2
6	土師器	—	甕	SX	6	Ⅱ	-	-	3.0	1mm程度の砂混じる	橙色	40	手握ね 横ナデ 無文	25図-7	8-2
7	土師器	—	甕	SX	6	Ⅱ	19.5	26.7	-	1mm程度の砂混じる	浅黄褐色	40	手握ね 横ナデ 無文	25図-8	8-1
8	須恵器	—	甕	SB	1	Ⅳ	-	-	-	0.1~0.5mmの砂混じる	灰黄褐色	—	胴部 外面平行タタキ目	31図-10	9-2
9	須恵器	—	甕	SB	1	Ⅳ	-	-	-	緻密	灰黄褐色	—	胴部 外面平行タタキ目	31図-11	10-1
10	須恵器	—	甕	SB	1	Ⅳ	-	-	-	緻密	灰黄褐色	—	胴部 外面平行タタキ目	31図-12	10-1
11	須恵器	—	甕	SB	1	Ⅳ	-	-	-	緻密	灰黄褐色	—	胴部 外面平行タタキ目	31図-13	10-1
12	須恵器	—	甕	SB	1	Ⅳ	-	-	-	緻密	灰黄褐色	—	胴部 外面平行タタキ目	31図-14	9-2
13	須恵器	—	甕	SB	1	Ⅳ	-	-	-	緻密	灰黄褐色	—	胴部 外面平行タタキ目	31図-15	9-2
14	須恵器	—	甕	SB	1	Ⅳ	-	-	-	緻密	灰黄褐色	—	胴部 外面平行タタキ目	31図-16	9-2
15	須恵器	—	甕	SB	1	Ⅳ	33.0	-	-	緻密	灰黄褐色	口縁30	内外回転ナデ	31図-9	9-1
16	須恵器	—	鉢	SB	1	Ⅳ	14.2	3.2	6.7	緻密	灰黄褐色	40	内回転ナデ外ヘラ削り	32図-17	8-7
17	灰釉陶器	I	椀	SB	1	I	-	-	8.3	緻密	黄灰色	30	回転ナデ 全面に刷毛塗り施釉	32図-18	10-2
18	灰釉陶器	I	皿	SB	1	Ⅱ	16.2	3.0	8.2	緻密	黄灰色	30	回転ナデ 全面に刷毛塗り施釉	32図-19	11-2
19	灰釉陶器	I	水注	SB	1	Ⅱ	10.0	26.3	10.0	緻密	黄灰色	90	回転ナデ 全面に刷毛塗り施釉	32図-20	11-3
20	灰釉陶器	I	椀	SB	1	Ⅱ	14.0	-	-	緻密	黄灰色	20	回転ナデ 全面に刷毛塗り施釉	32図-21	10-2
21	灰釉陶器	I	大椀	SB	1	Ⅱ	19.3	-	-	緻密	黄灰色	30	回転ナデ 全面に刷毛塗り施釉	32図-22	10-2
22	灰釉陶器	I	大椀	SB	1	Ⅱ	-	-	9.2	緻密	黄灰色	30	回転ナデ 全面に刷毛塗り施釉	32図-23	10-2
23	灰釉陶器	I	大椀	SB	1	Ⅱ	-	-	8.8	緻密	黄灰色	30	回転ナデ 全面に刷毛塗り施釉	32図-24	10-2
24	灰釉陶器	Ⅱ	段皿	SB	1	Ⅱ	15.4	2.8	6.2	緻密	黄灰色	50	回転ナデ	32図-25	11-5
25	灰釉陶器	Ⅱ	段皿	SB	1	Ⅱ	15.5	3.2	6.8	緻密	黄灰色	60	回転ナデ	32図-26	11-4
26	灰釉陶器	Ⅱ	椀	SB	1	Ⅱ	16.0	5.1	8.8	0.1~1mmの砂混じる	黄灰色	70	回転ナデ	32図-27	11-6
27	灰釉陶器	Ⅲ	椀	SB	1	Ⅱ	14.7	-	-	緻密	黄灰色	10	回転ナデ	32図-28	
28	灰釉陶器	Ⅲ	椀	SB	1	Ⅱ	14.5	4.1	7.2	緻密	黄灰色	60	回転ナデ 内面に薄く釉	32図-29	12-7
29	灰釉陶器	Ⅲ	椀	SB	1	Ⅱ	14.0	-	-	緻密	黄灰色	10	回転ナデ	32図-30	
30	灰釉陶器	Ⅲ	椀	SB	1	Ⅱ	15.5	5.8	7.8	緻密	黄灰色	80	回転ナデ 内面に薄く釉	32図-31	12-1
31	須恵器	—	坏蓋	ノ	13	Ⅱ	14.0	-	-	緻密	褐灰色	10	内外回転ナデ	35図-71	8-5
32	須恵器	—	坏身	表探	ノ	Ⅱ	18.6	-	-	緻密	褐灰色	5	内外回転ナデ	35図-72	8-5
33	須恵器	—	鉢	ノ	10	Ⅱ	-	-	9.0	0.3~0.5mmの砂混じる	灰黄褐色	30	内回転ナデ外ヘラ削り	35図-73	8-6
34	灰釉陶器	I	椀	ノ	10	Ⅱ	19.0	6.7	10.0	緻密	黄灰色	60	回転ナデ 全面に刷毛塗り施釉	35図-74	11-1
35	灰釉陶器	I	椀	ハ	9	I	16.0	-	-	緻密	黄灰色	20	回転ナデ 全面に刷毛塗り施釉	35図-75	10-2
36	灰釉陶器	Ⅱ	椀	ハ	13	I	14.4	-	-	緻密	黄灰色	30	回転ナデ	35図-76	
37	灰釉陶器	Ⅱ	椀	ノ	11	I	-	-	8.0	緻密	黄灰色	10	回転ナデ	35図-77	
38	灰釉陶器	Ⅱ	椀	ノ	13	I	-	-	7.0	緻密	黄灰色	30	回転ナデ	35図-78	
39	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ハ	9	I	-	-	8.7	緻密	黄灰色	30	回転ナデ	35図-79	
40	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ハ	10	Ⅱ	-	-	8.7	緻密	黄灰色	40	回転ナデ	35図-80	
41	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ハ	11	Ⅱ	-	-	7.0	緻密	黄灰色	10	回転ナデ	35図-81	
42	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ノ	11	Ⅱ	-	-	7.0	0.2~0.5mmの砂混じる	明黄褐色	40	回転ナデ	35図-82	
43	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ネ	8	I	-	-	6.0	緻密	黄灰色	10	回転ナデ	35図-83	
44	灰釉陶器	Ⅲ	小椀	ハ	9	Ⅱ	-	-	5.4	緻密	黄灰色	10	回転ナデ	35図-84	
45	灰釉陶器	Ⅲ	小椀	ネ	15	I	-	-	5.0	緻密	黄灰色	10	回転ナデ	35図-85	
46	灰釉陶器	Ⅲ	小椀	ハ	10	Ⅱ	-	-	3.6	緻密	黄灰色	5	回転ナデ	35図-86	
47	灰釉陶器	Ⅲ	小椀	ノ	15	Ⅱ	-	-	6.0	緻密	黄灰色	15	回転ナデ	35図-87	
48	灰釉陶器	Ⅲ	小椀	ネ	15	I	-	-	6.0	緻密	黄灰色	5	回転ナデ	35図-88	
49	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ノ	15	I	-	-	8.3	緻密	明黄褐色	40	回転ナデ	35図-89	12-5
50	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ノ	10	Ⅱ	-	-	9.0	0.2~0.6mmの砂混じる	黄灰色	40	回転ナデ	35図-90	
51	灰釉陶器	Ⅲ	椀	SS	7	Ⅲ	-	-	7.8	緻密	黄灰色	40	回転ナデ	35図-91	
52	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ノ	15	Ⅲ	-	-	8.0	緻密	黄灰色	10	回転ナデ	35図-92	
53	灰釉陶器	Ⅲ	輪花椀	ノ	12	I	13.0	-	-	緻密	黄灰色	20	回転ナデ	35図-93	
54	灰釉陶器	Ⅲ	小椀	ハ	10	I	10.0	-	-	緻密	黄灰色	10	回転ナデ	35図-94	
55	灰釉陶器	Ⅲ	小椀	SS	8	Ⅲ	10.5	-	-	緻密	黄灰色	40	回転ナデ	35図-95	
56	灰釉陶器	Ⅲ	小椀	ハ	11	I	-	-	6.0	緻密	明黄褐色	10	回転ナデ	35図-96	
57	灰釉陶器	Ⅲ	小椀	ハ	12	I	10.1	4.1	6.0	緻密	黄灰色	10	回転ナデ	35図-97	
58	灰釉陶器	Ⅲ	小椀	ハ	9	Ⅱ	10.8	4.0	6.0	緻密	黄灰色	40	回転ナデ	35図-98	12-4
59	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ノ	11	Ⅱ	-	-	7.3	緻密	黄灰色	40	回転ナデ	35図-99	12-8
60	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ハ	12	I	15.0	5.6	7.0	緻密	黄灰色	30	回転ナデ 腰部に2周ヘラ削り	35図-100	12-6
61	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ノ	12	I	-	-	8.0	緻密	黄灰色	50	回転ナデ 腰部に2周ヘラ削り	35図-101	11-7
62	灰釉陶器	Ⅲ	輪花椀	ノ	15	I	13.0	6.0	7.5	緻密	黄灰色	50	回転ナデ	35図-102	11-8
63	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ハ	10	I	16.4	6.1	7.5	緻密	黄灰色	60	回転ナデ 腰部に3周ヘラ削り	35図-103	12-2
64	灰釉陶器	Ⅲ	椀	ハ	10	Ⅱ	16.0	5.9	8.0	緻密	黄灰色	50	回転ナデ 底部外面回転糸切り痕	35図-104	12-3

第11表 石器一覽表

石器計測表 石鏡

No.	出土区	層	遺物番号	石材	長さ mm	幅 mm	厚み mm	重量 (g)	柄深 mm	分類 尖頭-基部 部位	欠損 部位	挿圖
1	SX	2	6940	下石	18.8	15	2.5	0.3	6	2	C1	12図-21
2	SX	2	7478	下石	21.3	13	2.5	0.6	5.5	1	C1	12図-22
3	SX	2	7712	下石	(15.5)	(13)	(2.5)	(0.5)	-	2	C1	12図-23
4	SX	2	7719	下石	(22.5)	15	4	(1.1)	-	1	B	12図-25
5	SX	2	7729	下石	(24)	(15)	(2)	(0.1)	-	2	C1	12図-26
6	SX	2	7735	下石	(23)	(17)	(2.7)	(0.8)	-	2	C1	12図-27
7	SX	2	7741	下石	(12)	16	(3)	(0.6)	1	6	E	12図-28
8	SX	2	7752	下石	(27)	(21)	5	(2.1)	5	1	C1	12図-29
9	SX	2	8315	下石	21.4	17	4	0.9	-	1	C1	12図-30
10	SX	2	8318	下石	(14)	(9)	1.8	(0.2)	5.8	2	C1	12図-31
11	SX	2	8422	下石	20	(15)	1.9	(0.5)	(4.5)	2	C1	12図-32
12	SX	2	8425	下石	(17)	(12)	(2.7)	(0.4)	-	2	C1	12図-33
13	SX	2	8472	下石	25.5	(9.3)	3.8	0.8	5.4	4	B	12図-34
14	SX	2	7950	下石	21.2	13	2.6	0.8	5.4	2	C1	12図-35
15	SX	2	7952	下石	19.5	(13)	3	(0.5)	5.3	2	C1	12図-36
16	SX	2	10937	下石	(23)	(8)	(2.3)	(0.7)	-	2	E	12図-37
17	SX	2	10963	下石	(21)	(11)	(2.1)	(0.6)	1.8	2	B	12図-38
18	SX	2	10964	下石	20.5	(19)	(2.9)	(1.5)	-	3	D	12図-40
19	SX	2	11769	下石	(22)	(11)	2.4	(0.3)	4	1	C1	10図-2
20	SX	3	4067	下石	13.5	12	2.1	0.2	1.8	1	C2	10図-3
21	SX	3	4110	下石	11	2.4	0.2	2.5	4	1	C2	10図-4
22	SX	3	4111	下石	16	15.5	2.3	0.4	-	3	D	10図-5
23	SX	3	4665	下石	(20)	11	5.8	(2.1)	-	6	E	10図-6
24	SX	3	4888	下石	(18)	13	2.2	(0.5)	-	6	E	10図-7
25	SX	3	4890	下石	(23)	(13)	2.5	(0.8)	2	1	C1	10図-8
26	SX	3	4899	下石	(19)	(15)	4.1	(0.8)	1.8	4	B	10図-9
27	SX	3	9738	下石	15	12	2.2	0.1	4.2	1	C2	10図-10
28	SX	3	5360	下石	14.5	(14.5)	(3.2)	(0.4)	1.8	1	A	10図-11
29	SX	3	8329	下石	18	(13)	2.4	0.4	1.8	1	A	10図-12
30	SX	3	10051	下石	13.5	12	2.2	0.4	-	3	D	10図-13
31	SX	3	10256	下石	(15)	(12)	2.4	(0.4)	-	3	C1	10図-14
32	SX	3	-	下石	28	(17)	2.8	(0.6)	6.2	4	A	10図-16
33	SX	3	-	下石	20.5	(13)	4.3	0.3	3.8	5	C2	10図-17
34	SX	3	-	下石	22.3	3.1	4.4	0.6	4.4	1	C2	10図-18
35	SX	3	6318	下石	19	2.8	2.6	0.4	2.8	1	C1	18図-47
36	SX	5	6468	下石	-	-	-	-	-	-	-	-
37	SX	5	6469	下石	-	-	-	-	-	-	-	-
38	SX	5	6470	下石	-	-	-	-	-	-	-	-
39	SX	5	6471	下石	-	-	-	-	-	-	-	-
40	SX	5	6543	下石	-	-	-	-	-	-	-	-

No.	出土区	層	遺物番号	石材	長さ mm	幅 mm	厚み mm	重量 (g)	柄深 mm	分類 尖頭-基部 部位	欠損 部位	挿圖
121	A	15	12197	下石	23	16.5	5.5	1.8	3	2	C1	37図-88
122	A	15	12198	下石	19	(14)	3.1	(0.5)	6	2	C1	37図-89
123	A	15	12199	下石	20.5	15	2.3	0.5	4.5	3	C1	37図-90
124	A	15	12200	下石	13	13	1.7	0.2	-	3	C1	38図-102
125	A	15	12201	下石	(15)	(12)	1.6	(0.2)	-	4	C1	-
126	A	15	12202	下石	(13.5)	(13)	3.1	(0.7)	-	4	C1	-
127	A	15	12203	下石	(20)	(15)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
128	A	15	12204	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
129	A	15	12205	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
130	A	15	12206	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
131	A	15	12207	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
132	A	15	12208	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
133	A	15	12209	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
134	A	15	12210	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
135	A	15	12211	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
136	A	15	12212	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
137	A	15	12213	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
138	A	15	12214	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
139	A	15	12215	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
140	A	15	12216	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
141	A	15	12217	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
142	A	15	12218	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
143	A	15	12219	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
144	A	15	12220	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
145	A	15	12221	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
146	A	15	12222	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
147	A	15	12223	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
148	A	15	12224	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
149	A	15	12225	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
150	A	15	12226	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
151	A	15	12227	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
152	A	15	12228	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
153	A	15	12229	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-
154	A	15	12230	下石	(19)	(13)	0.8	(0.4)	-	4	C1	-

石器計測表 スクレイバー類 遺構内

No	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm		重量 (g)	分類	使用痕	挿図	
					長さ	幅					
1	S X	5	Ⅲ 12291	下呂石	(12.8)	(9.7)	5.2	(0.6)	2	○	
2	S X	5	Ⅲ 12712	下呂石	(15)	12.2	3.5	(0.5)	2	○	
3	ノ	16	Ⅱ 13884	下呂石	(26.9)	18	5.6	(3)	1	○	38Ⅱ-109
4	ノ	15	Ⅲ 10434	下呂石	(53.8)	32.1	10.2	(11.8)	1	○	38Ⅱ-111
5	ノ	15	Ⅲ 255	下呂石	(25.5)	(18)	4.7	(2.1)	1	○	38Ⅱ-110
6	ネ	13	Ⅱ	下呂石	30.8	9	6.2	1.4	3	—	38Ⅱ-112
7	ノ	13	Ⅱ 10617	下呂石	(34.1)	34.1	9.1	(9.1)	1	○	38Ⅱ-113
8	ハ	13	Ⅲ 13739	下呂石	62	39	12.5	23.4	1	—	38Ⅱ-115
9	ハ	13	Ⅲ 蔵探	下呂石	30.4	9.2	6.3	1.8	3	—	38Ⅱ-114

石器計測表 石錐

No	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm		重量 (g)	分類	使用痕	挿図
					長さ	幅				
1	S X	5	Ⅲ 12291	下呂石	(12.8)	(9.7)	5.2	(0.6)	2	○
2	S X	5	Ⅲ 12712	下呂石	(15)	12.2	3.5	(0.5)	2	○
3	ノ	16	Ⅱ 13884	下呂石	(26.9)	18	5.6	(3)	1	○
4	ノ	15	Ⅲ 10434	下呂石	(53.8)	32.1	10.2	(11.8)	1	○
5	ノ	15	Ⅲ 255	下呂石	(25.5)	(18)	4.7	(2.1)	1	○
6	ネ	13	Ⅱ	下呂石	30.8	9	6.2	1.4	3	—
7	ノ	13	Ⅱ 10617	下呂石	(34.1)	34.1	9.1	(9.1)	1	○
8	ハ	13	Ⅲ 13739	下呂石	62	39	12.5	23.4	1	—
9	ハ	13	Ⅲ 蔵探	下呂石	30.4	9.2	6.3	1.8	3	—

石器計測表 スクレイバー類 遺構外

No	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm		重量 (g)	分類	折損	挿図
					長さ	幅				
1	ノ	16	Ⅱ 13880	下呂石	35	54	12	25.2		
2	ノ	16	Ⅱ 13889	下呂石	56	56	14	45.5		
3	ノ	16	Ⅲ 13652	下呂石	55	48	9	27.4		
4	ノ	16	Ⅲ 13938	下呂石	107	50	19	75.9		
5	ノ	15	I 8210	黒曜石	36	25	17	4.3		
6	ノ	15	Ⅲ 12505	下呂石	81	76	19	78.5		
7	ノ	15	Ⅲ 12815	下呂石	62	35	10	20.6		
8	ノ	15	Ⅲ 13214	下呂石	57	46	13	36.1		
9	ノ	15	Ⅲ 13445	下呂石	64	30	10	17.8		
10	ハ	14	I 8574	下呂石	96	60	26	183		
11	ハ	14	Ⅲ 11279	下呂石	34	56	7	16		
12	ハ	14	Ⅲ 12209	下呂石	44	36	15	13.4		
13	ハ	14	Ⅲ 12857	下呂石	60	52	15	52.5		
14	ハ	14	Ⅲ 13293	下呂石	101	56	14	66.2		
15	ハ	14	Ⅲ 13362	下呂石	81	74	20	98.5		
16	ハ	14	Ⅲ 13373	下呂石	64	52	20	72.9		
17	ノ	13	Ⅱ 4553	下呂石	56	37	15	31.2		
18	ノ	13	Ⅱ 7441	下呂石	61	37	9	20.2		
19	ノ	13	Ⅱ 9957	下呂石	74	56	17	65.6		
20	ノ	13	Ⅱ 9962	下呂石	45	29	10	10.1		
21	ノ	13	Ⅱ 10121	下呂石	56	53	18	43.2		
22	ノ	13	Ⅱ 10150	下呂石	63	47	13	28.6		
23	ノ	13	Ⅱ 10179	下呂石	44	27	10	11.9		
24	ノ	13	Ⅲ 11583	下呂石	54	41	14	21.8		
25	ハ	13	Ⅱ 1307	下呂石	62	50	11	37.6		
26	ハ	13	Ⅱ 1725	下呂石	87	49	31	128.2		
27	ハ	13	Ⅱ 8038	下呂石	60	46	16	46.3		
28	ハ	13	Ⅱ	下呂石	71	66	16	78.2		
29	ハ	13	Ⅲ 11272	下呂石	70	46	15	42.7		
30	ハ	13	Ⅲ 13805	下呂石	44	26	9	8		
31	ノ	12	I 375	下呂石	24	18	4	1.8		
32	ノ	12	I 389	下呂石	50	32	7	9		39Ⅱ-123
33	ノ	12	I 1278	下呂石	64	27	9	15.5		
34	ノ	12	Ⅱ 2125	下呂石	46	42	7	16.6		
35	ノ	12	Ⅱ 3404	下呂石	67	33	14	26.1		
36	ノ	12	Ⅱ 3852	頁岩	58	44	9	30		39Ⅱ-124
37	ノ	12	Ⅱ 5012	下呂石	90	58	22	74.8		
38	ノ	12	Ⅱ 5403	下呂石	43	43	12	15.8		
39	ノ	12	Ⅱ 9152	下呂石	51	70	9	30.4		39Ⅱ-125
40	ノ	12	Ⅱ 10185	下呂石	86	31	16	45.3		

石器計測表 石匙

No	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm		重量 (g)	分類	折損	挿図
					長さ	幅				
1	SK	1	Ⅲ 10593	下呂石	39	50	6.6	(1.7)	構	22Ⅱ-69
2	ネ	12	I 180	チャート	36.3	(46.6)	10.2	(17)	構	38Ⅱ-116
3	ハ	12	Ⅱ 9452	下呂石	34	46	7	9.3	構	38Ⅱ-117
4	ネ	8	Ⅱ 8567	下呂石	30.2	38.9	7	6.7	構	39Ⅱ-118

石器計測表 両端石器

No	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ		重量	分類	つぶれ	挿図	
					長さ	幅					
1	S X	3	Ⅲ 82451	下呂石	31	44	17.4	2	上下左右	10Ⅱ-17	
2	S X	5	Ⅲ 11515	下呂石	38.5	40	20.7	1	上下	18Ⅱ-59	
3	S X	5	Ⅲ 12919	下呂石	27.3	39.6	8.5	9.6	2	上下	18Ⅱ-60
4	ノ	15	Ⅲ 12807	下呂石	44.3	59.5	14	36.1	2	上下	
5	ハ	13	Ⅱ	下呂石	32.5	44.5	10.2	13.6	2	上下	
6	ネ	13	I	下呂石	37.7	23.9	8.3	9.2	1	下	
7	ノ	12	I 559	下呂石	43.4	40.2	14.8	26.4	1	上下	
8	ノ	12	Ⅱ 1418	下呂石	41.2	41.5	15	31	1	上下	39Ⅱ-119
9	ノ	12	Ⅱ 5401	下呂石	25.4	29.5	5.6	5.7	2	上下	39Ⅱ-120
10	ハ	12	Ⅱ 7282	下呂石	41.5	59.5	17.9	54.6	2	上下	39Ⅱ-122
11	ハ	12	Ⅱ 9448	下呂石	26	35	6	6.8	2	上下	39Ⅱ-121
12	ノ	11	Ⅱ 3165	下呂石	51.5	41.5	23.1	72.4	1	上下	
13	ハ	11	Ⅱ 5777	下呂石	42.4	48.5	14	29.7	1	上下	
14	ハ	11	Ⅱ 4432	下呂石	62.8	71	22.5	107.2	2	上下	
15	ノ	11	Ⅲ 11016	下呂石	52.2	47.5	11.3	34.4	2	上下左右	
16	ハ	10	Ⅱ 8151	下呂石	40	49.5	10.3	20.9	2	上下左右	
17	ハ	9	Ⅱ 8297	下呂石	30.5	47	9	13.8	2	上下	
18	蔵探			下呂石	41	42	14.2	28.6	1	上下	

石器計測表 打製石斧

No	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm		重量 (g)	刃部	次橋部位	挿図
					長さ	幅				
1	SX-1	II	3574	砂岩	66.6	44.1	13.9	62	面刃	42図-144
2	SX-2	II	3616	粘板岩	59.4	45.8	13.6	64.3	片刃	12図-42
3	J-11	II	3487	粘板岩	80.3	45	15	(99.8)	面刃	42図-143

石器計測表 砥石

No	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ		重量 (g)	磨った面の数	挿図
					長さ	幅			
1	SB	I	30	砂岩	91	71	316	5	
2	SX	2	7942	砂岩	117	77	217	3	12図-43
3	SX	2	8421	砂岩	25	24	6	3	
4	SX	3	4871	泥岩	59	41	19	2	
5	SX	5	13098	砂岩	92	55	10	76	1
6	ネ	14	・	砂岩	27	20	8	5	2
7	ネ	14	・	砂岩	64	43	14	55.9	3
8	ネ	13	・	砂岩	67	45	14	72	4
9	ハ	13	II	5463	砂岩	26	24	9	6
10	ノ	12	II	4195	砂岩	50	51	6	19
11	ノ	12	II	5003	砂岩	34	35	8	11
12	ノ	12	II	5011	砂岩	25	26	8	4
13	ノ	11	II	・	砂岩	53	41	13	34
14	ノ	11	II	2751	砂岩	80	67	13	77
15	ノ	11	II	3345	砂岩	41	32	10	16
16	ノ	11	II	4449	砂岩	65	53	14.5	71.5
17	ノ	10	II	・	砂岩	44	43	10	24
18	ネ	10	II	2564	砂岩	32	38	18	33
19	表深	・	・	砂岩	49	47	18	53	3

石器計測表 磨製石斧

No	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm		重量 (g)	自然面	挿図
					長さ	幅			
1	ハ-12	II	9094	凝灰岩	88.1	41.8	15	64.5	○ 42図-140
2	ハ-9	II	8773	凝灰岩	82.5	38.5	14.2	50.3	○ 42図-141
3	ノ-8	II	9072	凝灰岩	104	46.8	10	54.4	○ 42図-142

石器計測表 凹石・磨石

No	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm		重量 (g)	凹の数	磨り面	打痕	
					長さ	幅					
1	SX-5	III	12787	砂岩	105	74	45	464.2	1	1	20図-66
2	SX-5	III	12941	砂岩	120	74	61	602.1	1	1	20図-67
3	S-8	III	12271	安山岩	51	51	36.2	170	1	1	20図-68
4	ハ-14	III	12517	濃飛流紋岩	103.5	71	46	574.2	1	1	41図-134
5	ハ-14	III	12519	濃飛流紋岩	110.5	100	42.5	741	1	1	41図-135
6	ハ-14	III	13709	濃飛流紋岩	82.5	73	54	434.4	1	1	
7	ノ-13	III	10345	濃飛流紋岩	191	94	64	1500	1	1	
8	ハ-13	III	5743	砂岩	62	99	51	508	1	1	
9	ハ-13	II	7928	凝灰岩	119	87	47	557.7	1	2	
10	ハ-13	II	11323	濃飛流紋岩	80	87	57	515.5	2	1	2
11	ノ-12	II	5010	濃飛流紋岩	151.5	76	60	1131.6	2	1	41図-136
12	ノ-12	II	4473	濃飛流紋岩	124	49	26	198.3	1	1	
13	ハ-12	II	9113	濃飛流紋岩	55	93	50	325	1	1	
14	ハ-12	II	10479	凝灰岩	110.5	86	38.5	604.9	1	1	
15	ノ-11	II	5089	砂岩	74	91	44.5	473.3	1	1	
16	ノ-11	II	8470	濃飛流紋岩	135	72	48.5	836.7	1	2	41図-138
17	ハ-11	II	4428	砂岩	92.5	66.5	37.5	372.3	1	1	
18	ハ-11	II	5771	濃飛流紋岩	137	70.5	44	637.7	1	1	40図-137
19	ハ-10	II	4002	凝灰岩	113	95.5	61	1009.6	1	1	
20	ハ-10	II	7358	砂岩	76.5	66	30	195.2	1	1	
21	ハ-10	II	8090	濃飛流紋岩	127.5	82	54	712.7	1	1	
22	ハ-10	II	8125	砂岩	69	79.5	48	370.5	1	1	
23	ハ-9	II	9024	凝灰岩	88	103	47	711.5	1	2	
24	ノ-11	II	3342	濃飛流紋岩	132	77	60	873.6	1	1	
25	ハ-10	II	8120	砂岩	158	103.5	51	1300	1	1	

石器計測表 コア

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm		重量 (g)	分類	打面	挿図		
					長さ	幅						
1	SX	2	II	3835	下呂石	53	38	16	34	A	1	
2	SX	2	II	3840	下呂石	47	35	20	26	C	1	
3	SX	2	II	4471	下呂石	47	25	16	8	A	1	
4	SX	2	II	5382	下呂石	63	50	16	44	B	1	
5	SX	2	II	5983	下呂石	58	51	177	42	B	1	
6	SX	2	II	6806	下呂石	79	40	35	96	C	1	
7	SX	2	II	6935	下呂石	40	25	17	21	C	1	
8	SX	2	II	7312	下呂石	53	55	14	36	B	1	
9	SX	2	II	7314	下呂石	54	43	35	76	C	3	
10	SX	2	II	7319	下呂石	89	50	16	88	A+B	1	
11	SX	2	II	7473	下呂石	85	62	22	99	A	1	
12	SX	2	II	7481	下呂石	55	32	16	23	A	1	
13	SX	2	II	7482	下呂石	54	37	15	27	A	1	
14	SX	2	II	7483	下呂石	61	45	14	39	A	1	
15	SX	2	II	7487	下呂石	89	43	30	99	C	1	
16	SX	2	II	7491	下呂石	79	44	15	43	A	1	
17	SX	2	II	7551	下呂石	62	35	18	30	B	2	
18	SX	2	II	8485	下呂石	100	72	33	216	C	1	19図-62
19	SX	2	III	7633	下呂石	53	46	13	26	A	1	
20	SX	2	III	7943	下呂石	53	26	22	24	B	1	
21	SX	2	III	8313	下呂石	50	41	22	40	C	1	
22	SX	2	III	10896	下呂石	81	45	21	56	B	1	
23	SX	2	III	10911	下呂石	59	28	18	14	A	1	
24	SX	2	III	11075	下呂石	54	47	24	62	C	2	
25	SX	3	I	8836	下呂石	102	58	31	136	C	1	19図-64
26	SX	3	II	4117	下呂石	83	60	26	124	C	1	
27	SX	3	II	4663	下呂石	84	68	41	214	C	1	
28	SX	3	II	4664	下呂石	65	48	12	27	C	1	
29	SX	3	II	4669	下呂石	68	58	31	111	C	1	
30	SX	3	II	4670	下呂石	61	49	18	44	A	1	
31	SX	3	II	4877	下呂石	90	48	37	140	C	1	
32	SX	3	II	4885	下呂石	92	57	35	121	C	1	
33	SX	3	II	8832	下呂石	54	37	25	41	A	1	
34	SX	3	II	9701	下呂石	59	42	24	54	B	1	
35	SX	3	II	9721	下呂石	55	53	12	21	A	1	
36	SX	3	II	9724	下呂石	78	54	21	104	A	1	
37	SX	3	II	9737	下呂石	69	58	17	36	A	1	
38	SX	3	II	9744	下呂石	59	48	19	46	A	1	
39	SX	3	II	9745	下呂石	46	38	19	40	C	1	
40	SX	3	II	9754	下呂石	91	50	16	81	A	1	
41	SX	3	II	9767	下呂石	74	35	10	17	A	1	
42	SX	3	II	9992	下呂石	56	45	15	46	A	1	
43	SX	3	III	4884	下呂石	83	38	29	79	B	1	
44	SX	3	III	5356	下呂石	81	46	12	31	B	1	
45	SX	3	III	5368	下呂石	59	47	29	75	C	1	
46	SX	3	III	8249	下呂石	63	40	30	80	C	1	
47	SX	3	III	8251	下呂石	61	26	8	11	A	1	
48	SX	3	III	8261	下呂石	56	41	20	43	C	2	
49	SX	3	III	8271	下呂石	74	66	13	64	A	1	
50	SX	3	III	8327	下呂石	55	40	12	24	B	1	
51	SX	3	III	8328	下呂石	72	44	16	55	B	1	
52	SX	3	III	8337	下呂石	88	52	17	111	B	1	
53	SX	3	III	8345	下呂石	54	31	9	19	A	1	
54	SX	3	III	8818	下呂石	67	35	20	53	B	1	
55	SX	3	III	9774	下呂石	69	51	18	54	B	2	
56	SX	3	III	10006	下呂石	87	44	22	70	B	1	
57	SX	5	I	7755	下呂石	55	33	12	21	A	1	
58	SX	5	II	7756	下呂石	71	35	10	24	A	1	
59	SX	5	III	11461	下呂石	47	31	8	12	A	1	
60	SX	5	III	11465	下呂石	80	26	27	68	C	1	
61	SX	5	III	11470	下呂石	53	33	16	17	A	1	
62	SX	5	III	11476	下呂石	66	49	22	56	A	1	
63	SX	5	III	11491	下呂石	44	38	8	16	A	1	
64	SX	5	III	11494	下呂石	52	42	16	33	A	2	
65	SX	5	III	11495	下呂石	76	32	18	33	B	1	
66	SX	5	III	11514	下呂石	43	39	16	28	A	1	
67	SX	5	III	11517	下呂石	38	37	11	14	A	1	
68	SX	5	III	11521	下呂石	63	51	17	55	A	1	
69	SX	5	III	11538	下呂石	40	34	16	27	A	1	
70	SX	5	III	11918	下呂石	33	29	26	18	C	1	
71	SX	5	III	11922	下呂石	70	49	21	54	B	1	
72	SX	5	III	11924	下呂石	56	44	16	44	A	1	
73	SX	5	III	11930-4	下呂石	51	50	37	122	C	1	
74	SX	5	III	11933	下呂石	64	48	22	64	B	1	
75	SX	5	III	11935	下呂石	50	32	14	23	A	1	
76	SX	5	III	11943	下呂石	48	48	11	31	A	1	
77	SX	5	III	12485	下呂石	55	38	18	40	A	1	
78	SX	5	III	12487	下呂石	63	38	39	70	C	1	
79	SX	5	III	12488	下呂石	74	37	38	88	C	2	
80	SX	5	III	12532	下呂石	60	40	20	47	B	1	
81	SX	5	III	12535	下呂石	64	55	20	65	B	1	
82	SX	5	III	12539	下呂石	58	21	22	58	B	2	
83	SX	5	III	12549	下呂石	91	36	27	59	C	1	
84	SX	5	III	12551	下呂石	50	35	15	26	A	1	
85	SX	5	III	12555	下呂石	71	48	20	72	B	1	
86	SX	5	III	12559	下呂石	79	37	23	56	A	1	
87	SX	5	III	12690	下呂石	61	60	19	66	A	1	
88	SX	5	III	12710	下呂石	60	45	21	55	C	1	
89	SX	5	III	12723	下呂石	111	43	41	114	C	1	
90	SX	5	III	12729	下呂石	55	46	21	67	A	1	
91	SX	5	III	12736	下呂石	80	45	13	43	A	1	
92	SX	5	III	12741	下呂石	49	32	12	23	A	1	
93	SX	5	III	12745	下呂石	53	36	21	22	B	1	
94	SX	5	III	12759	下呂石	85	71	43	300	C	1	
95	SX	5	III	12765	下呂石	53	43	15	32	A	1	
96	SX	5	III	12880	下呂石	81	37	16	35	B	1	
97	SX	5	III	12898	下呂石	67	33	22	51	C	1	
98	SX	5	III	12907	下呂石	45	44	19	26	B	1	
99	SX	5	III	12921	下呂石	71	31	11	35	A	1	
100	SX	5	III	12937	下呂石	62	45	18	38	B	1	
101	SX	5	III	12938	下呂石	63	60	20	74	A	1	

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm		重量 (g)	分類	打面	挿図		
					長さ	幅						
102	SX	5	III	12943	下呂石	55	35	7	14	A	1	
103	SX	5	III	13089	下呂石	65	48	26	75	C	1	
104	SX	5	III	13090	下呂石	59	31	14	28	A	1	
105	SX	5	III	13102	下呂石	71	45	19	50	C	1	
106	SX	5	III	13105	下呂石	50	41	24	27	B	1	
107	SX	5	III	13116	下呂石	53	45	14	32	A	1	
108	SX	5	III	13485	下呂石	88	61	27	114	C	2	19図-65
109	SX	5	III	13488	下呂石	69	43	15	33	A	1	
110	SX	5	III	13621	下呂石	53	41	16	32	A	1	
111	SX	5	III	13629	下呂石	64	39	16	26	A	1	
112	SX	7	II	8397	下呂石	56	40	32	64	C	1	
113	SX	7	II	8399	下呂石	78	72	28	123	C	1	
114	SX	7	II	8405	下呂石	69	47	18	36	A	1	
115	SX	7	III	11638	下呂石	47	41	12	26	A	1	
116	SX	8	II	8411	下呂石	69	45	27	77	C	1	
117	SS	7	III	12279	下呂石	82	57	21	80	B	1	
118	SS	7	III	12280	下呂石	63	54	28	90	C	1	
119	SS	7	III	12282	下呂石	72	53	11	42	A	1	
120	SS	8	III	12263	下呂石	53	42	38	70	C	1	
121	SS	8	III	12264	下呂石	68	49	17	49	A	1	
122	SS	8	III	12266	下呂石	53	47	23	44	C	1	
123	SS	8	III	12267	下呂石	56	26	18	30	A	1	
124	SS	8	III	12268	下呂石	80	49	33	134	C	1	
125	SS	8	III	12274	下呂石	76	53	24	65	A	1	
126	SS	8	III	12275	下呂石	68	60	27	80	C	1	
127	SK	1	III	10514	下呂石	59	44	47	141	C	1	
128	SK	1	III	10515	下呂石	62	58	44	110	C	1	
129	PG	1	II	10290	下呂石	64	52	23	52	C	1	
130	PG	1	II	10292	下呂石	71	45	12	37	A	1	
131	PG	1	III	13282	下呂石	69	42	13	37	B	1	
132</												

石器計測表 コア

No	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm			重量 (g)	分類	打面	挿 図
					長さ	幅	厚み				
203	ハ 14	Ⅲ	13054	下呂石	70	55	36	111	C	1	
204	ハ 14	Ⅲ	13055	下呂石	81	68	19	99	A	1	
205	ハ 14	Ⅲ	13061	下呂石	78	50	26	106	C	1	
206	ハ 14	Ⅲ	13068	下呂石	63	42	41	89	C	1	
207	ハ 14	Ⅲ	13078	下呂石	73	62	41	175	C	1	
208	ハ 14	Ⅲ	13224	下呂石	71	69	31	119	C	1	
209	ハ 14	Ⅲ	13228	下呂石	69	55	28	81	A	1	
210	ハ 14	Ⅲ	13232	下呂石	80	54	43	164	C	2	
211	ハ 14	Ⅲ	13254	下呂石	84	65	29	125	C	1	
212	ハ 14	Ⅲ	13255	下呂石	86	56	37	134	C	1	
213	ハ 14	Ⅲ	13256	下呂石	74	42	24	73	B	1	
214	ハ 14	Ⅲ	13257	下呂石	73	65	21	87	B	1	
215	ハ 14	Ⅲ	13272	下呂石	85	55	30	113	C	1	
216	ハ 14	Ⅲ	13306	下呂石	82	74	62	404	C	1	
217	ハ 14	Ⅲ	13309	下呂石	77	58	27	115	B	1	
218	ハ 14	Ⅲ	13355	下呂石	42	37	15	28	A	1	
219	ハ 14	Ⅲ	13372	下呂石	57	51	29	87	C	1	
220	ハ 14	Ⅲ	13375	下呂石	54	55	14	37	A	1	
221	ハ 14	Ⅲ	13397	下呂石	126	41	39	145	C	1	
222	ハ 14	Ⅲ	13579	下呂石	72	64	34	119	C	1	
223	ハ 14	Ⅲ	13696	下呂石	77	71	56	184	C	1	
224	ハ 14	Ⅲ	13700	下呂石	90	68	33	168	C	1	
225	ハ 14	Ⅲ	13846	下呂石	74	70	51	260	C	1	
226	ハ 14	Ⅲ	13847	下呂石	88	70	26	239	C	1	
227	ハ 14	Ⅲ	13851	下呂石	72	34	14	31	A	1	
228	ハ 14	Ⅲ	13852	下呂石	80	54	47	186	C	1	
229	ハ 14	Ⅲ	13922	下呂石	78	54	26	107	A	1	
230	ハ 13	I	508	下呂石	82	65	14	73	A	1	
231	ハ 13	I	834	下呂石	70	52	38	140	C	1	
232	ハ 13	I	841	下呂石	68	45	36	97	C	1	
233	ハ 13	I	920	下呂石	86	70	32	206	C	1	
234	ハ 13	Ⅱ	937	下呂石	50	43	31	44	A	1	
235	ハ 13	Ⅱ	1735	下呂石	98	49	23	69	A	1	
236	ハ 13	Ⅱ	1752	下呂石	58	41	31	43	B	1	
237	ハ 13	Ⅱ	4243	下呂石	72	55	22	71	A	1	
238	ハ 13	Ⅱ	4244	下呂石	53	49	20	48	A	1	
239	ハ 13	Ⅱ	4541	下呂石	77	60	43	172	C	1	
240	ハ 13	Ⅱ	4547	下呂石	82	63	35	162	C	1	
241	ハ 13	Ⅱ	4551	下呂石	75	64	43	203	C	1	
242	ハ 13	Ⅱ	4557	下呂石	78	39	16	36	A	1	
243	ハ 13	Ⅱ	5032	下呂石	93	56	18	72	A	1	
244	ハ 13	Ⅱ	5035	下呂石	50	48	28	78	C	1	
245	ハ 13	Ⅱ	5047	下呂石	89	48	30	73	C	1	
246	ハ 13	Ⅱ	5052	下呂石	74	50	32	80	C	1	
247	ハ 13	Ⅱ	5417	下呂石	50	42	13	30	A	1	
248	ハ 13	Ⅱ	5419	下呂石	82	55	26	97	C	1	
249	ハ 13	Ⅱ	5420	下呂石	67	48	21	60	A	1	
250	ハ 13	Ⅱ	5432	下呂石	75	38	20	53	A	1	
251	ハ 13	Ⅱ	5439	下呂石	88	32	22	42	B	2	
252	ハ 13	Ⅱ	5509	下呂石	89	44	20	61	B	1	
253	ハ 13	Ⅱ	5762	下呂石	60	58	31	89	B	1	
254	ハ 13	Ⅱ	7299	下呂石	79	45	24	56	A	1	
255	ハ 13	Ⅱ	7305	下呂石	76	65	30	190	C	1	
256	ハ 13	Ⅱ	7306	下呂石	62	53	34	95	C	2	
257	ハ 13	Ⅱ	7310	下呂石	60	52	41	116	C	1	
258	ハ 13	Ⅱ	7442	下呂石	57	46	39	68	C	1	
259	ハ 13	Ⅱ	9377	下呂石	78	47	27	82	A	1	
260	ハ 13	Ⅱ	9387	下呂石	65	41	20	41	A	1	
261	ハ 13	Ⅱ	9389	下呂石	66	56	25	78	C	1	
262	ハ 13	Ⅱ	9394	下呂石	82	70	30	131	B	2	
263	ハ 13	Ⅱ	9409	下呂石	61	56	39	92	C	1	
264	ハ 13	Ⅱ	9416	下呂石	70	62	56	285	C	3	
265	ハ 13	Ⅱ	9418	下呂石	80	57	38	146	C	1	
266	ハ 13	Ⅱ	9420	下呂石	76	62	23	64	A	2	
267	ハ 13	Ⅱ	9530	下呂石	93	74	54	318	C	1	
268	ハ 13	Ⅱ	9543	下呂石	72	63	49	215	C	3	
269	ハ 13	Ⅱ	9545	下呂石	80	33	38	102	C	1	
270	ハ 13	Ⅱ	10112	下呂石	64	57	26	92	B	1	
271	ハ 13	Ⅱ	10123	下呂石	68	42	40	104	C	1	
272	ハ 13	Ⅱ	10153	下呂石	76	57	51	259	C	1	
273	ハ 13	Ⅱ	10156	下呂石	48	45	43	92	C	1	
274	ハ 13	Ⅱ	10157	下呂石	81	51	51	216	C	1	
275	ハ 13	Ⅱ	10160	下呂石	97	45	21	111	C	1	
276	ハ 13	Ⅱ	10171	下呂石	65	55	21	85	A	1	
277	ハ 13	Ⅱ	10175	下呂石	60	52	30	89	C	1	
278	ハ 13	Ⅱ	10400	下呂石	71	43	11	41	A	1	
279	ハ 13	Ⅲ	10319	下呂石	73	68	32	96	C	1	
280	ハ 13	Ⅲ	10327	下呂石	89	43	38	102	C	2	
281	ハ 13	Ⅲ	10344	下呂石	91	31	33	59	B	1	
282	ハ 13	Ⅲ	10348-1	下呂石	97	82	39	258	C	1	
283	ハ 13	Ⅲ	10352	下呂石	53	33	27	50	C	1	
284	ハ 13	Ⅲ	10356	下呂石	80	52	25	83	C	1	
285	ハ 13	Ⅲ	10545	下呂石	57	53	14	40	A	1	
286	ハ 13	Ⅲ	10663	下呂石	71	70	43	171	C	1	
287	ハ 13	Ⅲ	10724	下呂石	78	56	13	48	A	1	
288	ハ 13	Ⅲ	10746	下呂石	68	58	40	157	C	1	
289	ハ 13	Ⅲ	10814	下呂石	46	45	29	51	A-B	1	
290	ハ 13	Ⅲ	10818	下呂石	75	55	21	70	A	1	
291	ハ 13	Ⅲ	10819	下呂石	71	38	20	39	A	1	
292	ハ 13	Ⅲ	10840	下呂石	56	45	28	85	C	2	
293	ハ 13	Ⅲ	10868	下呂石	61	49	36	84	C	1	
294	ハ 13	Ⅲ	11120	下呂石	85	47	26	104	B	2	
295	ハ 13	Ⅲ	11129	下呂石	55	53	26	63	B	1	
296	ハ 13	Ⅲ	11289	下呂石	60	48	21	62	B	1	
297	ハ 13	Ⅲ	11291	下呂石	71	35	24	53	B	1	
298	ハ 13	Ⅲ	11297	下呂石	56	36	14	31	A	1	
299	ハ 13	Ⅲ	11298	下呂石	58	50	30	83	C	1	
300	ハ 13	Ⅲ	11569	下呂石	75	56	16	83	A	1	
301	ハ 13	Ⅲ	11602	下呂石	50	45	32	82	C	1	
302	ハ 13	Ⅲ	12149	下呂石	71	50	18	50	A	1	
303	ハ 13	Ⅲ	12701	下呂石	64	55	14	43	A	1	

No	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm			重量 (g)	分類	打面	挿 図
					長さ	幅	厚み				
304	ハ 13	Ⅱ	1295	下呂石	73	48	21	78	C	1	
305	ハ 13	Ⅱ	2790	下呂石	75	47	34	99	B	1	
306	ハ 13	Ⅱ	2792	下呂石	68	54	31	99	C	1	
307	ハ 13	Ⅱ	3717	下呂石	74	57	13	66	A	1	
308	ハ 13	Ⅱ	3718	下呂石	46	36	23	38	C	1	
309	ハ 13	Ⅱ	3925	下呂石	81	61	41	142	C	2	
310	ハ 13	Ⅱ	4238	下呂石	53	44	17	28	A	1	
311	ハ 13	Ⅱ	4241	下呂石	49	38	15	27	A	1	
312	ハ 13	Ⅱ	4558	下呂石	74	31	24	36	B	1	
313	ハ 13	Ⅱ	4568	下呂石	62	56	22	73	A	1	
314	ハ 13	Ⅱ	5045	下呂石	41	36	11	20	A	1	
315	ハ 13	Ⅱ	5053	下呂石	58	41	13	26	A	1	
316	ハ 13	Ⅱ	5424	下呂石	54	40	27	43	C	1	
317	ハ 13	Ⅱ	5429	下呂石	72	59	18	60	A	1	
318	ハ 13	Ⅱ	5437	下呂石	65	42	17	43	A	1	
319	ハ 13	Ⅱ	5472	下呂石	104	51	31	121	B	1	
320	ハ 13	Ⅱ	5474	下呂石	58	56	22	66	A	1	
321	ハ 13	Ⅱ	5497	下呂石	64	52	17	48	A	1	
322	ハ 13	Ⅱ	5515	下呂石	63	46	25	62	C	2	
323	ハ 13	Ⅱ	5710	下呂石	78	46	30	107	C	1	
324	ハ 13	Ⅱ	6006	下呂石	65	58	18	41	A	1	
325	ハ 13	Ⅱ	6020	下呂石	77	34	25	46	A	1	
326	ハ 13	Ⅱ	6028	下呂石	66	40	28	71	C	1	
327	ハ 13	Ⅱ	6034	下呂石	61	34	22	33	C	1	
328	ハ 13	Ⅱ	6049	下呂石	61	41	36	118	C	1	
329	ハ 13	Ⅱ	7297	下呂石	66	50	32	94	C	1	
330	ハ 13	Ⅱ	7308	下呂石	63	45	26	62	C	1	
331	ハ 13	Ⅱ	7401	下呂石	61	49	15	35	A	1	
332	ハ 13	Ⅱ	7429	下呂石	60	31	27	48	C	1	
333	ハ 13	Ⅱ	7683	下呂石	64	53	38	119	C	1	
334	ハ 13	Ⅱ	7696	下呂石	79	51	17	60	A	1	
335	ハ 13	Ⅱ	7697	下呂石	59	55	28				

石器計測表 コア

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm			重量 (g)	分類	打面	挿 図
					長さ	幅	厚み				
405	ネ 12	II	2839	下呂石	53	41	15	28	B	1	
406	ネ 12	II	2845	下呂石	60	35	20	33	A	1	
407	ネ 12	II	2848	下呂石	63	46	12	30	A	1	
408	ネ 12	II	2850	下呂石	38	37	10	17	A	1	
409	ネ 12	II	9884	下呂石	67	26	13	23	A	1	
410	ネ 12	II	9891	下呂石	58	32	21	49	A	1	
411	ネ 12	II	9892	下呂石	63	48	34	111	C	1	
412	ネ 12	II	9899	下呂石	77	38	15	36	A	1	
413	ハ 12	I	298	下呂石	59	49	27	55	B	1	
414	ハ 12	I	327	下呂石	67	49	22	64	A	1	
415	ハ 12	I	331	下呂石	79	54	42	167	C	1	
416	ハ 12	I	391	下呂石	57	45	27	71	C	1	
417	ハ 12	I	401	下呂石	83	70	52	371	C	1	
418	ハ 12	I	406	下呂石	67	35	24	58	A	1	
419	ハ 12	I	434	下呂石	100	49	27	126	A	1	
420	ハ 12	I	450	下呂石	97	55	25	109	A	1	
421	ハ 12	I	555	下呂石	89	44	32	88	A	1	
422	ハ 12	I	952	下呂石	82	52	34	107	C	1	
423	ハ 12	I	957	下呂石	62	52	22	58	A	1	
424	ハ 12	I	964	下呂石	60	43	14	41	A	1	
425	ハ 12	I	1252	下呂石	67	50	32	97	C	1	
426	ハ 12	I	1254	下呂石	63	62	22	92	A	1	
427	ハ 12	I	1270	下呂石	83	48	22	78	A	1	
428	ハ 12	I	1330	下呂石	98	40	26	71	B	1	
429	ハ 12	I	2104	下呂石	51	45	20	47	A	1	
430	ハ 12	I	2108	下呂石	56	45	22	51	B	1	
431	ハ 12	II	1780	下呂石	60	49	21	63	A	1	
432	ハ 12	II	2049	下呂石	98	43	23	88	A	1	
433	ハ 12	II	2225	下呂石	83	61	23	108	C	1	
434	ハ 12	II	3400	下呂石	63	45	22	61	A	1	
435	ハ 12	II	3407	下呂石	67	40	43	96	C	1	
436	ハ 12	II	3561	下呂石	75	60	19	69	B	1	
437	ハ 12	II	3858	下呂石	48	34	21	35	A	1	
438	ハ 12	II	3933	下呂石	84	59	37	143	C	1	
439	ハ 12	II	4977	下呂石	51	44	24	63	A	1	
440	ハ 12	II	5000	下呂石	50	50	20	44	A	1	
441	ハ 12	II	5077	下呂石	54	38	33	81	C	1	
442	ハ 12	II	5078	下呂石	83	74	34	209	C	1	
443	ハ 12	II	5409	下呂石	69	55	21	54	A	1	
444	ハ 12	II	5451	下呂石	90	66	31	142	A	1	
445	ハ 12	II	5680	下呂石	42	42	25	45	C	1	
446	ハ 12	II	5758	下呂石	53	53	40	89	C	1	
447	ハ 12	II	5759	下呂石	65	45	19	42	B	1	
448	ハ 12	II	6056	下呂石	50	39	18	31	B	1	
449	ハ 12	II	6779	下呂石	90	56	31	117	C	1	
450	ハ 12	II	6780	下呂石	50	49	32	60	C	1	
451	ハ 12	II	7646	下呂石	45	45	17	31	A	1	
452	ハ 12	II	7894	下呂石	63	51	27	80	C	1	
453	ハ 12	II	7941	下呂石	80	45	39	151	A	1	
454	ハ 12	III	11386	下呂石	53	47	31	82	C	1	
455	ハ 12	III	14025	下呂石	53	44	10	22	A	1	
456	ハ 12	II	3887	下呂石	55	52	28	91	C	2	
457	ハ 12	II	4518	下呂石	55	32	28	44	A	1	
458	ハ 12	II	4521	下呂石	92	45	35	144	C	1	
459	ハ 12	II	4523	下呂石	75	59	28	110	C	1	
460	ハ 12	II	4524	下呂石	60	32	22	40	A	1	
461	ハ 12	II	4528	下呂石	92	60	13	90	A	1	
462	ハ 12	II	4532	下呂石	88	51	36	162	C	1	
463	ハ 12	II	4538	下呂石	80	80	39	301	C	1	
464	ハ 12	II	5444	下呂石	89	57	41	212	C	2	
465	ハ 12	II	5503	下呂石	60	60	31	140	C	1	
466	ハ 12	II	5504	下呂石	83	69	46	250	C	1	
467	ハ 12	II	5506	下呂石	85	69	56	345	C	1	
468	ハ 12	II	5689	下呂石	67	60	37	129	C	1	
469	ハ 12	II	5694	下呂石	58	43	31	49	C	1	
470	ハ 12	II	5749	下呂石	56	51	30	81	A	1	
471	ハ 12	II	5750	下呂石	62	47	15	40	A	1	
472	ハ 12	II	5751	下呂石	59	49	31	84	C	1	40図-132
473	ハ 12	II	5891	下呂石	59	55	27	67	C	1	
474	ハ 12	II	5893	下呂石	57	52	39	114	C	1	
475	ハ 12	II	6482	下呂石	74	45	29	53	B	1	
476	ハ 12	II	6492	下呂石	83	42	28	79	C	1	
477	ハ 12	II	6495	下呂石	56	48	13	34	A	1	
478	ハ 12	II	6496	下呂石	54	51	31	77	C	2	
479	ハ 12	II	6505	下呂石	89	50	42	138	C	1	
480	ハ 12	II	6906	下呂石	82	51	40	135	C	2	
481	ハ 12	II	6907	下呂石	70	64	52	144	C	1	
482	ハ 12	II	6915	下呂石	63	46	31	92	A	1	
483	ハ 12	II	7274	下呂石	74	60	31	98	C	1	
484	ハ 12	II	7383	下呂石	50	43	21	44	A	1	
485	ハ 12	II	7384	下呂石	53	42	51	120	C	1	
486	ハ 12	II	7390	下呂石	44	39	42	86	C	1	
487	ハ 12	II	7395	下呂石	64	54	35	117	C	1	
488	ハ 12	II	7396	下呂石	65	63	24	92	A	1	
489	ハ 12	II	7399	下呂石	47	45	37	87	C	1	
490	ハ 12	II	7450	下呂石	60	37	23	42	B	1	
491	ハ 12	II	7454	下呂石	62	46	24	54	A	1	
492	ハ 12	II	7462	下呂石	73	57	33	80	C	1	
493	ハ 12	II	8045	下呂石	47	42	16	37	C	1	
494	ハ 12	II	8058	下呂石	61	38	35	78	C	1	
495	ハ 12	II	8962	下呂石	83	74	27	104	C	1	
496	ハ 12	II	8963	下呂石	93	58	50	228	C	1	
497	ハ 12	II	9089	下呂石	68	45	50	167	C	1	
498	ハ 12	II	9090	下呂石	70	42	35	110	C	1	
499	ハ 12	II	9099	下呂石	112	49	38	197	C	1	
500	ハ 12	II	9100	下呂石	69	53	36	66	A	1	
501	ハ 12	II	9119	下呂石	82	55	29	123	C	1	
502	ハ 12	II	9124	下呂石	90	48	32	106	C	1	
503	ハ 12	II	9157	下呂石	63	44	38	74	C	1	
504	ハ 12	II	9165	下呂石	70	69	35	161	C	1	
505	ハ 12	II	9171	下呂石	72	50	41	153	C	1	

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm			重量 (g)	分類	打面	挿 図
					長さ	幅	厚み				
506	ハ 12	II	9172	下呂石	68	51	57	226	C	1	
507	ハ 12	II	9174	下呂石	71	63	23	89	A	1	
508	ハ 12	II	9218	下呂石	79	71	42	216	C	1	
509	ハ 12	II	9220	下呂石	92	53	39	165	C	1	
510	ハ 12	II	9229	下呂石	60	48	26	76	C	1	
511	ハ 12	II	9235	下呂石	77	60	42	141	C	1	
512	ハ 12	II	9239	下呂石	76	48	32	103	C	1	
513	ハ 12	II	9240	下呂石	100	41	21	70	A	1	
514	ハ 12	II	9263	下呂石	50	44	26	36	A	1	
515	ハ 12	II	9467	下呂石	46	39	38	78	C	1	
516	ハ 12	III	9661	下呂石	83	81	42	223	C	1	
517	ハ 12	III	9674	下呂石	68	54	48	202	C	1	
518	ハ 12	III	9683	下呂石	60	49	42	170	C	1	
519	ハ 12	III	9686	下呂石	93	44	38	136	C	1	
520	ハ 12	III	9693	下呂石	71	43	22	49	A	1	
521	ハ 12	III	9837	下呂石	45	43	33	57	C	1	
522	ハ 12	III	9846	下呂石	65	49	28	94	C	1	
523	ハ 12	III	9848	下呂石	60	52	18	44	B	1	
524	ハ 12	III	9849	下呂石	66	55	24	82	A	1	
525	ハ 12	III	9851	下呂石	78	57	37	109	C	1	
526	ハ 12	III	10190	下呂石	80	33	18	46	A	1	
527	ハ 12	III	10201	下呂石	76	47	29	89	C	1	
528	ハ 12	III	10204	下呂石	86	38	41	148	C	1	
529	ハ 12	III	11383	下呂石	71	57	46	166	C	1	
530	ハ 12	III	11385	下呂石	67	44	30	80	A	1	
531	ハ 12	III	11388	下呂石	61	44	41	150	C	2	
532	ハ 12	III	11405	下呂石	51	52	39	98	C	1	
533	ハ 12	III	11412	下呂石	85	63	37	156	C	1	
534	ハ 12	III	11413	下呂石	67	43	43	133	C	1	
535	ハ 12	III	11419	下呂石	77	65	30	124	A	1	
536	ハ 12	III	11420	下呂石	74	61	43	160	C	1	
537	ハ 12	III	11873	下呂石	50	37	17	29	A	1	
538	ハ 12	III	11885	下呂石	100	69	35	222	A+B	1	
539	ハ 12	III	11892	下呂石	78	44	17	55</			

石器計測表 コア

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm			重量 (g)	分類	打面	挿 図	
					長さ	幅	厚み					
607	ハ	11	II	4463	下呂石	72	64	25	93	B	1	
608	ハ	11	II	4781	下呂石	62	58	19	63	B	1	
609	ハ	11	II	4800	下呂石	71	50	41	156	C	3	
610	ハ	11	II	4968	下呂石	57	34	37	78	C	1	
611	ハ	11	II	4974	下呂石	93	52	33	185	C	1	
612	ハ	11	II	5670	下呂石	53	40	27	55	A	1	
613	ハ	11	II	5671	下呂石	64	64	24	67	B	1	
614	ハ	11	II	6525	下呂石	62	44	27	41	C	1	
615	ハ	11	II	8467	下呂石	83	54	26	68	A	1	40図-131
616	ハ	11	III	13428	下呂石	48	47	33	94	C	1	
617	ハ	11	II	2319	下呂石	68	60	37	109	C	1	
618	ハ	11	II	2493	下呂石	64	44	20	55	A	1	
619	ハ	11	II	2716	下呂石	52	50	26	48	B	1	
620	ハ	11	II	3129	下呂石	96	72	31	125	C	1	
621	ハ	11	II	3131	下呂石	72	53	28	87	B	1	
622	ハ	11	II	3945	下呂石	65	35	19	33	B	1	
623	ハ	11	II	3961	下呂石	88	64	35	159	C	1	
624	ハ	11	II	3981	下呂石	65	48	26	84	B	1	
625	ハ	11	II	4148	下呂石	70	53	19	63	B	1	
626	ハ	11	II	4158	下呂石	53	43	20	32	B	1	
627	ハ	11	II	4343	下呂石	153	91	30	378	B	3	
628	ハ	11	II	4345	下呂石	69	46	40	130	C	2	
629	ハ	11	II	4408	下呂石	80	40	20	47	B	2	
630	ハ	11	II	4414	下呂石	51	44	26	49	B	2	
631	ハ	11	II	4425	下呂石	72	53	26	62	B	1	
632	ハ	11	II	4427	下呂石	64	59	42	179	C	1	
633	ハ	11	II	4433	下呂石	79	67	39	236	C	1	
634	ハ	11	II	4442	下呂石	54	37	16	34	A	1	
635	ハ	11	II	4768	下呂石	83	59	27	91	B	1	
636	ハ	11	II	4769	下呂石	68	40	14	31	B	1	
637	ハ	11	II	4772	下呂石	65	60	25	70	B	1	
638	ハ	11	II	4773	下呂石	56	56	22	66	A	1	
639	ハ	11	II	4774	下呂石	59	26	22	24	B	1	
640	ハ	11	II	4779	下呂石	50	50	18	48	A	1	
641	ハ	11	II	4795	下呂石	60	43	18	42	A	1	
642	ハ	11	II	5181	下呂石	63	40	21	57	A	1	
643	ハ	11	II	5196	下呂石	62	55	26	62	B	1	
644	ハ	11	II	5277	下呂石	55	44	21	43	B	1	
645	ハ	11	II	5646	下呂石	75	42	28	72	B	1	
646	ハ	11	II	5659	下呂石	69	34	26	53	B	2	
647	ハ	11	II	5772	下呂石	50	45	22	48	A	1	
648	ハ	11	II	5779	下呂石	70	49	22	67	A	1	
649	ハ	11	II	5780	下呂石	60	42	43	96	C	1	
650	ハ	11	II	5781	下呂石	41	40	20	27	B	1	
651	ハ	11	II	5795	下呂石	70	46	11	42	A	1	
652	ハ	11	II	5944	下呂石	56	33	10	18	B	1	
653	ハ	11	II	6531	下呂石	80	56	46	214	C	1	
654	ハ	11	II	6543	下呂石	72	42	37	142	C	1	
655	ハ	11	II	6544	下呂石	74	38	32	48	B	1	
656	ハ	11	II	6546	下呂石	79	28	10	21	A	1	
657	ハ	11	II	9137	下呂石	48	47	36	91	C	1	
658	ハ	11	II	9144	下呂石	60	44	15	35	B	1	
659	ハ	11	II	9626	下呂石	47	29	21	19	A	1	
660	ハ	11	III	9619	下呂石	52	61	32	108	C	3	
661	ハ	11	III	9622	下呂石	56	48	15	35	B	1	
662	ハ	11	III	9623	下呂石	62	42	27	77	A	1	
663	ハ	11	III	10229	下呂石	64	45	33	72	C	1	
664	ハ	11	III	10232	下呂石	61	66	37	140	C	2	
665	ハ	11	III	10235	下呂石	62	48	12	32	A	1	
666	ハ	11	III	10237	下呂石	61	55	13	50	A	1	
667	ハ	11	III	10243	下呂石	70	55	37	130	C	1	
668	ハ	11	III	10246	下呂石	66	55	34	87	C	1	
669	ハ	11	III	10248	下呂石	83	61	23	86	B	1	
670	ハ	11	III	10251	下呂石	66	56	25	96	A	1	
671	ハ	11	III	10255	下呂石	90	45	20	69	A	1	
672	ネ	10	I	19-1	下呂石	46	38	20	34	B	1	
673	ネ	10	I	40	下呂石	71	49	19	59	A	1	
674	ネ	10	I	1158	下呂石	69	41	39	65	C	1	
675	ネ	10	I	1194	下呂石	64	48	33	86	C	1	
676	ネ	10	I	1198	下呂石	71	40	38	86	C	1	
677	ネ	10	I	1204	下呂石	50	33	13	24	A	1	
678	ネ	10	I	1223	下呂石	53	37	28	58	C	1	
679	ネ	10	I	1579	下呂石	57	36	25	48	A	1	
680	ネ	10	II	12	下呂石	95	33	23	67	B	1	
681	ネ	10	II	1558	下呂石	55	35	29	34	B	1	
682	ネ	10	II	1570	下呂石	67	54	35	140	C	1	
683	ネ	10	II	1587	下呂石	91	35	17	42	B	1	
684	ネ	10	II	1606-1	下呂石	70	55	15	51	A	1	
685	ネ	10	II	1616	下呂石	84	57	20	63	B	1	
686	ネ	10	II	1969	下呂石	50	28	15	20	A	1	
687	ネ	10	II	2202-1	下呂石	64	48	30	91	C	2	
688	ネ	10	II	2206	下呂石	50	50	14	28	A	1	
689	ネ	10	II	2207	下呂石	68	55	18	64	B	1	
690	ネ	10	II	2347	下呂石	73	43	26	58	C	1	
691	ネ	10	II	2591	下呂石	77	48	23	98	B	1	
692	ネ	10	II	2926	下呂石	83	51	16	48	B	1	
693	ネ	10	III	2908	下呂石	64	50	21	52	A	1	
694	ハ	10	I	54	下呂石	68	50	38	98	C	1	
695	ハ	10	I	1110	下呂石	53	32	25	40	B	1	
696	ハ	10	I	1113-1	下呂石	48	35	10	20	A	1	
697	ハ	10	I	1113-2	下呂石	54	50	22	49	A	1	
698	ハ	10	I	1115	下呂石	43	23	13	16	A	1	
699	ハ	10	I	1121	下呂石	78	55	22	78	B	1	
700	ハ	10	I	1136	下呂石	60	43	25	51	C	1	
701	ハ	10	I	1360	下呂石	54	45	22	53	B	1	
702	ハ	10	I	1362	下呂石	88	57	43	197	C	1	
703	ハ	10	I	1363	下呂石	70	30	25	50	B	1	
704	ハ	10	I	1367	下呂石	44	39	8	16	A	1	
705	ハ	10	I	1379	下呂石	44	28	14	17	B	1	
706	ハ	10	I	1385	下呂石	41	33	37	38	C	1	
707	ハ	10	I	1386	下呂石	48	55	13	23	A	1	

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm			重量 (g)	分類	打面	挿 図	
					長さ	幅	厚み					
708	ハ	10	I	1655	下呂石	40	30	17	17	B	1	
709	ハ	10	I	1658	下呂石	82	28	16	29	B	1	
710	ハ	10	I	2287	下呂石	49	22	23	19	B	1	
711	ハ	10	I	3325	下呂石	43	38	8	12	A	1	
712	ハ	10	I	4697	下呂石	52	42	30	51	C	1	
713	ハ	10	I	4698	下呂石	83	48	32	107	C	1	
714	ハ	10	I	4704	下呂石	45	41	13	22	A	1	
715	ハ	10	I	4945	下呂石	59	42	19	30	B	1	
716	ハ	10	I	5227	下呂石	40	37	27	37	C	1	
717	ハ	10	I	5233	下呂石	53	31	16	19	B	1	
718	ハ	10	I	5537	下呂石	66	52	28	62	C	1	
719	ハ	10	I	5857	下呂石	60	39	41	104	C	1	
720	ハ	10	I	5867	下呂石	64	42	23	42	B	1	
721	ハ	10	I	5869	下呂石	75	38	24	68	A	1	
722	ハ	10	II	1638	下呂石	70	56	37	142	C	1	
723	ハ	10	II	1639	下呂石	52	57	18	43	B	1	
724	ハ	10	II	1644	下呂石	60	40	8	21	A	1	
725	ハ	10	II	1645	下呂石	67	49	22	55	B	1	
726	ハ	10	II	1646	下呂石	49	45	17	45	A	1	
727	ハ	10	II	1946	下呂石	93	51	36	195	C	1	
728	ハ	10	II	2378	下呂石	75	50	24	81	C	1	
729	ハ	10	II	2386	下呂石	52	47	14	27	A	1	
730	ハ	10	II	2469	下呂石	58	36	19	39	B	1	
731	ハ	10	II	2479	下呂石	63	41	19	54	A	1	
732	ハ	10	II	2481	下呂石	68	54	18	53	B	1	
733	ハ	10	II	2483	下呂石	77	62	35	150	C	1	
734	ハ	10	II	2522	下呂石	61	27	14	23	B	1	
735	ハ	10	II	2526	下呂石	68	46	23	67	B	1	
736	ハ	10	II	2533								

石器計測表 コア

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm			重量 (g)	分類	打面	挿 図	
					長さ	幅	厚み					
809	ハ	10	Ⅱ	6557	下呂石	57	51	37	114	C	1	
810	ハ	10	Ⅱ	6558	下呂石	50	44	27	53	C	1	
811	ハ	10	Ⅱ	6579	下呂石	44	31	20	27	B	1	
812	ハ	10	Ⅱ	6609	下呂石	54	40	24	40	C	1	
813	ハ	10	Ⅱ	6611	下呂石	37	25	20	17	C	1	
814	ハ	10	Ⅱ	6658	下呂石	67	42	30	77	C	1	
815	ハ	10	Ⅱ	7347	下呂石	45	40	16	29	A	1	
816	ハ	10	Ⅱ	7497	下呂石	63	60	44	104	C	1	
817	ハ	10	Ⅱ	7503	下呂石	80	59	21	75	A	1	
818	ハ	10	Ⅱ	7527	下呂石	47	39	18	30	A	1	
819	ハ	10	Ⅱ	7533	下呂石	55	57	32	80	C	1	
820	ハ	10	Ⅱ	7537	下呂石	39	37	24	39	C	1	
821	ハ	10	Ⅱ	7546	下呂石	72	50	18	49	A	1	
822	ハ	10	Ⅱ	7571	下呂石	62	47	13	45	A	1	
823	ハ	10	Ⅱ	7573	下呂石	64	41	26	46	B	1	
824	ハ	10	Ⅱ	7576	下呂石	63	55	34	75	C	1	
825	ハ	10	Ⅱ	7589	下呂石	60	35	27	56	A	1	
826	ハ	10	Ⅱ	7590	下呂石	57	38	12	30	A	1	
827	ハ	10	Ⅱ	7967	下呂石	45	30	18	21	A	1	
828	ハ	10	Ⅱ	7969	下呂石	61	42	21	41	B	1	
829	ハ	10	Ⅱ	7977	下呂石	67	44	12	39	A	1	
830	ハ	10	Ⅱ	7983	下呂石	64	53	32	103	C	1	
831	ハ	10	Ⅱ	8118	下呂石	66	39	14	27	A	1	
832	ハ	10	Ⅱ	8122	下呂石	91	65	18	103	A	1	
833	ハ	10	Ⅱ	8123	下呂石	53	49	24	38	A	1	
834	ハ	10	Ⅱ	8127	下呂石	68	44	30	73	B	1	
835	ハ	10	Ⅱ	8137	下呂石	72	52	31	114	C	1	
836	ハ	10	Ⅱ	8144	下呂石	70	50	27	57	A	1	
837	ハ	10	Ⅱ	8163	下呂石	72	59	34	142	C	1	
838	ハ	10	Ⅱ	8278	下呂石	55	49	30	73	C	1	
839	ハ	10	Ⅱ	8369	下呂石	68	46	44	147	C	1	
840	ハ	10	Ⅱ	8372	下呂石	64	48	22	58	B	2	
841	ハ	10	Ⅱ	8374	下呂石	59	66	20	61	A	1	
842	ハ	10	Ⅱ	8386	下呂石	56	56	24	77	C	1	
843	ハ	10	Ⅱ	8390	下呂石	69	59	34	104	C	1	
844	ハ	10	Ⅱ	8430	下呂石	68	51	35	160	C	1	
845	ハ	10	Ⅱ	8431	下呂石	35	34	27	38	C	1	
846	ハ	10	Ⅱ	8436	下呂石	69	51	34	125	C	1	
847	ハ	10	Ⅱ	8443	下呂石	72	65	41	216	C	1	
848	ハ	10	Ⅱ	8448	下呂石	73	75	30	138	C	4	
849	ハ	10	Ⅱ	8449	下呂石	68	61	19	70	A	2	
850	ハ	10	Ⅱ	11063	下呂石	74	52	29	103	C	1	
851	ハ	10	Ⅲ	13156	下呂石	64	59	21	67	A	1	
852	ハ	10	Ⅲ	13157	下呂石	72	35	21	42	A	1	
853	ハ	10	Ⅱ	3102	下呂石	60	55	18	53	A+B	1	
854	ハ	10	Ⅱ	4404	下呂石	98	73	28	149	A	1	
855	ハ	10	Ⅱ	4761	下呂石	85	60	36	195	C	1	
856	ハ	10	Ⅱ	5915	下呂石	98	58	49	269	C	1	
857	ハ	10	Ⅱ	8082	下呂石	83	53	51	225	C	1	
858	ハ	10	Ⅱ	8280	下呂石	75	70	59	322	C	1	
859	ハ	10	Ⅱ	8291	下呂石	94	73	62	326	C	1	
860	ハ	10	Ⅱ	8384	下呂石	76	57	34	155	C	1	
861	ハ	10	Ⅱ	8391	下呂石	76	49	51	206	C	1	
862	ハ	10	Ⅱ	8392	下呂石	83	55	21	92	A	1	
863	ネ	9	I	4045	下呂石	70	50	53	192	C	1	
864	ネ	9	I	4046	下呂石	50	49	14	40	A	1	
865	ネ	9	Ⅱ	8540	下呂石	63	59	12	44	A	2	
866	ネ	9	Ⅱ	8590	下呂石	51	36	8	12	A	1	
867	ハ	9	I	3335	下呂石	46	31	16	23	A	1	
868	ハ	9	I	4363	下呂石	55	31	12	24	A	1	
869	ハ	9	I	4369	下呂石	48	37	18	25	A	1	
870	ハ	9	I	4373	下呂石	64	30	30	63	B	1	
871	ハ	9	I	4614	下呂石	61	47	17	44	B	1	
872	ハ	9	I	5523	下呂石	61	50	25	64	B	1	
873	ハ	9	I	5529	下呂石	45	29	24	38	A	1	
874	ハ	9	I	6896	下呂石	82	43	22	57	B	1	
875	ハ	9	I	7014	下呂石	63	44	24	53	B	1	
876	ハ	9	I	7015	下呂石	60	40	29	63	B	1	
877	ハ	9	I	7016	下呂石	96	66	21	97	A	1	
878	ハ	9	I	7017	下呂石	74	64	10	36	B	1	
879	ハ	9	I	7026	下呂石	51	48	24	63	A	1	
880	ハ	9	I	7033	下呂石	64	56	46	142	C	1	
881	ハ	9	Ⅱ	7522	下呂石	55	53	18	45	A	1	
882	ハ	9	Ⅱ	7523	下呂石	55	38	11	22	A	1	
883	ハ	9	Ⅱ	7605	下呂石	48	46	22	60	A+B	1	41図-133
884	ハ	9	Ⅱ	7608	下呂石	71	47	25	60	B	1	
885	ハ	9	Ⅱ	7609	下呂石	54	49	27	44	B	1	
886	ハ	9	Ⅱ	8461	下呂石	54	41	15	33	B	1	
887	ハ	9	Ⅱ	8596	下呂石	75	54	29	95	C	1	
888	ハ	9	Ⅱ	8600	下呂石	68	54	28	116	C	1	
889	ハ	9	Ⅱ	8617	下呂石	52	47	32	59	C	2	
890	ハ	9	Ⅱ	8636	下呂石	68	57	17	47	B	1	
891	ハ	9	Ⅱ	8645	下呂石	59	53	17	52	B	1	
892	ハ	9	Ⅱ	8647	下呂石	61	44	23	62	B	1	
893	ハ	9	Ⅱ	8777	下呂石	57	53	22	65	A	1	
894	ハ	9	Ⅱ	8778	下呂石	73	42	26	52	B	1	
895	ハ	9	Ⅱ	9372	下呂石	67	39	16	31	A	1	
896	ハ	9	Ⅱ	11636	下呂石	54	34	29	66	A	1	
897	ハ	9	Ⅱ	7511	下呂石	64	62	17	54	A	1	
898	ハ	9	Ⅱ	7513	下呂石	63	50	22	48	A	1	
899	ハ	9	Ⅱ	8064	下呂石	82	52	37	116	C	1	
900	ハ	9	Ⅱ	8070	下呂石	67	47	24	51	B	1	
901	ハ	9	Ⅱ	8073	下呂石	76	31	34	73	C	1	
902	ハ	9	Ⅱ	8292	下呂石	78	46	41	156	C	1	
903	ハ	9	Ⅱ	8295	下呂石	62	50	24	48	C	1	
904	ハ	9	Ⅱ	8299	下呂石	68	48	39	97	C	1	
905	ハ	9	Ⅱ	8301	下呂石	58	45	32	47	C	1	
906	ハ	9	Ⅱ	8303	下呂石	63	54	29	124	C	1	
907	ハ	9	Ⅱ	8543	下呂石	68	41	20	63	B	1	
908	ハ	9	Ⅱ	8547	下呂石	84	37	48	94	C	1	
909	ハ	9	Ⅱ	8549	下呂石	106	48	32	136	C	2	

No.	出土区	層	遺物番号	石材	大きさ mm			重量 (g)	分類	打面	挿 図	
					長さ	幅	厚み					
910	ハ	9	Ⅱ	8556	下呂石	59	44	22	56	B	1	
911	ハ	9	Ⅱ	8558	下呂石	46	41	23	32	A	1	
912	ハ	9	Ⅱ	8562	下呂石	71	52	19	60	A	2	
913	ハ	9	Ⅱ	8563	下呂石	53	49	25	59	B	1	
914	ハ	9	Ⅱ	8564	下呂石	66	40	31	82	C	1	
915	ハ	9	Ⅱ	8567	下呂石	62	34	17	28	B	1	
916	ハ	9	Ⅱ	8568	下呂石	66	34	20	48	B	1	
917	ハ	9	Ⅱ	8606	下呂石	60	41	14	36	A	1	
918	ハ	9	Ⅱ	8613	下呂石	86	67	19	81	B	1	
919	ハ	9	Ⅱ	8614	下呂石	67	54	25	82	A	1	
920	ハ	9	Ⅱ	8615	下呂石	64	48	20	50	B	1	
921	ハ	9	Ⅱ	8616	下呂石	82	61	13	53	A	1	
922	ハ	9	Ⅱ	8654	下呂石	70	41	27	80	C	1	
923	ハ	9	Ⅱ	8657	下呂石	72	64	44	218	C	1	
924	ハ	9	Ⅱ	8662	下呂石	61	38	17	28	A	1	
925	ハ	9	Ⅱ	8663	下呂石	58	45	25	61	C	1	
926	ハ	9	Ⅱ	8670	下呂石	72	47	27	60	C	1	
927	ハ	9	Ⅱ	8677	下呂石	59	48	11	29	A	1	
928	ハ	9	Ⅱ	8678	下呂石	56	35	20	28	B	1	
929	ハ	9	Ⅱ	8684	下呂石	71	57	20	68	A	1	
930	ハ	9	Ⅱ	8686	下呂石	66	31	26	60	C	1	
931	ハ	9	Ⅱ	8689	下呂石	73	44	22	81	A	1	
932	ハ	9	Ⅱ	8694	下呂石	62	53	33	106	C	1	
933	ハ	9	Ⅱ	8698	下呂石	81	30	30	51	C	1	
934	ハ	9	Ⅱ	8713	下呂石	60	32	19	39	B	2	
935	ハ	9	Ⅱ	8714	下呂石	76	38	18	39	A	2	
936	ハ	9	Ⅱ	8731	下呂石	76	47	42	141	C	1	
937	ハ	9	Ⅱ	8737	下呂石	74	34	20				

圖 版



1. 表土掘削作業



2. 作業風景



3. 第1号住居跡 下呂石遺物出土状況



4. 第1号住居跡



5. 第2号住居跡 遺物出土状況



6. 第2号住居跡 黒鉛入り土器出土状況



7. 第2号住居跡



8. SS1 検出状況



1. 集石遺構 (手前からSS2、SS3、SS4)



2. SS2



3. SS3



4. SS4



5. SS5



6. ピット検出作業



7. SX5 下呂石チップ・フレイク出土状況



8. 南側から見たSX5



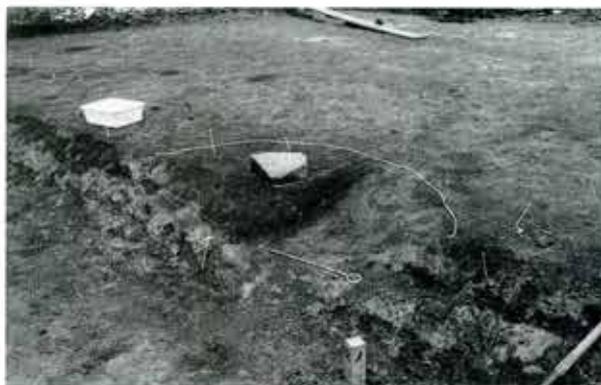
1. 下呂石集石出土地点 P G 1



2. S X 7



3. S X 8



4. S X 12



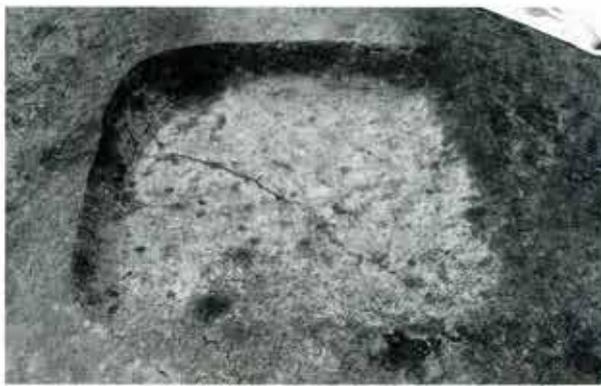
5. S K 1



6. 作業風景



7. 作業風景



8. 第3号住居跡



1. 第4号住居跡 プラン検出状況



2. 第4号住居跡 遺物出土状況



3. 第4号住居跡 遺物出土状況



4. 第4号住居跡 遺物出土状況



5. 第4号住居跡



6. 第5号住居跡



7. 第6号住居跡 プラン検出状況



8. 第6号住居跡 床面検出状況



1. SS7



2. 北から見たSS7、SS8



3. 第7号、第8号住居跡 検出状況



4. 第7号住居跡 炭化材検出状況



5. 第8号住居跡 刀子出土状況



6. 第8号住居跡 ドングリ検出状況



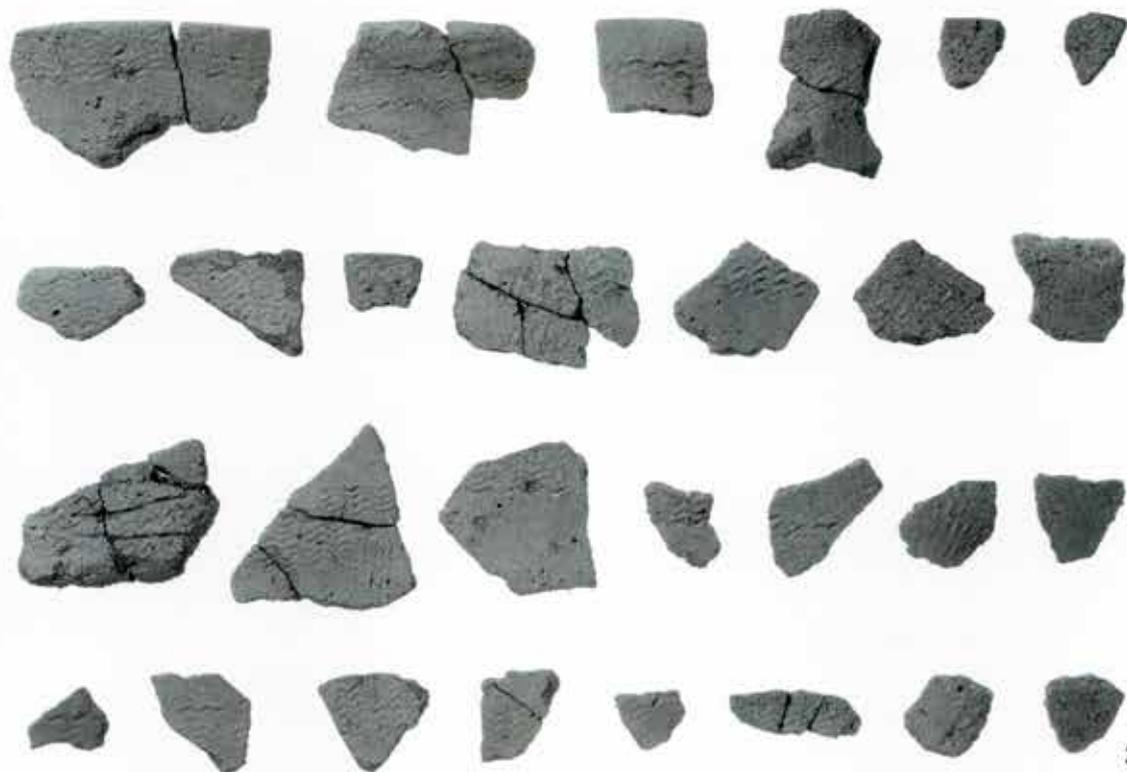
7. 第8号住居跡 遺物出土状況



8. 第7号、第8号住居跡



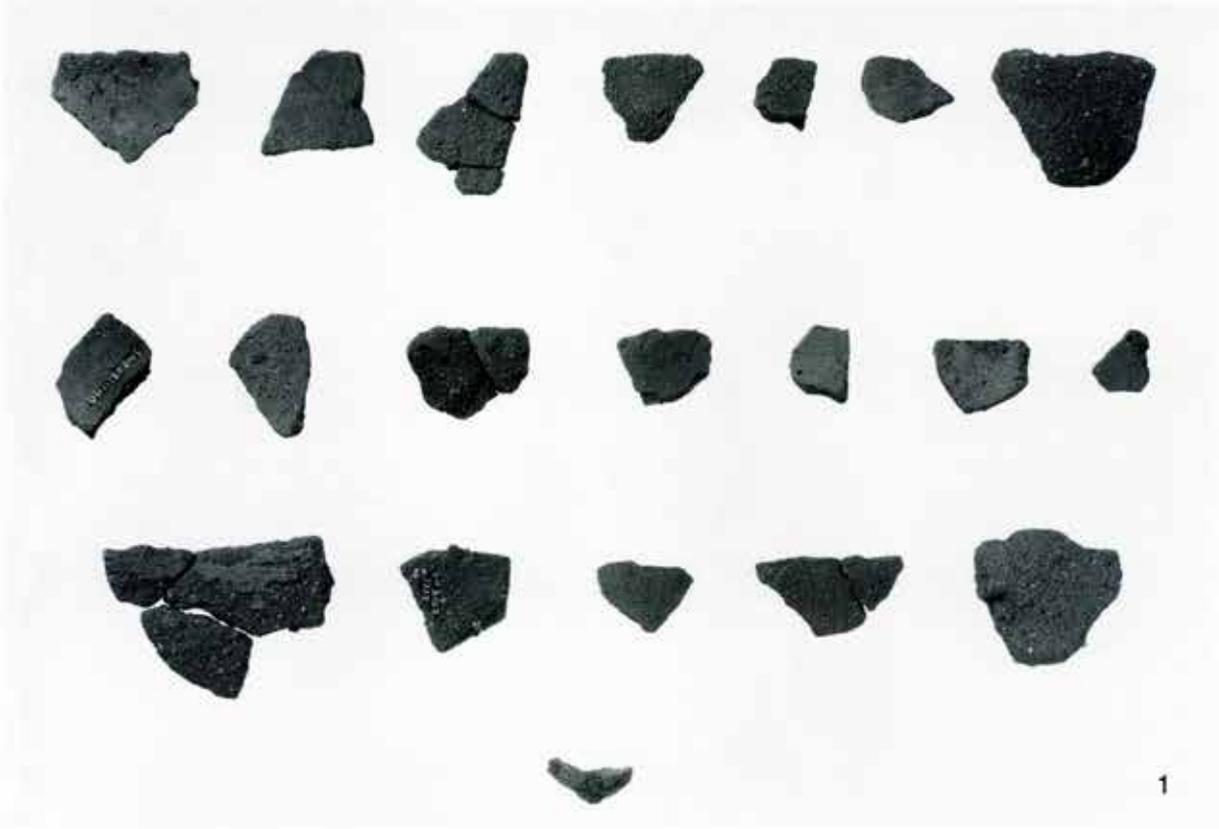
1



2

1. 第2号住居出土黒鉛入り土器

2. 包含層出土黒鉛入り土器（山形文）



1. 包含層出土黒鉛入り土器（無文）

2・3. 第4号住居 出土土師器



1



2



3



4



5



6



7

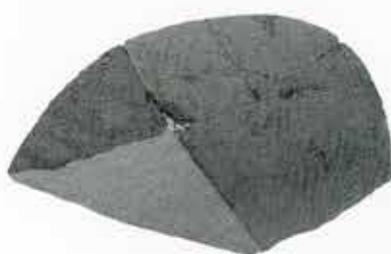
1~4. 第4号住居 出土土師器

5・6. 包含層出土須惠器

7. 第7号住居 出土須惠器

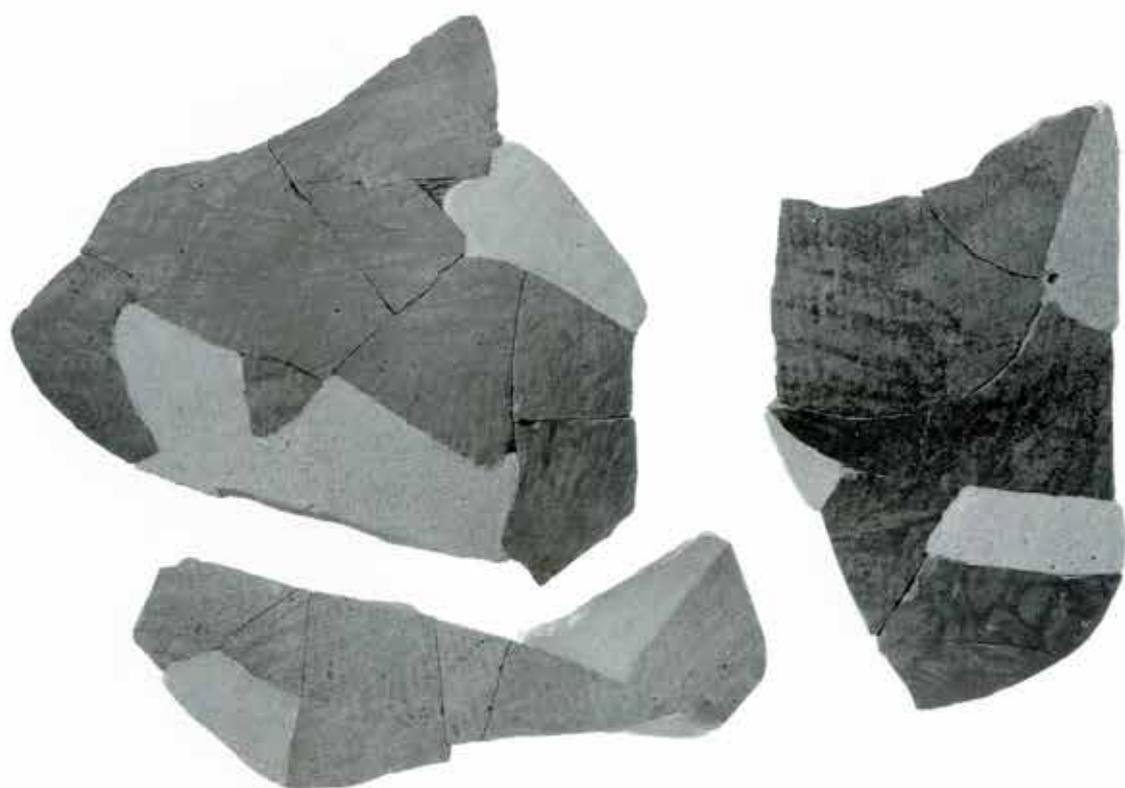


1

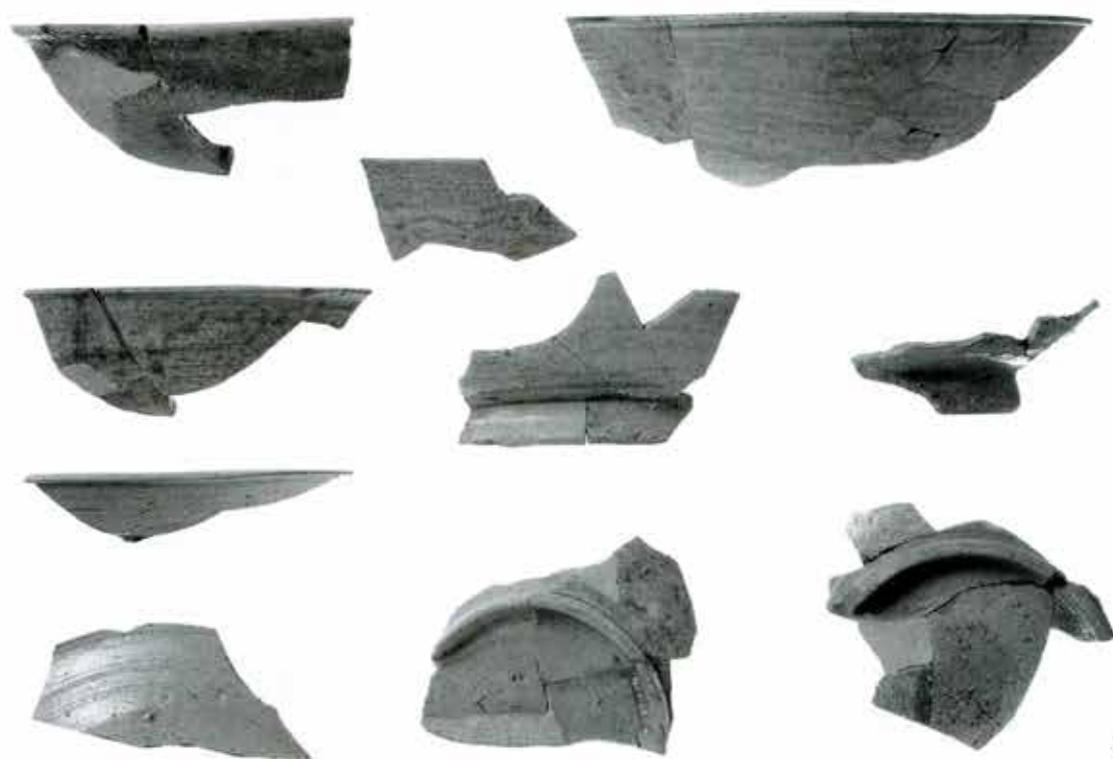


2

1·2. 第7号住居出土須惠器



1



2

1. 第7号住居出土須惠器

2. 第8号住居出土灰釉陶器



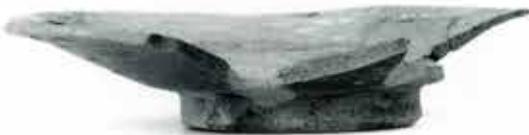
1



2



4



5



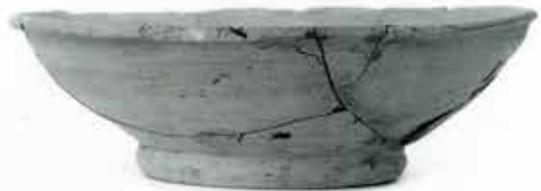
7



3



6



8

1·7·8. 包含層出土灰釉陶器

2~6. 第8号住居出土灰釉陶器



1



2



3



4



5



6



7



8



9

1·7. 第8号住居出土灰釉陶器

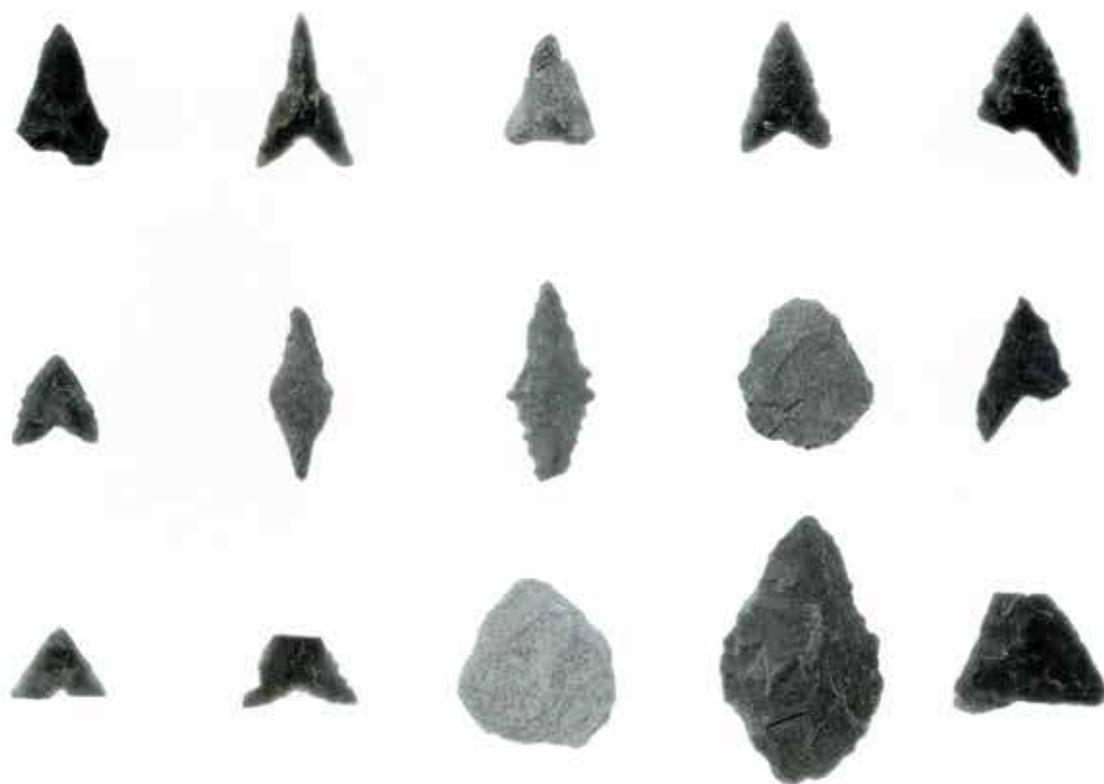
2~6. 包含層出土灰釉陶器

9. 第8号住居出土刀子

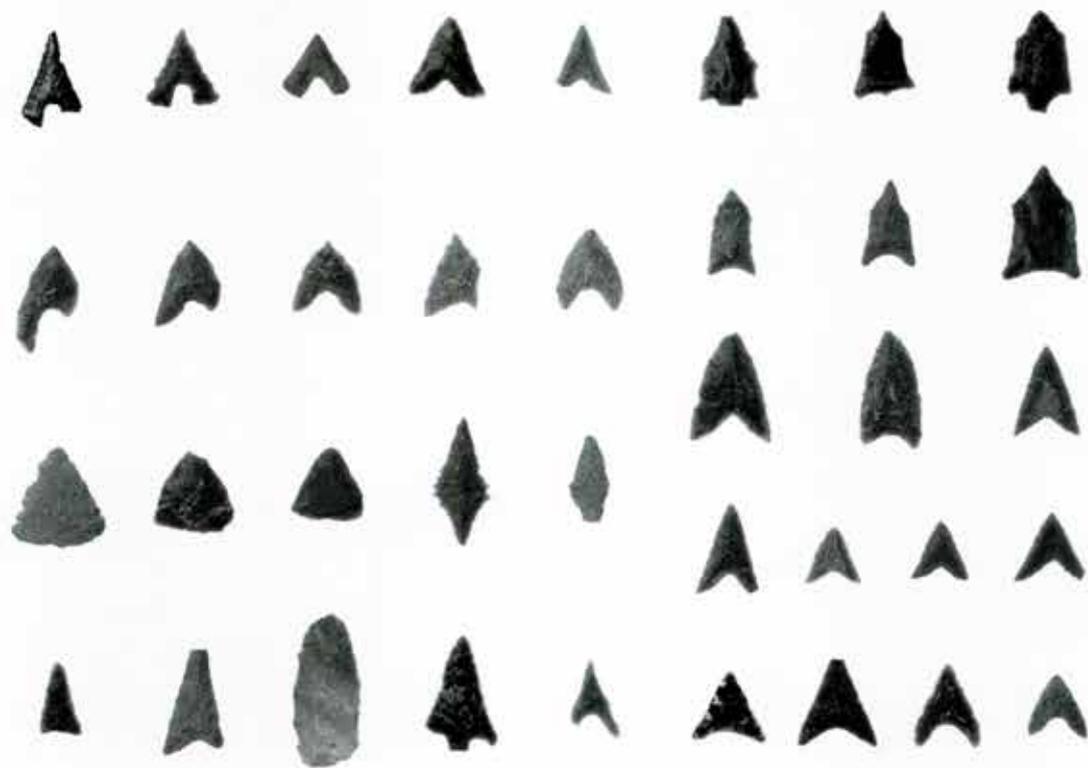


1. 第1号住居出土石鏃

2. 第2号住居出土石鏃



1



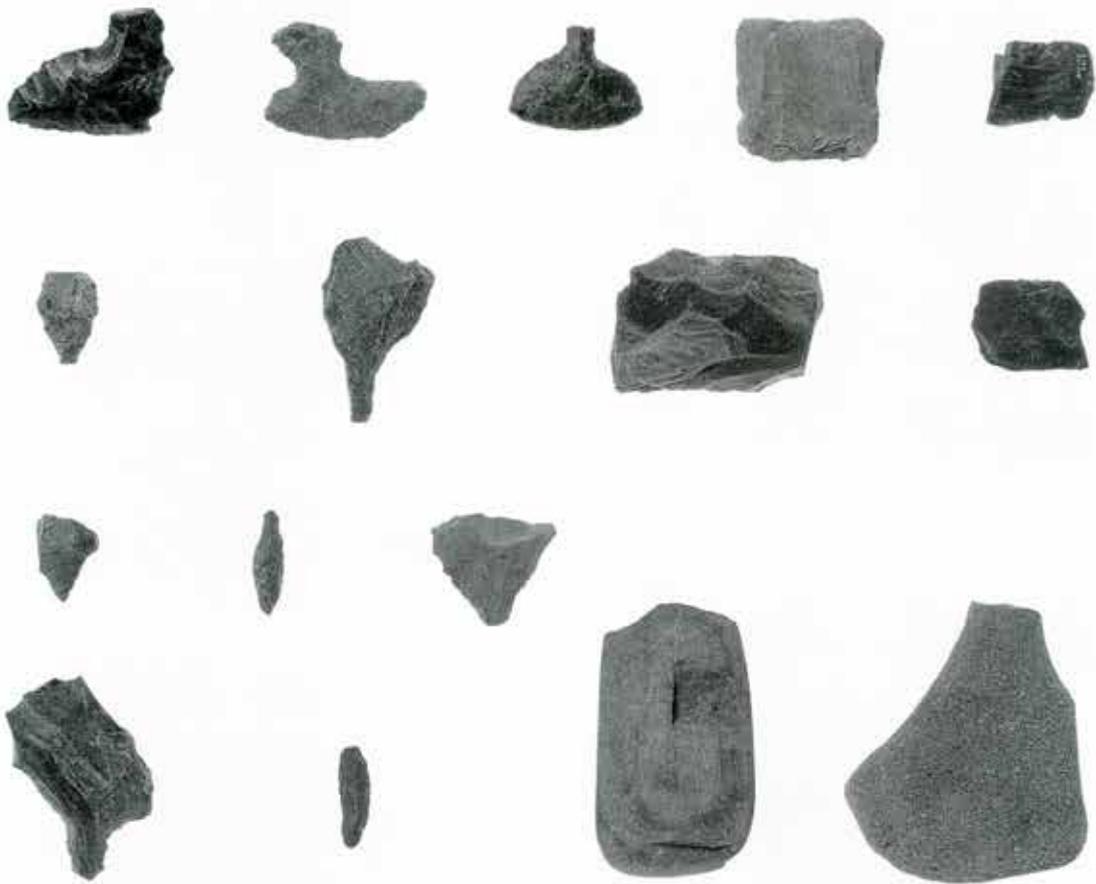
2

1. S X 5 出土石鏃

2. 包含層出土石鏃



1



2

1. 遺構内出土石器

2. 包含層出土石器



1



2

1. 遺構内出土スクレイパー 2. 包含層出土スクレイパー



1



2

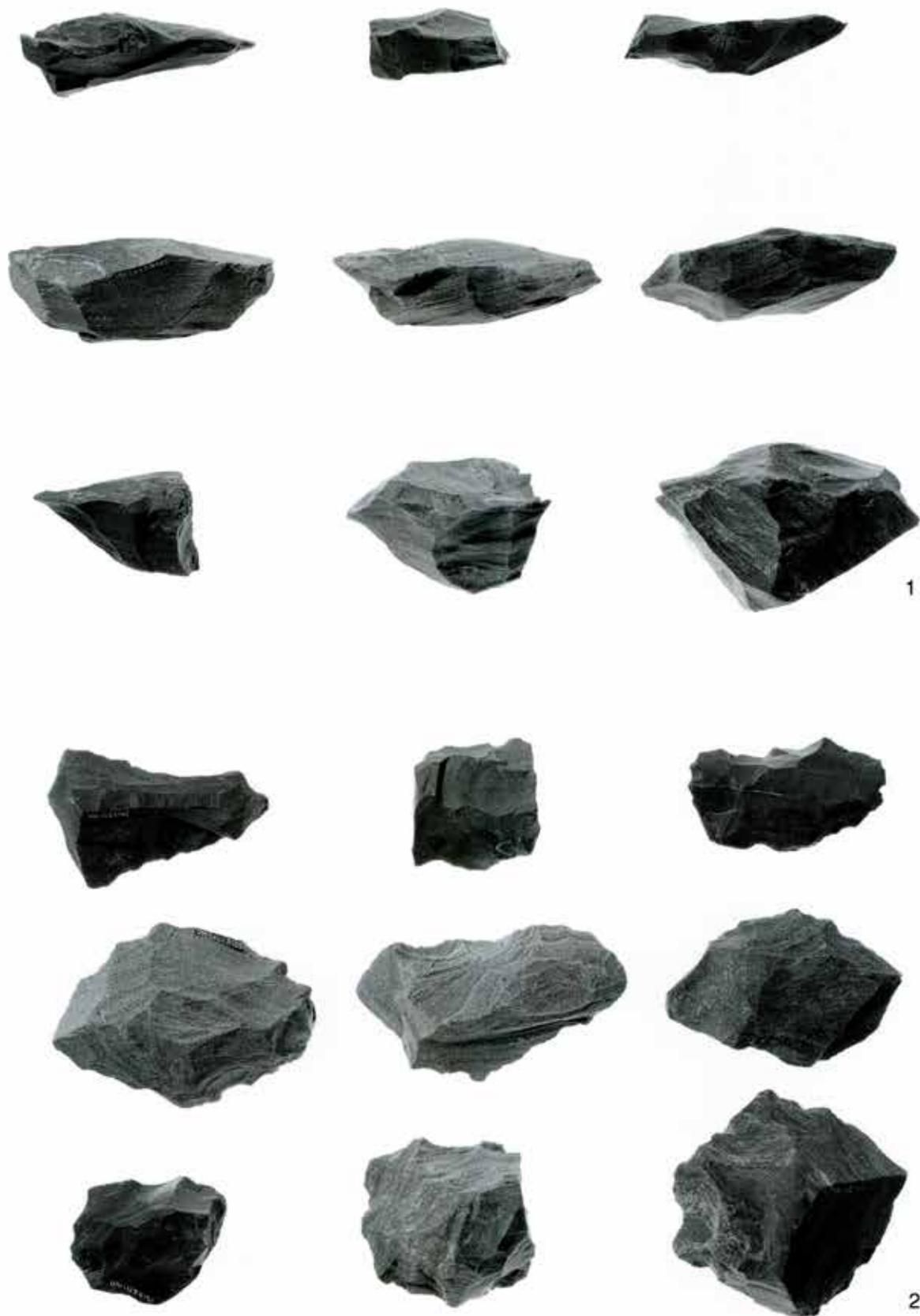


3

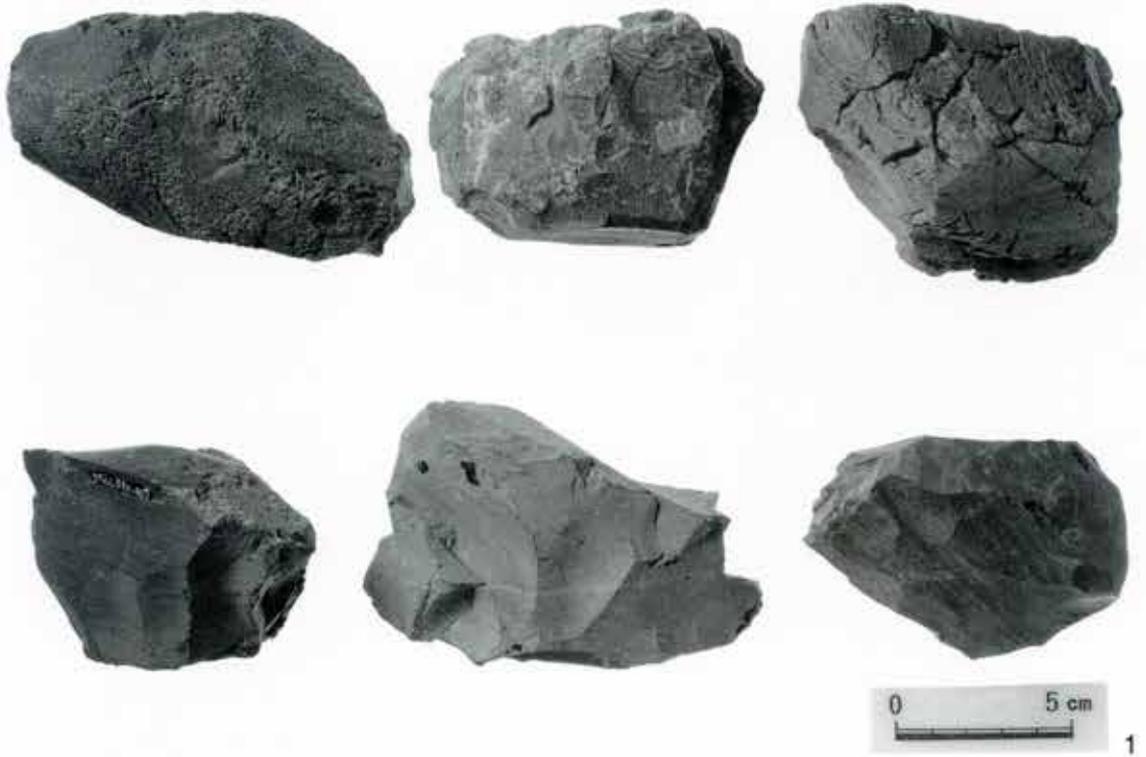
1. 遺構内出土磨石

2. 包含層出土磨石

3. 包含層出土打製石斧



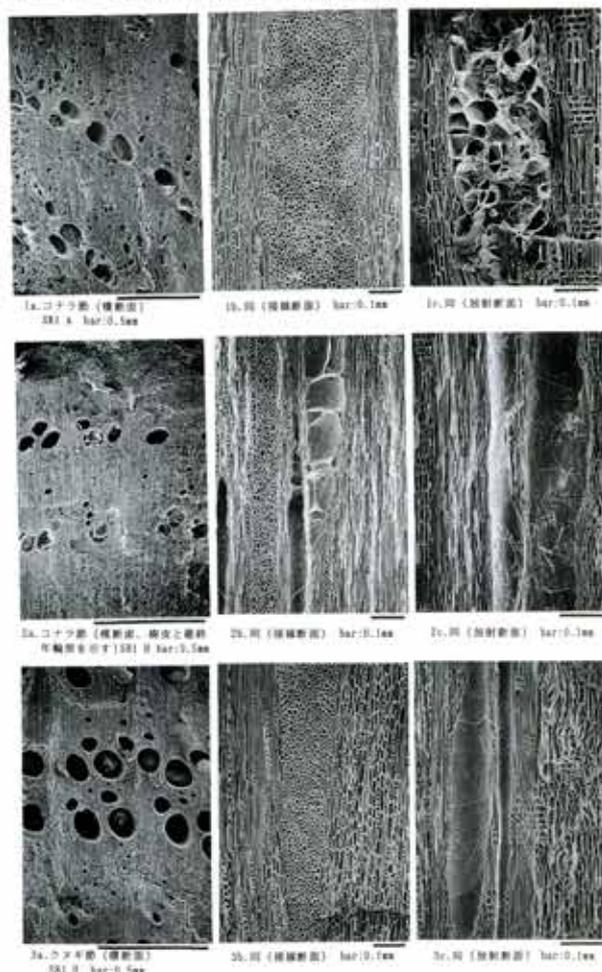
1. 下呂石コア側面 2. 下呂石コア下面



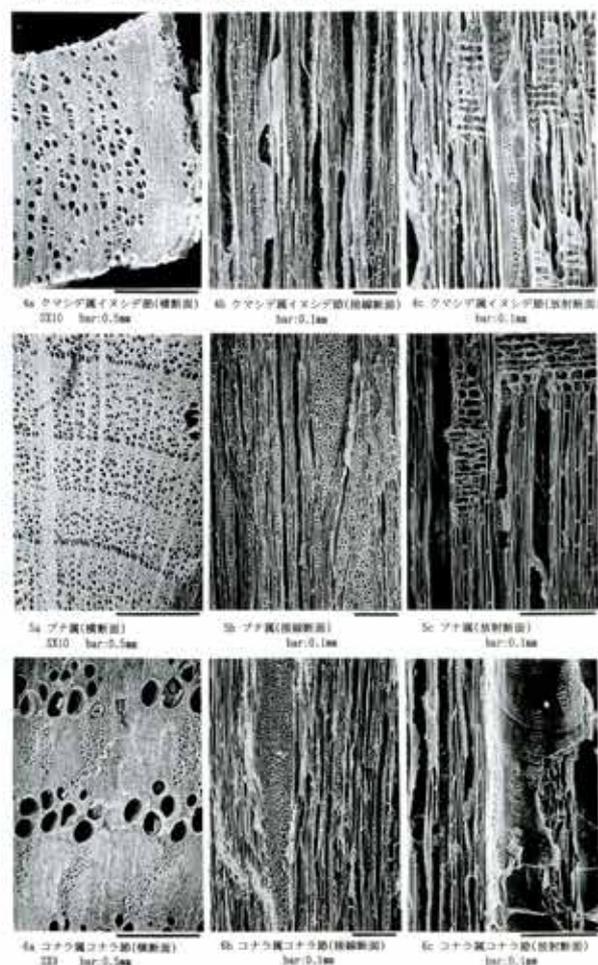
1. 下呂石礫とコアブランク

2・3. 打痕のあるコア

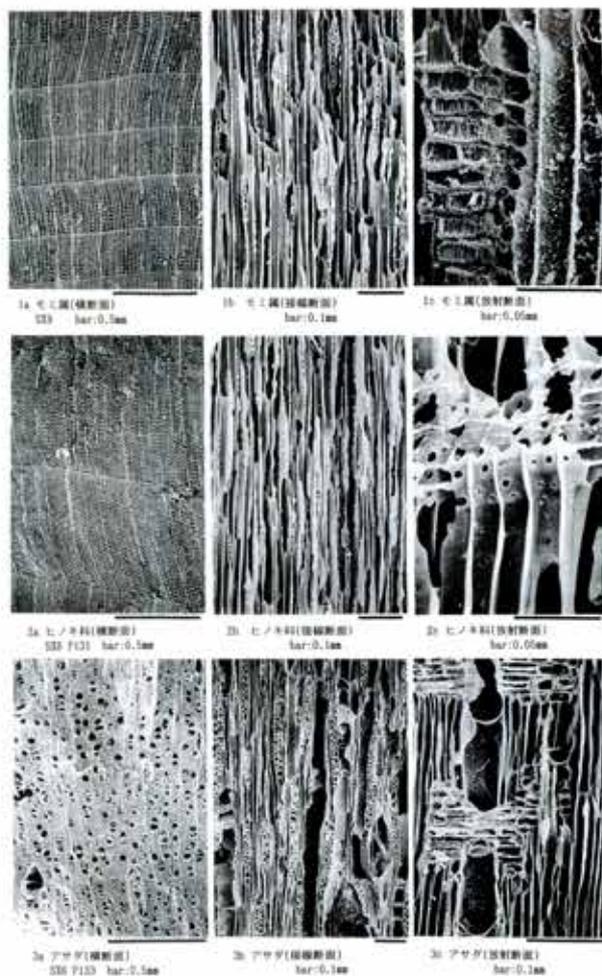
ア. 上ヶ平遺跡住居跡出土炭化材の樹種



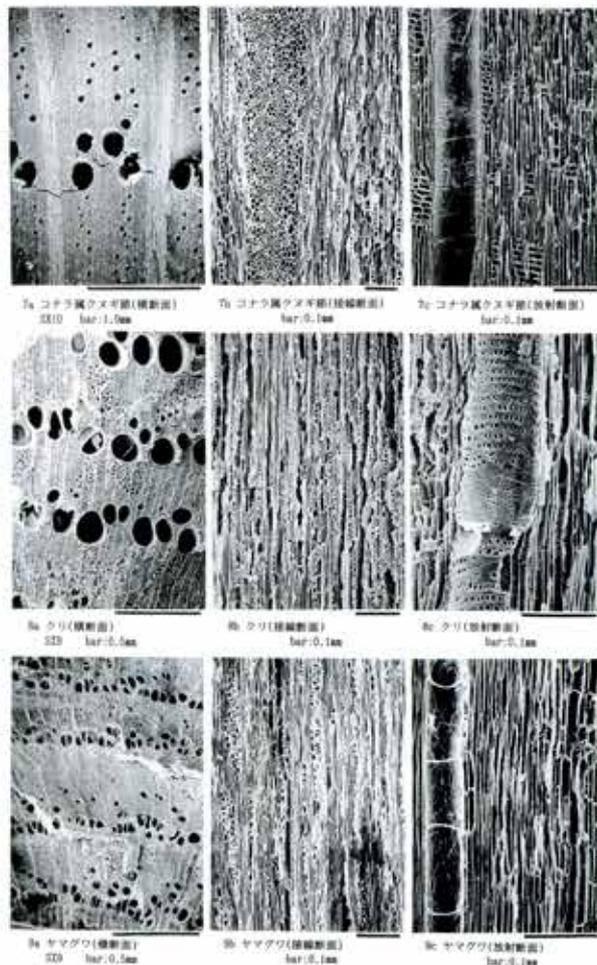
ウ. 上ヶ平遺跡出土炭化材の樹種



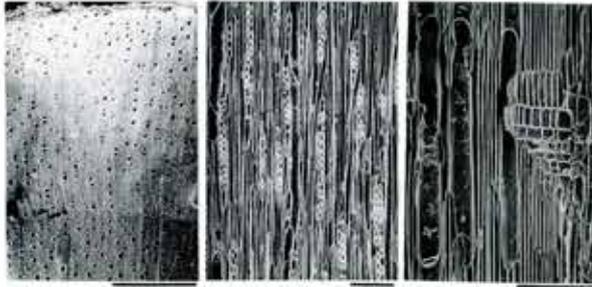
イ. 上ヶ平遺跡出土炭化材の樹種



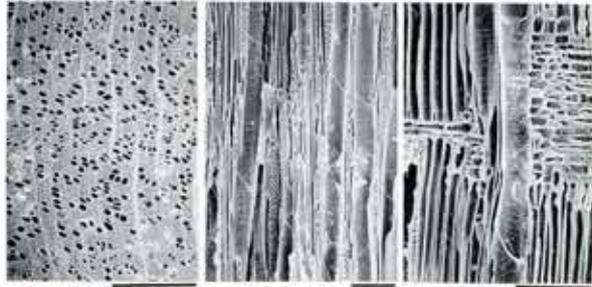
エ. 上ヶ平遺跡出土炭化材の樹種



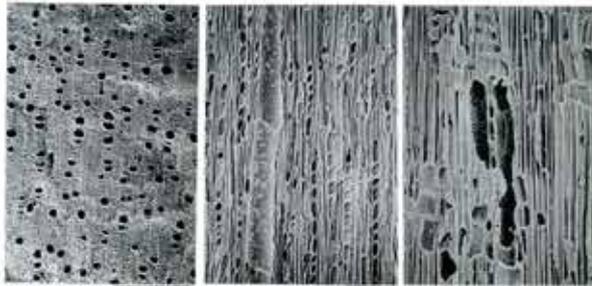
オ. 上ヶ平遺跡住居跡出土炭化材の樹種



10a ケスノ科(横断面) 10b ケスノ科(縦断面) 10c ケスノ科(放射断面)
 X10 bar:0.5mm bar:0.1mm bar:0.1mm

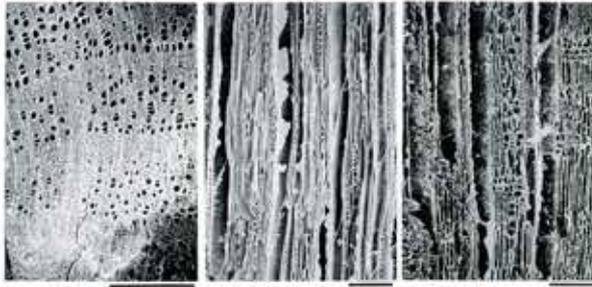


11a サクラ属(横断面) 11b サクラ属(縦断面) 11c サクラ属(放射断面)
 X10 bar:0.5mm bar:0.1mm bar:0.1mm

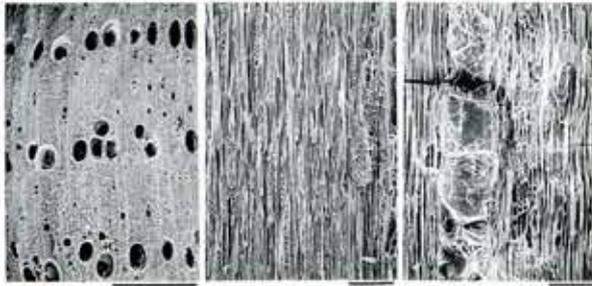


12a シラキ(横断面) 12b シラキ(縦断面) 12c シラキ(放射断面)
 X10 bar:0.5mm bar:0.1mm bar:0.1mm

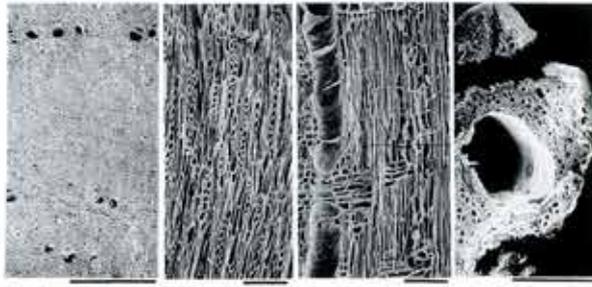
キ. 上ヶ平遺跡出土炭化材の樹種



16a エゴノキ属(横断面) 16b エゴノキ属(縦断面) 16c エゴノキ属(放射断面)
 X10 bar:0.5mm bar:0.1mm bar:0.1mm



17a トネリコ属(横断面) 17b トネリコ属(縦断面) 17c トネリコ属(放射断面)
 X10 bar:0.5mm bar:0.1mm bar:0.1mm

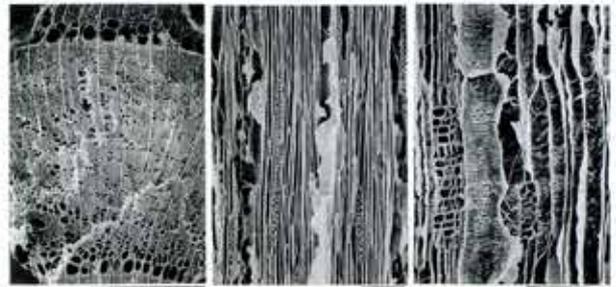


15a 不明環孔材(横断面) 15b 不明環孔材(縦断面) 15c 不明環孔材(放射断面) 15d タケ科(横断面)
 X10 bar:0.5mm bar:0.1mm bar:0.1mm X10 bar:1.0mm

カ. 上ヶ平遺跡出土炭化材の樹種



13a カエデ属(横断面) 13b カエデ属(縦断面) 13c カエデ属(放射断面)
 X10 bar:0.5mm bar:0.1mm bar:0.1mm

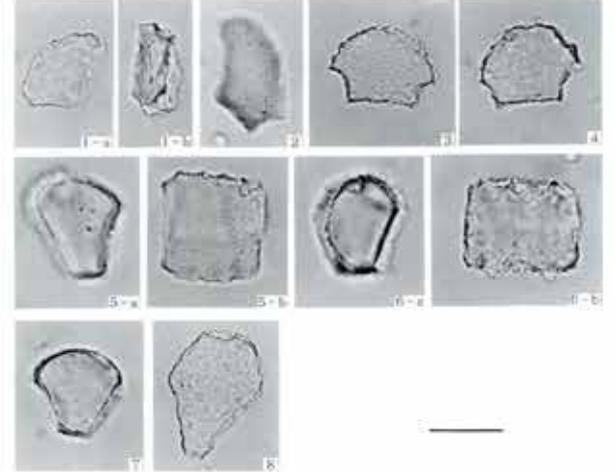


14a タラノキ(横断面) 14b タラノキ(縦断面) 14c タラノキ(放射断面)
 X10 bar:1.0mm bar:0.1mm bar:0.1mm



15a スノキ属(横断面) 15b スノキ属(縦断面) 15c スノキ属(放射断面)
 X10 bar:0.5mm bar:0.1mm bar:0.1mm

ク. 上ヶ平遺跡のプラント・オパール (scale bar:30 μm)



ク上ヶ平遺跡のプラント・オパール (scale bar:30 μm)

1~4:クマザサ属型 (1-a, 2~4:断面, 1-b:側面)
 5~7:ネザサ属型 (5-a, 6-a, 7:断面, 5-b, 6-b:側面)
 8:その他のタケ亜科 (断面)

報 告 書 抄 録

ふりがな	うえがひらいせき いち						
書名	上ヶ平遺跡 I						
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第62集						
編著者名	八賀哲夫 伊藤秀雄 岩田修 藤根久 山形秀樹 植田弥生 鈴木茂						
編集機関	財団法人 岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058-237-8550						
発行年月日	西暦2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
うえがひらいせき 上ヶ平遺跡	岐阜県益田郡 下呂町森上ヶ平	21583	09018	35° 48′ 11″	137° 15′ 20″	19971020 / 19980318 19980511 / 199809031 1700m ²	障害者総合リ ハビリテー ションセン ターりほとび あ(仮称)整 備事業に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
上ヶ平遺跡	集落	縄文時代 古墳時代 / 平安時代	土坑 ピット 溝状遺構 集石遺構 竪穴住居跡	縄文土器 石器 須恵器 土師器 灰釉陶器	石器原石である下呂石の コア、フレーク、チップが大量 に出土した。		

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第62集

上 ヶ 平 遺 跡

2000年3月31日

編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 たけもとプロジェクト